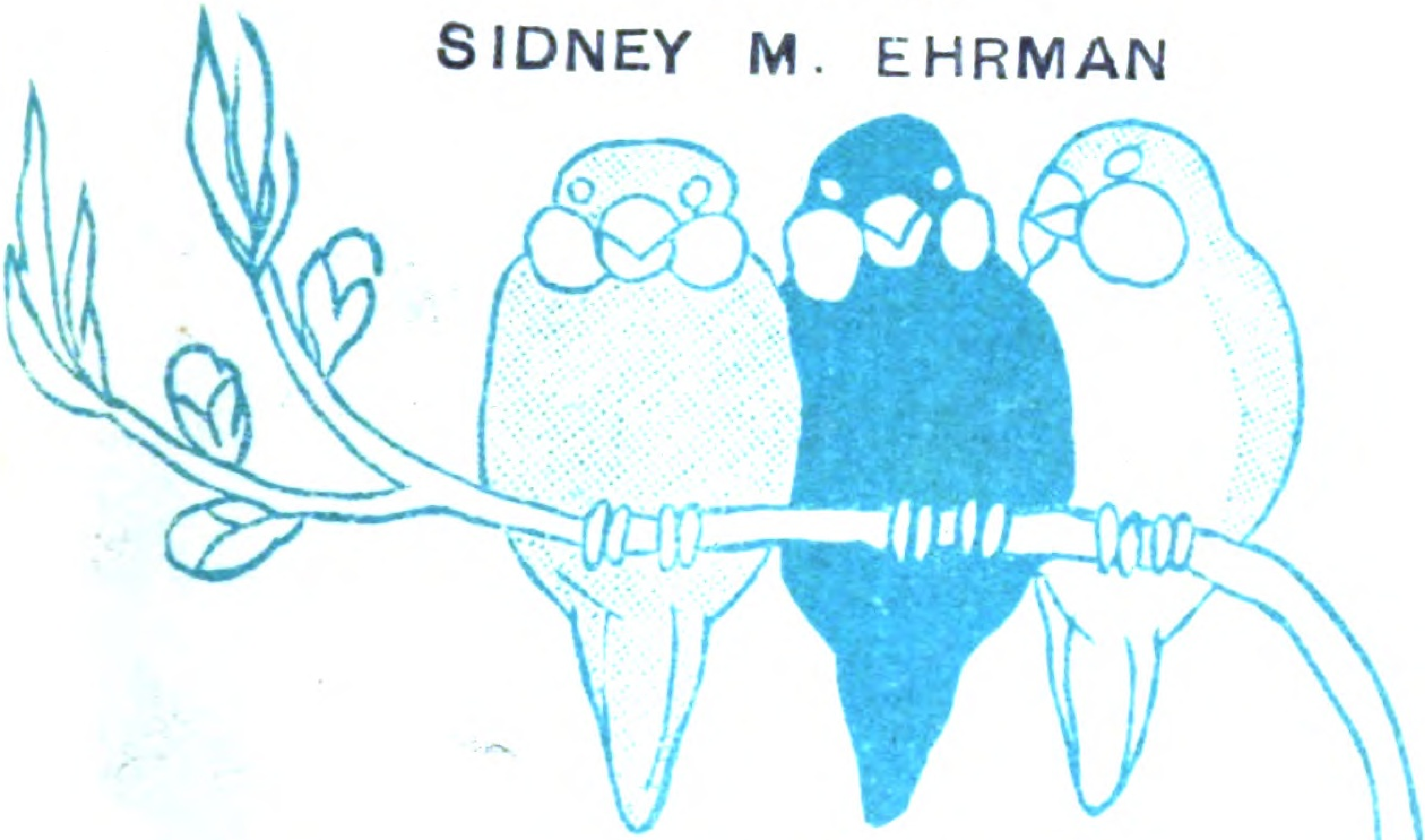
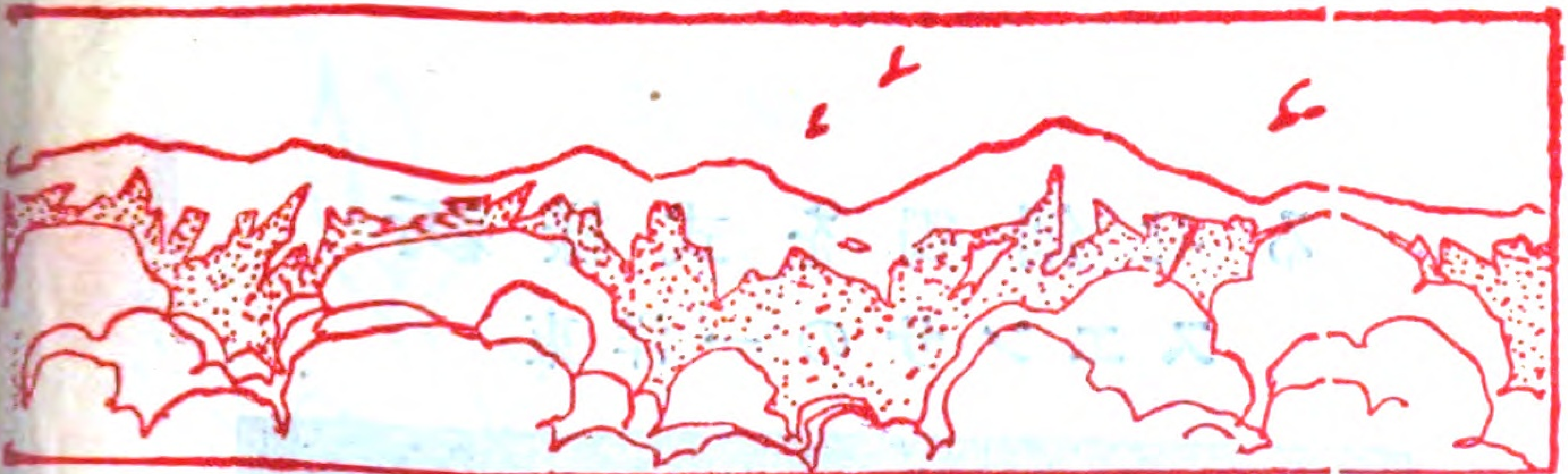
THE KAIZO

改造

三月号

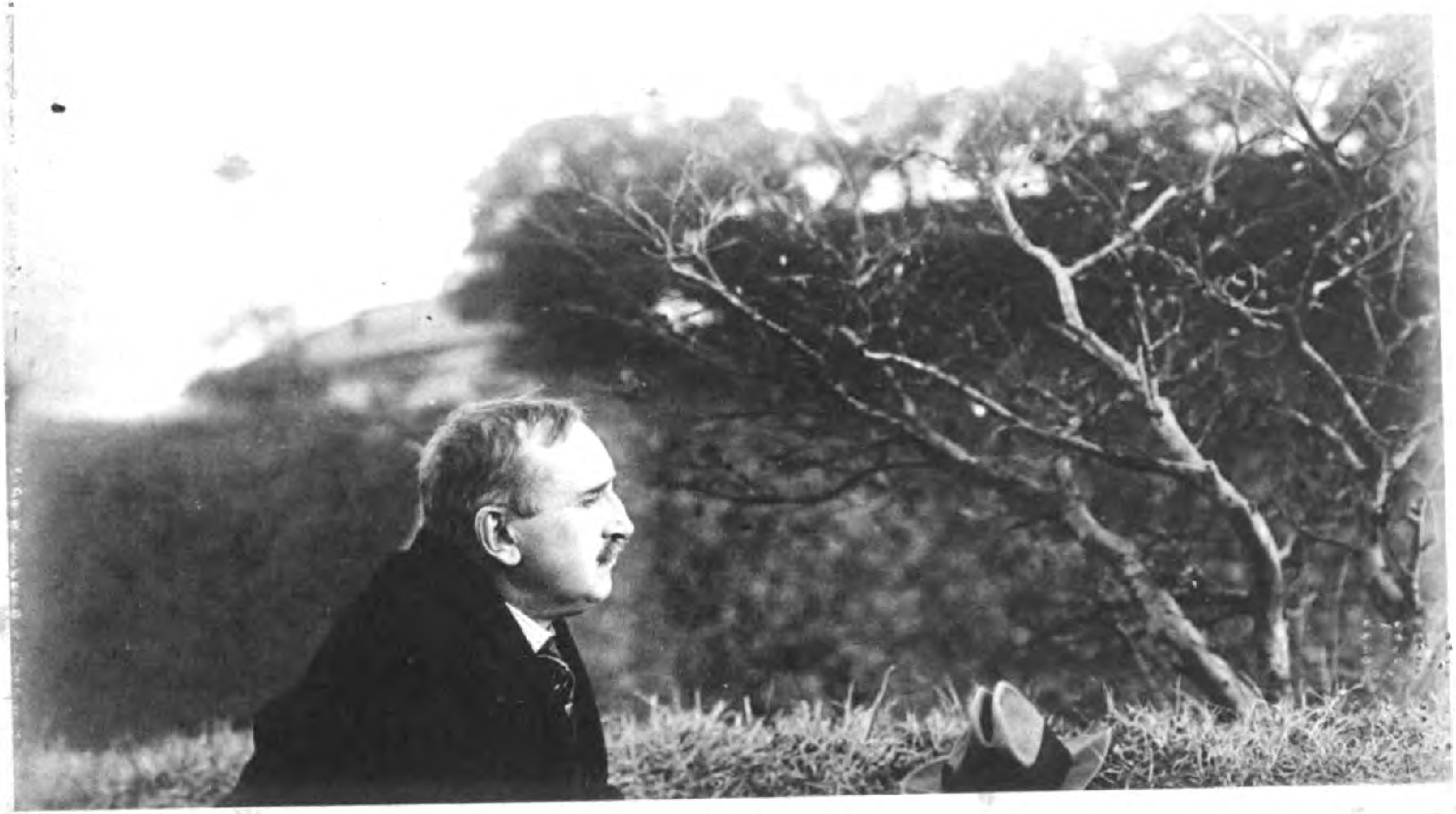
1923





改造三月號目次

創作



最近のポール・クローデル氏

長篇小説 結婚禮讃

◇第二十版◇武林無想庵作◇

戀の前にはすべてが虚無だ！

虚無だ、虚無だと鞄一つになつて放浪の旅に出たが『遠くへ行つちやいやよ、私は死ぬのは平氣ですよ』と媚びるが如く接吻した奥さんの姿が執拗にコビリついて又鎌倉に舞ひ戻つた、暗いわね………と私語くやうに云つて、ホツト熱い溜息をついた。

その息を感ずると私のからだはブル／＼震へた、女の髮の毛が私の頬に觸れさうになつた、そのとたん………奥さんの眼が燐のやうにキラリと光つた、思はずだき緊めた奥さんの唇の上へ熱鐵のやうに濺いだはじめての接吻より………情緒を描くに天下一品、戀の前には大膽不敵なる無想庵のいつはらざる横戀慕の實錄である。

深刻無比人妻への戀の實錄！

定價貳圓卅錢
送料十七錢
四六判上製

發行所 改造社
振替東京八四〇二

猪狩史山著（好評）五版

創作 老子の面

四六判總布表紙 四百五十頁函入

定價貳圓八拾錢 書留送料十七錢

トルストイを談じガンヂーを説く前に先づ老子に聴け!!

虚無哲學といひ、無爲之爲といひ、柔弱主義といひ、不爭といひ、抱撲といひ、谷神不死といふ。老子の教ふる所のものは抑々何か、蓋し東洋の天地の生み出した最も深奥幽玄なる哲學である。

著者老子を愛讀信奉すること多年、今『老子の面』を創作す、老子所謂抱撲の雅致愛すべく、老子の面目躍動して聲あり、老子の父母妻子、老子をめぐる人々との葛藤、陳、晋、宋、鄭の國々に於ける放浪生活は雲の如く水の如き大哲人と其時代を描寫して興趣涯りなき虚無哲學の一大ローマンスである。

文學博士 三宅雪嶺序
法學士 高田雄種著（訂正三版）

聖雄ガンヂー

定價貳圓七拾錢 書留送料十七錢

發兌 東京日本橋數寄屋町 振替東京一三七五番 大阪屋號 電話 三七三七番 本局 四二八九番

山本有三作

山本有三戯曲集

定價金貳圓八拾錢

◇送料十九錢◇

◇四六判布製◇

第五版

天才戯曲家として一作を出すごとに讀者の血を躍らしそしてその核心をシカと把握して離さないのは山本氏の戯曲である、氏の人生へ對する愛着、舞臺に對する細緻の觀察は篇中の何人をも躍らし泣かさずにはおかない、此書に收められたる五篇の總てが、均しく東都で歡迎せられ、そして舞臺の上では幾萬の人を泣かしめた傑作のみであることは呶々するまでもない「嬰兒殺し」の含蓄多き殺人婦に對する熱情、「坂崎出羽」「津村教授」「生命の冠」に用ゐられた忍從の辛さと困難にはいかなる男兒でも涙ならでは讀むことは出來まい。

内容

津村教授

嬰兒殺し

生命の冠

女親

坂崎出羽守

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

文學博士 瀧精一著

文人畫概論

定價二圓　送料拾七錢

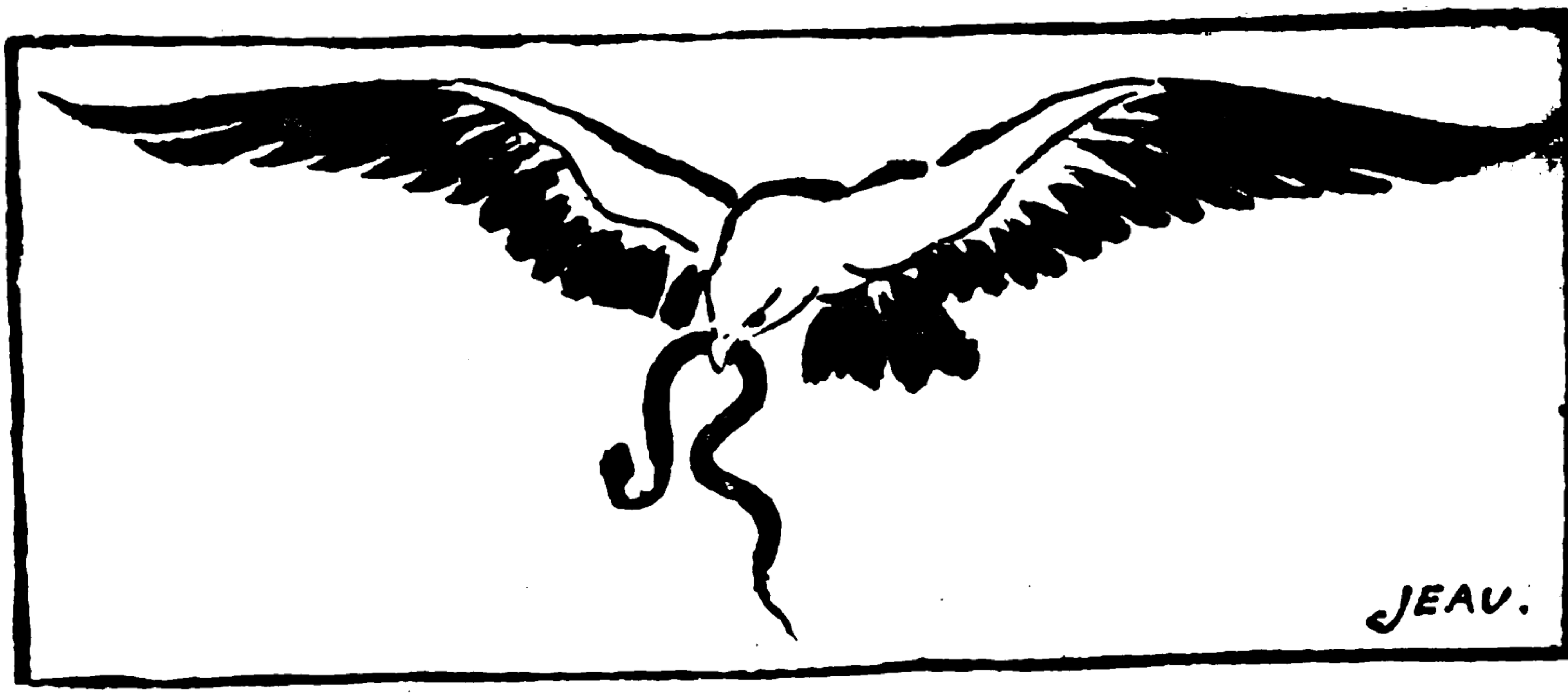
挿畫拾五葉　菊判上製

第六版

有識階級よりの註文殺到す

文人畫の流行今日より甚だしきはなく、またそれほど喜ばしく美はしきことはない、されど悲しいことには文人畫の概念を得るの一書だにないことだ、斯界の第一人者瀧博士は、深くそれ等の缺陷を遺憾に思ひ、本年東京帝國大學にて「文人畫概念」てふ趣味深き講演をなされた、本書は實にその講演を基礎として(一)文人畫の起源(二)文人畫の流派化(三)文人畫の原理(四)文人畫と南畫(六)文人畫の精華(六)將來の文人畫を説いたものだ、挿畫も麗しきコロタイプ十五圖を挿入したれば、美術の國の人々が必ず一讀せではすまぬ含蓄多き著書。

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二



改造三月號

獨露支同盟と日露外交の轉機

我が國は露領からまだ撤兵せないのに早くも露、獨、支の攻守同盟說が傳へられておる、ヨッフェ氏が上海にあるや、孫文氏一派とは盛んなる會商が遂げられ、そして或點までは兩氏の意見が一致したと思はるる節がある、勿論、孫文一派が支那を代表するとは見ないが、しかし大體に於て露支は提携する可能性を有つている、だが英米の傀儡と目せらるる北京の張內閣は露、獨、支三國の同盟は阻止すべく努力するだろう、然らば、此の日本を假想敵とする三國同盟に對し我々はいかに當面すべきか。

日本人の大部分は素より露國及ロシア人を憎惡していない、日露の役に數十萬の同胞が斃れても、西伯利の地に長く矛を交へても、骨に徹する國民的憤怒は有ち得なかつた、ただ特權階級は勞農政府の魔手が我國體に影響するを恐れて、我國體の根本組織改革を豫想して勞農露國を煙たがること一通りでない、殊に樞密院、貴族院、衆議院の大部分が、資本家、貴族の大部分が勞農露國を恐怖することは地獄の鬼以上である。一ヨッフェ氏の來朝に官憲の狼狽振り、上下の騷倒は唯だ驚くばかりである、殊に滑稽であつたのは、ヨッフェ氏を招待したる後藤氏がビャード氏の言を引いてヨッフェ氏の奉ずる主義を難じ自家の辯明をなしたるの一大失態は有識者の顰蹙する所である、もし果して後藤氏が始めよりヨッフェ氏とさほどに主義、主張が扞格して居たならば招待せざるの賢明を選ぶべきではないか。

それがヨッフェ氏に對する厚意と思ふ。

ヨッフェ氏の來朝は病の治癒に名をかれど、胸に一物ある策士のこととて日露提携に志があることは蔽ふべからざる事實だ、日露親善を策し、日露の提携が極東に好影響を與ふるものと自信して來れる彼を依然として敵國の鬼として待遇することは、それは日本百年の將來を思ふもののなすべき業であらうか、また隣人を遇する道であらうか、天涯の羈旅一人をどうした所で我國體にさほどの動搖を與ふるものでもあるまい、我輩は此點に於て勞農政府が露都に於て大庭柯公氏を軍事探偵と誤解して殆んど監禁的待遇を與へつつあるの一事と共に悲しむべき犧牲と思ふ。我政府も反省したがよく、勞農政府も反省したがよい。共に携へて文明的國家の建設に努力し、そして人類の至福のために碎勵せんとするならば、それはお互に城府を設けず、危惧を懷かず快活に所信を討究し、實蹟を較量せなくてはなるまい、我々はこの點を我が官僚諸君が反省することを望む。

支那は露西亞と結ぶ以上、我滿洲の既得權にも手をつけやう、朝鮮問題にも指を染めやう、ただ露西亞の經濟界がいつ恢復し、新經濟策が果して成功するか、そして現在の秩序がこのままでどの程度まで持續されるか、若くはまだこれ以上に良績を齎すに至るか、これ等の成功の曉はもう露西亞の手がソロ〳〵極東にのび上らんとするときだ。この時、露領の駐兵をいかに處分すべきか。

加藤内閣でも、政友會でも、憲政會でも——四十歳以上の政治家は殘らず、英、米、日の三國の攻守同盟を以つて新らしく起らんとしつゝある新三國同盟に對立せんとの志あることは明かな事實だ、アングロサクソンから特殊待遇されても、黄色猿と罵詈せられても依然として隨從して行きたい志は失せまい、これ等、所謂紳士閥は英、日、米の三國同盟を百年も千年も繼續して行けば世界は無事なるが如く想ふかも知れないが、玆に注目すべきは我が學者、新興國民の間には露、日、獨、支の新四國同盟が可なり眞面目に頭を擡げつつある、これ等の學徒、新興國民は新獨逸と提携せんがため、佛國が獨逸に償還すべき債務を打切るべきを切唱し、或る一面には窮乏せる獨逸學者に研究費を貢がんと欲するものさへある。勞農ロシアに對する同情は我接壤地だけに尙ほ一層濃密なるものである、我が國は依然として英米に

追隨すべきか、又新に獨、露、支と同盟するか、その選び方に依りて我が國の將來する結果を想ふべきである。そしてヨッフエ氏の使命をも想ふべきである。

ヨッフエ氏を前にして、政府も、政友會も、憲政會も、ただしは平常アントノフ氏と往來しつゝある革新黨の人々さへも、靜なること林の如く對露案に對して半言隻句なく、且つ氏と會見する事さへ躊躇しておるのはどういふ理由だらう。とにかく、露領の撤兵は左へなり、右へなり正當なる解決を急ぐべきだ、撤兵するのが不條理であり、又人道の上から好ましからざるものであるならば沿、黑州等の撤兵と異る所以をモット正確に宣言すべきではないか。

列國は大使若くはその代表者を既に露都に駐派したに拘らず我國が依然として通商を拒みつゝあるは怪訝に堪えない、我が隣境に儼存する露國と通商せざる所以は奈邊にある。とにかく日露通商は一日も早く開始すべきだ、それと同時に獨逸に對しても露西亞に對すると同樣に、そして同等の好意を有ちたいものだ、我々は近く反動運動が伊太利の如く我國で頭角を現はし來るをも豫感する、そしてその結果は現在個々に分裂せる社會主義團體の結束を促し、そしてそれが眞劍に團體のために戰ふの日も豫感されないことはない、しかしこの前に我國は外には露國と修好し、內には普選を斷行して眞に平和國としての根本政策を確立するが急務中の急務だ、それが成功したら我國が率先して英、佛、米の諸國に植民地還附運動を開始し、印度は印度に、加奈陀は加奈陀に、瓜哇は瓜哇に、濠洲は濠洲に、比利賓は比利賓に、支那の租借地は殘らず支那に返還すべき運動を開始して平和國としての第一線に立つべきだ。ただ我國に限り租借地と占領地を返還するのは世界平和のために謂れないことでもあり、無意義のことでもある。ここまで日本人が徹底的に眼ざめなくては駄目だ。

我々はヨッフエ氏の來朝に當面して一言思ひついたままを陳ぶることにした。



リーブクネヒト獄中遺稿
マルクス價値論批評（其の一）

福田德三

（一）

私は嘗て『マルキシズムとしてのボルシエヴキズム』と云ふ論文（今「ボルシエヴキズム研究」に收録す）に於て言つたことがある。マルキシズム研究の流行は少くとも獨逸に就ては一の爭を容れざる顯明の一事實である。而も其大々多數の實質は寧ろ低下

下を示めすとも向上を示して居らぬことも、亦同時に之を認めざるを得ぬのである。獨り此間に在て、我々研究者が目を張つて驚異の念を以て迎へねばならぬ二個の大產物がある。一は先頃物故したカール・リープクネヒトが一九一六年から一九一八年に涉つて獄中に於て起稿した『マルクス評論綱要』と題するマルクス價値理論の根本的批評の一篇である。此は一九一六年から一九一八年に涉つてリープクネヒトが獄中に起稿した『社會的發展の運動法則』と題する大部の書物の一部を成すもので、此書の全部はまだ我々が見ることを得る形になつては居らぬが共一部たる『マルクス評論綱要』丈けは『社會政策年報』 Archiv für Sozialwissens chaft und Sozialpolitik 46 Bd, 3 Heft (Jan. 1920) にのせてある』と（前掲書六一七頁）。而して其第二の大產物たるレニンの『國家と革命』とに就ては以下二三の論文に於て、私は紹介もし又た評論も試みたが、リープクネヒトの此研究に就ては、今日まで未だ紹介の機會を得なかつた。然るに其後昨年（簡本は九月）になつて私が右に未だ見る事を得ないと記して置いたリープクネト獄中遺稿の全部が出版された。其書題は Studien über die Bewegungsgesetze der gesellschaftlichen Entwickelung: Aus dem wissenschaftlichen Nachlass im Auftage der Erben Liebknechts herausgegeben von Dr. Morris. Kurt Wolff Verlag München 1922. （社會的發展の運動法則に關する諸研究。リープクネヒト相續人の依託により學問的遺稿中よりドクトル・モリス編纂。ミユンヘン・クルト・ヴオルフ出版一九二二年）と云ふ。且これより先一九二一年には Politische Aktions-Bibliothek の一冊としてリープクネヒト政治論遺稿（Politische Aufzeichnungen aus seinem Nachlass Geschrieben in den Jahren (1917-1918)の出版あり。又同じ年に『共產主義インテルナチヨナーレ』（スパルタクス團）の公認刊行物として、リープクネヒト演說論文集Reden und Aufsätze. Herausgeber Julian Gumperz 1921. Verlag der kommunistischen Internationale の出版あり。前者は故人が共同志ローザ・ルキセンブルグ、フランツ・メーリング、クララ・ツエトキンと共

非戰論を提げて奮闘した經過を明かに示し、後者は彼が議會に於てあらゆるものを敵として其政見を高唱した跡を偲ばしめるものである。エバート、シアイデマン内閣が彼とルキセンブルグ女史とを陰謀的に虐殺したと云ふのは事實か否か分らないが、兎に角此二人はスパルタクス團から見れば最も神聖の死を遂げたもので、彼等の思想學説に賛同せぬ人々と雖も彼等が主義の爲めに最後まで忠實に奮闘したに對しては深き敬意を表すを禁じ能はざるのである。兩人の中ルキセンブルグは學問上の遺業としては『資本の蓄積』一卷がある。此書は一九一三年に刊行され一九二一年には同じくルキセンブルグが獄中にあつて起草した其書の批評に對する反駁書 Die Akkumulation des Kapitals oder was die Epigonen aus der Marxschen Theorie gemacht haben を遺稿から編纂して附錄として添へた重刷本が出て居る。此附錄は河上博士が私の『資本增殖の理法と資本主義の崩壞』とを批評せらるるに方りて右書の第二卷なりと稱して引いて居られるもの其れである。同博士がトウガン・バラノフスキー説を攻撃せられた論旨は殆んど皆此附錄と本文とから取られたもので、其惡口雜言に至るまでルキセンブルグから借用せられたものがあること程左樣に有力な著作であつて、而して河上博士の部分的紹介によつて明なる如く、彼女はマルクス説に對して大體に於いて至つて忠實なもので、其れに反する者を罵倒することも亦可なり熱烈なものである。然るに其政治的意見を全く同じくし生死をさへ共にした戰友たるリープクネヒトに至つては、其學問上の意見はマルクスと著しく異り、殊に價値論に就ては根本的に見解を異にして居るのは、我々に取つて興味ある對照と云はねばならぬ。河上博士は右批評文に『資本論を讀まずしてマルクスを批評する舊式批評家は彼等相應の膚淺なる愚論に立脚するが故にそれは笑殺又は默殺するの遑もなく自然に自滅するが、新式批評家になると、少くとも其外形に於てマルクスの理論に立脚した姿を取るので往々にしてマルクス説の正當なる理解を擾亂すに足るものがある。それは味方の陣營に潜伏せる間諜の如きものである。かくて一個のブルジョア經濟學

者たるワガン・バラノフスキーも、よくマルクス主義者たる假面を被り得る』（「社會組織と社會革命」一三〇―一頁）と。今此筆法で行けばリープクネヒトも亦河上博士によつてはマルクス主義者の假面を被つたブルヂオア學者だとか味方の陣營に於ける間諜だとか言はれるであらう。私に取つてはリープクネヒトもルキセンブルグも將た亦た河上博士が隙だらけな他愛もない議論をしたと言はるゝトウガン・バラノフスキーも皆其々に十分の尊敬に値する研究者であつてマルクス研究の上に多大の貢献を爲したものである。ルキセンブルグは散々にトウガン・バラノフスキーを罵りつゝも猶ほ彼を以つて露國に於けるマルクス批評家中最も徹底した結論を下したものだと稱して居る（「資本の蓄積」二八一頁及二九七頁）。今私はリープクネヒトの說を紹介すること、前文に於てトウガン・バラノフスキーを紹介したと同じ心持を以てするものであるが、少くとも共戰友たるルキセンブルグからの翻譯にかゝる舶來の惡口雜言を以つて（其他からの輸入は別として）河上博士から評論せらるゝ心配丈けはなくて濟む次第である。而してリープクネヒトに此くの如き見解あることを示めすのは、資本增殖の理法に對する河上博士の批評に學問上から御答をするに――其惡口雜言的部分に對しては私は永久に博士と應酬する勇氣も餘暇も見出し得ないことを玆に御斷して置かねばならぬ――甚だ有力であり、又た同博士が近來小泉信三教授に對し學問文としては殆んど前例を見出し能はざる程な皮肉的批評を試みられたマルクス價値論に關する研究に關しても甚だ參考となることと思ふ。更らに又私としては資本主義必然崩壞論の第二の支柱たる利潤率漸落の理論の考察を試むる前に、リープクネヒトのマルクス批評を紹介して置くことは、幾多の點に於て大なる便宜を得る所以である。而してルキセンブルグと言ひリープクネヒトと云ひ共に歐洲大戰爭中極めて多忙なる政治的活動に從事して居た人々で、而かも一朝獄に投ぜられるやあらゆる苦痛と鬪ひつゝ斯くまで學問的な著作を作したことは、私共が驚畏渴仰の念森厳なる敬慕の心を起すを禁じ能はぬ所である。此の事情に想到する丈けでも私は如何に強き刺戟と挑發とに會しても輕々しい漫

言妄評を以て彼等の著作に對し得ざるものである。

二

リープクネヒトのマルクス評論は其大部分即ちAからEの三十六節（内若干部を除いて）に至るまでは、マナセ氏が校訂したものに同氏の筆に成る紹介の一文を添へて『社會政策年報』一九二〇年一月號に載せてあるが、新刊の右遺稿集には更らに一九一六年同じく彼が獄中に於て下筆した『經濟學備考』からE編を補綴して第二部の第七章『社會的支配關係、權力の役目』てふ章に附錄として載せてある。（二四七頁乃至二九七頁）

彼は先づ『勞働力』及び『勞働』の概念に論を起して云ふ、勞働とは勞働力支出の行爲である。從つて勞働は勞働力と相並び其以外に立つ一の因子たり勢力たるものでなく、勞働力其ものの一の運命であり。勞働力を以ての一の經過であり一の出來事である。勞働は勞働力と相並ぶ（其外に立つ）獨立特殊の因子でなく一のファチエレ（作爲）であり一のアチエレ（活動）である。給付せられた勞働中にも勞働は一の行爲として含まれて居る、其れは力としてではなく勞働力なる一の力の支出として含まれて居るのである。給付せられた勞働とは投下せられ支出せられ、生產行程に引き入れられた（是を給付せられたと云ふ）勞働力である。換言すれば實現せられた行爲により支出せられた勞働力である。即ち其れは勞働力と其本質を異にするものではなく、勞働力其れ自らであるのである。唯其の勞働力が放出せられてある狀態、若くは放出の狀態、即ち勞働力の人的擔荷體から釋放せられ放出せられ客體化せられた狀態を云ふものである。だから給付せられた勞働と云ふのは支出せられた勞働力と云ふことを少しく不正確に言つたものに外ならない。マルクスは勞働力の價値を其の階級的な、社會的に條件付けられた實際に充用された平均生產條件に從て、換言すれば、階級

的平均生産條件に從つて測定して居る。されば、其は階級的に定められた價値であつて、普遍社會的に定められた價値ではないとする。此は誤謬である。予は之を正して次の如く言ふ。全社會的平均生産條件が凡ての他の財の價値を定むる如く勞働力の價値をも定めるのである。勞働力の價値たりとも決して階級的に定められた價値ではなく、普遍社會的に定められた價値である。勞働力の全社會的に測定せられた平均價値が生産及び流通行程に於て妥當なので、其れが即ち生産物に入り込むのである。乍去資本主義的交換客體（勞銀）は、此の全社會的平均價値によつて測定せられるのでなく、階級的『價値』、階級的經驗的生産條件、實際具體的に階級的（社會的）に平均に支出せられた生産費に從つて測定せられるのである。これを約して云へば、勞銀は決して價値等價ではなく一のより少き價値である。マルクスは、勞働を價値生起の因子として取扱ふ、即ち勞働力以外の（其れと併立する）一の獨特な因子とする。然るに正しく云へば勞働は決して一の因子たるものではない、唯一の價値生起因子を表現する勞働力の支出の形態たり經過たるに過ぎぬものである。マルクスは價値の循環を引ちぎつたが、其は正しくは無限の連鎖――渦狀環――と見る可きものである。マルクスは『勞働』を原始創造的因子――無から若くは幻想的超越的な不思議の淵源から價値を生じ來るものとした、其の支出が勞働となる勞働力の價値以上の價値が出るものとした。彼の所謂餘剩價値なるものは正しく云へば、支出せられた勞働力の價値の一部に外ならない。其は資本主義的『等價』たる勞銀――其れは實は決して等價ではない――の價値以上に出る部分である。マルクスが價値の循環を破壞したと云ふのは、彼が全く勝手に且つ純辨證的訓詁的に、勞働力と勞働とを切り放ち、支出せられざる力と、支出せられたる力との關係を閑却して、之れから生ずる價値の一致を掩ひ去り、かくて勞働力に其自らの有する價値以上の價値を生ずる能力（新―餘剩―價値、創造力又は能力）ありとするに至つたことを云ふのである。マルクスの說く所では、勞働者の變動的な生活程度勞働力生起に對する事實上の變動的支出、

勞働力の事實上の生産費——其れは必ずしも其價値を定むるものではない——の歷史的、道德的要素の所在が不明である」少くともマルクスは之を說いて居ない。彼の樣に唯だ『社會的に必要なる』（實は『階級的に必要なる』）と云ふ曖昧な言葉を使つた丈けでは此困難を取り去ることは出來ない。

（三）

マルクスの理論は平均利潤率問題に關して更らに再び蹉跌し理論の連絡を切斷し、論理的徹底と整頓とを破るに至つた。勞働の生産能性とは社會的力の表現（成果、産物）である。其力は全體としての社會の力（能率）であつて勞働者の力でもなく勞働階級の力でもない。勞働力、勞働（勞働給付）、勞働産物價値に付ても亦同じである。分配の問題、殊に生産物及價値分配の問題に進むには、全體としての社會、全社會の範圍と體容とから出でて各階級、各階級と其相互間の關係（殊に權力關係）の範圍に進み入らなければならぬ。所謂『勞銀問題』即ち勞働者の及び全體としての勞働階級の生計維持と勞働力の再生産との爲めに實際に於て社會が何程を支出するかの問題は徹頭徹尾一の權力問題であつ（「著拙社會政策と階級鬪爭」二一二頁以下を見よ）社會的權力分配の範圍に依存するものである。マルクスが斯く其時々の事實上の生産費によつて勞働力の價値を測定せんとするのは驚く可き矛盾、不徹底と云はねばならぬ。殊に彼は餘剩價値と利潤の構成に於て何の顧慮する所なく平均利潤率の經驗的現象を度外に置いて居るから、矛盾は猶更ら甚しい。此れに比すれば各異れる階級へ勞働生産物が不平等に分配せられる事實を度外視した方が未だ目立つことも少く極端さも少いわけである。マルクスが勞銀問題に關しては經驗を其論理的構成に密輸入することを企てゝ居り乍ら、利潤率問題に就ては先づ以つて根本的に經驗的現象を度外に置くこと多ければ多いほど、彼の平均利潤率問題を此の單純なる實際的經驗的解釋によつて釋

き得ると云ふ說を理解すること愈々困難となる。利潤率の問題に於いてもマルクスの理論は破れて居る、唯だ第一の問題（勞働力の價値、勞働の新價値創造能力との關係）に於けるとは正反對の意味に於て破れて居るの差がある斗りである。第一の問題に就ては、經驗の現象は單純に理論の構成計劃に引き入れられ一の不合理的な（形而上的、超越的）要素（勞働の原始價値創造力）の助けを藉るによりて無害なるものとせられ中和せられて居るに反し、平均利潤問題に於ては經驗は先づ以つて——解釋の不合理性に到達するまで——全然疎外せられ、而して最後に至つて殆んど暴力的に又たマルクス說の本體から見れば甚だ皮相的に引き入れられて居るのである。要するに此二つの問題に於てマルクスは先づ誤れる理論によつて引き入れられた誤謬を後に至つて驅逐す可く努力して居るものである。マルクスの理論は其の餘剩價値問題に於て正統派のブルヂオア理論から其の兩端說を承繼したものである。スミスとリカルドとは共に掠奪てふ概念は有つて居なかつた。兩者に從へば利潤は、商業利潤として、資本主が賣手として商品の費用價格（原料及補助料の費用、不變資本の回收及勞銀）に添加する割增から起るものである。從つて勞働者の勞働は其全價値に對して支拂はれるものである。故に利潤はマルクスの見る所とは全く違つた見地から說明せられて居る。社會的地位に立脚する分配問題は彼等によつて考察せられて居らぬ。彼等の誤つた徑路をマルクスは辿り行いて、勞働者の勞働力は全部償はれるものとし、利潤と餘剩價値の成立を全く他の場所即ち勞働力が其自ら有する以上により多くの價値を生產するてふ謎的な能源に移讓して仕舞つた。マルクスは此點に於ては經濟界に於けるチホ・ブラヘ（コペルニクスの論敵ケプレルの師。コペルニクスに論破せられて、自己の謬說を强辯補綴した人）である。然るに他の點即ちマルクス的構成の主要點に於ては全社會が決定的因子として用られて居るのである。價値の大小は社會的に必要な勞働の分量である、換言すれば、全社會の文化的殊に經濟的全習慣に從ひ、生產に際し次で消費に際して必要な勞働の分量であるとせられて居る。言ひ直せば、

生産に向つても消費に向つても、此場合には、全社會が永續的普遍的なものであり、文化的全體が完結した單位として價値構成に、引き入れられて居るのである。何故に、勞働力の價値の測定に方つて、階級の尺度を基礎とし社會の尺度を基礎としないか、其時々の社會的の個々且部分現象を基礎とし、全體を基礎とせぬか、多數を基礎とし單位を基礎とせぬか、變化的經驗的、歷史的暫行的なものを基礎とし永續的なものを基礎とせぬか。同一なる勞働給付の價値即ち勞働を全社會的尺度に從つて測らぬのか。生活程度に於ける社會的階級水準の偶然性の代りに勞働力の價値の構成に全社會を以てするとは論理の一貫が要求する所とならないか。

（四）

マルクス價値論の矛盾は以上のみに止まらない。彼によれば、價値は全社會的事實であつて階級的事實ではない。此くの如き事實としては價値は全社會の條件から說明せられ構成せられねばならぬ。其の決定根據は社會の全狀態を全體として其中に於て見出されねばならぬ。然るにマルクスの爲す樣に、之を社會の一部分なる勞働階級のみの社會的條件の中に求めるのは著しい矛盾である。マルクスの說が勞働の產出に支出せられた商品の價値を算術的に限定して測定し得ると云ふ便利ありと思ふのは誤りである。何となれば、(a)勞働力產出のために支出せられた商品の價値の中にはマルクス說によれば算術的に捕捉し得られざる要素なる『社會的必要』と云ふことが入つて居る、(b)其時々に考察せられる生活に際して支出せられる勞働に關しては『社會的必要』てふ要素は算術的に捕捉し得ない。( )其時々に歷史的に與へられた生活の程度の變遷消長も算術的に捕捉することは出來ない。此場合マルクスは明かに斷つて歷史的道德的要因を其理論に引き入れることによつて、彼は社會的全生產物の分配の範圍から一の社會的要因を、諸階級の權力鬪爭の範圍

から一の要因を取り入れるのであつて、それは彼の剩余の理論に對して一の異分子たるものである。此くの如き異分子を取り入れるによつてマルクスの理論は更らに猶一箇の不徹底を構成する。此異分子はマルクス及其祖述者の研究に編縮し實に於てマルクスの價値學説の構造を覆へす藥となるものである。

各種の社會秩序に向つて價値構成を引き放すことは暴擧である、否、不可能事である。此くの如き企ては要するに、社會の其々に異なつた階級に過ぎない各種の形態を根本的に原則的に切斷するものである。價値なるものは決して單に一の資本主義的社會事實たるものではない。價値は資本主義社會の前にも後にも存在するものであつて、唯其形を異にし異なつた人の手に存するの差あるに外ならないのである。價値が各個社會を超越する(一の特定の社會秩序以上に出づる)現實性と組成とを有つものでないとしたならば、一の他の社會形態へ移り行くに際して其蓄積せられた)社會的富の引受けが如何に構成せらるゝか、殊に如何にして此の富に對する價値尺度が全體として又た個々に於て得られ得る、社會的富が具體的の價値擔荷體として各個社會を超越する現實性と組成とを有して、社會の一形態から他の形態へ移り行くことの眞實なるが如くに、價値は各個社會超越的に、換言すれば一の普遍文化的普遍社會發展史的事實として捕捉せられ構成せられねばならぬと云ふことは眞實である。社會的掠奪を一見明瞭に手に取るように分らしめんとするプロパガンダ的要求も此くの如き構成によつて充され得ること、マルクスの理論によつて充されるのと異る所はない。價値問題を分配問題から綺麗に分離することが必要である。マルクスの爲す樣に分配問題を價値構成問題中に押入し、挿し込み、挾み込むのは兩問題共之れを害することになる。價値問題は超各個社會的なる範圍に橫つて居る。分配問題(從つて其れと共に掠奪の問題)は、各個社會の範圍、一定の社會形態の各個部門間の關係の範圍内に橫つて居るのである。

（五）

マルクスは『勞働』を『勞働力』から無理に勝手に引き放して仕舞つて、それを一の神秘的のものにした。彼は勞働を勞働力と併立する一の因子とした。かく勞働を價値法則（社會的價値形成）の因果連鎖中に於ける一の特別な環とす可く引き放したによつて、此の因果連鎖は實際に於ては切斷せられて仕舞つた。マルクスの所爲は一の概念を與へる代りに、實は單に一の言葉を以てしたに過ぎない、問題を解決する代りに辯證的な言葉の手品を使つて見たに過ぎない。勞働の生産性又は價値なるものはない、勞働力の生産性と價値とがある斗りである。勞働てふ形態に於て勞働力は其自らを放出すること恰かも電力、熱、音響か波狀運動の形態で放出せられるが如くである。勞働を一の特別な支體として之を價値構成中に引き入れるのは、音波運動形態を一の特別な力因子として電力、熱、音響の力と相並んで之を物理學に引き入れんとするが如きものである。價値構成に於ける特殊因子としての『勞働』而して其れと共にマルクス價値論の全部は空中に漂ふ浮雲である。

マルクスによれば、掠奪の構成に對する出立點は、事實的なる其時々の勞働者の社會的地位（生活程度）これである。此れによつて勞働力の價値が測定せられる（此價値は全部支拂はれるものである！）而して掠奪てふ事實は、次の點に存する。かく評價せられた勞働力から其時々の事實的なる勞働者の社會的地位（生活程度）に從つて勞働力の再生産に必要なるより以上の勞働を絞取することと之れである。マルクスの出立點は、其時々の歴史的具體的な社會的階級地位の立場之れである。而して其れは勞働力の現實なる社會的價値の確定に對する出立點である、是れ取りも直さず、一の階級事實から一の全社會的事實を導き出さんとするものである。予の見る所はこれに反し、社會的平均生産能性の決定には、

全社會の（其の經濟的作用に於ける）文化的全地位から出立す可しとするもので、これから現實價値、勞働力の尺度を得、而して勞働者は彼の勞働力が價値する以上の價値を生ずるものでないこと、（但し階段の擴張、社會的富の蓄積は別である）乍去、其れと同時に勞働者はより少き報酬を勞銀として社會的全生産物中から受取るもので、其れは決して支出せられた勞働力に對する等價ではないと云ふのである。マルクスによれば勞働者は其の勞働力に對し全部の支拂を受くるもので、唯だ勞働行程に於て此の勞働力の一見神秘的な能性（其再生産に必要なるより多くを生産し能ふてふ）が利用せられると云ふのである　掠奪の事實を斯く構成することは大なる不明瞭否重大なる內在的矛盾に陷るものである。何となれば若しも勞働力が眞に其再生産に必要なるより多くを生産する能力を有つものならば、勞働力を收得する雇主は其再生産に必要なる部分丈けを收得し、それに對して支拂つたに過ぎないか、若くは寧ろ其殘余の部分たる神秘的の力、自己再生産力以上に出づる價値原始創造能力なるものをも收得し支拂つたのではないか？　勞銀（勞働力の購入價格）の價値と勞働力の自己再生産力との間に何等かの種類の比率を主張せんとする論據は何處にある？　勞働力は其有りの儘で其一切の能力と共に收得せられ全部支拂はれること、恰かも一輪の花を買へば其の幹と其葉とを買ふのみでなく、其香ふ能性も色と形とによつて人を喜ばす能性も共に買ふのと同じ事である。自己再生産限りの勞働力と云ふような限定せられた勞働力の收得と云ふことが實際に於て如何に限られ得るか？　事實に於いて全勞働力が支拂はれ、勞働力の價値に對して全部の等價が與へられるならば、掠奪てふ事は那邊に存し何事を意味するか？　全部支拂はれ全部等價によつて全部收得せられた勞働力が、他の能性と同じく或る一つの一見神秘的な能性即ち自己再生産に必要なるより多く生産し得るてふ能性が企業者によつて利用せらるゝと云ふ丈けでは掠奪は決して說明せられ能はぬ。自己再生産力と價値とは全く不同測的なる二つの事實である。マルクスは唯だ勝手に兩者を一の作爲的關係に置いたに過ぎないのである。

（六）

價値の大さの繼續的循環（渦狀循環）が本質的なのであつて、『勞働』による價値の原始創造などと云ふことは堪へ難い誤謬である。何故に自己再生産以上の勞働を給付するてふ勞働力の能性が――マルクスの言ふやうな全部的現實的な等價たる勞銀によつて同時に收得せられてはならぬか。我々は其欲するに從つて資本主義的勞働契約を如何樣にも非難し、又は嘉納し又は批判し得るも、勞働力に此くの如き一種の能性ありとして之を特別に取扱ひ批判することは許されて居ないのである。

而して此の特別なる能性なるものからマルクスの樣に重要な結論を導き出すことには如何なる論據があるか？、要するに、掠奪の構成は、マルクスに從へば、勞銀＝＝勞働力の現實なる等價――神秘的な價値原始創造能力，勞働力の超自己生産能力の適用のみが勞働者の（勞働力の）適用をして掠奪たらしめる。予の說によれば、勞銀＝＝勞働力の現實的等價に非ず、其れよりも少きものであると。

以上がAよりC節に至るまでに試みられて居るリーブクネヒトのマルクス評論である。彼は續いてD篇に於て『自己構成』と題して、彼自らの價値論を說いて居る。今其大要を述べて見よう。

（七）

價値てふ概念は全社會の範圍から構成す可きものである。其れには社會の形態（其發展階段）に考慮を費やすを要せず唯だ其の經濟的本質から構成す可きであつて其の社會的本質（諸階級權力の分布、富の分配）から構成す可きではな

に反し掠奪の概念は、個々の社會部分(階級)の社會的地位、其生活程度、社會の全生産物に對する其分け前から構成す可きである。掠奪の尺度は勞働力の社會的平均生産力から全社會的利益の爲めに蓄積す可きものを差引いた部分と、勞働力の支出に對し現實に與へられた社會的全生産物に對する分け前との間の比率之れである。換言すれば、掠奪の程度は、社會的平均生活程度と、具體的な其時々に歴史的に與へられた勞働者、勞働階級の生活程度との間の開きに存するのである勞働の各個の種類に對する掠奪の種々異なる度合の問題と、平均利潤率の問題とは、予の構成に從へば——マルクスの意味に於ても又は之れに似た意味に於ても決して問題を起さないのである。マルクス説に起る諸の困難は、予の見解に從へば、畢竟する所次の事に歸着する。曰く、價値と掠奪とは全く異つた範圍に横はつて居て、構成的に少しも連絡はない。此二個の現象に對しては、それ〳〵別々な尺度が存し、各々其れ自らの尺度を荷ひ又伴ふものである。予の見解にては資本家階級と勞働者階級とは其れ〳〵其の社會的權力關係に相當する分け前を社會の全生産物中から得るもので、各個の勞働種類の生産能性の度合にも關係なく、又た勞働力が其支出の種類に從つて、マルクスの言ふように、其時間の長短によつて其れ〳〵の分量を自己再生産する力ありなどと言ふことにも關係ないものである。掠奪とは斯く社會の全生産物を分配するに方つて起る Vergewaltigung (壓迫) Benachteiligung(相手方を不利に陥れること)の謂である。然らば之れのみが各個々の場合に於ける利潤の唯一の淵源であるか?、否!此れは社會の全平均に對して常例的本質的なものとして妥當なるに過ぎない。此れと相並んで、猶外に個人的、社會平均的、偶然的な他の諸淵源が可能である。其れは超平均的、非常例的な勞働者に對する壓迫、絞り取りである。マルクスの理論は此の如き非常例的なもの、概念的に前提的に非常例的なものを、絶へず勘定に入れて居るが、此等は考慮外に置いて差支ないものである。我々は大數現象、社會の全發展の大なる平均根柢を考察すれば足りるものであると。

次には編纂者の用意によつて『經濟學備考』から一節を挿入してある。其れは題して『資本の組合せ』と云ふ。曰く、固定資本は勿論其他の不變資本も亦た——全體としても又た個々に於ても——決して不變的なものではなく、流れの中にあるものである。（A）蓄積又は破壞によつて其の全價値は異動する（B）勞働の生産能性に於ける變化、勞働方法の變化、生産の場所變化等によつて、各個の與へられた傳來せられた過去の勞働を體化する使用物の價値も、社會の全傳來的不變資本の價値も變化する。勞働生産能性の增進は今猶昨の如く社會によつて不變の姿に於て消費せらるゝ不變資本に屬する財の價値を失はしめる。勞働方法の變化は此くの如き價値減少を惹起するのみならず、猶ほ不變資本の從來の價値の全部的消滅をも持來すことがある。其時々に於いて生産に入り込む不變資本の價値は、其充用の時に於ける新生産に際して、其れが有す可き價値であつて、其の生産に方つて體化する其の價値ではない。斯く不變資本に就て言ふことは、可變資本に屬する傳來的消費品（生活要品の蓄積）に就ても妥當である。

可變資本は、其時々に現存する未だ支出せられざる勞働力に加ふるに、同一の時點に於て——既成又は未成品として——此の時點に於て支出せられた勞働力の再生産の爲めに現存する消費商品を以てしたもの之れである。其の價値は、其時々に充用せられた（支出せられ又は未だ支出せられない）勞働力の價値に等しいものではない。勞働力價値は其れよりも大である。即ち其れは可變資本の價値に加ふるに、勞働力によつて生産せられた（再生産又は新たに生産せられた）若くは此れから生産せらる可き不變資本の價値を以てしたものである。其時々に於てプロレタリアの勞働力の再生産に役立つ生活要品（可變の一部）の價値は、其時々に充用せられた（支出せられた又は未だ支出せられざる）プロレタリ

アの勞働力の價値に等しくはなく、其れよりは低いものである。何となれば此の勞働力は其價値以下に支拂はれ、而して價値以下の消費によつて再生産せられるものであるから。不變資本は可變資本の目的に對する手段たるに過ぎないものである。生産要具の生産は凡ての c（不變資本）が流れ込む消費要具の生産への手段たるに過ぎないものである。m（餘剩價値）はプロレタリアから取り去られた彼の生産品（社會的平均生産能性に從つて測つた）の一部であつて、資本家の過超消費に役立つものである。社會的に必要な蓄積は m から起るのではない。蓄積す可きものは、社會的平均生産能性の計算に方つて社會的機能として始めから社會的全生産物中より取り去られるものである。マルクスの說によれば、資本家の餘剩價値消費が資本主義的社會的に必要で從つて絕へず再生産を要する限り餘剩價値は再生産せらる可き社會的全生産物の一部である。之れに反し（マルクスによれば）餘剩價値は再生産せらる可き全資本の一部ではない、」何となれば、其れは——蓄積を別として——可變資本のように再び生産に入り込むことなくして消費されて仕舞ふものであるから。然るに予の解釋によれば、餘剩價値はプロレタリアの勞働力の生産物中支配階級がプロレタリアから取り去る部分——非プロレタリア勞働力の超平均的消費の爲めにせよ、勞働せざる寄生動物の消費の爲めにせよ——である餘剩價値＋プロレタリアが實際受取る可變資本の部分は、社會平均に於てプロレタリアに歸屬す可き勞働生産物に等しいのである。要するに、餘剩價値は可變資本の一部たるものである。

（九）

社會の全資本は事實的に社會的全生産に於て活動する財の總量のみから成るのではない。實際上寄生動物の消費の用に充てらるゝ（勞働力の再生産に用ひられずして）財——即ち m としてプロレタリアから取り去られるもの——も亦其中

に含まれて居るのである。何となれば此等の財は潜勢的可能的に勞働力の再生產に充てられ得るものであるから $c+v$ (可變資本+不變資本)が再生產せらる可き社會的全資本を言表はすのである。

アダム・スミスは、全生產物の價値は $v+m$ (可變資本+餘剩價値)に均しいとした。換言すれば一切の人間勞働の生產物は——材料的のものから放れて見れば——結局凝結した人間勞働に外ならないと云ふのである。其價値は $c+v+m$ (不變資本+可變資本+餘剩價値)ではあるに相違ないけれども、c は無限の連鎖に於て更らに $c'+v'+m'$ に其の c' は又は $c''+v''+m''$ に c'' は $c'''+v'''+m'''$ にと云ふ樣に解かれ行くと云ふのである。スミスの此の公式は『絕對的に——資本主義的生產方法から離れて——文化史的『正統的哲理的』『普遍的人間的』に考察するときは正しい。(勞働生產物の價値を資本主義的の意味に於て $v+m$ のてふ公式の無限連鎖を辿つて人間生產の原始時代にまで溯らしめるとは、甚しい歷史的錯誤たることは、言ふまでもない)。乍併之を經濟學的具體的に見れば無用な論である。但しそれは單純再生產前揭拙文參考に關して無用なのであつて、其反對に資本の蓄積(擴張再生產)に就いては全く具體的資本主義的に妥當である。スミスが餘剩價値中蓄積せられた部分を以て可變資本に變化されたものと爲すは正しい。此の v は先づより高き階梯に於ける生產の前提たる新しい c を生產する、而して c の擴張に充てられた勞働力は全部又は一部、此の擴張によつて可能となつた擴張再生產に於て充用せられる。玆に全部又は一部と云ふのは、再生產は事情如何によつて新しい c の生產に要するより少い勞働力しか要せぬかも知れぬ、從て之れに充てられた勞働力の一部は新らしい c を作り上げた上解放せられて豫備軍に編入せられることもある。是れは高度資本主義に於いて日々見る現象である、(殊に製鐵鋼業等に於いて)。又た再生產に充てられる新らしい c の生產に要せられたにして永久に又は一時不用となるものもある(新たに大規模な鐵道布設を爲すとき。軍艦製造等の例。高度資本主義が從來後れて居た產業に突然入り込み來る

ときに顯著である、米國に於て殊に多く之を見る）。然るときは、除外の危險を以て脅かされる資本が神經質的に業務擴張、新計劃、設計變更、新設備の强行等によつて利潤獲得行動のより廣い分野を爭奪せんとするに至る。此くの如き場合は甚だ屢々起つて終には其れが原則となるに至るが、其反對の場合即ち再生産が新らしい、の生産よりより多くの勞働力を要求する場合は、理論的には考へ得るには相違ないが實際には餘り澤山はないことである。斯くて生産の變化的鼓動が生じ一の進歩的な但し其强さに於て常に消長のある資本主義膨脹の刺戟が生ずるのである。

蓄積の經過は先づ始めに個々の資本家に於て起り且つ原則として其れは數多き個々の資本家に於て起るのである。此經過が生産連鎖の異れる諸部門に同時に起らずして均等に各部門に分配せられ、相互に補ひ合ひ、技術的に遞次に引受くる各部分間に適當の順位を以て起るならば、擴張行程は相對的恒常性均等性を有し得るであらうが、此くの如き事は資本主義經濟には全く起らぬが、起つても甚不充分である。是れ生産恐慌が資本主義經濟の構成に免る可からざる現象たる所以である。其著しき例は製鐵鋼工業及機械業である。

（一〇）

蓄積には蓄積す可きものゝ物體範圍に從つて三樣の意義があり得る。

（一）廣義に於ける蓄積。全社會に於て——各個人の手に分有せられては居るが——現存する諸財の社會的富の成長增進、新累積（其財が經濟的に如何なる種類のものであり、如何なる社會的若くは個人的作用を有するものたるを問はず、即ち奢侈用のものたると、消費に供せられると、若くは、生産增進の爲めの要具たるとを問はず）

（二）狹き意義にての蓄積。社會的生産及分配の目的並びに其他の社會的作用に役立つ諸財の成長、增進、新らしき累

積。

（三）最も狹き意義に於ける蓄積。社會經濟的作用の諸財の成長、增進、新しき累積。

蓄積には又た（一）絕對的蓄積（二）相對的蓄積を分つことが出來る。其れは其成長が絕對的の分量的の意味に於いて起るか、又は問題中にある人間の數に相對的に起るかによつて區別するのである。更らに又た蓄積は其れが起る經濟的範疇、範圍に從つて次の三樣の意義を有する。（一）社會的富の分量の增進（二）社會的富の經濟的品質即ち價値の增進（其分量は增減ないか又は現戰爭に於けるやうに社會的財が巨額に滅亡して其分量が減ずるか何れにしても）（三）社會的富の分量と品質との兩者に於ける增進。是れである。

蓄積は又た次の二樣の見地から考察することが出來る。

（一）各個の場合の見地から。即ち各個の場合に於て社會的富の一部分が生產、分配、消費へ轉位するに方つて經濟的經營手段の增大す可き累積が起る限りに於て。此くの如き各個蓄積は全社會の富が全體として見るときは停滯の狀にあるか又は却つて退步するときにも起り得るのである。

（二）社會的の見地から。即ち全社會の富が增進する限りに於て。

價値品質成長の意に於てでも、分量成長の意に於てでも、蓄積は唯一且つ絕對的疏外的に社會的勞働の社會的平均（常例的）生產能性の增進によつてのみ起り得るものであるか？答て曰く、否。其外に猶ほ各個の場合に於ける起り得可き超常例的な勞働力利用によつても起り得るのである。乍併如此非常例は理論的根本原理に取つては肝要ならず須らく之を度外に置く可きものである。

（一一）

次に起る問題は蓄積は如何にして價値の運動たる無限なる連鎖の渦狀循環に其れ自らを適合せしむるか。換言すれば蓄積が行はれるにも拘はらず價値の運動には何等の間斷停止もなく絶へず繼續して行くの理は如何是れである。

全社會的平均に從つて勞働力と社會的富との社會的必要量と、斤全文化の勞働の物質的本體の繼續的生產に要せらるるものゝ價値は、此の勞働力の勞働生產物の中に入るものである。此の如き繼續的生產には、同一の品質と分量とに於て具體的に既に充用せられたる勞働力の再生產のみが屬するのではない。同時に又た繼續的なる技術、慾望、人口數、の變遷、向上發展衝動等によつて提供せられ、而して此意味に於て社會的に必要なる分量と品質の增進が屬するものである。勞働力並びに物質的なる社會的富の增進は勿論、更に又た凡ての種類の理想的富の增進も屬する。手短かに言へば、全社會をより高き文化平準に引上げ、より大なる擴張を爲さしむるに要するもの、社會を分量に於て又た品質に於て引上ぐるに要するものを含むのである。此くの如き增進は勞働力增進の爲めにも亦た必要なものである。此くの如く其れ自らを擴張し行く擴張再生產が社會的必要再生產と云はれるのである。此くの如き見解から社會的價値額の永久無限なる固定的不變性が當然の歸結として生ずるか。答へて曰く否。

勞働力の社會的平均生產能性は、勞働力の價値に向つての尺度を與へるものである。乍去、社會的全生產物の相當部分は此勞働力に此くの如き價値を得せしめる爲めに、必ずしも勞働者によつて事實上彼の勞働力の再生產の爲めに費消せられることを要するものではない。事實上は此部分はプロレタリアによつて費消せられない。何んとなれば、其れは掠奪の結果彼れの受くるものでないから。乍去勞働者の處分に委せられる部分と雖も、事情によつて彼れの消費する所となり

能はぬか又は消費する所となつてはならぬものである。何んとなれば其れは後繼者（子孫）の養育の爲め、より增殖する子孫の養育の爲め充用せられねばならぬものであるから、又一部は貯蓄せられねばならぬから。而して社會的全生產の最重要部にして掠奪によつて勞働者から取り去られざるものは、全社會と其發展の利益の爲めに、支配階級（企業者其他）がより擴張せる、より高き品質の生產を可能ならしむ可く、之れを貯藏し置くものである、否左樣されねばならぬものである。是れが卽ち蓄積である。斯く蓄積せられ從つて社會的富に添加せられたるものは元より其の特定の價値を有する。此れは其時々の經濟中に道具、原料、生活要品として人口增加の爲め組み入れられ、斯くして社會的全生產物の價値を增大するのである。

（一二）

或は問ふ者があらう。曰く、文化經過の間に生產能性の增進と共に各個勞働力の價値の增進は起るものであるか、起る所のものは永久に均等な循環ではなく一の渦狀循環である？　其の半徑は絕へず增大し行くものであるか？　と。抑も此くの如き問を起すこと其事既に不用意無思慮の一證左である。價値と云ふものは一の相對的のものである。各種異れる分量の勞働力間の比率である。勞働力の分量は變ずるであらう、勞働力の生產能力は或は增し或は減ずるであらう、乍去尺度としての勞働力の品質は決してそれが爲めに左右せらるるものではない。勞働力再生產の爲めに全勞働生產物が、一部は掠奪により一部は貯藏（殊に蓄積）により、全部充用せられないとしても、其れが爲めに潛勢的に社會平均に從つて全勞働生產物が勞働力の再生產に入り込むことには何等の變りもないのである。此潛勢力は特殊なる社會的要因（掠奪、蓄積）の干涉あるによつてのみ現勢力となることを妨げられるのである。卽ち一部は掠奪によつて一の階

級（勞働階級）に對して現勢力とならず、他の一部は蓄積によつて全社會に對して現勢力とならないのである。

商品が相互に交換せらるゝ比率たる交換價値は勞働量によつて定められるのではない、勞働力量によつて定められるのである。全勞働生産物は全勞働力を含む。其れは餘剩勞働を含むのではない。其れが（a）勞働力（即ち再生産額に達するまでの勞働）（b）超過勞働（即ち再生産額以上の勞働）の二者を含むものとするは誤りであつて、單純に勞働力を含むのみである。然らば勞働力は如何なる尺度によつて量的に測定せらる可きか。答へて曰く、勞働力が經濟的に支出せられ流通場裡に入り込む形態としての勞働の時間と能率とに從つて測らる可きである。高度の精巧勞働力は又たより高き社會的平均生産能性、可能的に社會的平均に於て、より高き生産再生産費を有つ。換言すれば可能的にはより高き價値を消費し又た代表する。可能的に其の再生産に對して充用せらるゝ生活要品のより高き價値は、渦狀循環に於て其の高き價値の尺度と根柢とを有することより高き生産能性に劣るものではない。斯く考察するによつて予の見解はマルクスの見解に接近し來るのであると。以上がA篇よりD篇に到るリープクネヒトのマルクス價値論批評の大要である、而して以下E篇に於ては『社會的價値額の成長』を、F篇に於ては『價値の變遷と生産能性』とを說いて彼は其論を結んで居る。

（以下嗣出）

法律の生命

恒藤恭

一

概念がもつてゐる不可思議な力の一つの現はれではないかと思ふが——われわれが概念と概念とを結合することにより、或る思想を表すときに、本來それらの概念の各個は、それぞれ互ひに相反撥する內容をもつものでありながら、その矛盾を脫却し、統一的なる意味を構成すべきものとして、其れ等の上に綜合が加へられる場合には、問題たる思想は異常なるかがやきと色彩とを帶びつつわれわれの意識の裡にみづからの內容を力強く表出せむとするであらう。近年法律學界に頭を擡げ來つたところの『生きた法』の思想の場合において、さうした事例の一つに會するかのやうに思ふ。

普通に考へられてゐる所では、或は法と呼ばれ、或は法律と呼ばれるものの特性は、規範の一種類であることに存する。そして規範は、それが如何なる對象に向けられるにもせよ、之を何等かの定型に則つて規律することを以て、その本領とする。然るに、同じく通常の見解からすれば、生けるもの、生命あるものは、みづからの裡からあふれる力の趨くままに、絶えず流動し、發展し、成長することによつてのみ、その面目を發揮するものと言はねばならぬ。かやうに全然その內容を異にする二つの概念が、一つの概念のうちに、それぞれその對偶を存しつつ統一的なる意味にまで融合することは、如何にして可能たるであらうか？生ける法は、果してその規範としての本領を失ふことなくして、能く生けるもの、生命有るものたることを得るであらうか？——しかも『生きた法』なる逆說的表白にまつはつて起る斯うした疑問を抱擁しつつ、已れみづからの存立を保持する點に、生きた法の思想の全意義は懸つてゐるのではあるまいか？

生きた法の思想その者は、かなり古くから存在してゐたもののやうであり、殊に歴史法學派の重鎭であつたサギニイやプフタにおいては、かれ等の全學說の中心思想を形成してゐたとも言ひ得られるけれど、これに對して初めて明確なる概念的形態をあたへたのは、墺太利の法學者オイゲン・エーアリヒであると思ふ。素より必ずしもエーアリヒが、右に指摘したやうな逆說的意義を鋭く意識しつつ、生きた法の概念を定立したといふわけではなく、寧ろ彼みづからは極めて無理のない、自然的なる表白として、『生きてゐる法』（„das lebendige Recht"）といふ語を選んだものらしく考へられる。それはそれとして、『生きた法』といふ其れ自身生き生きした表白を捉へ得たことは、エーアリヒの唱へる生きた法の思想をして、社會的に生命あらしめる上にも、尠からず役立つてはゐはしまいかと思ふ。そして、斯かる表白を旗幟として眞向に振りかざしながら、彼の意味における法律社會學の領域の開拓に向つて進んで行きつつあるエーアリヒの見識なり努力なりに對しては、十分にその意義と功績とを認めて然るべきであらう。併しながら、それかと言つて私たちは、『生きた法』なる概念を、エーアリヒが規定した同一の內容において思惟しなければならぬ義務をもつ筈のものでもあるまい。エーアリヒの主張の核心を表現するものとして用ゐられた場合における『生きた法』の概念の內容は、斯かる意義あるものとして尊重しながら、しかも他の立場において、この概念の內容を修正し又は擴充することにより、法の本質に關する種々の事相を把捉しやうとすることも、何等かの意味ある試みとしてゆるされ得ると思ふ。

さうした見地から、生きた法の思想を批判し闡明しつつ、法律の生命の問題を考へて見やうといふのが、この稿の趣意である。すなはちエーアリヒが、彼自身の見地において、且つ彼自身の意味において、『生きた法』の思想及びその研究の重要性を高調する心持には十分共鳴するし、その立場にも暫く佇立して私自身の問題を考察して見やうとは思ふものの、いつまでもその立場にのみ執着してゐやうといふのではない。むしろ私は、『生きた法』の概念をエーアリヒによ

つて置かれた序列の中から取り出し、より高い序列にまでのぼせることによつて、法律の生命の源泉を一層深い地底に求めたいと思ふのである。

二

人類の社會及びその他の生物の社會に共通な法があるといふ思想は、希臘の昔に存在した。それをつたへて、羅馬の法學者ウルピアーヌスは、『自然が一切の動物に教へるところの法がある。この法は人類に特有なものではなく、地上並びに海中に棲息する一切の動物に共通である』と述べてゐる。かやうな思想のうちに、古拙の趣の掬すべきものが含まれてゐることは、別論として、それとは反對な方向の主張を、即ち『法はひたすらに文化の世界に屬する對象である』といふ命題を前提し、隨つてまた、『法は自然科學的意義において生けるもの、生命あるものたり得ない』といふ前提を豫想しながら、考へを進めて行きたい。だから、スピノザの嚴かな世界觀のうちにはたらく法の生命だとか、乃至は十九世紀の末年から現れはじめた生物學的法律觀における法の生命だとかは、茲では初めから考察の外に置くわけである。勿論、文化の世界のみに視野を限定する見地においても、自然の世界における生命の現象との比論、それからの暗示又はそれに基く象徴に訴へることなしに、生命の問題について云爲することの困難な所以は、之を看過しやうとするのではなく、共れとこれとは、全く違つた事柄に關するのであることを斷つて置かねばならぬ。

然らば、文化の世界のうちに生ける法が存立するとは、如何なることを意味するであらうか？ 生ける法といふからには、誰しも死せる法に想ひ及ぶであらう。そして『死せる法』といふ概念と聯關して心に浮ぶのは、『すたれた法』の概念、より精しく言へば、『すでにその効力を失つた法』の概念ではあるまいか。さうすれば、生ける法は、なほ効力を保有する法を、おのづと意味することとなるであらう。

法の効力といふことを問題とするのは、文化一般の世界を漫然と見渡してゐる立場をはなれて、法の世界の内面に踏み入つてゐることを意味する。しかも、法の効力について思惟する場合には、私たちは一足飛びに法の世界に深く踏み

込んでゐるのであつて、純粹なる法の規範によつて組み立てられた世界に當面するところの立場にまで到達してゐるわけである。

この世界においては、個々の法は、純粹なる意味として、規範的意味として、互ひに論理的に關聯しながら、相合して統一ある體系を構成する。そして此れらの法の規定の間には、それが法の規定として妥當する力の上に階級的差別があり、より低い階級の規定は、より高い階級の規定によつてその存立を支持され、後者は更により高い階級の規定に倚存しつつ、終極においては、一個の最高なる規定によつて、一切の規定がその効力をさづけられる。かの憲法學とか、民法學とか、刑法學とかによつて、即ち各種の法律解釋學によつて考察される對象は、かやうな關聯と秩序とを組成する法の規定の集團である。しかも斯かる法規の關聯は、現實的なるものの地盤から全く絶緣せる超越的存立をもつといふ意味において、純粹たるわけではなく、かの最終最高の法規その者を接觸點として、しかと社會的實在の世界に結合するものである。謂はば母體のうちにはぐくまれる胎兒が、一筋のほぞの緒から養ひを受けるやうに、右の接觸點を通して、或る法律體系内のあらゆる法規は、その生命の究極の源泉たる現實の世界につながつてゐるのである。即ち各個の法規は、一定の法律體系のうちに位置を占めることによつて初めて、有効なる法規、生きた法規として認められるのである。それ故、この意味において生命有る法は、かの最高の法規から投射される當爲の權威にうるほふことによつて、生命ありとされるに止まり、直接には、社會的現實に根ざす生命を有つものではない。

或る規範が、斯樣な意味における生きた法律たるか否かといふことは、一般に法律を適用し執行する職能をいとなむ人々にとつては、極めて重要な問題であり、延いてはおしなべて社會生活のうちにある一般の人々にとつても、多大の意義を有する問題たるのである。法律解釋學者が、その取扱ふ規定が現行法の規定たるか否かといふ點に、細密なる注意を拂ふことは、周知の事實である。玆にのべた意味における生命を喪つた法規は、それ自身、法律解釋學者にとつて何等の意味をも有たぬのであつて、『生きた法を取扱つてゐるのだ』といふ信念のみが、法律解釋學者をして、一見甚しく乾燥無味の觀ある法律解釋の任務に、傍人には理解し難いほどの熱心と忠實さとを以て從事せしめるのである。恰

もそのために、他方には、その生命を直ちに社會生活の現實に託してゐるのではない所の法規の考察としての法律解釋學のはたらきに對して、種々なる不滿が生まれて來る。この不滿は、或る意味において正しい理論的要求に基く不滿たるのであるが、しかも共れは何處までも唯不滿の感情たるに止まり、法律解釋學の學問的存立を否定するとか、危くするとかいふ力をもつものでないことを、私たちは明確に認識しなければならぬし、斯かる不滿に驅られて、見當ちがひの註文を法律解釋學に向つて發することも、心して避けなければならぬ。

右に說明したやうな、法律の効力を意味するものとしての法律の生命を、假りに法律解釋學的意義における法律の生命と名づけることとしたい。一定の法律體系に參加する總ての法規に對し生命をさづけるところの最高の法規その者が、果して社會的實在の地盤に根基をもつてゐるか否かといふことは、法律解釋學的認識によつて、見定め得られる事柄ではないけれど、この問題が肯定された上は、その體系の內面における一切の法規の生命の根源は、法律解釋學的に十分究明し得られる所である。

三

『法律の生命』を右に規定したやうな意義に理解することは、それ自身相當に意味のある考へ方ではあると思ふけれど、われわれが法律學に對して抱く理論的要求が、法律解釋學のみによつては、十分にみたし得られず、かなり強い不滿が殘存すると同樣に、單に法律解釋學的意義において法律の生命を思惟するといふ考へ方に固執することを許さないものが、われわれの心の裡に潜んでゐて、『法律はもつと充實した生命をもつてゐなければならぬ筈だ』と叫ぶのである。

かうした要求に從ふべく、さきに法律の世界に深入りして到着した立場からもとの方向へと後退することゝする。斯くして移りついた新しい立場から法律の世界をながめるとき、新しい內容をそなへた法律の生命があり〳〵と私たちの眼に觸れるであらう。

前の立場において認識された法規の體系は、唯一つの點においてのみ社會的實在の地盤と接合し、その外は、謂はゞ

意味の世界の透明なる雰圍氣の中に浮搖してゐるのであるが、この新しい立場に立つ者の視野にはいつて來る法規の數數は、それぞれ直接に社會的實在の地盤に根ざしつゝ、以てそれぞれ自己の生命の養分を吸收してゐるのだとも喩言し得られる。

この意味において生きてゐる法は、人間の社會生活の複雜多樣なる構造の一要素たり、その旺盛活潑なる歷史的發展の一分子たることに、その特色を存し、社會と共に生き、歷史と共に成長するものと言ふべきである。その代りに、社會生活の不斷の流れの動き行くところ、個々の法規を現實の地盤から切斷して、それをして直ちに死せる法たらしめることに、いさゝかも躊躇するものではない。―玆にいはゆる法律の生命を、しばらく法律社會學的意義における法律の生命と呼ぶことゝする。かのマルクス主義の唯物史觀の根本命題の一つに、『社會の物質的生產力により制約されつゝ、經濟的基礎の上に、法律は發生する』といふのも、恐らくは、この意義における生命に生きるところの法律に關するものと解すべきではあるまいか。

社會を一の人格者になぞらへて言ふならば、社會が自己みづからの活動を規律すべく、自己みづからに對して課するところの當爲の意識から、その生命を注ぎ込まれるものが、法律解釋學的意義において生ける法である。そして、この當爲を當爲として意識する境地から進んで、社會が自己の活動により當爲を現實たらしめるところの力を、その生命の根源とするものが、法律社會學的意義において生ける法である。法律が社會的權威によつて支持されることに基いて、社會構成員の意志に對し拘束を加へる點を重く視る人々は、社會的實在を超越してそれ自ら存立するかのやうな觀を呈するところの法規の體系の論理的關聯を明かにすることが、偏へに法律學の使命たるものゝやうに思ひ込みがちである社會的權力のはたらきに參加する人々も亦、かれらの權能の自由なる使用を尙ぶの餘り、やゝともすれば、抽象的法理的意義における法律の生命に眩惑して、社會的實在の複雜なる構成と、それに伴ふ要求とを無視することに傾く。之に反して、社會的權威から由來する法律の生命の實際的意義を輕く視る人々は、社會生活との具體的關聯から切り離され意味としての抽象的形態に還元せしめられた法規の體系の研究を以て、學問的實質に乏しく、徒らに煩瑣なる概念の遊

戯に墮する勞作たるものと哂ひ、法律がその他の種々の文化現象と共に、社會的實在の經緯の中に目まぐろしく織り込まれる有機的な關係を通じて、發展し躍動する法律の生命を把握することにこそ、法律學の眞實の職分は成立すると主張するであらう。これらの見解のいづれもが、正しく價値ある思想を含むと共に、それぞれ違つた意味においてゞはあるけれど、一種の偏見に囚はれてゐることも亦之を否みえないのである。

以上の考察によつて知られるやうに、法律は、意味として生きると共に、實在として生きる方面をも有つてゐる。法律が意味として生きるとは、『法律が一定の内容を――法理的内容をもちつゝ、個人の意志を超越して妥當するものとして、社會を構成する人々に臨み、これらの人々が如何なる態度をとることを現實に欲求するかを問はず、或る態度は之を適法なりとし、或る態度は之を違法なりとする力を具へつゝ存立すること』を意味する。この力を失ふや否や、法律は最早意味として生きるものではなくなるが、この力を失はぬ限りは、社會生活との交渉が如何様に行はれるかに關する所なく、儼然としてその生命を維持するのである。して見れば、斯やうに解せられるとき『生きた法』なる表白にあらはれてゐる逆説が眞實なる逆説として成立しないことは明かである。次に、法律が實在として生きるとは、『法律がその意味の上からは當爲でありながら、存在としては、社會を構成して生活する個々の人々の現實的意識のうちに表象されることによつてのみ、その存立を保つこと、從つて社會を構成する人々が、かれらの意識する法律の表象にしたがつて自己の行爲を定める限りにおいてのみ、法律はその規範としての社會的任務を果し得ること、種々多様なる原因に促されて社會を構成する人々の法律意識又は法律思想が變化し動搖し發達するに伴うて、必然に法律その者もそれに對應した運命に服せざるを得ないこと』を意味する。この方面においては、法律の生命は、その規範としての性質に關はしめて概念されるのではなく、ひたすらにその規範を支へる存在の態様に着眼して想定されるのであるために、やはり『生きた法』なる表白の逆説性が、單に表見的なものとなつてゐる次第である。

久しい間、法律學者たちの多くは、法律解釋學的意義における『生きた法』の考察に、その力を傾倒してゐた。そして法律社會學的意義における『生きた法』の考察を、あまりにも等閑に付したのであつた。かやうな學問的態度が、かれらの旨とした學問的考察、すなはち法律解釋學の研究その者に對しても、面白からぬ影響を及ぼしたことは、それ自身重大なる學問的缺陥を——いはゆる概念法學的缺陥を構成するものと見なければならぬが、その點は姑く措いて、法律學者たちが、法律解釋學の研究のみが法律學者の任務たるかの如くに考へ馴れたこと、言ひ換へると、經驗的實在の源泉から湧き出る法律の生命のみに心を奪はれたことは、學問的要求に忠實なる人々の意識のうちに烈しい不滿の念を刺戟する所以たらざるを得ない。殊に法律解釋學によつて考察される法規の範圍が、國家機關によつて制定された法律に局限されてゐることは、一層この不滿の程度を增大せしめるのである。獨乙系統の法律學界において、さうした不滿をかもすべき空氣が殊に濃厚となつて來た。エーアリヒが生きた法の研究の必要を提唱した動機も、主としてかやうな不滿の念から生まれ出たのであつて、彼のいはゆる『生きた法』は、私が上に規定したやうな法律社會學的意義における『生きた法』と、大體において近似せる概念たるのである。

國家機關が制定し適用する法と、國民の間に行はれる慣習を通じておのづから發現する法との二者を、峻しく對立せしめることは、歷史法學派に特有な考へ方の一つであつた。元來かうした考へからエーアリヒは彼の全思想に對する暗示を獲たのであるが、彼も亦一種の二元的法律觀に立脚するものであつて、國家機關を拘束するところの法、すなはち行政規範及び裁判規範と、一般の社會生活において國民の家族關係や財産關係やを支配する規範との間に、截然たる差別の存することを力說する。『生きた法は、生活を支配する法である』と彼は說いてゐるが、彼のいはゆる『生活』は社會生活の全體の中から國家機關の活動をのぞいた其他の部分を指すものとしての『生活』なのであつて、『生きた法は單に裁判所や官廳やで妥當する法ではない』のである。一般文化の發展につれて、國家機關の活動を規律する法が確盛なる成長を遂げるに至つて、法律學者は專らこの種の法の考察に沒頭し、殆んど他を顧みないやうになつた。その結果法律學者の爲す所は、固定せる國家的規範の條文解釋に過ぎず、法律學は、行政官又は裁判官が法律を執行し又は宣言

すべき職能をいとなみ得るための技術と化した。今や法律學者は、法律學の基礎をきづいた羅馬の法律學者の精神に復歸すべきであり、近世において羅馬の法律學者の精神を復活した歴史法學派の創始者たちの態度に倣はなければならぬ。言ひ換へると、生きた法の研究が、法律學の第一義たることを、明確に自覺し、且つそれに基いて研究に從事しなければならぬ。それは、單なる技術にまで堕落した法律學のために、學問的生命を回復する所以でもあれば、實生活の要求とは沒交渉に、法律のために法律を解釋しやうとする概念法學の迷妄を打破する所以でもある。

かやうなエーアリヒの提唱が、沈滯せる法律學界に新しい生命を注入すべき意義をもつものたることは明かであるが方法論的見地からみて、彼の主張には、重要なる修正を要する點があるやうに思はれる。

『法律學の考察範圍を國家の制定に係る法規に限定せず、國家と直接に交渉しない一般の生活關係において發生し發展するところの法規をも亦、研究の對象たらしめやうとすること』と『研究の對象の範圍如何に拘らず、あたへられた法規の意味を解釋することを旨としないで、それらの法規を現實の社會生活の組織の一分子として、歴史的發展の一要素として考察しやうとすること』とは、互ひに全くその意義を異にする二個の事柄である。そしてこの第二の事柄が、法律社會學を法律解釋學から區別する標準を成すのであると、私は考へる。だから、考察範圍を國家の制定に係る法規に局限したところで、必ずしも法律解釋學的研究たらねばならぬ理由もなければ、考察範圍をその以外に求めることによつて、當然にその研究が法律社會學的となるとも限らぬわけである。——私が前に規定したやうな二樣の意義における『生きた法』のいづれか一方を以て、殊に法律社會學的意義における其れを以て、眞實の『生きた法』であるとし、他方はさうでないと考へることは、考へる者の自由であるが、これらの二樣の意義における法を以て、同一の視野の中に矚目する二種類の對象たるものと考へるのは、正確な觀方ではない。むしろ同一內容の規範が、一方には、法律解釋學的意義において生きた法たると同時に、他方において、法律社會學的意義において生きた法たることもあれば、さうでない場合もあるといふ風に理解されねばならぬ。エーアリヒが彼の謂はゆる『生活』を支配する法のみを以て、『生きた法』たるものと限らうとする心持その者には、いかにも同感を禁じ得ないけれど、かやうな觀方に基いて法律社會學の

本質及び方法を規定しやうとする態度には、無條件に贊成することが能きない。茲では詳しい議論に亘ることを避けたいが、國家機關の法律的活動と、その他の一般の人々のそれとを峻別する仕方は、假令或る一定の立場からは必要であるとしても、法律社會學が恰もこの立場をとらねばならぬといふ理論的根據は、之を求める由もない。

對象の方面から觀る場合に、私は、國家機關が制定し適用する規範のみを以て法律たるものとなす見解を採らず、エーアリヒと同樣に、その他の社會的規範の中にも法律の範疇に屬するもののあることを認める者であり、前の種類の法律のみならず、後の種類の法律も亦、十分に法律學的研究に値ひする對象たることを主張する者である。けれどもエーアリヒとは違つて、後の種類の法律は、ひとり法律社會學のみならず、法律解釋學によつても研究さるべきものであり、この方面に、法律解釋學は廣き未開の地域をもつてゐるといふ風に考へたいと思ふのである。

五

法律秩序の一構成分子として認められてゐるといふこと、即ち現行法の體系のうちに一定の地位をあたへられてゐるといふことは、或る規範が法律としての使命を全くする上に欠く可からざる前提を成すものであり、その限りにおいて、法律解釋學的意義における『法律の生命』も、その内包が空虛であるとは言へない。けれども法律秩序の一構成分子として存立するといふだけでは、法律の法律としての機能が十分に發揮され得べくもない。他方においては、法律の規範が、國家機關の活動並びにその他の一般の人々の活動を媒介として、社會的實在の組織及び發展過程の中に有機的に織り込まれてゐるといつても、この事柄その者によつて、法律の全生命が滿足にあらはれ盡すとも言へ難い。換言すると、法律の生命は、之を法律解釋學的意義において思惟し、且つまた法律社會學的意義において思惟したとしても、なほ思惟し盡されないところの重要なる內容をもつて居る。隨つて或る法律規範が、これらの二樣の意義における生命を併せもつてゐるとしても、單にそれだけでは、十分なる意味において『生命ある法』たるものとは認め難いのである。

最初にのべたように、法律の本質は規範たることにある。だから、法律は何等かの定型に則つてその對象を規準しな

ければならぬ。——對象に即し、對象に支配され、對象の存在と性狀とに唯々として服從するといふのであつては、規範は到底眞正の規範たることを得ない。規範は、自ら守る所のもの、自ら定立すべき所のものを有し、これによつて飽くまでも能働的に、自律的にその對象を支配し、規定すべきである。法律の對象が人間の社會的生活關係であるとすれば、法律は、社會的關係に盲從し追隨することを以て足れりとすべきではなく、一定の型式により、一定の方向へと、後者を規律し、指導することを以て、その本領とせざるを得ない。法律解釋學的意義における法律の生命は、斯かる法律の本領を幾分か表現するものであつて、われわれは、一方にはこの意義における法律の生命の思想を、更にその歸趨に向つて展開せしめなければならぬ。

規範は、現實的なるものに倚存せず、率ゐられず、獨自の存立と方向とを維持しなければならぬが、同時に、現實的なるものをして已れに合致せしめ、已れと同化せしめ得るのでなければ、其使命を完全に成就するものとは言ひ難い。假令、初めは、法律の要求と社會的生活關係の現實との間に、顯著なる間隙が存在し、前者は後者に拘はりなく當爲として存立すると共に、後者は前者を無視してみづからの隋性の向ふままに展開するといふのであつても、いつかは、兩者の間に融合の途がひらけ、法律の要求が當爲として意識されるまでもなく、社會的生活關係のうちに謂はば無意識に半ば本能的に實現されて行くといふやうな狀態が招來されなければならぬ。かくなつた曉には、法律は、法律社會學的意義における生命を十分に體得するのであつて、あらゆる法律は、この意義において生きむとする欲求を本質的に具有するものと言はねばならぬ。

然らば、前の意義において生命ある法律が、後の意義において生命ある法律と爲る可能性は、一般に如何にして保證されるであらうか？言ひかへると、社會における一定の權威者が、その社會において妥當すべきものとして定立した法律は、如何なる條件をみたすことによつて、その社會を構成するところの歴史的實在の地盤の上に、自己の生命を顯現し得るであらうか？。

六

或る法律の規定の內容が、その規定の妥當すべき領域たる社會を構成するところの一般の人々の生活要求に叶ふといふことが、右に疑問とした必要條件たるものとして思惟することが能きるであらう。すなはち、社會の一般の人々の有する生活要求のうちに、かの二樣の意義における法律の生命が契合する點を求め得るであらう。法律の對象は、社會的生活關係であると、一般的には規定しえられるが、現實の社會的生活關係は、一つとして特殊の形態、特殊の構造を有たぬものはなく、それに伴うて、個々の法律にとつて對象たるものの內容も亦多樣たらざるを得ない。だから各個の法律の規定は、一定の形態、一定の構造をそなへた生活樣式を概念的に抽象的に定立し、現實の社會的生活關係がこれに合致すべきことを要求するのであるが、後者がかやうな法律の要求をみたすに至るのは、終局において、社會を構成する一般の人々の意識が、問題たる特定の生活關係の構成について、法律が定立すると同一の樣式を、その典型とすることを是認するに因るのである。

特定の社會の構成者一般の價値意識のうちに採擇され、その中に自己の存立を託することによつて、法律は以上において未だ闡明しなかつた所の、新しい意味における生命に生きることとなる。——或る社會において法律が一般人の生活要求に適合するといふことは、前にのべた二樣の意義における法律の生命の發現形式を綜合して、より高い意義における法律の生命の發現形式を成立せしめる。社會人一般が一定の法的規範に對して是認をあたへると言つても、或社會に屬する總ての人々がこの是認に參加することを意味しない。言ひかへると、社會人一般の生活要求は、必ずしもその社會の全員の意識によつて支へられるものではなく、むしろ兩者の間には截然たる差別の存するのが通常である。そして社會人一般の要求を現實に支持する人々その者について見ても、要求意識はどこまでも要求意識たるに止まり、それが要求內容を實現せむとする意志たるに至る迄には、必ずや一定の意識的間隔を經由しなければならぬ。かの差別とこの間隔とは、社會人一般の生活要求をして、その社會の全員の意志に對して當爲の形式をとりつつ臨ましめるのである。

しかも社會人一般の生活要求は、よし社會のすべての人々の意識のうちにその存立の地盤をもたないまでも、少くとも社會の多數の人々の意識によつて現實に支持されるのでなければならぬ。だから、法律が社會の一般人の生活要求に叶ふといふことは、社會的實在の根柢を成すところの個人の意識のうちに、現實的存立の足がかりを獲得してゐることを意味するわけであつて、この方面から見れば、社會人一般の生活要求を通して、法律は現實の世界に確固として立脚するものと言ふべきである。かやうに考へて來ると、社會人一般の評價意識は法律解釋學的意義において生命ある法が、法律社會學的意義において生命ある法たるに至る可能性を、一般的に保證するものであること、また社會人一般の生活要求に合致することによつて生命有るところの法律は、右の二樣の意義において生命ある法律に比して、より複雜な意味において生きた法律たる所以が、おのづと首肯されるであらう。

今日法律の實際家や學者やの意識をかなり强く刺戟してゐるところの『法律の社會化』の要求は、それ自ら社會の一般人の生活要求に根ざしてゐるか否かは別問題として、その正しい意味は、おそらく、『法律をして適切に社會の一般人の生活要求に叶はしめよ』といふにあるのではあるまいか？、すなはち、法律を社會化するとは、玆に規定した意味における『法律の生命』を法律のために確保することをいふのではあるまいか？そしてかやうな推定が是認されるならば、『法律の社會化』の要求は、『生きた法律』の要求に歸着するわけであるが、この場合に『生きた法律』といふのは、かのエーアリヒの謂はゆる『生きた法律』の概念とぴつたり合一するものではないと、私には考へられるのである。

かくて、法律を社會化し、生命あらしめるためには、社會の一般人の生活要求を認識することが、何よりも肝要な前程であるとして、『社會の一般人の生活要求』の概念を明確にするのでなければ、個々の社會的生活關係に對する該要求の具體的內容を正しく把捉することは、到底不能たらざるを得ないであらう。

七

若しも、法律は社會の一般人の生活要求に適合すべきであるとの主張が、法律は人間の生きやうとする原本的意志に直自に合致すべく、且つそれ以上に出るべきではないといふことを意味するものならば、結局、法律は不必要であるといふ斷定に歸着しなければならぬ。斯かる斷定を、眞に徹底的に是認する人々の立場も思惟しえられるけれど、苟しくも法律その者の存立を必要とみとめ、その見地から、生きた法律を要請する態度をとる以上は、法律は社會の一般人の生活要求に適合すべきであるとの主張を、右のやうな意味に理解することは許されない。すなはちこの場合にいはゆる生活要求は、單なる自然科學的意義における『生きやうとする意志』その者ではあり得ない。

かやうに云つても、謂ふ所の生活要求が、自然科學的意義における生活意志。即ち單なる生物として認識された人間の生きやうとする意志と沒交渉に、それ自ら獨立に存在するといふのでないことは、勿論である。法律をして生命あらしめる所以たる一般人の生活要求は、生物としての人間の生きやうとする意志に論理的に對應する內容をもその中に包含しつゝ、更により多樣な、より豐富な內容を藏するところの『生きやうとする意志』であらねばならぬ。別個の方面からいふと、斯かる意味における生活意志は、何らか超越的なる存在を有する形而上學的意志として考へらるべきではなく、むしろ共れの實在的支持者として、自然科學的意義における生活意志が、重要なる役割をつとめるのである。以上において、往々『社會人一般の評價意識』といふ表白を用ゐたのも、右に述べた所と照應するのであつて、謂ふ所の生活意志は、畢竟、人間が價値を承認し、且つこれに基いて生活しやうとする意志を指すものに他ならぬ。だから、人間が、自己の單なる生物としての生存を價値づけ、その維持を欲求する意志を有するに止まらず、その他の多樣なる價値を肯定し、その實現に努力するものたる以上、問題たる『社會の一般人の生活要求』が、これに應じて複雜なる內容を有せざるを得ないことは素より明白である。

法律をして生命あらしめる根源たる『社會の一般人の生活要求』が、それらの人々の價値意識によつて、支持され、提起されるものであるとすれば、われわれは論理的に一層遡つて、價値意識をして價値意識たらしめる根據をあたへる價値その者に到達しなければならぬ筈である。併しながら、その前に吟味して置く必要があるのは、『社會の一般人』と

は何を意味するかの問題である。

この問題については、或る社會の一般の人々とは必ずしもその社會のすべての人々を意味するものでないといふ消極的規定だけを、既にあたへて置いた。或る社會に屬する一切の人々又は大多數の人々が特定の法的規範を是認する場合には、問題は簡單である。併しながら、一般にある規範に對して評價を加へる能力のない人々は、最初から之を顧慮しないとしても、その他の人々の全部又は大多數が、特定の法的規範を是認する場合は、比較的に稀れであつて、多くの場合には、個々の法的規範の評價につき、社會に屬する人々の意見は、複雜な形態をとつて岐れるのである。爾餘のさまざまな事情を一々擧示するまでもなく、生活上の利害關係において峻しい對立を形成する階級的區別が、社會の内面を横斷してゐる場合に、同一の法的規範又はそれによつて、維持される法的制度の評價に關して、如何に相異つた意見が、如何に烈しく鬪ひ合ふかといふことに想到するときは、多くの法的規範又は法的制度に關しては、社會の一般人の是認を問題とすることが、全然意味のない仕業たるやうに感ぜられるであらう。

かやうに觀て來ると、社會の一般人の生活要求に叶ふ法律を意味するものとしての『生きた法律』の思想は、甚しく意義の空疎なものとなりはすまいかと危惧されるかも知れない。併しながら、この危惧は表見上のものたるにすぎぬ。といふのは、右の意義に於ける『生きた法律』の思想は、元來、或る時代の或る社會において法律たる效力を有する規範の全部又は多數が、一般人の生活要求に適合することを表白しやうとする意義をもつものではなく、法的規範は社會の一般人の生活要求に適ふ場合においてのみ生命を有すること、言ひかへると、あらゆる法的規範は社會の一般人の生活要求に合致すべきであるといふ要請を表白することに、その全意義を存するからである。だから、或る時代の或る社會において、一般の人々の生活要求に合致すると認め得られる法的規範が乏しいとすれば、必竟その社會には、生命なき法律、死せる法律のみが徒らにはびこつてゐるといふ事實が、證明されるわけであり、この事實をするどく意識に訴へる役目を果しさへすれば、玆にいはゆる『生きた法律』の思想は、徒らに構想された事とはならぬ次第である。

八

或る時代の或る社會において、一般の人々の生活要求を標準として個々の法的規範を評價し、之に適ふものが正しいといふ理由から、その社會には死せる法が跳梁してゐると判斷し得たとしても、積極的に、如何なる法的規範が果して生ける法であるかを、的確に判斷し得るであらうか？その社會に属し且つ評價能力をもつ人々の全部又は大多數によつて是認される法的規範が少數であるといふ事實が確定しただけでは、その他の生命なき法的規範の代りに如何なる法的規範を定立すべきであるかといふことは、當然には認知され能はぬ。但し此場合に、一般の人々の積極的に要求する規範の內容が知られてゐながら、法律の制定を左右する社會的勢力關係のために、その要求が實現されないといふのであるならば、如何なる規範が、現在の生命なき法に代るべきであるかといふことは、明確に判斷されるわけである。之に反して、現在の法が、社會の一般人の生活要求に合致するのではないが、さりとて其れを支持する人々も相當に多數であり、其れを批難する人々と相拮抗するといふやうな場合や、現存の法を支持する人々は、甚だ少數であつても、その法によつて生活利益を抑壓されてゐる大多數の人々の自覺が幼稚であるために、かれらが自分たちの生活利益を生活要求として意識するに至らない場合やにおいては、『生きた法』たるべきものの內容を確立し難い事情が存するわけである。かやうな場合には、何を標準としてわれわれは、現存の生命なき法に代るべき『生きた法』の內容を知り得るであらうか？

更に一歩を進めて考へるならば、個々の法的制度に關する社會の一般人の生活要求が、明瞭に認識され得るとしても果してその要求內容がかれらの正當なる評價意識に基くものであるか否かが、問題とされねばならぬであらう。但しかくいふ場合には、生活要求を以て、單に『價値を承認し、これに基いて生きやうとする意志』を意味するものと解する

立場から、『價値を正しく承認し、これに基いて正しく生きやうとする意志』を意味するものと解する立場に、漠然として移り立つてゐるのである。勿論、前の立場から後の立場への前進に、すべての人々が肯んずるところの所爲であるといふのではなくて、すべての人々が肯んずべきところの所爲であるといふことを確認しなければならぬ。

さきに、社會の一般人の價値意識から、一層遡つて價値その者に到達しなければならぬと言つたが、われわれが斯くして先づ到達し得るのは、それらの人々によつて承認され、その限りにおいて、それ等の人々の意識を支配する資格としての價値たるのであつて、經驗的客觀性をそなへた價値ともいふべきものなのである。しかも社會の一般人の評價意識から出發して、かやうな經驗的客觀的價値にまで進んで行つた論理的動機をして更にその方向に發展せしめるならば、すなはちその本質的動機を求めしめるならば、、該價値にそなはつてゐる客觀性を純化する過程の窮まりに立つところの先驗的客觀的價値にまで、追窮しなければ止まぬであらう。そしてこの純粹なる價値を目標としつゝ生活の途をたどらうとする意志こそは、右に言及した價値を正しく承認し、これに基づいて正しく生きやうとする意志に他ならぬ。

九

社會の一般人の價値意識といふ場合の『社會の一般人』は、單に『社會に屬して居り且つ評價能力ある人々』を指すのではなく、『社會の一員であり且つ正に社會の一員たる立場から評價作用を行ふ者としての人々』を指すのである。だから、社會の構成者としての立場から提起されるのではない生活要求は、假令社會の構成者としての立場から提起される生活要求と緊密に結合するものであるとしても、それ自ら『法律の生命』の根源たる『社會の一般人の生活要求』たることを得ない。今われわれが社會の構成者としての立場から正しく評價作用を行ふことによつて把握する價値を、『正義』の價値とよぶことゝするならば、正義の價値は、他の諸々の先驗的價値と並んで獨自の存立を有すべく、その特有

なる意味は、他の諸々の價値を實現し促進するわれわれの活動をして——それが社會の構成員としての吾々の地位に關する限りにおいて——同時に社會の構成員としてのわれわれの正當なる活動にまで綜合されしめる所の指導原理たる點にあらはれるであらう。

正義の概念をかやうに規定するときは、さきに述べたところの、社會的生活關係に對する社會の一般人の要求は、まさに正義の價値意識に立脚するものたるべく、更に社會の一般人の價値意識から論理的に遡り行く窮極の境地に立つものは、先驗的客觀性をそなへた正義の價値たらねばならぬわけである。そして、斯かる純粹なる境地に存立する正義については、或る時代の或る社會に屬する人々の全部又は大多數が承認するとか、承認しないとかいふやうな問題は、最早關する所ではなく、或る時代の或る社會における一定の生活關係と、それに對して與へられる法的規範とを對立せしめ、果して後者が正義の意味において前者を規律するものたるか否かを檢討するによつてのみ、その規範の生命の存否が判定しえられることになる。かやうな意味における『法律の生命』を問題とする見地において、なほ『社會の一般人の生活要求』といふ概念を保持しやうと思ふならば、謂ふ所の『一般人』は、社會を構成する個人の全部又は大多數を意味するものではなく、それらの個人の行ふ評價作用をして正しき評價作用たらしめる評價原理の支持者を意味するものとしての『先驗的社會我』又は『社會人一般』であらねばならぬ。現代において、或は民衆の名において、或は無産階級の名において、法律秩序の根本的變革の要求が提起される場合に、それがあらゆる人間の頭をうなだれしめる嚴肅なる權威をもつのは、必竟茲にいはゆる社會人一般の生活要求を體現することに基く。

かくて『法律の生命』の最も深い根源は社會人一般の生活要求の心髓としての正義の價値に求められる外はなく、この根源から湧き出る生命こそは、最も固有なる意味において『法律の生命』たるものといふべきである。

正義の意味において社會的生活關係を規律するのが生きた法律の本領であるとすれば、社會の歷史的發展にうながさ

れて、個々の特殊なる社會的生活關係の全社會生活に對する複雜なる關聯の形態が變化するに伴つて、全法律秩序の構成分子に對し、それに照應した改廢が施されるのでなければ、生きた法律は次第にその踪を絶つに至るであらう。だから、法律秩序が全體としての正義の意味を矛盾なく顯現し能ふ限りにおいてのみ、その構成分子たる各個の法律規範は各自が提立する定型を以て、それぞれその對象たる生活關係を規律する權利ありとされるのであり、この條件が損傷された場合には その損傷を惹起した原因たる諸々の法律規範は、その提立する定型を以て、現實の生活關係を規律する權利を喪失するのである。この意味においては、對象たる社會的生活關係の發展に適應して、法律秩序みづからが常に生き生きと成長しなければならぬ。しかもこの成長その者は、正義の要請にみちびかれて行はれるのでなければ、單たる成長、單なる變化たるに止まつて、眞に生き生きした成長たり得ないであらう。

「法律は自然科學的意義において生けるもの、生命あるものたり得ない」といふ前提から出發する以上は、所詮、法律の生命は、精神的意義において理會されなければならぬ。そして精神的意義における生命は、一律なる因果の法則に支配されつつ雜多なる表象の消えては現れる心的實在の地盤にそだつものでなく、人間の追求する目的內容の意味によつて限なくいろどられた文化の領域に成長するものであつて見れば、人間の目的定立を制約する所の純粹なるもの、普遍妥當的なるものの世界に、その源泉を有することによつて、物象の生命は、眞に潑溂として躍動し、生命有りとされる一切のものに特有なところの、清新なるうつくしさと、充實した力のはたらきとを顯現すべきわけである。

法律についても異なる所はなく、純粹なるもの、普遍妥當的なるものの地盤に根ざして、それらのものの限りなき生命にうるほふことによつてのみ、且つ斯かる存立のすがたにおいて認識される限りにおいてのみ、法律は、われわれの意識のうちに、眞に生命あるものの形相を展開し來るのである。私は、法理的効力を意味するものとしての法律の生命

と、社會的效果を意味するものとしての法律の生命とを區別して、相互に比較考察した後、次には、これらの兩者の特性を綜合し包容するものとも視得られるところの、社會人一般の生活要求の結晶としての法律の生命について考察し、終りに、正義の要請の體現としての法律の生命に考へを及ぼしたのであつた。これらの四様の意義において、法律の生命の問題を考究するときは、それぞれ違つた意味において、法律の本質に觸れ得ると思ふが、これらの問題を互ひに關聯せしめて、順次に考察しつゝ最後の問題の解明に到着することが、法律の本質を比較的に的確に把捉し得る方法であるとも思ふ。そして、『法律に生命あり』と主張する者が、若しも最後の意味において、法律の生命なる概念を理會しないならば、その主張は、到底、單なる喩言以上に出で能はぬであらう。

法律の生命の問題をかやうに考へて來て、私自身を取り卷いてゐる現代のわが國の社會を見わたすとき、其處に、既に生命を失つた法律制度や、初めから生命をもつてゐない法律制度やが、徒らにいかめしい形骸をさらしつつあるのをあまりにも夥しく見出すことを哀しむ。そして斯かる生命なき法律の形骸の檢討に、多くの勞力を費さなければならぬ法律解釋學者の運命をさびしく思ふのである。──一九二三・一・二八──

藝術の本質的價値とその附隨的價値との差別について

石原純

藝術を深く且つ正しく味ふためにはその本質的價値がどこに存するかを知らなければなりません。

私たちは新らしい藝術に對して之が現はさうとする意味を理解し得るだけの準備を必要とすると共に、亦古い藝術作品に接して能くその本質を見徹すことの出來る鋭い批判を要求しなければならないのです。蓋し藝術の純粹なる批判は作品そのものから承ける直接の氣分的鑑賞と或る意味に於て差別されなければならないからです。

藝術にはいろ／＼の種類があります。從つて私の上に述べた事がらはこの種類に應じてそれぞれ異つた要素に對して考究せられなければなりません。文藝や音樂のやうなものでは、それは言葉とか樂譜とかによりてのみ殘され得るものですから、それらが後の時代に於てもその儘理解せられ得る限りに於て、作品そのものに新らしい要素の附加せられることは殆どないと謂うてもよいでせう。併し之に反して成形美術のやうな制作品に對してはその作品の保存がどんなに注意ぶかくなされても、そこには多くの自然的變化があらはれて來ます。私たちはこの自然的變化から承ける感情を作品の藝術的意味と混同してはならないのです。こゝに藝術的並に骨董的價値の差別が必要になるのでありませう。

尤も文藝や音樂などに關しても私たちは尙ほ幾分同樣の事がらを顧慮しなくてはなりません。言葉や思想は常に同一

のものではなくて、絶えず時代と共に流動し變化します。これ故制作者それみづからがその作品にあらはせる言葉や思想に對する感情と、時代を隔つた私たちが之等に對する感情との間には大なる差異のあることは免がれません。特に古代語に接するやうな場合にありては、私たちはそこに現實を離れた或る夢想的雰圍氣を感ずることが多いのです。(現代語でも自分から遠い外國語に於て同樣です。)かやうな場合には私たちが直接にそれらから承ける氣分は、その藝術の時代的意味とは異つたものがあるでありませう。私は固より古藝術がさう云ふ雰圍氣に包まれながら直接に時代を隔たつた人たちに及ぼす影響の正當な評價を否むものでありません。私たちが古典に於てのみ味ひ得る或る感情はまことに尊いものであり、そこに古典の多くの價値があることを信ずるものです。特に私たちの現實的に求めて得られない思想をそこに含むことに於て、そしてまた私たちが時代を溯りて完全に古昔のこゝろに歸ることの不可能なことに於て、その創作を再びすることの出來ない尊さをもつてゐるのです。併しながら私たちが之等の古藝術の眞の價値がどこに在るかを審かに考究したならば、それは單に之等のものが再び創作し得られないと云ふ點にあるのではないことを知るでせう。或る藝術家の死が人をして俄かにその遺作に括目せしめると云ふことも事實です。この場合にはその死によりて彼の人格を追悼すると云ふ意味と共にその創作が再びせられないといふ事がらに對する名殘惜しさも含まれてはゐますが、併し純粹の藝術上から見れば、之を機會として彼の藝術に存する價値が人々の記憶のなかに喚び起されるといふことにより多くの意味が歸せられなければなりません。單に再び創作されないと云ふことから云へばすべての人の過去の作品は悉くさうであるわけです。過去の時代は同一の人に取りても既に歸ることは出來ないからです。古藝術の價値は之に內在する思想及びその藝術的表現が現在の私たちの上にもその儘生きてはたらく處に求められなければなりません。それは固よりその藝術の生れた時代並にその以後の時代に影響をもち得たことに於て歴史的價値をあらはすと共に、たとへ

藝術的感激は時代の經過に從つてその形を異にし、また程度を異にはするでありませうが、それは永遠に續くべきものであります。こゝに藝術の本質的價値が存在するのであると私は思ひます。私たちは之等の藝術の批判に於てこの本質的價値を嚴にその他のものと區別しなければなりません。

成形美術に於ては之を表現するに當りて種々の實在の自然物を用ひます。然るに之等の自然物は時代の經過するに從つて種々の變化をうけ若くは破損せられることを免がれないものです。それ故私たちはそれらの變化を受けたものによりて之を鑑賞するより外はないことになり、又一たび破損せられたならその美術作品は永遠に失はれてしまはなくてはなりません。この意味に於て美術作品は曩に述べた文藝音樂が永遠に傳へ得られるのに反し、悲むべき運命を與へられたものであります。そしてその美術作品の保存そのことに或る價値が歸せられるやうになり、こゝに謂はゆる骨董的價値が隨伴するのです。

一方から考へますと、骨董作品にあらはれる自然的の變化は亦得難いものの一つとも見られます。特に繪畫に於ける色彩の如きはその顏料に物質的制限があるために、新鮮なる場合には落ちついた感じのあらはれないものが、却つて時日を經て光や熱の徐々の作用のために、謂はゆる寂びを生じ氣品を增すやうになることは常に見られる處です。之等の自然的變化は時代經過の一つの特質であつて、たとへ最初からそれを望んでもなし得なかつたものを含むことが出來ますそこに私は骨董的價値の存在を認めるものではありますけれども、併し翻つて考察すれば、之等の價値は單に自然現象に依存するものであつて、決して人間の創作としての藝術の本質に關與するものではありません。私たちは之を當然藝術批判の埒外におかなくてはならないのです。

尙ほ一歩を進めてこの點に關する根本的な問題に立ち入りて見ますと、美術作品が常に骨董的に取り扱はれなければ

ならない理由はそれが自然物を借りて始めて藝術表現を行つてゐると云ふ性質にあるのです。既にそこに自然現象そのものとの密接な交渉があるわけです。そしてまたその事がらが破損によりて永遠の存續を亡失すると云ふ悲むべき運命をになふ所以でもあります。私たちはこゝに藝術の永遠性を之等に於て見捨てなければならないのであらうかと云ふ重大な問題に衝き當ります。

私は敢てこれに對して答へませう。藝術は永遠のものでなければならないと。そしてその永遠的な効果に於てのみ藝述の本質的價値が見出されるものであると。

然らば美術作品の永遠性と云ふことに對し私たちはどう考へたならよいのでせうか。之が寧ろ私の述べやうとする主題なのであります。

既に述べましたやうに私は藝術は人間の存在と共に永遠的でなければならないと信じます。そして斯やうにして一つの偉大な藝術は永遠に人間のこゝろに生きてはたらくところの價値をもつのであります。併し之がためには藝術の表現的手段に於てまた永遠性を保つやうに選ばれなくてはなりません。それ故或る藝術の表現が一定の自然物を借りてなされただけではまだほんとうに滿足なのではないと思はれます。眞實の藝術的要素はいつでもそれが望ましい時に再現の可能性を與へ得られる筈のものです。骨董はこの再現の可能性を欠くものの價値であり、そこに骨董と藝術との判然たる差別が見られるのです。

たとへば文藝について考へてごらんなさい。私たちはその思想を言葉によりて綴ります。この言葉さへあればそれで文藝の直接の表現には足りるのでもありませう。併しながら言葉が瞬時的の聲音によりてのみ傳へられるものであるならば、それは單に記憶によりて永遠性をもち得るだけです。しかも人間の記憶は極めて不完全であるがために、私たち

は他の手段即ち記號的文字を用ひて始めてその缺を補ふことが出來るのです。この記號的文字は單にその意味をしるすためには、精密なる形體的模寫を必要としません。これが隨意に再現の可能性を與へられる所以であります。之に反して若しそこに精密な形體的表現を要求するやうな要素を取り入れたなら、それはもはや通常の成形美術と同樣に容易に再現をゆるされないものとなるでありませう。作家が直接に筆をとつた原稿には或る意味でその作家の氣品人格があらはれてゐると云ふことがあり、そしてその點で之は尊重せらるべきものでありませうが、併しそれは再現の可能性を欠く意味に於て一つの骨董品なのであります。作家それみづからが意識的にそこに藝術的表現を期待しなかつた以上、それは文藝そのものとは全く無關係なものであります。またたとへそこに意識的（若くは無意識的に）或る藝術的表現があり得たとしても、尚ほそれは文藝と離れた一つの成形藝術と見なければなりません。ともかくも文藝そのものは常に再現を可能とする永遠的藝術として成り立ち得るのです。

音樂に於ても略ぼ之と同樣です。いろいろな音樂は聲音的の言葉と等しく瞬時的にのみ存在するものですから、之を傳へるために記號的音譜が用ひられるやうになりました。この音譜によりて私たちはその音樂をいつでも再現することが出來ます。併しながら記號的文字が之によりてあらはされる言葉乃至思想を殆ど完全にしるし得るのに反して、單純なる音譜は必ずしも樂器の起す樂音の連續を精密に示すことは出來ません。何故ならば一つの樂器は既にかなり複雜な振動音を包含するものですから、樂譜はそのうちの主要なもののみをあらはして、すべてを追隨するわけにゆきません。しかも一方で作曲家は樂器によりて起される音の全體をその藝術的表現として用ひることを當然とするのですから、之が再現に當りてはそれに從事する演奏者の如何によりて多少異つたものとしてあらはれるのが必然です。けれども斯やうに藝術再現が單に自然物によらないで、他人の人格を借りてなされる場合には、再現そのものが完全に精密に規律

せられてゐない處に、たとへ極めて狹いものではありますが、また演奏者の藝術的活動の餘地が見出されるわけであります。かやうな事がらは一つの藝術表現の變態に關するに相違ありますまい。（尤も之は種々の場合にあり得るので、外國文藝の飜譯といふやうなものにも同樣の意味が含まれてゐます。）

音樂の再現を全く自然物によりて行はうとする企ては蓄音器によりて旣に或る程度まで遂げられました。蓄音器の圓板は亦一種の記號的樂譜であつて、その儘機械的に音の再現に役だつものです。蓄音器の構造上の不備のために、尙ほこの再現の目的に對して多少の故障はありますけれども、之が更に改良せられ得るものとすれば、理想的にはもはや模寫を目的とする演奏者を要しなくなるでもありませう。若しさうなつたとすれば、音樂演奏は全く前述の變態的表現を離れて常に純粹に創造的に個性的になされ得ることとでせう。そして之等を一々記し殘すための蓄音器板の製作は音樂家みづからの手を借りないで機械的になし得る點に於て、完全な再現可能性を與へられ、從つてこゝには謂はゆる骨董の出現があり得ないことになります。私は蓄音器の完成によりて音樂は最も純粹に藝術的にのみ取り扱はれるものとなる可能的素質をより容易くもつてゐると信じます。そして文藝が國語的規約によりて制限をうけるのに反し音樂がより普遍的であることはその大なる利益であります。

私はこゝに漸くその論を美術に進めやうと思ひます。何故に美術が常に骨董と結びつかなければならないかを考察しますと、それはこの場合の藝術表現が極めて複雜な自然現象を借り用ひてなされてゐるからに外ならないのでせう。藝術家の手技を必要とすることに於ては音樂も亦之と等しいものがあるでせう。只音樂に於ては樂器そのものが旣に一定の成るべく純粹の樂音を發するやうにつくられて居るために、之を簡單な記號的樂譜若くは蓄音器によりて比較的完全に記すことが出來るのですが、美術にありてはそれがより複雜になつてゐるために、然う容易く記號を用ひることが出

來なくなります。先づ音樂では音の一次元的時線を記せばよいのですが、繪畫ではそれが通常二次元的面にあらはされ彫塑に到りては三次元的立體になつてゐます。二次元的平面に於ける形體は寫眞によりて稍完全に模寫されますけれども、三次元的立體を機械的に記述することは既に困難を感じます。その上に繪畫の色彩はたとへ一定の顏料繪具が用ひられるとしても、之を調合する程度と、また之を塗沫する畫面材料の光りに對する反射及び吸收度によりて種々の變化を呈するために、頗る多様の複雜さを生じます。之が制作者自らの手を煩はさなければならない原因をなしてゐるのです。

けれども若し私たちの科學が充分に發達したとするならば、たとへば繪畫面の各處から一定の光（白光）の一定の照度に對して一定の方向に反射せられる光を分析して、各波長に對する光の强さをあらはす曲線を決定することは決して不可能ではありません。さうすれば斯やうな曲線の多數によりて繪畫面全體の模樣を最も精確にしるすことが出來るわけです。また彫塑のやうな立體的形體を幾何學的に精確にしるすと共に、その形體面の各處の滑らかさ及び光線に對する關係を物理學的に云ひあらはすことも亦可能になされるでもありませう。たとへそれらの仕事は極めて煩雜な手數を要しやうとも、それは理論的には何の支障をもつくるものではなく、又一方に於て人間の藝術の至上的價値を認め、之を永遠に破損の厄から救ふためには、實際上に於て必要なことゝして希求されなくてはならないやうになるでせう。丁度私たちの標準の物指を永遠に保たせるために物理學者が現に多くの手數を費して之を光の波長によりて代へやうと試みてゐるやうに、若し私たちの藝術をその科學と等しく永遠に傳へやうとするならば、之等の科學的方法がそこに應用せられるのを至當としなければなりますまい。藝術はかくして常に再現を可能とせられるからです。

私は藝術がその本質的價値を永遠に保存するために、科學の共助を待つことを必要とすると云ふ點に極めて多くの興

味を感ぜずにはゐられません。藝術と科學とは本來私たち人間の思惟作用について全然別個のものに屬してゐます。しかも藝術がその永遠性を保つために科學の普遍的永遠的價値に依らなければならないと云ふことを悟つたならば、現實の上に於て兩者の交渉がいかに密接であるかに關して、蓋し驚くに足りるでありませう。この意味を能く會得したならば、すべての藝術家は決して科學を疎んずることは出來ないのです。藝術がその自己の生命を永遠に持續するために實際に科學を必要とするからであります。

このやうにして始めてすべての藝術は骨董から全く離れることが出來るでもありませう。私は既に骨董的價値の捨て難いものゝあることを述べました。併しながら骨董の成立は畢竟自然現象の一部に過ぎないのであつて、それは人間の藝術とは本質的には關する處のないものです。骨董的價値をよろこぶのは、それは自然そのものを賞するに外ならないのでせう。若し藝術作品から骨董的意味のみを純粹に抽象したならば、それはたとへば老樹の趣を賞美するにも等しいと思ひます。適當な環境のもとに年數を經ることによりてその味を自然が之に與へてくれるのです。只老樹が最初から自然的に芽ぐまれるのに反して、謂はゆる骨董に於てはその作品の最初に於て或る藝術的要素が含まれてゐるに過ぎません。個々の藝術の本質的價値が如何なるものであるかを批判するまへに、私たちは之等の事情關係を能く辨へておかなくてはならないと思ひます。

知的生活の階級的構成に就て

長谷川如是閑

一

人間の知的生活の進化の跡に就いて考察して見ると、知識は、人間に屬する他の物的財産と同じく或る時代から、次第に世襲的傾向を採るに至つた。最も原始的の知識は、神に關する知識、即ち神自體又はその作爲を知ることであつたが、これは一般に、幻覺、錯覺等の心理的特徴を持つた人間の心的産物であつたらしく思はれる。原始人の心理狀態が、精神病者のそれと共通してゐるといふフロイド流の見地は人類學的にも實證される事實である。而も、精神病的神經作用は、心理的に傳染も可能であり、生理的に遺傳も可能である。故に自づからそこに、かゝる原始的科學及び哲學の世襲的傾向を持つべき性質が存する譯である。

人間の最初の知識が主として主觀的な、神經の病的（後世發達した心理から見て病的といふのであつて、當時にあつては、それが健全であつたのである。）興奮であつたといふことは、とりもなほさず、知覺の發達の不完全であつたことを示すものである。知識を假りに知覺的知識と想像的知識に區別し、後の所謂科學的知識や實證的知識を前者に包含せしめ、神話的、宗教的、假定的、獨斷的知識を後者に包含せしめるならば、最初の知識は、主として想像的のそれであつたといへる。而して凡て知識は、生活持續の爲めの意識であるから、想像的知識も生活に直接する現象に即して發生したのである。頭上を蓋ふ天、身體の載つてゐる地、天を吹く風、降る雨、鳴り轟く雷、地を搖り動かす力、恐しい怪獸、生活の伴侶となり又食餌となる禽獸…………それ等に關する想像的知識は、人間の物的生活と相關聯する知的生活

の全部であつた。而して知覺の不完全な發達の爲め、それ等の天文學的、物理學的、動物學的諸現象は、總べて混同されて、太陽や月が人間と同一範疇に入れられ、雷や雨や風やが動物であつたり、狐と人間とが同胞視され、熊が人間の祖先であつたり、山が怒り、河が語り、木が怨み、すべて人間の生活と交渉ある萬物は、人間と同じ『生活』を營んでゐると、人間に知識されたのである。

然かも、此の簡單な知識も、當時の人間にとつては可なり複雜であつた爲めに、此の知識を人間同士の間に交換することは、今の文字を知らぬ人間同士が孔子やカントを理解し合ふと同じやうに困難な仕事であつた。殊に言語の發達の不充分であつたことは、一層それを困難にしたであらう。そこで自づから、これらの原始的知識は、知識そのものゝ內容の統一を缺いてゐたのである。雷神といふものが如何なる生物であるかに就ても、內容の一致した知識があつたのではなく、やゝ知覺が發達してから、ある天才が、その雷神の形相（今日優良な博物館に保存されてゐる原始民族の遺物に於て見るやうな）を彫刻なり畫なりで示すまで、彼等の雷神に關する知識は、たゞ主觀的に各自の幻覺に依憑してゐたのである。而して、それを最も知覺的に表現した天才の作品は、件の遺物を見る誰れでもが氣付く通り、全く精神病者の作品であつた。

然るに、此の奇怪千萬な想像的知識が、人間を力强く支配した事實は、それから何千年も經つた今日でさへ、往々そんな風な想像的知識に支配されてゐる人のある――而かも多數に――といふ事實に徵しても明瞭である。それは現代にも無知な人間があるといふことの證據ではなく、現代人の祖先が、さういふ知識に長い年月の間從順であつた爲めに、現代人の本能のうちに、さういふ空想的知識に從順なるべき作用が含まれてゐるに過ぎないのである。（『忝けなさに涙こぼるゝ』といつたのは、祖先の經驗が西行の本能に表はれて、彼をして譯の解らない涙を流さしめたのである。）而かも、さういふ想像的知識が、一般人の知的生活を占領することが出來るのは、その知識が或る民族的集團のうちの特殊の生活に依存して發生したものでなくて、その集團それ自體の生活に卽して發生した意識だつたからである。神話は、當初に於ては、民族的知識であつて、プロンエッショナルの知識ではなかつたのである。

けれども、前にもいつたやうに、此の想像的知識が主觀的感覺に依憑したものであるから、特に或る種の幻覺や神經性の特徴を持つたものに於て、殊に完全な形で現はれて來るのである。それは後代の科學的知識が、特にニュートンのやうな、鋭敏な知覺の持主に先づ現はれて來るのと同じ現象である。そこから、原始的な想像的知識も亦特定の人々に於て最も完全に發生する。（それは大抵老人であつた。老人は、記錄の缺乏した時代に於て、記憶に依賴する經驗の蓄積者であり、その點から知覺的知識即ち後の所謂科學的知識の所有者であると同時に、最早知覺が衰退して、幻覺、錯覺を生ずるに便利な地位にあるので、原始的代に於ける科學者兼神秘主義者たるに最も適した人間だつたのである。その上に老人は、年少者よりも遙か先きに此の世に生れてゐるので、年少者の知らない過去――それは原始人には未來と同じ神秘境であつた――の世界を知つてゐるといふ事實と口實とを有つてゐた。この事實と口實とが、老人をしてその人間的經驗を詐る場合に往々彼れを噓吐きにしたのである。が此噓は、無論後代人の噓のやうに道德的缺陷を持つたものではなく、精神病者の噓のやうに、道德的自信を有つたものだつたのである。で、强い想像力と豐かな知識とを有つた老人は、往々この道德的虛僞によつて、魔術者となり從つて支配者となつたのである。これは歷史的事實である。）

想像的知識が右の如く或る特定の人間に現はれるといふ事實は、それだけでは、知識を世襲的にするに充分な原因とはならない。假令特定の人に現はれたとはいへ、それは民族的集團の持つ普遍的意識である。神の意識を知識化し、神の人格を實物で示現するのは、特別の幻覺を持つた老人の仕事であつたにしても、それは民族的意識の組立ての一つの作用に外ならないのである。始めに云つたやうに、それに關する一種の神經作用は、それを世襲的にする或る條件を含んでゐるに相違ないが、然し、人間に於ける知識の分配がそれに關する能力のみに依存してゐないのは、財產の分配が生產能力だけに依存してゐない事情と同樣である。財產の世襲は、財產を共有的狀態に於て保つてゐた時代にはあり得べからざる事であつた。その時代に於ては、私有物はたゞ重要ならざる身の廻りの道具だけに止まつてゐたのだが、その私有物たる重要ならざる道具の類は、死者があの世まで持參する爲めに彼れと一緒に燒かれたりしたのである。時には妻さへも主要ならざる私有物として――土地などに比べると妻は主要ならざる私有物であつた――夫の死體と共に生きな

から焼かれた。蓋し夫と共にあの世に連れて行かれなければならない物品だつたからである。かくて、此時代には財物の世襲といふ制度も観念もなかつたのである。然かも、財産の観念が社會的性質のみによつて決定されないで、そこに個人的性質が混合するに至つて、始めて世襲の制度が産れたのである。何となれば、重大な財物が、次第に私有の財物のうちに繰り込まれるに至つては、始めの如く、それを焼いて主人公のあの世の主權たらしめては、社會的損害が夥しいことになるので、世襲の形で、その保存を計るに至つたのである。——それは世襲の社會的意義である、——されば、世襲と私有とは離るべからざる關係に在るのである。而かも私有の發達は、社會が強者と弱者との階級的構成を根柢とするに至つて始めて可能なのであつて、何等かの形の征服關係即ち權力關係の成立を前提とする。財物が、各人の社會的生存を充たす單純な目的である事から、轉じて、その生存を階級づける重要な物的要素となるに至つたのが、財産私有の發達の契機である。

二

知識の世襲的傾向の發達も亦右の事情と共通の過程を取つてゐるのである。知識が、共有的狀態に在る時代には、その發生に或る特別の能力を有する人間を必要としたに拘らず、而してその人間は、その知識によつて優越の地位を占むること後代のそれと似た狀態に在つたに拘らず、知識そのもの丶構成は、社會的性質を有し、その民族の心的生活の根柢の上に築かれてゐて、神の意識も惡魔の意識も、誰れでもの一般知的生活にしつくりと入つてゐたのである。而して、それが次第に特殊化するに至つたのは、權力關係の發生の爲め、特殊の意識の構成を權力者の側に於て要求したことに始まるのである。

權力關係は、原始的發生狀態に於ては征服關係である。而して此の原始的征服は、後代のそれと同じく、一方で武力的であつたと同時に、他方で、文化的であつたのである。前者は、生存の爲めの強力の使用であるが、その優者の強力が有功に成立するには、必ずその民族的信仰の有力なことを條件とした。即ち有力な武力のみが征服事業を完成し得る

ことは稀有で有力な信仰――想像的知識――の成立が、被征服者を威嚇することが出來なければ、征服は、被征服者の全滅又は排除となつて、そこに權力關係の完全な成立がない。（日本民族の祖先とアイヌとの間に、充分な權力關係が成立しなかつたのは其一例である。）此の文化的征服は、民族自體の構成に於て、民族や種族の離合集散に必要な條件であつて、優良な文化を持つたものが、その中心勢力を構成するのであるが、征服事業は、その大規模の試練である。而してそこには丁度今日のロシヤの努力と同じやうに、宣傳が何よりも肝要な仕事の一つとする。それは各國の傳説的歴史が示してゐる通り、民族的信仰の努力である。盛に魔術が行はれ、日蝕や月蝕が利用され、鳥獸の擧動が意味を與へられなどしたが、その宣傳には、必ずダブーが伴つてゐたのである。ダブーは、原始社會の組織を維持する神秘的禁止命令であるが、想像的知識の宣傳には、必ず此の禁止を伴つてゐる。それは後の異端禁壓と同質同型の權力的動作の原始的でさうしてもつと社會的の性質を持つたものである。當時の知識は、天文學的たると、物理學的たると、博物學的たると、數學的たるとを問はず總べて想像的知識であつた故に、それは民族的信仰と別のものではあり得なかつた。ずつと後になつても――現に今日でさへ――博物學的に明確な事實を國民的信仰に反するとして禁止してゐる例もある位であるから數千年の民族的信仰が如何に嚴重な禁制の下に統一されなければならなかつたかは察しるに足るのである。（尤も實際に於ては、その時代には、異端者は同時に異民族であつたので、それは異信者統一の問題ではなく、異民族同化の問題だつたのである。信仰の社會統一は、今日に比べればもつと自然に成立してゐた譯である）想像的知識が權力者の權力維持に必然の條件であつた故に、その知識が、知性的知識によつて破られることは社會的危險であるとして、ダブーによつて、その實證的檢討の危險を避けたのである。後には權力者の意識的脅迫となつたものも始めには、社會的組織擁護のダブーとしての神秘的禁止だつたのである。希臘市民はデルフアイの神託は信ずるがその神託が何者の作爲であるかを檢討する能力を奪はれてゐたのは、ダブーの力である。神託といふやうなものも、今日こそその實證的説明が許されてゐるが――まだ完全に許されてゐない民族もあるが――古代人は、それをする能力を、ダブーによつて本能的に奪はれてゐたのである。ダブーは社會的禁制であるが、その進化は、一般の社會的現象が後の發達に於て個人的、階級的

現象に變化すると同様の過程をとつて、社會意識としてよりは、階級意識として發達し、つひに全然權力關係に變化して、今日の法律關係――それは今日の法理觀念によれば權力關係の根柢に立つ――とまで進化したのである。

想像的知識が、征服事業に於ける文化的役割を務むるに至つて、それは、社會的生存維持の普遍意識たる特徴をもとのまゝに持續するよりは寧ろ、新らたな特徴の下に發展するに至つたのである。

それは即ち他の一方の知覺的知識の發達が、特別の組織的階級社會の一般構成によつて制限されるに至つたことである。想像的知識の宣傳によつて一定の統一された想像的知識の支配することが、權力關係に基く階級的社會構成の基調となるに及べば、其想像的知識の崩壊は、一種の重大なる社會的危險なる。――それが階級的構成を持つ社會の特徴の一である。――此危險は、何處までも權力者の側に於て防止しなければならない。而も此の危險を醸成する要素は即ち知覺的知識である。想像の世界は、知覺の不完全な爲めに、主觀的に構成された夢幻の世界である。此の夢幻の世界は、知覺に基く意識の發達によつて破られることは、太陽其他天體に關する迷信が望遠鏡其他の天文學的諸機械の發達で破られるやうなものである。知覺の發達は一方で想像的知識の虛僞を打ち破ると同時に、他方では、それ自體の神經的錯誤を矯正する。人智の發達といふのは、要するに、知覺的認識が、神經的錯誤を矯正して行くことである。

然かも、右の事情の爲めに、知覺の生活は、想像の生活に依賴する階級社會にとつて危險なのである。故に階級的權力者は、一般をして出來るだけ知覺の生活に深入りせしめないで、元のまゝの想像の生活に安住せしめやうと努力する。早い時代の支配階級にとつては「教育」又は『教化』といふことは、全くその努力を意味するのであつた。――今日でもさうでないとは云はれない、――それは換言すれば。知覺の發達の進歩を妨害する努力である。望遠鏡で顯微鏡の發明の阻止である。要するにそれは人智の發達の禁壓である。地球は扁平であるといふ想像的知識は、何等階級的構成の擁護とは沒交渉のやうであるが、それでも宗教的階級組織に根柢する支配者は、地球の圓體であるといふ知覺的知識を極度に禁壓しなければならなかつたのである。

昔から權力階級が、如何に知覺的知識の發達を禁壓すべく努力したかは、今でも、權力階級の宣傳に征服され來つた

一般人の間に、知覺的生活を『物質的』と稱して劣等の生活と觀念する堅固な心的傾向が存在してゐることを見てもわかる。これに反して想像的知識は、『精神的』と稱して、最も人間的な優等で崇高な生活と觀念されてゐる。(その癖、昔から權力階級の生活は、必らず物質的で、甚だ精神的でないに定つてゐたが。)而して、人間が精神的に偏倚すると生活減退の兆がそこに現はれたのは、元來精神的生活の本質が想像的知識に立脚するものであつて、それが生活持續の意識としては第二次的のものであるといふ故ばかりでなく、生活衰退の兆が現はれる時は、權力階級の傳統的支配が動搖する時なので、殊に階級的知識に基く想像的知識の生活が固執され高調されるからである。詳しくいへば、その社會の想像的知識は生活を意識的に安定せしめるといふ生活持續の第二次的の意義をさへ失つて、全く階級的組織の産んだ頽廢的心理狀態が要求する、想像的――寧ろ幻想的――知識の自己興奮に過ぎないからである。その想像的知識は、まるでスエデンボルグが自分の幻覺の世界を、知覺の世界と固く信じて疑はなかつたやうに、意識それ自からの想像的世界の論理で、現實の生活の客觀的條件が充たされると考へ、觀念を信じて現實を疑ひ、『生きること』よりは『考へること』を人間的生活と誤信するに至つたことが、生活の衰亡を招く所以なのである。頽廢期の階級的思想が、必ず想像的知識の此種の構成に基く複雜煩瑣な哲學を有し、又其反對に非哲學的な神秘幽玄の信仰を有することは、希臘の末期や、現今のヨーロッパ大陸の傾向を見てもわかるのである。

今日の文明人が、右のやうな生活意識の偏倚に對して疑を挾む能力を失つてゐるのは、彼等の社會が、想像的知識に維持される階級的構成を有するが爲めである。此の意識は近代の科學(知覺的知識)の勃興によつて動搖し、種々なる自己改造を經つゝあるが、その階級組織が、生活の第一次的性質よりは――生活維持の生產生活よりは――第二次的の生活安定の觀念的構成を必要とする生活者の管理の下にある間は、想像的知識を偏重する社會的傾向は更まる氣支ひはない。昔の征服者が、その權力關係を社會的に意識せしめる爲めに、想像的知識の構成を必要とした事情は今日の社會に於ても、依然として存するのである。ギリシャ市民の哲學は、彼等の生活組織に市民自からが自己を安定せしむる爲めの觀念的態度であつて、從つてその强制的支配は、支配者自身たる市民その人は感じない譯であるが、生活維持の任に當つた

奴隷階級は、度々動亂を起さない譯に行かなかつた位、その市民的觀念に基く支配の壓迫を感じたのである。（支配が觀念に基いたのではない、觀念が支配の安定の爲めに產まれたのではあるが。）歷史的には、如何なる社會と雖も全く此想像的知識を根柢とする意識を必要としなかつたことはない。意識の進化は、權力關係で强制される一定の想像的知識な、知覺的認識の發達によつて打ち破つて行く過程であるが、然し、此の過程は恐らく永久に完了しない過程なのである。

三

知識が以上述べたやうな過程の下に構成されるに至つたに就ては、それを『知識』だけの孤立的現象と見ることは出來ない。前述の如く、すべての人間的制度は、社會的タブーが次第に階級的個人的壓制となり、權力關係による禁止と發達したのであるが、（勿論、今でもタブーの心理で行はれてゐる禁制や制度が澤山ある。今日に殘つてゐる特殊の風俗習慣の根柢には大抵タブー的心理がある。例へば上長に逢つて道を讓つたり、敬語を使つたりするのもそれで、隣人に會つて挨拶をしないと變な氣持がするのもそれ、男女の席を異にするのも、着物の左衽を嫌ふのも、皆それである。）知識が財物や妻と同じく、社會的から階級的となるに及べは、特殊の知識はタブーの結果、或る階級にだけに許されることになる。普通の男子は結婚によつても處女を破ることは出來ないといふタブーのあつた時代には、王や僧侶だけが、處女を破る權利（一說には義務だともいふ。それをする僧侶が莫大な料金を取つたりした例もある。）を有つとせられたやうに、一定の想像的知識は、必らず特權的となつた。始めは人間同士の觀念移轉の困難から特定の人々に獨占されてゐた知識は、後には、殊更らその移轉普及を妨げる禁止が成立して、『一子相傳』といふやうな制度が確立した、想像的知識は、殊に特定の階級の手に構成されることを要し、知覺的知識でも、當時は想像的要素が多かつた故、例へば天文學のやうなものでも、世襲的知識として一般には禁止され、それを犯したものは、何處の國でも大抵死刑に處された。知覺的機關を補助する機械類の發明は、惡魔の業として同じく死刑に値した。これらはすべて、想像的知識が知覺的知識によつて破られることが、階級的構成に危害を及ぼす結果となる爲めに、特權階級の側に於て行つた强制なのである。

然し、生産の生活が、私有及び世襲の制度の爲めに、非常の發達を遂げたと同じく、知識も、社會的普及から、階級的專門となるに及んで異常の發達を遂げたことは事實である。中世のギルドは、一般人の職業の自由を妨げたが、それが爲めに工業の價質は非常に優良となつた。けれども、この獨占による發達に程度の存することは、經濟生活でも知的生活でも變りはない。その組織は或る程度まで價質を發達させるが、軈て必らず行詰まる。そこで解放が叫ばれる。知的生活の世襲的傾向は、これによつて空想的專門思想を何處までも發達させることを得るが、それは一般生活が知的遊戯の爲めに阻害されることを意味し、從つて、生活の第一次的條件生産の生活——が閑却されて、社會は當然に生活難に陷る。富の個人的蓄積は、その所有者をして高級の人間的生活を實現させるに違ひないが、然し、同時に社會的に第一次的なる生産の生活から遁避せしめるので、富者の子孫は、きまつて生活能力のない寄生的人間となる。彼れ自身は、生活の仕事なしに生きて行けるので、生活から逃れんことを計るのであるが、さういふ人間的能力を失つた人間の勢力が增せば增すほど、その人間を中心とする社會は、たゞ享樂的欲求のみ昂進して、生活衝動が少しも働かなくなつて、生活の澁滯に陷る。知的生活の想像的方面のみの發達は、如何に階級的社會構成には必要であるとはいへ、人間生活が第一次的に要求する知識は知覺的のそれなのであるから、此の一次的意識の缺乏は當然、生活を困難にする。知的享樂が、其階級の唯一の生活法となり、所謂『喰はねど高揚枝』の知的貴族が社會に充滿するギリシヤ末期の症狀を呈するに至る。

四

近世以前に於ける國家生活の澁滯は、經濟的寄生々活に因つたものであつて、自から經濟生活の解放が、世界的に生活の復活を招いた譯であるが、此の過程に於て、生活の他の一面即ち心的生活に就て觀察して見ると、舊國家時代の經濟生活の制限は、必ずこれを肯定する想像的知識の根柢を有つてゐたのである。一般支配の階級的固着にも、職業の制限にも、財産の制限にも、生産の拘束又は強制にも、それ〴〵想像的知識に基く根本の信仰があつたのである。無論その

信仰は、階級構成の生活利害に應じて産れたもので、封建組織ならば、それに便宜な信仰、帝國組織ならば、これに便宜な信仰であつたのであるが、とにかく、その信仰の根柢は、想像的知識であつた。各時代は、それ〲その想像的知識を堅固にする組織的努力を拂つたので、何れの時代の國家でも、皆所謂『正統的』知識の支配を維持してゐないものはなかつたのである。

此の想像的知識の支配は、時代の生活の進化につれて、他の知識によつて破られるが、これを根本から打ち破るものは同じ想像的知識の進化ではなく、必ずヨリ知覺的の傾向を有た知識であることが、殆んど例外のない原則である。フランス革命の社會事實と關聯して起つた知的傾向は、ルソー一派の自然理性的(たとへそれは、今日のそれから見ると頗る想像的要素の勝つた知識であつたとはいへ。)知識であり、又革命實法が示してゐる諸々の經濟生活に關する知識であつた。日本の明治維新に伴ふ知的傾向は、フランス革命ほど明確に經濟史觀による說明は充分に遂げられてゐないが封建的信仰が、もつと知覺的の生活意識で破られたことは、武士階級の無産者の手によつて、維新の事業が遂げられ、その革命家が、久しからずして揃つて經濟界に雄飛するに至つたことによつても察しられる。維新史に於ける經濟的動因は今後開拓さるべき處女地であるが、如上の見地を實證する斷片的資材は、漸次に發表されることゝ思ふ。尙ほ一般には認められてゐないことだが、當時の封建的信仰を打ち破つた本居一派の古典的精神が元來古代の想像的知識の復活であるに拘らず、その傾向が甚しく知覺的であつたことは注意を要する。宣長の古事記傳の卷頭に掲げた議論は、古代の荒唐の傳說をそのまゝ信仰すべきことを說くのであるが、その傳說にある諸現象を、たゞ知覺的現象として取扱ふべきことを力說してゐる。又道德的現象も、正邪善惡は人力の如何ともすべからざる自然(神的)現象で、善人も禍をうけ惡人も福を受けるといひ、殊に、支那の思想の空想的なることを指摘して支那人の神といふは、『空しき理のみにしてたしかにその物あるにあらず』といひ、『大かた漢國の說は、かの陰陽乾坤などをはじめ諸皆、もと聖人どもの己が智をもておしはかりに作りかまへたる物なれば、うち聞くにはことわり深げに聞ゆれども、彼が垣内を離れて外よりよく見れば、何ばかりのこともなく、中々に淺はかなることどもなりかし』又『ことごとしく秘說など云て、人えりして竊かに傳へ

る類など皆後世に偽造れることぞ、凡てよきことはいかにも〳〵世に廣まることそよけれ、ひめかくして、あまねく人に知らせず己が私物にせむとするは、いとこゝろぎたなきわざなりかし。」といつてゐるのは、民族的神話による社會意識を、後の階級的構成に根抵した專門的觀念が生んだ生活意識よりも高調するのであつて、同じ想像的知識でも、後の階級的構成によるものよりも知覺的傾向に富んでゐるのである。生活が行き詰る時には想像的知識の昂奮があるが、その行き詰りから恢復しやうとする意識には、必ず知覺的傾向があるのは、生活の恢復が夢から現實に、空想から知覺に轉ずる事によつて遂げられるものだからである。宣長が偶然に知識の階級的獨占や私有的世襲的獨占を罵つてゐるのも、革命的氣分に共通の精神なのである。

近代の生活は、經濟的に財產の生產、所有、移轉の解放によつて恢復したのであつたが、心的生活の方面に於ては、やはり知識が此の財物と同じ取扱ひを受ける事になつたのである。宣長式精神が一般に勃興して、知識の階級的制限は撤回された、然しこの普遍化は經濟上の自由主義と同じく、階級的構成の移動を持ち來したが、依然として傳統的社會構成の延長であつた。

近代の科學の勃興は、生活を知覺的認識に基ける傾向で發展して行つて、所謂機械文明を生むに至つたのであるが、一般にこれを物質文明と稱して人間的生活の脫線であると認める傾向がある。如何にも、生活が機械的に偏る事は、それが精神的に偏るのと同じく生活の常態ではない。が併し知覺的知識の近代の發達は、必ずしも生活に禍してゐるとは言はれない。或はその後發生した資本主義的社會組織を、この知覺的傾向の當然の歸結であると言ふが、これは近代の生活が前代の想像的知識の生活と正反對をなす所から、その前代の標準によつて判斷するものであつて、この判斷の根據が既に想像的知識の根柢に立つてゐるのである。弊害である所の資本主義的生活組織は、その生活の上の發達は知覺的知識(科學)に基いたが、しかしこの組織の權力關係は、依然として前代の想像的知識の根柢の上に置かれてゐるのである。經濟的世の獨占による權力の根柢は――その可能性は――全然、前代の私有と世襲制度の上に築かれてゐるのである。而してこの制度を肯定する社會意識は、前代の想像的知識の根據に依つてゐるのである。最近發達した知覺的

知識が右の制度の想像的知識の根柢を動搖せしめてゐるに對して、現代の資本主義的階級生活者は、何を以てその新しい知識に對抗してゐるかと言へば、依然として古い想像的知識の城壁によつてゐるのである。彼等は自分の經濟的勢力の根據である所の科學（知覺的知識）を、そこに至ると平氣で放棄して、寧ろそれをわざわひ視するのである。それで今日の階級的構成に於ても、その意識的根據は、依然として昔の征服關係のそれと同じ想像的知識の基礎の上に置かれてゐる事がわかる。

五

近代の階級的生活が右のやうな過程をとつたと云ふ事は、舊組織の壓迫から解放された近代的經濟生活が、舊組織のそれにも劣らない壓迫的の經濟組織を持ち來したのと共通してゐる。前に言つたやうに、經濟生活に自由と平等とが持ち來されたと同時に、知識の普遍化はあつたが、その結果は經濟的自由平等主義の結果と同じく、一層の私有化世襲化の狀態に陷つたのである。近代的私有狀態は、財物に於ても知識に於ても、自由主義の基調の上に立つてゐるのがその特徴であるが、かやうにして、新たな階級的構成が成立つた爲に、私有の自由は空名となつて、その自由なる財的及び知的私有を自由にする事の出來ない一般狀態を釀成したのである。知識が解放されたにも拘らず、その知識は、革命時代に、知覺的根柢によつて想像的根柢を打破つたのと反對に、今は想像的根柢に立つて知覺的發達を壓抑してゐる。

想像的知識は凡ての科學が或る所で假定してゐるものであつて、知覺的知識も畢竟その限界に達すれば想像的知識に到達するのである。しかし意識の進化はこの知覺的知識の限界を押し擴める事であつて、想像的知識が知覺的知識の限界を狹めて行く事ではない。この過程は現代の自然科學的知識の進步に於てはやゝその通りに進行してゐて、さうして、この進行によつて生活が現實に進展しつゝある。然るにこの知覺的傾向を、現代的階級組織の根柢となつてゐる想像的知識の破壞にまで押し進めやうとすると、忽ち階級意識による壓迫が加へられる。

公平に言へば、この壓迫は昔の權威者の知識壓迫に比べれば多少無理のない點がある。純粹な知覺的知識の威力は、

それが知覺の判斷による點に存するのであつて、既に知覺の生活が一定度に發達した以上は、知覺による判斷を否定する事ほど不可能な仕事はない。非常な暴君でなければ、馬を馬と知覺する事を禁壓する譯に行かない。――稀にその例はあるが――。その譯は最も日常的の社會生活は全くその知覺的生活に依存してゐるので、それを壓迫すれば社會生活が不可能になるからである。で、如何なる階級的暴虐も自滅の危險を賭する事なしにそれをする譯に行かない。これに反して、想像的知識の構成は、その與件を直ちに知覺に訴へる事が出來ないので、或る程度迄虚僞の知識が强制される。馬が如何なる物なるかに就て、虚僞の知識を承認させる事は、知覺經驗の發達した後は最早困難な事であるが、國又は『家』等に關しては想像的知識に基く見地――知覺の上からは承認されない見地――を强制する可能性が多い。で、さう云ふものに對しては、知覺的知識――『家』又は『國』に關する科學的研究――の領分が次第に殖えては行くにしても尙ほ想像的信仰に基く領分も少くない。これが想像的知識に基く虚僞の意識を或る點まで强制する事の出來る所以である。

かくの如くにして、現代の階級的構成が、想像的知識の根柢に在る事は、在來の種々なる階級的社會構成のそれと異らない譯になる。そこから想像的生活の觀念的構成が依然として階級的であり、從つて特權的となり、專門的となり、その構成の爲めに、一般社會的意識は、この階級的觀念生活と相容れないやうな形で取り殘されることとなる。『常識』と云ふやうな言葉が、その一般社會的な知覺的知識を呼ぶ言葉として用ゐられてゐるが、それは階級的構成による少數者の特別な意識に比べて、意味に乏しい低級の意識であると認められてゐる。凡ての人がその現實の生活を、この低級の意識によつて營んでゐるに拘らず、現實の生活を離れた階級的生活に還入ると、その現實に役立ちつゝある意識が、無意義、低級、無價値として斥けられる。それは丁度、人間にとつて何よりも大切な生命と云ふものが、或る階級的構成の特別な生活意識によると、甚だ無用なものとなつて、階級的觀念生活の權威者は、皆生命を最も低級なものとして取扱ふに至つたのと同じである。さう云ふ生命輕視の觀念の發生は、元來集團の生活保存の爲に、個體の生命が犠牲となる非常の場合の生活事實を、意識する事から起つたのであつて、それが生命輕視の觀念の社會的意義に外ならないのであるが、階級的構成の生活意識に於ける個體犠牲の觀念は、希臘市民の爲に奴隷が犠牲となり、中世紀には

武門階級の爲に農民が犧牲となり、近代では資本家階級の爲に勞働者が犧牲となる、と云ふやうな意味に改造されて、全集團的意識は、階級的意識と變化し、前に言つた如く、發生的には社會生存の必然的現象であつた事が、後に階級的又は個人的生活目的の實現の爲に應用される事となるのである。

かくて知識の構成は、現代に於ても亦全く階級的となつた。階級的生活は集團の多數の犧牲に於て他の一部の生活を完成せしめる構成である。言ひ換へれば、生産の生活を犧牲として、享樂の生活を完成せしめる方法である。勞作する者と享樂する者とが、全く分業となつてゐる組織である。この組織の社會的生活は、發生當時の征服關係の生活に於て想像的知識が支配する事を必要としたと同じく、今日に於ても想像的知識の根柢に於てのみ肯定的に意識する事が出來る生活組織である。古代の征服事實の神話的肯定が、知覺的知識に依つて打破られざるを得なかつたやうに、今日の社會意識の想像的知識の根柢も、着々として知覺的認識の發達によつて破られる。社會進化は古代に於て知覺の認識の確實性に依據した如く、今日に於てもさうなのである。

然るに、知識そのものが、既に屢々言つた如く、今日に於ても階級的獨占の狀態に在る。一方の享樂の生活が他方の生産の生活を支配する階級的構成の下に於ては、知識は想像的のものも、知覺的のものも共に享樂的生活の目的の爲に構成される。近代の知覺的生活は、古代のそれのやうに、生活を生かす――空想を幻滅に歸する――作用に於て尊重されないで、それの享樂的價値に於て尊重されてゐる。――『眞理の爲めの眞理』などゝいふのがそれである。社會的生活の衰退を恢復する知覺の鋭敏は、物質的墮落と呼ばれて排斥されてゐる。そして文化的頽廢の心理にふさはしいやうな、感情的昂奮と協力した想像的知識が、人間的崇高を表現する意識として尊重されてゐる。

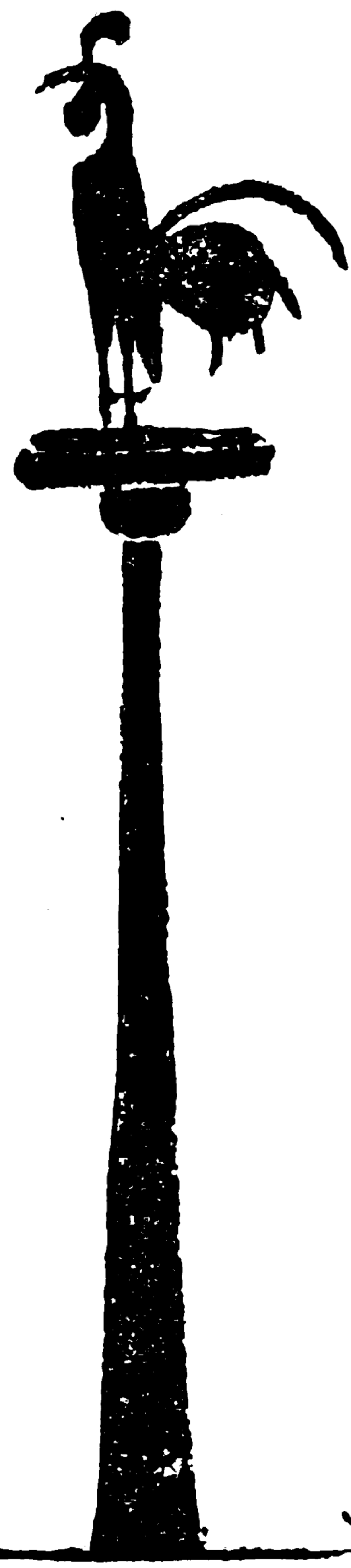
かやうな階級的生活意識は、その意識の世界それ自身によつては、矯正される事も、改悛する事も不可能である。たゞさういふ生活意識を産んだ生活の組織の爲めに 現實の生活が行き詰まるに及んで、まだ生活力を失ひ切らない社會は、生活恢復の無意識的行動に向つて突進する。そこから、新たな生活意識が、人間の知的生活に新たな進行を與へる。

筆者附記 ――筆者は、本論を讀まれる勞を惜しまなかつた讀者が、雜誌『我等』二月號 載拙稿『階級的生活意識と階級文化を併せ讀まれんことを希望する。同稿は、本論の見地をやゝ違つた角度から說明したものである。

革新

その問題とその方法

エドムンド・フッサール



吾々の惱みに滿ちたる現代において、革新は一般の叫びである。歐洲文化の全範域に亘つて然りである。一九一四年以來、大戰は歐洲の文化を荒廢させた。然して、一九一八年以來は、わづかに軍事的の强壓手段に代ふるに、精神的の苛責と、並びに、道德的に敗壞せる經濟的急迫との、一層『纖細微妙』なる强壓手段を選んだにすぎなかつた。かくてこの大戰は、歐洲文化の內的虛僞、內的の無意味さをば暴露した。此の暴露こそはまさしく、該文化に固有なる發動力の沈頹を意味してゐる。若しも、一つの國民、一つの人類が、已れ自らに對する踊躍たる確信に支へられ、且つは、已

が文化生活の意味の美はしくして善良なることに、潑剌たる確信を奉持してゐるならば、——然るときにこそ、彼等は、その發動の力に充たされつゝ、生活し將た創造してゆくのである。言葉を換へて言ふならば、彼等が、單に要するに生存しつゝあると言ふに止まらずして、寧しろ、彼等の眼に偉大とし映ずるものに向つて生活し、かくて、純眞にして而して彼等自らを高めるが如き價値の實現に、着々として成果を收めつゝあることに安んじてあるならば、——然るときにこそ、彼等の生活と創造とは、かの發動の力に充ち滿ちてゐるのである。かゝる人類に伍して、ふさはしき一員たらんこと、かゝる文化のために協働すべきこと、その高雅なる價値の實現に寄與せんことは、能ある者各々の幸福である。否、そは、その人々をば高めて、彼が個人的の憂ひや不遇をば超出せしめるであらう。

かくの如き確信、——それは、かつて吾々と吾々の祖先とを奮起させたものであつた。そしてまた、例へば日本の國民の如く、最近に至つて甫めて、歐洲の文化勞作に伍するに到つたる諸國民の上にも、擴く展べられたる確信であつたが、——かくの如き確信をば、吾々は失つてしまつた。國民の最大範圍は、既にそれを失つてしまつたのである。

かくの如き確信が、戰前に既に動搖しつゝあつたと謂ふならば、今や、それは完全に崩潰してしまつたのである。この事實。吾々は、自由なる人間として、この事實の面前に立つてゐる。この事實は、實踐的に、吾々を規定せずんばやまないであらう。さればこそ、吾々は謂ふ『一の新たなるものが、成生しなければならない』と。そは、吾々の裡に、而して、吾々自らの力によつて、將來されなければならない。この世界に生存しつゝあつて、吾々自らこの世界を形成し、將た、吾々自らこの世界によつて形成せられつゝある、同胞人類の構成員としての吾々によつて、それは將來されなければならない。價値生産的の力と價値破壞的の力との、偶然なる骰子の戯に委ねて、おのづからこの文化の恢復の來らざるかを、吾々は徒らに待つべきであらうか？　吾々は、『西歐の沒落』をもつて、天の命數として、徒らに忍從して

あるべきであらうか？　吾々が、たゞ〳〵受動的に傍觀してあるときにのみ、――たゞ受動的に傍觀してあり得るであらうときにのみ、この天の命數なるものは存在する。されど否、このことと雖も、吾々に天命を知らしめる所以ではあり得ない。

吾々は人間である。自由に意欲するところの主體である。絶えず相率ゐて自己の環境を形成すべく、能動的にこれに干渉してゆくところの主體である。吾々が欲すると否とに拘らず、善かれ惡しかれ、とにかくも吾々はさう爲るのである。然らば、吾々は、これをまた合理的に理性的に行ふことは出來ないのであるか？　抑も、合理性と堪能とは、吾々の力量に及ばざるところであるのか？

それは空想的の目標であると、悲觀論者や『實際の爲政家』は、もとより反對するであらう。およそ個人にとつて、その個體的の生活をば理性生活たらしむることが、既に達成すべからざる理想であるとしたならば、――社會生活のために、國民生活のために、否西歐全人類の生活のために、同樣なる生活の理性化を企てんとするが如きことをば、吾吾は如何にして欲むべきであらうか？

然しながら、この倫理的理想の遂に達成すべからざるものたるの故を以つて、果ては倫理上の目標をば放擲して、倫理の戰に參加せざらんとするが如き人に向つて、吾々は何と言ふであらうか？　吾々は識つてゐる。およそこの倫理の戰こそは、嚴肅にして不斷のものたるかぎり、如何なる事情のもとにおいても、價値創造的の意義を保有するものである。否、この戰それ自身が、既に、この戰の場にあへぎ惱むところの人格を高めて、眞の人間たるの段階に騰揚せしむべきものである。且つは、確たる倫理上の進歩が、理性理想の導きのもとにおいて、可能たるべきことをば、何人が否定するであらうか？

吾々が、心弱き悲觀論や理想なき『實在論』によつて迷はされてゐないならば、吾々は、また『總體の人間』のためにも、より廣汎なる、否、最も廣汎なる社會のためにも、如上のことは不可能であると、輕々に速斷すべきではないであらう。よりよき人類と純眞なる人道的文化とを目指して、この倫理の戰に伍せんとする情操をば、吾々は、絕對的なる倫理的要求として承認しなければならないであらう。

自然的感情。——個々なる人間と社會との間に定立されたあのプラトーンの比論の內奧に、明かに根を張つてゐるところの自然的感情が、先づ以つて、上の如くに告げるのである。この比論は、自然的思惟の道程に高くも攀ぢ登りたる哲人、或は寧しろあまりに高くその路に秀でたる哲人のみの、意味深き着想ではない。寧しろ、それは、人間生活の現實から自然に生れてくる日常の覺りのあらはれにすぎない。この樣な覺知は、その自然性のまゝにおいて、例へば、殆んどすべての國民的並びに世界政策的の價値判斷のなかに、またそれに對應する諸々の行動のための動機として、また常に斷定的にあらはれてゐる。然しながら、この種の自然的覺知と、これに支持せらるゝ感情的の態度措置とが、果して、合理的なる社會改革のための、充分なる基礎であるであらうか？況して、歐洲の文化人類と言ふが如き全文化人類をば、根本的に革新すべき、すべての改革のうちの最大なるものゝ、基礎たりうるであらうか？およそ、——吾吾の文化は、このまゝにして終るべきではない。それは、人間の理性と人間の意志とによつて、改革せられ得るしまた改革せられなければならない。——と言ふ信仰が、吾々を充してゐる。若しも、この信仰が、冷靜にして理性的洞察に溢れたる思想にかはるならば、——若しも、この信仰が、かゝる思想の中において、その目標とこれを實現すべき方法との、本質と可能性とを確立して、これを完全に規定し明晰に摑むならば、——たゞ然るときにこそ、この吾々を充すところの信仰は、單なる空想に於いてには非ずして、否、現實に、『山をも移す』ことが出來るのである。實に、か

くてこそ、その信仰それ自身が、先づ合理的に確認せらるべき根底をば獲るのである。かくの如き悟性の明晰さのみが心悦べる作業へと人々を呼び招くことが出來る。それのみが、意志に對して、解放の事業への決斷と敢行力とを與へることが出來る。たゞこれに對する認識のみが、確固たる共同の財となることを得て、遂に、かくの如き合理性を確信せる人々の多樣なる協働のもとに、山をも移し得るに到るのである。即ち、こゝに於いて始めて、單なる感情的の革新の動きが、革新そのものゝ實行過程となるに到るのである。

併しながら、か樣なる明晰さを獲ることは、決して容易ではない。若しも、自然的に芽生え來つたる社會の諸概念がその自然的本性にも拘らず、曖昧なる見解をもつて蝕らされてゐなかつたならば、――粗剛なる思惟の力を以つてしては、全く、分明なる釋明を加へる能はざるが如き、錯綜して且つ蔭蔽せられたる仲介物を以つて覆はれてゐなかつたならば、――かの懷疑的なる悲觀論や、宿命的に現代を支配しつゝある政治的詭辯の厚かましさは、全く可能ではなかつたであらう。蓋し、痛ましくも吾々の現代を支配しつゝある政策上の詭辯が、社會倫理的の論議を云爲するは、ただ、全く壞敗しつくしたる國民主義の利己的なる目的のための假面としてのみである。されば、こゝには、たゞ嚴密なる科學のみが、確實なる方法と確固たる成果とを齎し得るであらう。かくて、たゞ科學のみが、合理的なる文化改革の土臺たるべき理論的前作業を供し得るのである。

然るに、こゝに、吾々は、一の當惑すべき狀態にある。蓋し、吾々のために役立つべかりし科學をば、吾々は空しくも求めてゐるものである。即ち、吾々の社會政策的、外政的、國民的判斷をば、よしや細心に專門智識の上に基づけ得て、偖てこの社會生活の奇しき世界に於いて、本能的無規定的因襲的なる思想と行爲との草昧なる狀態から、吾々を救出し得るであらうが如き科學的教養を求めるとしても、吾々が現在の科學に於いて逢着し得るところは、關係すべての

社會生活上の實踐場裡において遭逢するところに異らない。いかにも、吾々の時代は、偉大にして嚴肅なる科學において、あり餘るほどに富んでゐる。吾々は、幾多の所謂『精密的』なる自然科學をば有つてゐる。そして、この自然科學を通して、近代文明に異常なる優越を賦へたる驚くべき自然のテクニックをば藏してゐる。もとより、その結果、また最も悲むべき傷害が齎らされもした。けれども常に、また人間の行爲の一領域たる此の自然學術的の領域においては、科學は實に、眞の實踐的合理性の實現を可能ならしめた。而してまた、一般に科學が、實踐の世界の燈明臺とならなければならないと言ふことに關して、典型的の教訓をば與へた。併し乍ら、人間そのものと並びに人間の社會とに關する合理的の科學、——即ち、社會的行爲、政策的行動における合理性と、合理的なる政策上のテクニックとを、基礎附けるであらうところの、人間並に社會の合理的科學に關しては、全然缺除してゐるのである。

かくて、かくも強く吾々の關心をひきつゝある革新の問題に關しても、まさしくこのことは當てはまる。一層精確に言ふならば、——自然に關する純粹數學が、**自然のイデー**のために企劃し、また主要なる部分において實際に實現したところのこと、——これと同じ事柄を、**人間のイデー**のために、(從つてまた、先天的に不可分離的なる一聯のイデー、即ち個人と社會とのイデーのために)、實行すべく企劃するが如き科學が、吾々には缺けてゐるのである。自然のイデー——普遍的形式としての自然一般のイデー——が、自然科學の全宇宙を包圍し浸徹すると同樣に、精神的本體のイデー——而してより特殊には、理性體即ち人間のイデー——が、すべての精神科學、而して特殊には、すべての人道的精神科學の全宇宙を包圍し浸徹する。かくて、一方(自然)の側においては、自然の數學は、時間、空間、運動、運動力に關するその先天的理論において、これら自然一般の本質成素(natura formaliter spectata)にこめられたる先天的の必然性を展開する。かくして、數學は、與へられたる自然の事實に適用されて、合理的即ち數學的方法を以つて、經驗

的自然科學をば可能ならしめるのである。こゝを以つて、數學は、その先天性を提げて、經驗態合理化の原理をば與へるに到るのである。

次に他方(精神)の側に於いても、たしかに、吾々は、精神の領土に從つて人道の問題に關係づけられたる數多の効果ある科學をば有つてゐる。併し乍ら、それらの科學は、全く經驗的である。『單なる』經驗的科學たるにすぎない。そこには時間的に、形態學的に、歸納的に、乃至實踐的視點のもとに整頓せられたる、巨大なる事實の集積があるが、この尨大なる事實の充滿は、それらの科學において、何ら**原理的**なる合理性の紐帶にも結ばれてゐない。こゝには、まさしく、かの數學に比すべき先天的の科學が缺けてゐる。言はゞ、**精神と人道との原理學**が缺けてゐる。純粹に理性的なる眞理、人間の『本質』に根させる『先天的』なる眞理の、科學的に展開せられたる體系が缺けてゐる。蓋し、かくの如き眞理こそは、方法の純粹なるロゴスとして、――自然の純粹數學が、經驗的なる自然科學をして、數學的に理論づけられたる從つて合理的に說明的なる科學として、これを可能ならしめたと同樣の意味において、――精神科學的經驗學に理論的合理性を導入し得たであつたらうに。それは、數學の爲したる所と同樣の意味において、經驗的事實の合理的說明を可能ならしめたであつたらうに。

けれども、精神科學の側に於いては、自然の場合におけるが如くに、單なる合理的の『說明』を以つて了れりとはしない。こゝには、なほ一つの全く特種なる、精神科學に固有なる、經驗態合理化の仕方があらはれてゐる。即ち、『理性的』なる人道の先天的本質に屬する**普遍的規範に從つての規範的判定**と言ふことゝ、實踐指導の理性規範を伴ふところの同前の規範に從つて、事實的なる**實踐そのものを指導する**といふことである。

かくて、自然科學と精神科學と、兩者の事情は、一般に、――自然的實在と精神的實在との本質的特性の相異るがた

めに、——根本的に異つてゐる。從つて、事實的なるものを合理化するに當つて、兩者の要求する合理化の形態は、決して同じ樣式を有つてはゐない。それ故に、こゝに、——吾々の主眼たる革新の問題に關して、分析的の論究を進めるに際して、自然觀的の先入見によつて迷はされることのないやうに、——先づ進んで、この兩者の簡結なる對比を試みて、兩者の相異する點を明瞭にしておくのがいゝであらう。そして、是を以つて同時に、この種の分析的論究が求めんとするところの科學、しかも前に言つた樣に、吾々に缺除せる科學の、方法上の特質をば、一層究明するの必要がある。

自然とは、本質上、單なる事實的の存在である。しかも、こゝに事實とは、單なる外的經驗にもとづいてゐる。それ故に、自然一般に關する原理的の考究は、先天的に、たゞ外面態の合理性といふ點にのみ導かれてゆく。即ち、時間空間的形式の本質的法則を示表して、更に進んで、時間空間的に配分せられたるもの即ち時空的存在の、精密的歸納的なる規則秩序に關する必然性をのみ問題とする。それは、要するに、通常吾々が、『因果』の法則秩序と呼びなれてゐるものである。

これに反して、精神態の特殊なる意義は、全く異つた形式を有つてゐる。即ち、ここ(精神態)にありては、一つ一つの實在の最普遍的本質規定と、並びに、それらの多數實在を結びつけるところの結合の普遍的本質形式とに於いて、前者(自然)とは全く異つたものが存するのである。精神の領土における時間空間的形式は(例へば歴史に於けるが如き)、物理的自然におけるものとは、本質的に異つた意味を有するものであるが、この點を度外視しても、こゝには、次の點に注目しなければならない。即ち、一つ一つの精神的實在の各々は、その內面態を有するものである。それ自らにおいて纏つた『意識生活』を有つてゐる。一つ一つの意識動作のすべてを集束する極としての『自我』に關係づけてゐる。その際

これらの意識の諸動作は、これが『動機』の決定に關係してゐる。

更に、一つ一つの切り離されたる實在、即ちそれぞれの自我主體は、お互に、進んで相互理解（『感情移入』）といふ關係にはいつてゆく。彼等は、（直接にか間接にか）、『社會的』なる意識動作によつて、多數實在の結合合一に關する全然新たなる一形式をば樹立する。即ち、社會（團體）といふ形式である。こゝでは、內面的の契機によつて、主觀內在的の動作と動機とによつて、精神的に結合される。

而して、ここになほ最も重要なるは、次の事柄である。即ち、如上の動作とその動機とには、理性と非理性との差別が存することである。『正しき』思惟、評價、意欲と、『正しからざる』思惟、評價、意欲との差別が屬するといふことである。

一體、吾々は、また精神的の實在をも、ある仕方において（第二の自然として）、外面態の關係において考察することも出來る。即ち、意識をば、物理的の實在（往々にして物理的の身體）に附屬せる外面的の附屬物として、――人間と動物とをば、單なる空間內の現象即ち自然の『中』の現象として、考察することも出來る。然しながら、その樣にして見出されたる歸納的の秩序は、（本性上物理的自然に對しては妥當するが如くに、）精神の本質に關する精密なる法則を示表するものではない。詳しく云ふならば、これらの精神的實在の客觀的に眞なる『本性』を規定する法則、―即ち、かくの如き本性をば、かくの如き實在の本質的特質に應じて、理性的眞理さにおいて規定するところの法則を、示表するものではない。言葉を換へて言ふならば、精神態の固有の本質が、意識生活の內面性に於いてあらはれてゐる場合には、歸納的因果的考察の路を以つてしては、決して何らの合理的說明にも達しうるものではない。この事は實に、先天的の根據からして、然りである。（從つて、吾々の自然主義的なる心理學の仕方において、かくの如き合理的說明を求

めんとすることは、不合理である。）經驗態の現實なる合理化のために、まさしく要求せらるゝところは、（この點では全く自然の場合と同樣に）、準矩たるべき本質法則へと溯ることである。即ち、ここでは、内面性の世界としての、特殊なる精神性の、本質法則を追求することが要求されるのである。さて、人道的なる精神性の本質の中で、先天的に可能なるものとして示されたる意識の形態、從つてその動機決定の形態は、また『理性』の規範形態を伴はなければならない。これに加ふるに、ここには、一般に自由に思惟し、且つ、自覺的なる先天的の規範法則に從つて、實踐的並びに一般的に自己を規定すべき可能性が、先天的に成立する。從つて、人道的精神の領域においては、吾々は、前に述べられた樣に、また自然の場合とは異つて、單に、特別なる意味において、所謂『理論的』の判斷構成を有つのみではない。即ち、『單なる存在の事實』を示すのみではない。（matter of fact）。更に、從つて、吾々は、所謂『說明的理論』を通して、これらの事實を合理化すべき任務を有するのみではない。精神の本質を、純物件的に探求せんとする一の先天的學理に從つて、以つて、これらの事實を合理化すべき課題を負ふのみではない。寧しろ、ここにはまた、すべての精神態に關する、全然新たなる判定と合理化の樣式があらはれる。即ち、規範による判定と合理化である。理性——論理的、評價的、實踐的理性の、規範的先天的敎理に從ふところの判定と合理化である。かかる規範をば認識し斯くて自由に行爲するところの主體は、多くの實踐において、判定を行ふところの理性に從ふ。若しくは、自由にこれに從ふことが出來る。それ故に、精神の範域においては、實際に、更に、實踐をば**合理的**に指導するといふ任務が生じてくるのである。かくて、それは、科學的基礎の上に立つて、——即ち、實踐的理性指導の規範に關する先驅的の先天的敎理を通して、——精神的事實を合理化し得るものであつて、實に、更に新しい合理化の仕方である。

偖て、吾々は、再び、吾々自身の問題に立ち歸るならば、次の點を洞察しなければならない。およそ上述の關係に

おいて、今日吾々の所有するところの、人間に關する單なる經驗的の諸科學は、――（吾々の歷史的文化科學、乃至は、近代の單に歸納的なる心理學の如き）――實際に、吾々革新を求めて努力する者にとつて必需なる事柄に關して、何物をも寄與することは出來ないのである。而して實に、先きに述べたるが如き、人道的精神性の本質に關する先天的の科學のみが、――若し斯かるものが存在するならば、――吾々のためには、合理的なる救援の乙女として考へられるであらう。次に、單なる事實に關する科學は、吾々にとつては、勿論無効であるといふことを、吾々は確認する。――もとより、吾々の革新の問題が、單なる事實態に關係してゐることを否みはしない。否、吾々の革新問題は、實に、現代の文化而して特に歐洲文化の領域における現代の文化に關係する。然しながら、この際、事實は評價的に判定される。理性の規範規定に從屬せしめられる。即ち、この無價値なる文化生活をして、一の理性生活たらしむべき改革が、如何に準備せられ如何に指導せらるべきか、といふことが問題となる。かくてここに、苟くもより深く熟考するならば、必ずや、實踐理性の原理的なる問題へと導かれるであらう。即ち、個人と社會、並びにその理性生活の、本質に適合して而して純粹形式的なる普遍性に關する、原理的の問題へと溯るであらう。すべての經驗的なる事實態、すべての偶然的なる概念をば、遠く下界に見棄てるが如き、普遍態の問題に。

このことを基礎づけるがためには、――また從つて同時に、先きに述べたるが如き人間一般に關する本質科學こそは、まさしく、吾々のために救援たるべきものであるといふことを、明らかにするがためには、多くを言ふを須ひないであらう。

吾々が、吾々現在の文化を、――從つて、それ自らとその環境とを敎化しつゝある吾々現在の人間性を、――吾吾の判斷において評價的に否認し去らんとする所以は、理想的なる可能態としての『善き』人間性をば信ずるが故であ

る。吾々の判斷の底には、たしかに、客觀的に妥當なるイデーとしての、『眞實にして純眞なる』人間性の信仰が、含蓄されてゐる。かかるイデーの意味において、事實的なる現存の文化を改革することが、吾々の改革の努力の自明なる目標でなければならない。されば、先づ第一に、かかるイデーを明晰に構想し把握することに、考慮をひそめなければならないであらう。吾々が、ユートピアなる空想の路を歩まざらんとするならば、否寧しろ、冷靜なる客觀的眞理をば目指すものであるならば、かくの如きイデーの構想は、純概念的なる本質規定の態を有たなければならない。また同樣に、かかるイデー實現の可能性は、先づ第一に、先天的に、純粹なる本質可能性として、科學的の嚴密さにおいて、思量されなければならないであらう。抑も、かくの如き純眞なる人道のイデーに適合せる人類社會の内部においては、——社會の一員としてかくの如き人類社會を構成しつゝある個人にとつて、同樣にまた、樣々なる型式の團體、社會制度、文化活動其他にとつて、——如何なる特殊なる形態、如何なる合規範的なる形態が、可能であり且つ必要であらうかと言ふ問題。この問題は、すべて、純眞なる乃至理性的なる人間性のイデーに關する科學的本質分析の論究に、包含せられるであらう。そして、また、それは、多樣に分岐せる樣々の細目的研究に導くであらう。

すこしく考へるならば、今や既に、次の點は明白である。吾々の問題とするところに必要なる研究の、全體の仕方と並びにその特殊なる主題とは、勿論實際に、形式的普遍的なる組み立てによつて規定されてゐる。即ち、それは、吾々の文化が、そのすべての事實的特殊性を超越して、理念的に可能なる無限に多數の諸文化と共有するであらうが如き、普遍的の結構を有つてゐる。ここに、根底に肉迫するところの研究、即ち原理的なるものに徹するところの研究が、論及するに至るべきすべての概念は、先天的普遍的なるものである。善い意味において形式的なる普遍性を有するものである。理性態としての人間一般の概念が然りである。社會の肢體、並びに社會それ自身の概念がそれである。またすべて

の特殊なる社會の概念、例へば、家庭、國民、國家等の概念も同樣である。更にまた、文化の概念、並びに、特殊なる文化の諸體系、即ち科學、藝術、宗教等の諸概念も同樣である。（規範的形態におけるこれらのもの、即ち、『眞實の』『純眞の』科學、藝術、宗教等の概念。）

純粹なる本質探究と、これに屬する本質抽象（『純粹』『先天的』なる概念の抽象）を、本源的且つ模範的に展開させてゆくところの場所は、數學である。併し乍ら、かくの如き探究の仕方と方法とは、決してこれに羈束されてはゐない。かくて、吾々の問題とする精神の領域においてもまた、かくの如き抽象を行つて、その『先天性』——精神と並びに理性との本質的必然性——を探究するといふことが、吾々にとつて、假へ奇異に感ぜられようとも、併し乍ら、ここにこれらの事柄は、たしかにまた可能なのである。否、吾々は、屢々既に、——たゞ意識的且つ方法的にではないが——かかる先天的本質の中にゐるのである。蓋し、吾々が、苟しくも、原理的なる考究に沈潜する場合には、吾々の着眼は、全くおのづから、たゞ純粹なる形式の上にのみ向けられてゐる。勿論、その際與へられたる諸概念の經驗的なる內實をば、方法意識的に除外するといふことは、——即ち、與へられたる不純なる概念をば、意識的に、『純粹』なる概念たらしむべく形成するといふことは、起らないかも知れない。けれども、かくの如き經驗的內實は、吾々の思惟においては、何らの根元的重要なる役目をも演じてゐるものではないのである。例へば、社會一般に關して、國家、國民一般に關して、等しくまた、人間、市民等に關して、精しく反省してみるがいい。而して更に、これらの諸々の普遍態の中において、純眞なるもの理性的なるものに屬すべき部分に關して、精しく考へてみるがいい。しかるときは、身體上並びに精神上に、將た具象的地上的なる生活狀態等に附屬するところの、經驗的に事實的なるすべての差別は、明らかに、『無規定的』なるものであり、『自由に可變的』なるものである。あたかも、或る單位に附屬する具體的なる徵表や、

偶有的經驗的なる結束物が、純粹算術家の理想的考察に於いては、――若しくは、ある量に附屬するそれらのものが、代數學者の考察においては、――全く『無規定的』なるものであり、また『自由に可變的』なるものであると同じ意味において然りである。（譯者註。蓋し、數學において名數を取扱ふのは、たゞ實用上の意味にすぎない。數學の本領は寧しろ、無名數に關して、純粹なる數關係を論ずる點にある。）人間の有する知覺機關、目、耳等の構造が、經驗的に云々であるか若しくはそれと異つてゐるかとか、目の數が二個であるか乃至はX個であるかとか、運動の機關がこれかあれかとか、足か翅かとか言ふ樣な、すべてこれらの事柄は、例へば純粹理性に關する考究と言ふが如き、原理的の勘考に於いては、全然問題外であり且つ全く無規定的である――どうでもいいことである。たゞ、身體本性並びに心的精神性の或る形式のみが前提される。そして、たゞそれのみが着眼される。先天的に必然的なるものとしての斯かる形式を見出すこと、而してこれを概念的に確保すること、それが即ち、意識的に遂行せられたる科學的本質研究の仕事である。このことは、樣々に分岐せる概念體系の全體にあてはまる。即ち、形式的の土台として、すべての精神科學的思惟をば、從つて特殊にはまた、吾々にとつて當面の問題たる規範的樣式の研究をば、貫き支へるところの、概念體系の總體にあてはまるのである。

借て、精神態の本質形式と本質法則に關しては、――而して、この際ことに吾々にとつて主要なる關心事たる、理性的精神性の、本質形式と本質法則に關しては、なほ未だ、一の先天的科學も、體系的の形成には到達してゐないのであるが、しからば、吾々は、吾々の革新の努力に合理的の土台を與へんがために、ここに、目前に現存せる知識の財貨から汲むことは出來ない。然らば、吾々は如何に爲すべきであるか？吾々は、かくて再び、政治上の實踐におけるが如くに、處置すべきであるか？例へば、吾々が、市民として、選擧のために準備する時の如くに？吾々は、かくてた

だ、本能と氣轉とに從つてのみ、大體の憶測に從つてのみ、判斷すべきであるか？決定を要求する日限が定まつてゐる場合には、そしてその日限を以つて行爲が完了する場合には、その樣な仕方も全く正當であるかも知れない。併し乍ら、吾々の場合には、配慮は、時間的に無限なるものに及び、且つ時間的なるものの中にあつて永遠なるものに亙らなければならない。吾々が、自らそこに責任を感ずべき、人類の將來、眞實なる人間性の成生のために、配慮されなければならない。而して、吾々は、科學的に教養せられたるものとして、科學のみが窮極の理性的決定を基礎づけうるものであり、且つ、科學のみが遂に貫徹せらるべき最後の權威でありうるといふことを知つてゐる。されば、この際吾々にとつては、吾々の採るべき道に關して、何らの疑ひも存し得ない。自ら進んで、科學的の道程を探究しなければならない。遺憾ながら、今日までの先行の科學は、その道を準備してはおかなかつたのである。されば、嚴肅に、吾々自ら、方法的且つ問題分析的なる豫備的考究を開始しなければならない。あらゆる種類の、準備的なる思想の嚮導を開始しなければならない。それこそ、先づもつて要求せらるべき急務である。

この意味において、以上に論じ來つたる考察は、既に、かくの如き科學をば準備するところの――而して望むらくは無益のものならざる――豫備的考究である。殊に、以上の考察は、方法上の問題に關して、次の點を吾々に明示したるが故に、決して無用のものではない。即ち、たゞ、本質考察として認めらるべき考察の仕方のみが、眞に効果あるものであり得るといふこと、並びに、かくの如き本質考察の仕方のみが、人間性一般に關するのみならず更に進んでまたその『革新』に關する、一の合理的科學への道程を開拓し得るものであるといふことを、以上の考究が明示したからである。更に、およそ本質必然性に於ける革新は、個人と並びに人類の發展に――眞の人道に――屬するものであることが、明瞭になるならば、次の如き結論になるであらう。――かくの如き科學をば基礎づけ、これを建設することは、即ち、

現實なる革新のための、必然的前提である。否、それは實に、革新の實演、革新の實行そのものの、先づ第一の發端である。ともあれ、それを準備することは、現在において而して何よりも先づ、吾々の自ら爲し得るところの事柄である。

さて、吾々は、この次の論文において、純眞なる人道と革新とのイデーに愈々近接することを期しつゝ、十分意識的に本質要素において展開せられたる、一聯の原理的なる思想の系列をばあとづけてみたいと思ふ。それらの思想の脈絡は、規範的――社會倫理的――領域の文化研究、冷靜に科學的にしてしかも先天的なる文化研究の發端――準備的なる試みの發端――をば、吾々が如何に考へるかを、一層明確に示表するに到るべきものである。吾々の科學上の情勢においては、就中、問題の攻究と並びに方法との上に、特に關心が向けられなければならないのである。

eine Betrachtungsart, die sich als **Wesensbetrachtung** vertreten lässt, wirklich fruchtbar sein kann, und dass nur **sie** den Weg zu einer rationalen Wissenschaft nicht nur von Menschen thun überhaupt, sondern auch von seiner „Erneuerung" eröffnen kann. Macht man sich aber noch klar, dass eine „Erneuerung" in Wesensnotwendigkeit zur Entwicklung eines Menschen und einer Menschheit zu wahrer Humanität gehört, so ergibt sich, dass die Begründung dieser Wissenschaft die notwendige Voraussetzung für eine wirkliche Erneuerung, ja ein erster Anfang ihrer Inscenirung selbst wäre. Ihre Vorbereitung ist jedesfalls das, was wir jetzt und zunächst allein thun können.

Im nächsten Artikel wollen wir nun den Versuch wagen, an die Idee echter Humanität und Erneuerung heranzutreten, eine Reihe principieller Gedankenlinien zu verfolgen, die vollbewusst in der Wesenseinstellung vollzogen, bestimmte zeigen sollen, wie wir uns Anfänge — vortastende Anfänge — nüchtern wissenschaftlicher und dabei apriorischer Kulturuntersuchungen der normativen — socialethischen — Sphäre denken. Auf **Problematik** und **Methode** muss das Interesse in unserer wissenschaftlichen Lage vor allem gerichtet sein.

ebenso über den Menschen, den Bürger u. dgl. und darüber, was in solchen Allgemeinheiten zur "Echtheit", zum Vernünftigen gehöre—so sind offenbar alle empirisch factischen Unterschiede der Leiblichkeit und Geistigkeit, concreter indische Lebens umstände u. dgl. in demselben Sinne unbestimmt" und „frei variabel" wie die concreten Merkmale und eventuellen empirischen Bindungen der Einheiten in der idealen Betrachtung des Arithmetikers oder der Größen in der des Algebraikers. Ob der Mensch empirisch so oder anders gebaute Wahrnehmungsorgane, Augen, Ohren, usw hat ob 2 oder Augen ob die oder jene Organe der Locomotion, ob Beine oder Flügel u. dgl., das ist bei principiellen Erwägungen, wie z. B. solchen reiner Vernunft, ganz außer Frage und unbestimmt-offen. Nur gewisse Formen der Leiblichkeit und der seelischen Geistigkeit sind voraus gesetzt und liegen im Blick; sie als a priori notwendige herauszustellen und begrifflich zu fixiren ist Sache der bewußt durchgeführten wissenschaftlichen Wesensforschung. Das gilt von dem gesammten, sich vielverzweigenden Begriffssystem, das als formales Gerüst durch alles geisteswissenschaftliche Denken hindurchgeht und speciell also auch durch die Untersuchungen normativen Stils, die für uns in Frage sind. –

Ist nun eine apriorische Wissenschaft von den Wesensformen und Wesensgesetzen des Geistigen und was uns hier vor allem interessirt, der vernünftigen Geistigkeit, noch nicht zu systematischer Ausbildung gekommen, können wir aus bereit liegenden Erkenntnisschätzen hier nicht schöpfen, um unserem Erneuerungsstreben eine rationale Unterlage zu geben—was sollen wir thun? Sollen wir also wieder wie in der politischen Praxis verfahren, z. B wenn wir uns als Bürger zur Wahl bereiten? Sollen wir also nur nach Instinct und Tact, nach überschauenden Vermutungen urtheilen? Dergleichen mag vollkommen gerechtfertigt sein, wo der Tag die Entscheidung fordert, und mit ihm die Handlung sich vollendet. In unserem Falle aber, wo die Sorge einem zeitlich Unendlichen und im Zeitlichen dem Ewigen gilt—der Zukunft der Menschheit, dem Werden wahren Menschenthums, wofür wir uns doch selbst verantwortlich fühlen—und für uns, die wir als wissenschaftlich Erzogene auch wissen, dass nur Wissenschaft endgiltige Vernunftentscheidungen begründet, und nur sie die Autorität sein kann, die sich schließlich durchsetzt—für uns kann kein Zweifel darüber sein, was uns obliegt. Es gilt selbstthätig nach den wissenschaftlichen Wegen suchen, die leider keine vorangehende Wissenschaft vorbereitet hat, und ernstlich selbst mit den methodischen und problem-analytischen Vorerwägungen zu beginnen, mit vorbereitenden Gedankenführungen jeder Art, die sich als erste Erfordernisse erweisen.

In diesem Sinne sind schon die bisher durchgeführten Betrachtungen solche Wissenschaft vorbereitende und hoffentlich nicht unnütze Vorerwägungen. Nicht unnütz vor allem, weil sie uns in methodische Hinsicht gezeigt haben dass nur

giltige Idee, in deren Sinn die factische Kultur zu reformiren das selbstverständliche Ziel unserer Reformbestrebungen sein muss. Die ersten Besinnungen müssten also auf einen klaren Entwurf dieser Idee gehen. Beschreiten wir nicht den Phantasieweg der Utopie, zielen wir vielmehr auf nüchterne objective Wahrheit, so muss dieser Entwurf die Gestalt einer rein begrifflichen Wesensbestimmung haben, ebenso müssten die Möglichkeiten der Verwirklichung der Idee zunächst a priori als reine Wesensmöglichkeiten in wissenschaftlicher Strenge erwogen werden. Welche besonderen, normgerechten Gestalten innerhalb einer, dieser Idee echter Humanität gemäßen Menschheit dann möglich und notwendig wären, für die sie als Gemeinschaftsglieder constituirenden Einzelpersonen, sowie für die verschiedenen Typen von Verbänden, Gemeinschaftsinstitutionen, Kulturthätigkeiten u. s. w.—das alles gehörte mit in eine wissenschaftliche Wesensanalyse der Idee einer echten oder vernünftigen Menschheit und führte auf mannigfache sich verzweigende Einzeluntersuchungen.

Schon eine flüchtige Überlegung macht es klar, dass die ganze Art und die besonderen Themen der in unserem Interesse nötigen Untersuchungen von vornherein in der That durch die formalallgemeinen Strukturen bestimmt ist, welche unsere Kultur über alle ihre Facticitäten hinaus mit unendlich vielen idealiter möglichen Kulturen gemein hätte. Alle Begriffe, auf die hier eine in die Tiefen, also ins Principielle dringende Untersuchung stößt, sind von apriorischer, in einem guten Sinne formaler Allgemeinheit. So der Begriff des Menschen überhaupt als Vernunftwesen, der Begriff des Gemeinschaftsgliedes und der Gemeinschaft selbst, und nicht minder alle besonderen Gemeinschaftsbegriffe, wie Familie, Volk, Staat u. s. w. Ebenso die Begriffe der Kultur und der besonderen Kultursysteme Wissenschaft, Kunst, Religion u. s. w. (Desgleichen in den normativen Gestalten: „wahre", „echte" Wissenschaft, Kunst Religion).

Die ursprüngliche und klassische Ausbildungsstätte reiner Wesensforschung und der zu ihr gehörigen Wesensabstraction (Abstraction „reiner", apriorischer „Begriffe) ist die Mathematik; aber keineswegs ist solche Forschungsart und Methode an sie gebunden. Mag es uns also auch ungewohnt sein, in der Geistessphäre solche Abstraction zu üben und ihrem „Apriori", den Wesensnotwendigkeiten des Geistes und der Vernunft nachzuforschen, so ist dergleichen hier doch ebensowol möglich; ja oft genug sind wir schon—nur nicht bewusst und methodisch—mitten im Apriori. Denn wo immer wir in principielle Erwägungen hineingeraten, da ruht unser Blick ganz von selbst nur auf der reinen Form. Das methodisch bewusste Absehen vom empirischen Gehalt der jeweiligen Begriffe, ihre bewusste Gestaltung zu „reinen" Begriffen mag unterbleiben; aber dieser Gehalt spielt doch in unserem Denken keine mitmotivirende Rolle. Denkt man über die Gemeinschaft überhaupt nach, über den Staat, das Volk überhaupt,

Geistes, wie oben vorausgesagt, und ungleich dem Falle der Natur, nicht allein im besonderen Sinne sogenannte „theoretische“ Urtheilsbildung nämlich gerichtet auf „bloße Thatsachen des Daseins“ (matter of fact). Und dementsprechend haben wir nicht bloß die Aufgaben der Rationalisirung dieser Thatsachen durch sogenannte „erklärende Theorien“ und gemäß einer apriorischen Disciplin, welche das Wesen des Geistes rein sachlich erforscht. Vielmehr tritt hier auch eine völlig neuartige Beurtheilung und Rationalisirung alles Geistigen auf diejenige nach Normen, bezw. nach normativen apriorischen Disciplinen der Vernunft, des logischen, wertenden und practischen Vernunft. Der beurtheilenden Vernunft folgt aber in praxi, oder kann in Freiheit folgen, ein die Norm erkennendes und daraufhin frei handelndes Subject. Demgemäß ergeben sich in der Geistessphäre in der That noch die Aufgaben einer rationalen Leitung der Praxis, also eine abermals neue Weise der möglichen Rationalisierung geistiger Thatsachen auf wissenschaftlicher Grundlage, nämlich durch eine vorgängige apriorische Disciplin von den Normen practischer Vernunftleitung.

Kehren wir nun wieder zu unserem eigenen Problem zurück, so ist es einzusehen, dass hiefür in der That die vorliegenden, bloß empirischen Wissenschaften vom Menschen (wie unseren historischen Kulturwissenschaften oder gar die moderne bloß inductive Psychologie) nichts von dem bieten können, was uns nach Erneuerung Strebenden notthut; und dass wirklich nur jene apriorische Wissenschaft vom Wesen der humanen Geistigkeit—wenn sie da wäre—für uns als rationale Helferin in Betracht käme. Zunächst stellen wir fest, dass Wissenschaften von bloßen Thatsachen für uns von vornherein ausscheiden. — Zwar knüpfen unsere Erneuerungsfragen an bloße Thatsächlichkeiten an, sie betreffen ja die gegenwärtige Kultur und speciell die des europäischen Kulturkreises. Aber die Thatsachen werden hiebei wertend beurtheilt, werden einer Normirung der Vernunft unterworfen; es wird gefragt, wie eine Reform dieses unwertigen Kulturlebens zu einem Vernunftleben in die Wege zu leiten sei. Jede tiefere Besinnung führt hier auf die principiellen Fragen der practischen Vernunft zurück, welche das Individuum und die Gemeinschaft, und ihr Vernunftleben in wesensmäßiger und rein formaler Allgemeinheit betreffen, einer Allgemeinheit, welche alle empirische Thatsächlichkeit, alle contigenten Begriffe tief unter sich lässt.

Weniges genügt dies zu begründen und damit zugleich ersichtlich zu machen, dass gerade jene Wesenswissenschaft vom Menschen- überhaupt eben die wäre, die wir als Hilfe brauchten.

Unterwerfen wir unsere Kultur, also unsere sich und ihre Umwelt kultivirende Menschheit einem Verwerfungsurtheil, so liegt darin, dass wir an eine „gute“ Menschheit als ideale Möglichkeit glauben. Implicite liegt als in unserem Urtheil beschlossen der Glaube an eine „wahre und echte“ Menschheit, als eine objectiv

darüber hinaus nur auf eine Notwendigkeit exacter inductiver Regelordnung des zeit—räumlich Vertheilten—das, was wir schlechthin als „causale" Gesetzesordnung zu bezeichnen pflegen.

Dagegen liegen im specifischen Sinn des Geistigen ganz andere Formen, ganz andere allgemeinste Wesensbestimmungen der einzelnen Realitäten und Wesensformen der Verbindung. Abgesehen davon, dass die zeit-räumliche Form im Reiche des Geistes (z. B. in der Historie) einen wesentlich anderen Sinn hat als in der physischen Natur, ist hier darauf hinzuweisen, dass jede einzelne geistige Realität ihre Innerlichkeit hat, ein in sich geschlossenes Bewusstseinsleben, "bezogen auf ein „Ich", s. z. s. als" einen alle einzelnen Bewusstseins Acte centrirender Pol, wobei diese Acte in Zusammenhängen der „Motivation" stehen.

Ferner, die einzelnen, getrennten Realitäten, bezw. ihre Ichsubjecte, treten zu einander in Beziehungen des Wechselverständnisses („Einfühlung"); durch „sociale" Bewusstseinsacte stiften sie (unmittelbar oder mittelbar) eine völlig neuartige Form der Vereinigung von Realitäten: die Form der Gemeinschaft, geistig einig durch innerliche Momente, durch intersubjective Acte und Motivationen.

Und noch ein Wichtigstes: Zu den Acten und ihren Motivationen gehören Unterschiede der Vernunft und Unvernunft, des „rechten" und „unrechten" Denkens, Wertens und Wollens.—

Nun können wir zwar auch geistige Realitäten in gewisser Weise (als zweite Natur) in Beziehungen der Äußerlichkeit betrachten: das Bewusstsein als äußerlichen Annex an physischen Realitäten (den jeweiligen physischen Leibern); Menschen und Thiere als bloße Vorkommnisse im Raume, „in" der Natur. Aber die sich alsdann ebenfalls darbietenden inductiven Regelmäßigkeiten sind nicht, wie es wesensmäßig für die physische Natur gilt, Anzeigen von exacten Gesetzen, von Gesetzen, welche die objectiv wahre „Natur" dieser Realitäten bestimmen, d. i. sie der Wesensart solcher Realitäten gemäß in rationaler Wahrheit bestimmen. Mit anderen Worten: hier, wo das eigenthümliche Wesen des Geistigen in der Innerlichkeit des Bewusstseinslebens sich ausspricht, liegt auf dem Wege inductiv causaler Betrachtung keine rationale Erklärung, und das aus Gründen a priori (so dass es widersinning ist in der Art unserer naturalistischen Psychologie nach einer solchen zu suchen). Zur wirklichen Rationalisirung des Empirischen ist eben erfordert hierin ganz wie im Falle der Natur) ein Rückgang auf die maßgebenden Wesensgesetze, also der specifischen Geistigkeit, als der Welt der Innerlichkeiten. Nun gehören zu den im Wesen der humanen Geistigkeit a priori als möglich vorgezeichneten Bewusstseins bezw. Motivationsgestalten auch die Normgestalten der „Vernunft" und a priori besteht zudem die Möglichkeit, in Freiheit allgemein zu denken und gemäß selbsterkannter apriorischer Normgesetze, sich practisch und allgemein zu bestimmen. Demgemäß haben wir im Reiche des humanen

der einen Seite die Mathematik der Natur in ihren apriorischen Disciplinen von Zeit, Raum, Bewegung, bewegenden Kräften die in solchen Wesenscomponenten einer Natur überhaupt („natura formaliter spectata") beschlossenen apriorischen Notwendigkeiten entfaltet, ermöglicht sie in Anwendung auf die Thatsächlichkeit der gegebenen Natur empirische Naturwissenschaften mit rationaler, nämlich mathematische Methode. Sie liefert also mit ihrem Apriori Principien der Rationalisirung des Empirischen.

Auf der anderen Seite haben wir nun wol viele und fruchtbare Wissenschaften bezogen auf das Reich des Geistes, bezw. der Humanität, aber sie sind durchaus empirische und „bloß" empirische Wissenschaften. Die ungeheure Fülle Zeitlich, morphologisch, inductiv oder unter praktischen Gesichtspunkten geordneter Thatsachen bleibt in ihnen ohne jedes Band principieller Rationalität. Hier fehlt eben die parallele apriorische Wissenschaft, sozusagen die Mathesis des Geistes und der Humanität; es fehlt das wissenschaftlich entfaltete System der rein rationalen, der im „Wesen" des Menschen wurzelnden „apriorischen" Wahrheiten, die als der reine Logos der Methode in die geisteswissenschaftliche Empirie in einem ähnlichen Sinne theoretische Rationalität hineinbrächte und in einem ähnlichen Sinne rationale Erklärung empirischer Thatsachen möglich machte, wie die reine Mathematik der Natur empirische Naturwissenschaft als mathematisch theoretisirende und somit rational erklärende möglich gemacht hat.

Doch auf geisteswissenschaftlicher Seite handelt es sich nicht wie bei der Natur um bloße rationale „Erklärung". Hier tritt noch eine ganz eigenthümliche Art der Rationalisirung des Empirischen auf: die normative Beurtheilung nach allgemeinen Normen, die zum apriorischen Wesen der „vernünftigen" Humanität gehören und die Leitung der thatsächlichen Praxis selbst nach ebensolchen Normen, zu denen die Vernunftnormen practischer Leitung selbst mitgehören.

Die Sachlagen auf beiden Seiten sind überhaupt, eben vermöge der verschiedenen Wesensart natürlicher und geistigen Realitäten, grundverschieden, daher die Gestalten der beiderseits zu fordernden Rationalisierungen des Thatsächlichen nichts weniger als vom selben Stil sind. Es wird gut sein, dies hier gleich anschließend, um nicht in unseren weiteren Erneuerungsanalysen durch naturalische Vorurteile gehemmt zu sein, in einer knappen Contrastirung zu verdeutlichen, und uns damit zugleich die methodische Eigenart der, wie wir im voraus sagten, fehlenden Wissenschaft näher zu bringen, welcher solche Analysen zustreben.

Natur ist wesensmäßig bloß thatsächliches Dasein und dabei Thatsache aus bloß äußerer Erfahrung. Eine principielle Erwägung von Natur überhaupt führt also apriori nur auf eine Rationalität der Äußerlichkeiten, nämlich auf Wesensgesetze der zeiträumlichen Form und

solche Rationalität Überzeugten die Berge versetzen, d. i. die bloß gefühlsmäßige Erneuerungsbewegung in den Process der Erneuerung selbst wandelt.

Solche Klarheit ist aber keineswegs leicht zu gewinnen. Jener skeptische Pessimismus und die Schamlosigkeit der unsere Zeit so verhängnisvoll beherrschenden politischen Sophistik, die sich der socialethischen Argumentation nur als Deckmantel für die egoistischen Zwecke eines völlig entarteten Nationalismus bedient, wäre gar nicht möglich, wenn die natürlich gewachsenen Gemeinschaftsbegriffe trotz ihrer Natürlichkeit nicht mit dunklen Horizonten behaftet wären, mit verwickelten und verdeckten Mittelbarkeiten, deren klärende Auseinanderlegung die Kräfte des ungeschulten Denkens völlig übersteigt. Nur strenge Wissenschaft kann hier sichere Methode und feste Ergebnisse schaffen; nur sie kann also die theoretische Vorarbeit liefern, von der eine rationale Kulturreform abhängig ist.

Hier sind wir aber in einer argen Lage; denn die Wissenschaft, die uns dienen müsste, suchen wir vergeblich. Es ergeht uns darin nicht anders als in der gesammten übrigen Praxis des Gemeinschaftslebens, nämlich wenn wir unsere socialpolitischen, aussenpolitischen, nationalen Urtheile gewissenhafter Weise auf Sachkunde gründen möchten und uns nun nach einer wissenschaftlichen Belehrung umthun, die uns in dieser schicksalsvollen Welt des Gemeinschaftslebens vom primitiven Stande eines instinktiven, vagen traditionalistischen Vorstellens und Handelns erlösen könnte. An großen und ernsten Wissenschaften ist unser Zeitalter überreich. Wir haben „exacte" Naturwissenschaften und durch sie jene vielbewunderte Technik der Natur, die der modernen Civilisation ihre gewaltige Überlegenheit gab, aber freilich auch vielbeklagte Nachtheile im Gefolge hatte. Doch wie immer, in dieser naturtechnischen Sphäre des menschlichen Handelns ermöglichte Wissenschaft eine wahre practische Rationalität, und sie gab die vorbildliche Lehre, wie Wissenschaft überhaupt zur Leuchte der Praxis werden müsse. Aber an einer rationalen Wissenschaft von Menschen und der menschlichen Gemeinschaft, welche eine Rationalität im socialen, im politischen Handeln und eine nationale politische Technik begründen würde, fehlt es durchaus.

Eben dasselbe gilt also auch hinsichtlich der uns so sehr interessierenden Erneuerungsprobleme. Genauer bezeichnet, fehlt uns die Wissenschaft, welche für die Idee des Menschen (und somit auch für das apriori untrennbare Ideenpaar: Einzelmensch und Gemeinschaft) das zu leisten unternommen hätte, was die reine Mathematik der Natur für die Idee der Natur unternommen und in den Hauptstücken auch geleistet hat. So wie die letztere Idee—Natur überhaupt als allgemeine Form—die Universitas der Naturwissenschaften umspannt, so die Idee des geistigen Wesens—und specieller des Vernunftwesens, des Menschen—die Universitas aller und speciell aller humanen Geisteswissenschaften. Indem auf

Einzelnen ein unerreichbares Ideal sein individuelles Leben zu einem Vernunftleben zu gestalten, wie sollen wir dergleichen für das Gemeinschaftsleben, das nationale, ja das der gesammten abendländischen Menschheit unternehmen wollen?

Indessen, was würden wir zu einem Menschen sagen, der um der Unerreichbarkeit des ethischen Ideals willen das ethische Ziel preisgeben und den ethischen Kampf nicht aufnehmen würde? Wir wissen, dass dieser Kampf, soweit er ein ernster und stetiger ist, unter allen Umständen eine wertschaffende Bedeutung hat, ja dass er an sich schon die ringende Persönlichkeit auf die Stufe des wahren Menschentums erhebt. Wer wird zudem die Möglichkeit eines steten ethischen Fortschreitens unter der Leitung des Vernunftideals leugnen?

Eben dasselbe werden wir, ohne uns durch einen schwächlichen Pessimismus und ideallosen „Realismus" beirren zu lassen, auch für den „Menschen im Großen", für die weiteren und weitesten Gemeinschaften nicht unbesehen für unmöglich erachten dürfen, und die gleiche Kampfesgesinnung in Richtung auf eine bessere Menschheit und eine echt humane Kultur werden wir als eine absolute ethische Forderung anerkennen müssen.

So spricht vorweg ein natürliches Gefühl, das offenbar in jener platonischen Analogie zwischen Einzelmenschen und Gemeinschaft verwurzelt ist. Diese Analogie ist aber keineswegs ein geistreicher Einfall eines, das natürliche Denken hochübersteigenden oder gar verstiegenen Philosophen, sondern ist nicht mehr als der Ausdruck einer alltäglichen, aus den Aktualitäten des menschlichen Lebens natürlich erwachsenden Apperception. In ihrer Natürlichkeit erweist sie sich denn auch immerfort bestimmend, wie z. B. fast in allen nationalen und weltpolitischen Werturteilen und als Motiv für entsprechende Handlungen. Aber sind derart natürliche Apperceptionen und von ihnen getragene gefühlsmäßige Stellungnahmen eine hinreichende Grundlage für rationale Gemeinschaftsreformen; und nun gar für die größte aller Reformen, die eine ganze Kulturmenschheit, wie die europäische, radical erneuern soll? Der uns erfüllende Glaube—bei unserer Kultur dürfe es nicht sein Bewenden haben sie könne und müsse durch Menschenvernunft und Menschenwillen reformiert werden—kann doch nur dann nicht in bloßer Phantasie, sondern in Wirklichkeit „Berge versetzen", wenn er sich in nüchterne rational einsichtige Gedanken umsetzt, wenn er sich in ihnen Wesen und Möglichkeit seines Ziels und der es realisierenden Methode zu vollkommener Bestimmtheit und Klarheit bringt. Und damit schafft er ja für sich selbst allererst sein Fundament rationaler Rechtfertigung. Nur solche Verstandesklarheit kann zu freudiger Arbeit aufrufen, kann dem Willen die Entschlossenheit und die durchsetzende Kraft zu befreiender That geben, nur ihre Erkenntnis kann zum festen Gemeingut werden, so dass sich schließlich unter tausendfältiger Mitwirkung der durch

Erneuerung.

Ihr Problem und ihre Methode.

von Edmund Husserl

Erneuerung ist der allgemeine Ruf in unserer leidensvollen Gegenwart und ist es im Gesammtbereich der europäischen Kultur. Der Krieg, der sie seit dem Jahre 1914 verwüstet und seit 1918 nur statt der militärischen Zwangsmittel die „feineren" der seelischen Torturen und der moralisch depravirenden wirtschaftlichen Nöte gewählt hat, hat die innere Unwahrheit, Sinnlosigkeit dieser Kultur enthüllt. Eben diese Enthüllung bedeutet aber die Unterbindung ihrer eigentlichen Schwungkraft. Eine Nation, eine Menschheit lebt und schafft in der Fülle der Kraft, wenn sie von einem sie in Schwung haltenden Glauben an sich selbst und an einen schönen und guten Sinn ihres Kulturlebens getragen ist; wenn sie also nicht nur überhaupt lebt, sondern einem in ihren Augen Großen entgegenlebt und sich in ihren fortschreitenden Erfolgen in der Verwirklichung echter und sich steigernder Werte befriedigt. In solcher Menschheit ein würdiges Mitglied zu sein, für eine solche Kultur mitzuwirken, zu ihren herzerhebenden Werten beizutragen, ist das Glück jedes Tüchtigen und hebt ihn empor über seine individuellen Sorgen und Missgeschicke.

Diesen Glauben, der uns und unsere Väter hob und der sich auch auf die Nationen übertrug, die wie die japanische sich erst in neuester Zeit der europäischen Kulturarbeit anschlossen, haben wir, haben weiteste Volkskreise verloren.

War er schon vor dem Kriege schwankend geworden, so ist er jetzt völlig zusammen gebrochen. Als freie Menschen stehen wir vor dieser Thatsache; sie muss uns praktisch bestimmen.

Und darnach sagen wir: Ein Neues muss werden; es muss in uns und durch uns selbst werden; durch uns als Mitglieder der in dieser Welt lebenden, sie durch uns und uns durch sie gestaltenden Menschheit. Sollen wir warten, ob diese Kultur nicht von selbst in ihrem Zufallspiel wertzeugender und wertzerstörender Kräfte gesunde? Sollen wir den „Untergang des Abendlandes" als ein Fatum über uns ergehen lassen? Dieses Fatum ist nur, wenn wir passiv zusehen-passiv zusehen könnten. Aber das können auch die nicht, die uns das Fatum verkünden.

Wir sind Menschen, frei wollende Subjecte, die in ihre Umwelt thätig eingreifen, sie beständig mitgestalten. Ob wir wollen oder nicht, ob schlecht oder recht, wir thun so. Können wir es nicht auch vernünftig thun, steht Vernünftigkeit und Tüchtigkeit nicht in unserer Macht?

Das sind chimärische Ziele, werden freilich die Pessimisten und „Realpolitiker" einwenden. Ist es schon für den

新興愛國團體批判

愛國團體に對する考察

馬場恒吾

國粹會、民勞會、赤化防止團などに共通な性質は、彼等が愛國主義を標榜して起つた事である。併し之に反對して、非愛國主義を標榜して起つた團體と云ふものが、別に見當らぬ。日本に於て起る各種の團體は、共愛國主義を標榜すると否とに關はらず、日本の國家を破壞する事を目的として居らぬ限り、其根底に於て、國家の存在を認め其發達を希望すると云ふ諒解が流れて居ると見る事が適當であらう。此思想は勿論非愛國主義と云ふ事も出來ず、從つて、廣い意味の愛國主義の上に立つて居るものと見て差支ないのである。例へばボルセヴヰキ的傾向のある勞働團體に於ても、支那人海員排斥や、人種平等などを唱へる點から見れば、其根底に於て日本を愛する心、同胞民族を愛する思潮が流れてゐる事を否定出來ぬ。故に特に愛國主義を標榜すると云ふ事のみを以て、愛國主義が此等の團體の特長と見る事が出來ぬ。又之を以て此等の團體を、他の團體と區別する譯けに行かぬ。

されば此の所謂愛國團體の特長と見るべきものは何んであるかと云へば、それは、此等の團體の創立者、贊成者及會員の色彩から見て、及び其活動の事績から見て、此等の團體は相當に官憲の諒解、若しくは援助と及び相應に活動する丈の資金を有してゐるのみならず、其志ざす所を實行する丈の努力を有してゐると云ふ事が此等の團體が最も深刻に世人の注意を惹いた所以である。

流行したる否定說

此等の愛國團體に對する非難の焦點は、立憲政治の行はれてゐる世の中に暴力を以て、政治上の主義を通さんとする事は言論に於て行はるべき立憲政治の趣旨に反すると云ふのである。殊に此等の團體が官權の援助、資本家との連絡とを疑はれる事が、此等の團體に對する、世人の憎惡の念を深刻ならしめてゐる。併し、私は此等の愛國團體もさう一概に呪ふべきものだとも思つてゐない。何となれば、官權の擁護があるとか、資本家の援助を受ける團體及外に幾許もある事だから、之を愛國團體を批難する主眼とする事は出來ぬ。矢張之を批評するには、憲政の世の中に暴力團體のあるは不合理であると云ふ點を考察せねばならぬ。果して此等の團體の存在がさほど不合理であるや否や、之も尙研究する餘地がある。

果して憲政存在するや

日本に憲法が發布せられて已に三十餘年となつて居る。或は憲政三十年祝賀會を開いた連中もある。然るに、立憲政治が日本に行はれてゐると云ふ事に對しては多少の疑問がある。立憲政治と云ふものゝ定義は幾通りにも下されるであらうが、其根本思想は國民は他人に政治をされるのでなく、國民自から政治をすると云ふ所になければならぬ。それは國民が參政權を所有すると云ふ事に歸着する。現今の日本に於て、國政に對して參政權を有するものは、人口六千萬の中で約三百萬人位である。即ち立憲政治は三百萬人の間には行はれてゐるが、殘りの五千七百萬人に對しては行はれてゐない。此國民の大部分に取つては、所謂憲政が布かれる前と同じく、矢張一種の×××に支配せられてゐるのである。憲法が布かれる前には、君主專制であつた代りに、憲法布かれて後は藩閥、官僚、爭鬪、軍閥、資本家と、段々に××するものが下落して來た事は事實であるが、一般民衆に取つては、矢張他人の政治である。醜惡なる政團の專制である。一般民衆は訴へると欲して、訴へる事が出來ぬ。それは他人の專制であるから已むを得ざる事であつて、或は時に氣紛ぐれの政治家が民衆の聲を聞くと云ふ事實もあるがそれは眞の氣紛れと、及び彼等自身の都合のよい時にのみさうするのであつて、原則としては、現在の政治家は、參政權を有する五百萬人の利害を重んじて、他の一般人民に對しては、少しも紛飾せざる專制を行つてゐるのである。又さうする事が人情である。

暴力團體の肯定

要するに立憲政治は三百萬人に行はれて、五千七百萬人には

行はれて居らぬ。立憲政治を有する三百萬人の人には所謂憲政の原則を尊重して、言論を以て政治を行ふ義務がある。彼等はそれ丈の權利を與へられてゐるのだから、それ丈の義務を負ふのが當然である。併しそれは參政權を與へられて居らぬ他の五千七百萬人に適用し難い原則である。尤もそれだからと云つて直ちに暴力を用ひてもよろしいと云ふ結論には達しえられぬかもしれぬが、政治上訴ふる所なき民衆が、窮するの餘り暴力團體を組織する事は、止むを得ざる弊害として××××ければならぬやうに思はれる。勿論之は政治上の無産階級としての民衆に付いて一般的に云ふのであつて、之が直ちに國粹會等に應用されるか否かはそれらの内容を調べねば何とも云はれぬ。

暴力のなき世界

世界に暴力なき時代を來らしめたならば、それは理想の世界であらう。併し今の世界は暴力が尙存在してゐる世界である。國家と云ふものに、軍隊があり、警察が居る。皆兵器を有して居る。軍隊や警察は政治家の方から云へば、常に正義の爲めに動くものであるけれども、政權を有せざるものゝ目から見れば彼等の一擧一動正義許りに動いてゐると見へぬ節もある。例令へば獨逸皇帝が兵を動かした時、聯合國は皆獨逸の不正義を罵しつた。露西亞の共産黨政府の赤軍、パルチザンに對しては、日本人は之を虐殺團と稱した。併しそれらの軍隊は、それらの國家を組織する基礎工事であつて、國家それ自身が一種の暴力團體である適切な例證と見られる。故に斯の如き場合には暴力團體を否定すれば、國家を否定せねばならぬ事になる。之を裏面より云へば、國家が暴力團體である間は、國内に暴力團體の起る事を理論上××××××××××せねばなるまい。

和製ムソリニと國粹民勞

堺利彦

イタリーのフアシストがクーデターに成功して政權を握つて以來、和製ムソリニ、和製ダヌンチオが輩出しさうな形勢が見

える少なくとも、そういふ夢を見てゐる野心家は大ぶんあちこちに轉がつてゐさうに見える。

然し和製ファシストの實體は何處に求められるだらう。和製ムソリニの背後の實力は何處に作り出だされる豫算だらう。

各地方の青年團や在郷軍人會は誰しも先づ考へつく所だらう。然し戰後に除隊された失業兵が戰時中の殺伐氣分と習慣とを持つて多數にウロ〳〵してゐるといふ場合と違つて、日本の現在に於ける在郷軍人が直ちにさういふ目的の爲に、有効に利用されるかどうか。青年團にした所で、消極的に保守的態度を持つて進歩運動の邪魔になるといふだけの役目は務めるにしても、積極的に和製ムソリニの武裝組織を構成するに足るかどうか。

次には『國士』『浪人』などゝ稱する一群の保守主義者がある。彼等の中には腕力自慢の者も多いし、暴力主義の崇拜者もあるし、多少の武器を持つてゐる者もあるだらうし、場合に依つては一廉の實力になりさうにも考へられぬではない。然し數の上から云つて大したものではない。たとひ一騎當千の勇者があるにしても、それだけでクーデターを成功させる事が出來るかどうか。

そこで問題は國粹會民勞會、などに移つて來る。粹勞二會の構成要素の品質はどうであるにせよ、兎にかく數が可なり多く、而も可なりに組織立つてゐる所に强味がある。和製ムソリニが主として之に着眼してゐるらしい形勢の見えるのは尤もな事である。けれども、之とても果してクーデターの實力になり得るだけの見込が立つかどうか。

それに、和製ムソリニは必ずしも資本家に忠勤を抽んでる積りの者ではないらしい。少なくとも大資本家の御用を勤める者ではないだらう。彼等の立場は恐らく中流階級もしくば中産階級に在る。そして勞働階級の一部をそれに引付けようとする位の所だらう。そこで大資本家に動かされてゐる政府や政黨から見ると、矢張り一種の危險物である。所が、國粹會は主として政友會の因緣で出來あがつてゐるらしい。民勞會は政友會に反對して憲政會系統に屬してゐるかと見える場合もあるが、それはいづれにしても、彼等は社會主義および勞働運動のブッつぶしに役立つ限りに於いて、あれだけの自由、あれだけの發達が許されてゐるのである。即ち大資本の利益が彼等の存在を擁護してゐるのである。從つて彼等が大資本に對する叛逆の軍隊に變形される可能性は先づ少ないと考へねばならぬ。

然し、大資本と小資本、資本階級と中流階級、その間の利益の區劃が判然とせぬ結果として、どさくさまぎれに諸種の保

守的勢力が急進的勢力の前に結合し、政府と政黨との擁護の下に、『國粹』『民勞』『國士』『浪人』『青年』『在鄉』等の大合同が可なりの大勢力を作り出す場合がないとも限らない。そして一旦、可なりの大勢力を作つた以上、たとひそれが大資本に叛逆する態度を示して來ようとも、政府も政黨も今更ら手のつけ様がなく、遂に和製ムソリニを成功させる場合がないとも限らない。（但し政府も政黨も大抵さういふ豫想がつく筈であるから、手のつけられないほどには和製フアシストの勢力を增大させぬ筈だとも考へられる。

然し又、何かの機會で、諸勢力の均衡の上に立つ超然政府が出來て、それが政黨を凹まし、資本家を抑へ、勞働階級の機嫌を取る爲に、ニセ・デモクラシーの中流階級的態度を取り、然しながら本物の急進主義に對しては飽くまで鎭壓の方針を取り、それが爲め大いに和製フアシストを奬勵し、結局、遂に和製ムソリニを成功させる場合もないとは起らない。

『國粹』『民勞』について書けといふ注文に對しては、少し話が廣くなり過ぎた。和製ムソリニの成功如何については、別に軍隊の問題もあるが、今はそれには觸れずにおく。

上杉氏と高畠氏が提携するまで

中山啓

高畠素之を中心にして、松延繁、神永文三、小栗慶太郎、矢部周、尾崎士郎、それに僕などが集つて、大衆社と云ふものを組織してゐる。これは日本をば、國粹的な方法で、日本獨特な方法で改造しやうと云ふ、社會主義者中の神風連なのだ。その共通の特徴は、誰も彼も毛唐嫌ひと云ふ點である。魂の底からの日本人と云ふ事である。

みなが集ると何時も同じ様に憤慨し合つたのは、日本の青年が近頃、全く毛唐共の精神的奴隷になつてゐると云ふ事であつた。マルクス臭かつたり、クロポトキン臭かつたり、コール臭かつたり、彼等はどうも日本人としての同類意識がしない。

日本人と云ふ奴は變な動物で、毛唐の考案だとか思想だとか云へば、てんで反省なしに頭から鵜のみにして悦んでゐる奴等だ。日本人はそれが我國の國體に適用するか否か、それを其儘に採用しては、國家に有害でないか否かを吟味せずに、只お有難的に信仰してしまふから困つてしまふ。上下を押しなべた西洋崇拜！毛唐の小便はサイダーの味がするのか知ら？

日本の青年は精神的女郎だ。彼等はオイケン、ベルグソン、ラッセル、クロポトキン、マルクスと、源平藤橘に枕を交すに餘念がない。何時も咀嚼せずに飲み込んで下痢ばかりしてゐる。だから彼等の思想には底力がない、眞に持して下らざると云ふ處がない。臍下丹田に力がはいつて居らぬ、腰がひよろついて、白晝の幽靈だ。

特にマルクスやクロポトキンを生噛りしてゐる學生と來た日には鼻持がならぬ。頭の毛を長くして、三田や早稻田邊の喫茶店で、コーヒーをすゝり乍らの革命談だ。親の脛をかぢつて革命家氣取りで、卒業等をするとペイペイの月給取りになつて、完全なる腰辨として去勢されてしまふ。これ等を稱して Cafe chair Revoluti nist と云ふ。

これ等の Cafe chair Revolutionists の中にマルクス熱が流行して、高畠のマルクスの資本論の飜譯が、二萬圓の廣告を使つて營利本位の本屋から出版されると云ふ始末だ。資本論が營利本位の本屋から出版されたのは、世界で日本が始めてだ。何とお有難い國柄では御座らぬか。

大衆社の連中も人間で、飯を食はねばならぬので、毛唐の思想を輕蔑しながら Cafe chair Revolutionist に賣るために、盛に飜譯をやつてゐるのであるが、何といふ之は滑稽なる悲哀であらうか。毛唐嫌いも、毛唐の思想を飜譯して飯を食はねばならぬのも、時世と云ふものだ。

大衆社の二階へ皆が集つて、ウヰスキーに顏をほてらせながら何と彼等が飜譯本の賣る事に憤慨したらうか。――然も其處に置いてある机のどれにも、飜譯しかけの洋書が載せて有るではないか。これは何と云ふ淋しい滑稽であるのであらうか。

――日本には日本特有な社會改造の樣式が必要なんだ。こんな一寸考へても分る事ではないか。ロシアに何故ボリシエビイキが盛で、フランスには何故サンヂカリズムが流行し、イギリスには何故ギルド社會主義が勢力があり、ドイツでは何故修正派が横行してゐるか。どれも之もそれぞれ各、國體の性質を異にしてゐるからではないか。ギルド社會主義は何故ロシアに植えられないか考へて見たつて分るぢやないか、國情が異ふからだ。

然るに日本の飜譯社會主義は、植えられない苗を植えんとして汗をかいてゐるのだ。否お祭りさはぎをしてゐるのだ。青年會館で演說會を開いて、國粹會や大和民勞會の連中にどやしつけられてゐた、あのザマは何であらうか。國粹や大和民勞會が、山川だとか堺だとか云ふ連中を、なぐりつけてゐる時に、俺達は何とそれ等を小氣味よく悅んでゐた事であらうか。

　山川均など云ふ男の思想は、肺病その物のやうだ。その昔、政治運動を否定してゐながら、經濟運動專門のサンヂカリストであつたのが、何時の間にやらボルシエビイキだ。何と猫の瞳の樣に豹變する主義では御座らぬか。俺達はボルシエビズムの精神を日本的に譯すれば、國家社會主義になると思つてゐる。換言すれば國家資本主義だ。然るに彼等はレニンを神と崇拜し、ボルシエビズムの御題目にも夜もあけぬ。次は何主義に豹變なさる事であるやら……。

　また近藤一派はロシアのする事なら何でも有難かつてゐるが、ロシアがダーダネルス海峽通航權獲得のために、資本家國家の會議に列してゐる事は何と映ずるのであらう。彼等は樺太の事などはどうでも好いと云つてゐるが、彼等は御本尊のロシアの有樣をチト見習ふがよい。社會主義者が國外の利權を日本に收める事を主張するのが何で悪いのか、彼等は精神が腐つてゐる、賣國奴に過ぎない。

　何時も集れば必ず以上の樣な事で切齒扼腕してゐた。小栗慶太郎は、大杉なんかゞ天下を取れば切腹して死ぬと云ふし、神永は神永で日本に革命が起きたら、一番先に堺や山川を殺すと腕を叩く。松延は何時も刀をぬいでは、あゝこれでスツパリとやりたいと俺の鼻の先に刀をつきつけるのだ。今の中から賣國奴等は首を洗つて待つてゐる事が必要である。俺達は花火線香の樣な感激に生きて、赤旗を持つてまはつたり、巡査につき掛つて喧嘩したりする樣な、小供だましの樣な革命手淫はせぬのだ。

　――國粹會や大和民勞會が、非國民共をやつける痛快ぶりには面白くてならなんだ。僕等も國粹的な然も革命的な結社を作らうではないかと、皆で論じあつたんだ。然し厚い眼鏡の底に眼玉を光らせながら、高畠は『もう少しマルクス熱がさめるまで待て、其時が立ちあがる時だ』となか〳〵腰をあげないのだ。資本論が譯了せられる時分には、反動が來るからと云ふのだ。

　この隱忍時代を大杉や近藤の一派は、高畠は資本論が儲かるので社會主義は止めて變節したと罵つてゐたのだ。人一倍に神

經のするどい彼だ。この罵倒をちつとこらへる爲めに、土佐犬を飼ひ出した。そして犬を喧嘩させて、せめてもの闘爭慾を滿足させてゐたのである。一同彼を稱して犬屋のオヤヂと云ふ。

ムツソリニが伊太利の政權を握つたと云ふ飛報が來た。——その晩は期せずして一同が酒をぶら下げて集つたのだ。貧乏德利をごろ〳〵と明けて、それでまだ足らぬと云ふて、白山上の馬肉屋で痛飲し、幾度か杯をあげてムツソリニ萬歳、革命萬歳を叫んだであらうか。醉歩よろ〳〵と馬肉屋を出た時、矢部周は感きはまつて、ムツソリニ萬歳を唱へつゝ、電柱を抱いて接吻をしたのである。

高畠はしきりに一歩をムツソリニに先ぜられたのを悔しがつて、唇を嚙み、唇からは血が滲み出した。神永は嗚呼この腕を如何せんと云つて板壁を撲つて穴をあけ、一ケ月もペンを持てない程に骨を痛めた。

ムツソリニの執政以來、皆が興奮してゐて仕事が手につかず、高畠すらために資本論の譯了が今日になつて完成しない。——皆の頭にはさあ何とかせねばならぬとの決心が湧いて出たのである。

これより先、茂木久平はロシアから歸つてある汚名のために、社會主義運動から離れてゐる形であつたが、この男は一寸役に立つ男で、なかなかの企業家であり、實行力に富んでゐるので、男をすたらせては氣の毒であり何とかして今一度男にしてやらねばならぬと云ふ事が、大衆社の一同の問題になつた。彼はロシアから宣傳費を詐取して來て、たわいもない遊蕩に使つてしまつたり、五六人の友人に卷き上げられてしまつて、惡漢の大將の様にせられてゐるが、事情をよく知つてゐる者、特に茂木の金を一文も卷き上げて居らぬ高畠と僕とは、是非にも彼に今一度仕事をさせやう、男にしやうと骨を折つたのである。別に彼一人が惡物にされる必要はないと思ふ。大杉や近藤や堺は皆やつてゐるので、それが皆遊蕩に使用されてゐるが、彼等はビラの一枚も電車に貼つて口實にしてゐるから、まあ世間體を胡麻化してゐるのであるが、茂木のやり方が下手だと云ふ事になる。そしてレニンから死刑の宣告を受ける様な茶番までしでかした。

この男は高杉晉作の様な男だ。高杉晉作は黒船を見に行く時に、お酌に繪日傘をさしかけさせて出掛け、陣中に藝者を引つぱり込んでゐたさうだが、——つまり維新の革命なんかどうでも良いと多寡をくゝつてゐたやうであるが、茂木にもそんな點

がある。彼は革命運動と遊蕩が一しよだ。革命を遊戯にしてゐるのである。底を洗つて見ればニヒリストである。革命も社會もどうでも良いので、高杉もそうであつたらしいのである。高杉がニヒリストで終らなかつたのは、彼が仕事が出來るので、西郷や大久保などが離さなかつたのであるが、茂木も一寸これに似てゐる。話が上手で仕事が出來ることは、社會主義者でまあ珍らしい方だらう。堺利彦なんかの十倍位は仕事が出來る。

そこで此男の手づなを引きしめて何とかさせてやらうと思つてゐた處が、其處へ懐手をしながら、風の樣に現はれ出たOと云ふ男がある。これは誠に不思議な人物で、最少限度に働いて、出來るだけズボラをして暮して行かうと云ふ哲學を持つてゐる仙人である。羅漢の樣な顔をし、體は乞食の如く汚く、年中顔を洗つた事がなく、然も學は東西古今に通じ、世界の事情に通曉せる事、恐らくは本邦に其右に出づる者が無からうと云ふ人物だ。高島すら舌を卷いて驚いてゐる。

此のOは其の風采にも係らず、奇策縱橫なる才を有し、社會主義運動や、愛國運動や、政治運動や、國粹會等と連絡があつて、これ等に對して時々、不思議な暗示を與へて飄然と去り、何事かを起して居る。風の如く來り、風の如く去る、一種不思議な男である。此男の名を明に語つても良いのであるが、何時までも社會の黒幕にして、見えざる惡戯者にして置きたいから茲には名を明かさないで置かう、誰か此男の生活を小説に書いたら眞に面白いものが出來ると思ふ。

此の魔術的なOが、久しぶりでひよつくりと懐手をして、大衆社へ現はれたのである。そして高島の云ふファスチスチ團組織を聞き、僕の茂木活用論を聞いて、『茂木に仕事をさせて見ませう』と云つて彼はまた風の如く去つてしまつたのである。それから二三日過ぎてからの事、彼は茂木と共に神樂坂の料理屋で飲んでゐたのであるが、その翌日から茂木は俄かに朝起きをして活動を開始したのである。

魔法使は茂木を國粹會の重要なる幹事をしてゐる某に先づ引き合せた。某氏の名前は御迷惑を察して發表せぬ。魔法使ひは一面に於て國粹會の顧問をしてゐるからであるが、彼の紹介によつて茂木は某氏と、直ちに親しくなつてしまつた。そして數度の會見の後に、では高島と逢はうと云ふので、ムツソリニが政權を得て半月ばかりの後に、國粹會の某氏と築地の精養軒で會つた。こちから出向いたのは高島、茂木、金内良輔、清水小次郎、O氏と僕とであつた。

この會見は實行方法に於て意見の一致を見たが、標榜の宣言に於て一致する事が出來ず、曖昧に電車のなくなる迄、いろん

な話をした。それから一ケ月ばかり、間を置いて、今度は上野の精養軒で、具體的に就て妥協點を見出すために會見したが、これも同じく主義が、餘りに社會主義的なる點に於て一致を見出し難く、効果のない會見に終つてしまつた。但し攻守同盟に締結せざるも、或る援助を受け、我等の行爲に對して、好意を表はすると云ふ點を約し得たのみである。

これより先、高畠はしきりに上杉博士の勇敢さを稱揚して、何とかして提携して運動がしたいものだと云つてゐたが、機がなかつた。上杉博士と提携するには、是非とも今少し、博士の國家主義が徹底すればよいと云ふ事を願つてゐたのであつたが、或る人から上杉博士も國の現情を憂ひてをられるから、直ぐ提携し得るだらうと云つて、茂木を上杉博士に紹介したのである。

そこで茂木は上杉博士と高畠を中心にして經綸學盟なるものを作るべく、奔走して遂にそれを作りあげるや、また彼の怪しきＯが茲へ現はれて來た。そして茂木には默つて此の經綸學盟に合致せしむゝ爲め、他の一の勢力をまとめ來つたのである。それは中外商業の松川顧輔や老壯會の滿川龜太郎の勢力であつた。Ｏは之をも連盟に加へ、更に大運動をなすべく、全國家主義者を糾合する事になり、かくて茲に新國家主義同盟なるものが生れた。然し滿川は或事情で之に加盟して來なかつた　然しいづれ加盟して働かるゝ事と信ずる。

會の幹部の内の白石好夫は、福岡の人で他日の頭山滿と云はるゝ大人物である。この人は政友會の岡崎といふ格であり、此人さへ居れば、會は必ず圓滿にまとまつて行くと云ふ不思議な人格者である。此人が此會に入つた事は、會の前途のために甚だ幸な事である。次に大化會の清水小次郎は、大化改新を武力的に解決せんとして、牛込の加賀町に道場を開いてゐる國士で、意氣天を衝く猛者である。目下ロシアに遊んでゐる大化會の岩田富美夫と共に、社會黨第一の腕力家であらう。同盟の武力的實行は、主として此人があたる事になつてゐる。鬼の如く振舞ふを待ち望んで置く。

同盟が成立すると共に、不思議なるＯは會より脫して風の如く何處にか去つて、また何等かの惡戲を計畫してゐるやうだ。彼が去つたのは會が、更に大きく肥る前提であらうと考へられる。茂木は恐らくは同盟の、委員が選ばれる時には、また世間の信用の回復してをらぬ時でもあるが、故に、恐らくは裏面に於て働く事になるであらう　僕はまた白石俊夫と共に監獄部屋の打破に從つてゐるので、直接に此會に加はらない考である。

僕も一個の背後の人たるに過ぎない。

上杉博士を取りまく人々に就て、多くを書かねばならぬのだが、僕はそれ等の人々をば全く知つてをらぬから、書けないのが殘念である。只博士の門下の稻葉一也は、僕が中學時代に第四高等學校の柔道部の猛將で、僕はよく寒稽古をもんで、もらつた事があるので、なつかしい氣がした。上杉博士が僕の同鄕であるのもうれしく思ふ。

一月廿五日の夜——此の同盟の發起人會が神樂坂倶樂部に於て開かれた。雪が外に吹雪いてゐて、時々さつと戸の隙から吹き込んで來るではないか。同志はみな雪を冒して、遠く府外よりやつて來た。——皆が輝ける瞳をあげて、日本の改革の理想を語りあつた。夜は更けて行つて、雪が思ひ出した樣に、隙間から吹き込んで來る。僕等は何んだが、ロシアの革命の志士が秘かに會議をしてゐる樣な氣がしたのであつた。感謝に充ちた夜の光景は、思ひ出しても詩の一節である。新しい維新がつい其處まで來てゐるのである。

各種愛國團體の首腦者

櫻木秀一

大日本社同人

愛國團體の一に大日本社同人がある。皇室を中心とする大日本主義に依りて世界を統一して、人類の平和を確立するを其目的として居る。平田東助、長瀬鳳輔、上泉徳彌、井上準之助、大類伸等、朝野の名士、學者、及實業家數十人を顧問とし、全國に二千餘の會員を有し、初號より天覽臺覽を賜ふの榮を有する雜誌「大日本」を發行して居る。該團體の牛耳を執り同時に「大日本」の主幹として活躍して居る者は、民間に於ける海軍のオーソチーたり、又、貨幣廢止論者として世界的に有名なる川島清次郎である。

彼、社會より貧窮を一掃するの手段に關して熟慮潜思する事

多年、遂に貨幣廢止に想到し、之れマルクスもクロポトキンも考へ能はざりし、社會改造の根本原理なりと斷定した。而して、之を各國語に譯して、レニン、ロイドジョージ、ウイルソン、アルバート、トーマス、ヘンダーソン、倫敦タイムス、紐育タイムス等、世界の名士及新聞雜誌へ送つた。レニン、ウイルソン等は、其名論を理解する能力を有しなかつた爲であらう、何等答ふる所がなかつたが、トーマス、ヘンダーソン等は皆、其學說に對する批判を送り來り、紐育タイムスは、數日に亘つて「大日本川嶋清治郎貨幣廢止論」を掲載した。

彼には、貨幣廢止論の外、尙科學上の一大發見がある。其れは「地震は天上より來る」といふ說で、科學者の非常識を罵倒した學說であるが、未だ世界的有名の新學說たるに至らない。

最近に於ては、大日本誌上、高天原は富士山麓に存し、紀元前數千年間皇統連綿たりしを記載せる古文書發見されし事が報ぜられて居る。之に依れば、日本の文化は埃及、支那、印度以上に古い事になるのである。

彼は老壯會に於て、高畠、堺等の社會主義者とも懇意になり、山崎今朝彌の平民大學の講師として聘せられ、社會主義者に對して、軍國主義の講演をなし、軍國主義は長男にして、社會主義は放蕩の爲勘當されたる次男坊」なりの新學說を吐いた事もある。

之を要するに、大日本愛國の新哲理の提唱者として川嶋清治郎あるは、日本の爲、以て人意を強くするに足り、彼の新學說あり、愛國者は頑迷固陋なりとの毀りより免かるゝ事が出來る譯である。

黑龍會

內田良平の黑龍會は、頭山滿の玄洋社の衣鉢を繼ぐもの、黑龍會壯士一度腕を揮えば、數十萬の讀者を有する兩朝日左傾の論壇忽ちにして右傾し、又一度公憤すれば白蓮忽ちにして尼となる。日本に黑龍會あり、筆は遂に鐵拳に勝たず、自由は遂に正義と國粹の敵でない。

內田良平は、武術に依りて鍛練さるゝに非ずんば、思想人格共に何等の價値なしと爲す。而して彼自らは柔道四段の腕前であるが、實際の爭鬪に於ては、七段八段の名人と雖も彼に對抗して勝を得る事困難と稱せられて居る。

張作霖の威喝に對しては、誰一人縮みあがらぬものなしと稱せられて居るが、彼は唯獨り馬車を驅つて、張作霖の本營に乘込み、反對に馬賊上りの將軍を慴伏せしめた事がある。

彼は又或時朝鮮志士の爲めに荒繩で縛りあげられ、白刃を眼

前に突付けられたる事があるが、泰然自若として驚かず、却て彼等を威壓して、九死に一生を得た事がある。

小にしては、郵船の株主總會も、內國通運の株主總會も、彼の首の曲り工合に依りて、或は右し、或は左す。政府に對し、資本家に對し言論の王國に對し、思想の王國に對し、常に彼は一大脅威たり、又常に隱然として一大敵國の觀がある。

國家社會主義者たる北原龍雄は彼と深交あり、北原は餘り人を讃めない人間であるが、內田のみは、其日本史に通ずる事深く、又其武術の堂奧に入れるを賞揚するが常である。以て彼が尋常一樣の人物にあらざるを知る事が出來る。

大業社

隱れたる團體に大業社がある。萬朝報の菊池茂、中外の松山新輔、讀賣の小村俊三郎、外務囑托の水野梅曉。等で各新聞社內の愛國的國家主義者十數名を發起人とする、眞摯なる有力團體である。淸水谷皆香園に於て、度々祕密的研究會を開いて居る。

該團體の世話人として異彩を放てる人物に酒卷貞一郞がある。元海軍の教授であつたが、愛國の熱血に燃ゆる彼は、斯くの如き閑職に久しく、止まるを得ず、職を擲つて新宿遊廓の間に一西洋料理店を開き、自らコックとして働きつゝ、客に對して愛國を說いた。

日本の西伯利に出兵するや、從軍記者として從ひ、中外商業に白軍暴虐の裏面を曝露せる通信を匿名にて送り、陸軍當局をして大いに狼狽せしめた。

後、大正日日に編輯長たり、大本教を善導して日本の大改造を劃策する中、大本教潰滅に遭ひ、再び復西洋料理のコックに後戾りをした。

彼は日本に於ける亞細亞問題のオーソリチーたり、滿川龜太郞一派の先鋒で浩翰なる亞細亞大觀を興龍會より刊行して居る。

雄辯に於ても、彼は又一流の人物たり、嘗て平和主義者尾崎行雄の選擧區に於て、大軍國主義の講演會を開きたるに、三十錢の入場料を取りたるに係らず千餘の聽衆あり、盡く皆其雄辯に魅せられて、尾崎行雄に反對するに至つたと稱せられて居る。

大業社は老壯會と共に上杉、高橋一派の愛國黨の中堅たるに至つたが、上杉の如きは寧ろ表面に立つを避け、酒卷等をして大いに活躍せしむるが、黨發展の最良方法たるは言ふ迄もない。

尙大業社には松田禎輔あり、黑龍會系の新人物で、武術を知らざる者は共に談ずるに足らずとなす。然しながら社會主義、無政府主義に關する萬卷の書を讀破し、日本は自治を發達せめ、氏神を中心としてクロポトキンの思想を實現せしむるの、最も理想なるを說く、多少一般愛國主義と其選を異にする所がある。

猶存社及老壯會

猶存社は老壯會を背景とする數人の實行團體である。老壯會は滿川龜太郎、岡悌治等が世話人として組織する所、老壯會とは老と壯とが隔てなく國事を談ずといふ意味で、佐藤鋼次郎の命名する所で、世人の思惟する如く虛無主義を標榜するものでない。然しながら、岡悌治が、文化學會の島中雄三、下中彌三郎、井箆節三、社會主義者の高畠素之、北原龍雄、遠藤無水、堺枯川等を引込みたる爲、問題每に議論百出し、全く虛無的混亂狀態を呈するに至つた。北一輝支那より歸るに及び、滿川龜太郎は、老壯會の北一輝、大川周明、鹿子木員信、平賀磯次郎の四人と提携し、猶存社を組織し、以て老壯會を司配するに至つた。

其れが爲、所謂論者は出席せざるに至り、又、佐藤、上泉、山口等の諸中將又及川鶴清治郎、長瀨鳳輔等に、滿川、大川等と改造の手段に關して意見を異にして會を退くに至つた。而して、其代りに、純勞、自由勞働等の一派及抹殺社の一派が加入するに至つた。從つて老壯會、猶存社とも、滿川龜太郎を中心とする愛國團體たるに至つた。

レニンが惡鬼の如く宣傳されつゝあつた時、社會主義よりも先に、レニンの偉大と、露國の復活を說いた者は滿川龜太郎であつた。又、某內閣員高畠、北原、遠藤等を實業家の宅に於て會合せしめ、某內閣員をして、マルクスの資本論を發賣禁止となさずといふ誓をなさしめたのも彼滿川である。マルクスが日本の天地に顏を出す事が出來たのは、全く、彼の隱れたる靈力の結果である。

亞細亞問題にしては、其著「復はれたる亞細亞」が示す如く、其調査の正確と、問題の眞相に通ぜる、時に陸軍の專門を驚かする事少なからずと稱せられて居る。愛國の志士に、酒と女は、多くの場合に於て附ものであるが、彼は酒を飲まず、煙草を喫はず、女を買はず、文字通りに品行方正の志士である。

大川周明はダンテを統一の崇拜者である。而して又、日本に於ける唯一の歷史哲學者である。受け賣りの歷史哲學者は非常に多いが、日本に立脚し、英米の凋落、亞細亞の復興を豫言

し、統一に向ひつゝある世界の大勢を歴史哲學を根據として、火の如き熱烈を以て説く者は唯彼あるのみである。

容貌魁偉の美男子で　熱し易い感情の所有者である。老壯會に於て、機關師組合の松延繁が、組合の宣言を讀みあぐるや、其文句が自己の哲理に反する所ありとし、奮然として演壇目がけて突進し、一大混亂を誘致した事すらある。

彼は又鹿子木員信と共に、印度の事情に最精通し、同時に最も印度に於ける英國の暴虐を憎む者である。

日本人として、最も眞面目に日本の改造を考ふる者に北一輝がある。改造學説の受賣りで、原稿かせぎと、賣名を専門とする者は多いが、北一輝の如く、其改造意見を數百頁の謄寫版刷として極秘の版を押して樞密顧問官を初め朝野の識者數百人に配布したものは彼以外に見出す事が出來ない。其一篇には議會を一時中止するの論あり、政府は配布を禁止し、北を處罰せんとしたが、其議論に贊する大官少なからず、其れが爲に手を下す事が出來なかつたと稱せられて居る。

彼は青年時代に於ては幸徳秋水等に親交あり、當時既に國家と社會主義との關係を論じたる『國體論及純正社會主義』なる一千頁の一大著述を公にして居る。

現今に於ては日蓮の熱心なる信者で、若し北の前に於て、病氣であるとでも言はふものなら、御題目の力で療してやると、飛んでもない踊りを强制されて、とんでもない目にあはなければならない。

猶存社は府下千駄ヶ谷の山本唯三郎の別莊を乘つ取つたもので五百坪の處あり、百疊を敷く宏壯の建物で、支那革命の眞個の中心人物たる譚仁鳳の一人の遺子を養育しつゝ夫妻は靜かなる生活を樂しんで居る。世人は北夫妻が、必要もなきに係らず、斯くの如き一大家屋を獨占するを非難する者が少なくないが、其獨占は一時的で、眞に國事を憂ふる團體さへ成立すれば、彼は其邸宅を解放して、其使用に供するに吝かならざるべきは明である。

鹿子木員信は、現今に於ては團體に隸屬するを欲せず、猶存社とも殆んど關係がないやうになつた。從つて、愛國團體の人物として彼の名を擧ぐるは、却つて、彼の迷惑する所であらうと思ふ。

國粹會

國粹會は佐藤鋼治郎を迎えて有名となつたが、其代りに、佐藤が政友派たるを背んぜざる結果、國粹會は政友及中立の二派に分裂するに至つた。

彼が關東國粹會に總長たる未だ一年に滿たざるに終らず、機關誌「男」及國粹會本部に出資する事既に二萬餘に及んで居る。會員の言ふ所に依れば盡く彼のポケットマネーなりと。果して然るや、否やは別問題として、彼と國粹會との關係は、是に由て觀るも尋常一樣のものに非ざるを知る事が出來る。

彼は好んで社會主義の書を讀み、新思想に對して理解あり「マルクス、クロポトキンの如きも、老子、孟子の思想が日本化されたる如く、遠からず日本化さるゝに至るべく、敢て危險視するに足らずと爲すも、國際主義者、平和主義者は極力之を讎敵視し、國家を蠧毒するの害虫として居る。從つて、尾崎 吉野、賀川等の徒は、機會ある每に「男」誌上に於て槍玉に揚げられて居る。

其玄海生と稱するは、日露戰爭當時玄海灘に於て露艦の砲擊に遭ひ、汽船と共に沈沒し、九死一生を得たるが爲なりと

次長に少將木田伊之助、少將佐藤房太郎の二人あり、木田は人格の人にして、而も淸濁併せ呑むの度量あり、親分達に推服され、總長の軍隊的嚴格を緩和するに努めて居る。少將佐藤は、謹嚴にして溫厚の人、現に宇都宮支部長として、各方面に評判が好い。

常任幹事の椎津揚兵衛は、膽あり、策あり、而して又文字を解し、マルクスを談じ、全く新しい親分である。

國粹會は主として彼の盡力に依つて成立する所、關東本部に中將佐藤を迎えて總長となすや、自己の利害を顧みず、將軍連、親分連の事を調和するに努めたが、國粹會の主義に餘り忠實なる爲、總長と意見合はず、遂に常任幹事を退くに至つた。然しながら、彼が再び其任に復歸するは、多數の會員が熱望する所で、彼が復歸するに非ずんば、國粹會は將來分裂を免れない。

彼に近頃、國家社會主義の高畠素之と提携して居るが、其目的は模範的一大勞働組合の組織にありと稱せられて居るが其計劃は頗る大げさで、理想をいへば、一千萬圓、少なくとも百萬圓は資金を要するとは、彼の公言する所で、彼は現に其資金の爲に東奔西走して居る。

現常任幹事金井米吉は、精悍にして、寡默、民勞會との爭ひに於て「骨が砂利になる迄」の一言、彼の性格を躍如たらしむるものがある。

大和民勞會

「賭博師（あそびにん）の團體ではなく、土木といふ正業に從事する者が、國家に奉仕する爲に團結せるものである」とは、大和民勞會員の

國粹會員に對して誇る言葉である。其會長は河井德三郎である。

彼が有名になつたのは、大倉組の爲に犠牲となつて入獄せし當時からで、初めは國粹會の幹事であつたが、後分れて、土木業者を糾合して、大和民勞會を組織するに至つた。

「乾兒の者が暴れ出しても、それでは私は抑へる事が出來ません、乾分の數ですか、東京だけで二萬は御座いませう」との、彼の言葉は、各方面に向つて、恐るべき脅威となつて居る。

彼は、大和民族美點の結晶として、頗る義太夫を愛し、之を奬勵して居る。義太夫の奬勵は結構であるが、時に女義に對する贔屓は問題を惹起する事がある。東明に對する愛顧も度を過ぎて、厳格で有名な、女義界の泰斗素聲の皮肉となり、東明は遂に大阪に去るに至つた。

義太夫と共に、彼が其奬勵に努めつゝあるは、忠君愛國の思想で、其れが爲めに一學校を建て、上杉博士を聘して校長たらしめて居る。

新國家主義同盟

上杉博士と高畠素之とが提携して、日本の黒シャツ黨を組織したといふ事は、日本の新聞ばかりでない、外字新聞の評判となつた。或人がアントノーフを訪ねたら、黒シャツ黨の組織に關するやまと新聞其他の英譯を持つて居り、「いつたい、日本の國粹黨は何が目的ですか」と訊ねた。其人言下に「錦旗を奉じて、ソヴエット露國の長所を行ふものである」と答へたら、アントノーフは解つたやうな、解らないやうな顏をして居たといふ事である。

「世人は上杉を曲學阿世の徒と罵るが、博士程曲學阿世を知らない正直な人間に遭つた事がない」とは、二三度遇つた高畠の上杉評である。上杉は全く日本の現狀に絶望して居たのが、新國家主義同盟で、非常に元氣づいた。廿五日の大雪の夜の神樂坂倶樂部血盟の會には風邪の爲出席しなかつたが、一月廿五日は新日本建設の第一日であるといふ手紙を送つて來た。

高畠も此度は、非常な意氣込であり、又眞劍である事は、廿五日の大雪の會合で、新國家主義に關して數十分の大演説をなし、熱心に各種の質問に答へて居たに徴するも明かである。

倘、新國家同盟中、異彩を放つ一人物がある。其れは白石政夫である。「あれは、ほんものだ」とは、福岡縣多數の青年豪傑中、特に先輩が、彼を推賞する言葉である。「自分の窮乏を顧みず、人の事ばかり心配するのだから氣の毒でならない」とは、友人の彼を評する言葉である。沈勇にして温厚、又頗る武術に

達して居る。

大化會

學生相撲、最後の全勝者、小山、山中の二人も其會員であり、尚、柔道劍道に達する數十人の屬する、武術を其基礎とする愛國團體に、牛込加賀町の大化會がある。

清水小次郎、岩田富美男。岡崎四段等の創立する所であるが、現今は清水小次郎主として經營の任に當つて居る。

清水は久しく支那にあり、苦力の事情に精通す、揚子江沿岸二十萬の苦力を糾合して一大組合を組織し、英米の資本閥に對抗して其死命を制すると共に、機を見て一大風雲を卷起する壯圖は、彼が夢寐の間も忘るゝを得ざる所である。

岩田富美男は、ゲンコ一つで十枚積み重ねた瓦を粉碎する力あり、常に十貫の鐵棒を提げ、數里を平氣で徒歩する脚力がある。北原龍雄等と鎌倉で暴ばるゝや警官の手に餘り、消防夫を繰出し漸く水責めにして逮捕する事が出來た。滿州馬賊間に大なる勢力を有して居る。

民生性會

大正の俠骨道を鼓吹するを其目的とする團體に民生協會がある。青年黒龍會、或は新黒龍會とも稱すべき團體で、其牛耳を執る者は、内田良平の信頼する所深い一青年、中島幸太郎がある。

抹殺社の石黒鋭一郎、土木勞働者組合の白石俠夫等とも實際の血盟を結び、其宅には、常に十數の筋骨逞しき青年あり、柔道相撲で、襖は穴だらけになつて居る。

彼の理想は、東都數千の火事仕を糾合して、眞の俠骨團體をつくり、大正の新門辰五郎たるにありと稱せられて居る。

現今、日本のバイロン及國家社會主義者として有名なる中山啓は、彼の親友として、各種の劃策に參加して居る。監獄部屋打破の如きは、最近に於ける其一つである。

其他の團體

愛國を標榜する團體は、此等の外、其數頗る多く、一々枚擧するに遑ない位である。大竹貫一、五百木良三等の城南莊、大迫大將の救世團、山口彈正の皇民一義會、唐澤の南信黨、米村嘉一郎の赤化防止團、佐竹隆輔の浩然會森の縱横倶樂部、奥野貫の神州義團磯部一郎の新政會等は其主なるものである。此等團體首腦部の評論は他日に讓る事とする。

俠客の眞の精神

加藤一夫

　昔から俠客と云ふものは時の政府や國家には獨立して、別に一敵國をなして居た。彼等は日本と云ふ國土には住つて居たが、決してその臣民ではなかつた。僕は今、俠客はどんなところから生れて來たのか委しい事は知らないが、思ふに必ず、時代の被壓迫階級から、壓迫階級に對する反抗團として生れたものであらう。だから俠客のモットオは弱きを扶けて强きを挫くと云ふ事であつたのだ。

　彼等が賭博をして正業をつとめず、素人の金持ちから賭博によつて金をしぼりあげて生活をする習慣も、今日のプロレタリアの或るものが仕事をしても食つて行けないと云ふところから自然と眞面目な仕事をするのがいやになり、富豪をおびやかして金をとつてやらうと云ふ樣な氣になるのと同じ心理だと思ふ。

　それ故に、彼等は昔から、一面に於いては博徒だと云ふ名のもとに時の支配階級から輕蔑せられ惡まれながらも、貧しきもの弱きもの抑壓されて居るものからは俠客として尊ばれて來たのである。彼等も亦、どんなにその俠客の精神がすたれた時でも尙、この根本の精神を全く失つてしまつた事はなかつた。だから、昔から、彼等の社會では、謂ゆる二枚ワラジを穿くものを極端に輕蔑して來たのである。

　二枚ワラジを穿くと云ふ者は、彼等がそれ程反抗し憎んで居たところの權力階級のお先棒となつて、彼等自らの階級のものをふん縛らうとする蝙蝠の事を云ふのである。即ち權力階級者は、俠客の暴力行爲がうるさいので、それに對抗すべく同じく暴力を行使する同じ俠客中のあるものを利用したので、彼等階級はそれに對して極度の反感と侮辱とを加へたのである。

　然るに今日では此の立派な現象が、今日の權力者の狡猾なる政策のためにすつかり失はれてしまつたかの如くに見える。

　今日の暴力團體は、弱きを扶けて强きを挫くと云つたやうな精神のもとに、國家や政府に獨立した一敵國ではなくて、國家と云ふ强者をたすけて、勞働者と云ふ無力者を壓迫しようとし

居るのは甚だ遺憾である。

俠客が反抗して來た當のものは何時でも、政府であり、資本家であつたのだ。何故なれば、彼等はその權力と金力とをもつて、權力のないものをいぢめて我がまゝをし、金のないものに勞働を强いて搾取を事として來たからである。そしてそれは今日と雖も少しも變つては居ない。否、今日はその弊の最も大なる時代である。

然るにも拘らず、何が故に此の俠客もしくは俠客的精神の持主が、かくもうま〳〵と權力階級の傀儡となつたのであらうか。

それは勿論今日の權力者が、昔よりは一層狡猾になつて居るからだ。今一つは明治維新此の方、學校敎育により、社會敎育により、人民の心の中に最も巧妙な宣傳を行つて、俠客的精神を何時の間にかあらぬ方へ導き入れたからだ。今一つは昔からあつた親分崇拜の精神が、今度は親分でなしに、たゞ社會的に有名なるものを尊崇する精神に變化して行つた事だ。それが爲めに社會的に有名なる人間を會長に戴いてその人の云ひなりになるのだ。

しかしこれ等は俠客本來の精神でないのは云ふまでもない。今に、これ等の暴力團體も必ず眞の精神に立ちもどつて弱きを扶け强きを挫くの擧に出づる樣になるのを僕は疑はない。

僕等としては、少しばかり學問をして、自分の知識を賣り物に、表面は極めて淺薄な、野心のないものゝ樣な顏をしてその實、腹に一物をもつて居る知識階級よりは、かうした、あつさりとした、俠氣に充ちた階級のものをどんなに好むかも知れない、それは僕が何時か和歌山の國粹會の幹事と話したときにもよくわかつた事だつた。

僕は今の暴力團體が昔のやうに權力政治に反抗した獨立的な團體に歸る事をのぞみ、且つ必ずさうなる事を信ずる。

愛國と非愛國

室伏高信

愛國的な運動の盛になつてきたことはこの二、三年來の世界の記錄である。世界が愛國的となつたからではない。反愛國的となつたからである。世界が反愛國的となつてからこゝに反動が生れてきた。それが愛國的の運動となつて現はれてきた。こゝに妙味がある。こゝに國家の問題の秘密を開くべき鍵がある。

今日の世界の動は社會主義である。マアクス派の國際社會主義である。プロタリエル、ハアベン、カイン、ファタアランド。私はマアクスのいふたことを僞りだと云ふのではない。資本主義國家においては、プロレタリヤは確に祖國をもたない。祖國とは畢ては「ファタア」の土地である。今日の「ファタア」は資本家である。即ちプロレタリヤは祖國をもたない。この意味に於いて今日のプロレタリヤ運動は非愛國運動である。愛國はプロレタリヤの任務ではなく 資本家の任務である。反動は愛國である。ファシッチ運動はこの意味において愛國運動である。今日の國家における愛國運動である。「ファタア」の國家を擁護せんとする運動である。從つてそれは如何なる假面を破つてもプロレタリヤ運動となることはできない。プロレタリヤ運動はそれが被支配者の運動である限り非愛國運動であるからである。

マアクス主義の鬨の聲を揚げる時はブルヂョア階級が國家を喪失した時である。從つて非愛國的となるの時である。しかも國家が消滅したのではない。カウツキイ・クノウ・ベルンシタイン派の國家、若しくは共產黨國家のできた時である。こゝに社會主義は愛國運動と化するのである。だから動も反動もファシッチもマアキストも、堺利彥も高畠素之も、山川均も、上杉愼吉も、ともにその本質において愛國者である。彼等の國家の愛護者である。他の國家の反逆者である。今日は二つの國家が存在する。二つの國家が戰ふ。愛國者と愛國者とが血を流してゐる。ともに自己を守り、ともに他に反抗する。守る時に愛國者である。反抗する時に非愛國者である。一人の人が愛國者であることに非愛國者である。愛國者が二重人格であるのではない。國家が二重人格なのである。今日は高畠素之が愛國者である。從つて堺利彥が非愛國者である。明日のことは分らぬ。共產黨ロシヤのことを思へ。堺利彥は愛國者であつて高畠素之は非愛國者である。排他的であるが權力の本質である。從つて國家の本質である。從つて愛國の本質である。今日は堺利彥が非愛國者であるがそれは彼が國家を欲せざるがためではない。欲するがためである。共產黨國家を欲するがためである。高畠素之が愛國者であることは彼が國を愛するからではない。彼が共產黨國家若しくはカウツキイ・クノウ・ベルンシタインの國家を愛せざ

るが爲めである。國家は愛のうへに立つのではない。憎惡のうへに立つのである。愛するがために國家の生れた記錄はどこにもない。憎むが故に國家は生れてきたのである。愛國者とは愛の人ではない。憎惡の人である。汝の隣人を愛するものは愛國者ではあり能はぬ。汝の隣人を憎惡するものは常に愛國者とならうとしつゝあるものである。資本主義國家が憎惡のうへに立脚してゐるやうにマアクス主義の國家も憎惡のうへに立つてゐる。人間生活の最も醜惡な方面の代表者である。

私は決して憎む勿れとはいはない。右の手で鑛山勞働者の血を絞り、左の手で「懺悔」の書物に筆をとる人よりも憎惡の哲學を鼓吹する人はより多く善である。何故なら後者は少くとも虛僞ではないからである。プロレタリヤには「懺悔」はない。鑛山がないからである。私は決して憎む勿れとはいはない。從つて戰ふ勿れとはいはない。プロレタリヤは憎むべく從つて戰ふべく餘儀なくされてゐるからである。しかもそれは餘儀なきがゆえに餘儀ないのである。それの助長と煽動とはチエスホツトだけが道德化することができる。とは最早やプロレタリヤの範圍ではない。謂ふところの「指導者」とはしば〳〵「勞働者」から勞働を盜むものである。資本家が「勞働者」から勞働を盜むがごとくにこの種の「指導者」は勞働者を盜むものである。フアツシチ的愛國運動が勞働者運動の假面をかむるとしたらこれはまた勞働者を盜むものであること勿論である。

愛國運動を難ずることは用なきことである。必要なことは批難ではない。愛國運動をプロレタリヤ運動から明確に區別することである。プロレタリヤには祖國はないからである。「フアタア」をして國を愛せしめよ。祖國は彼等のものであるからである。

先月號「自由國と奴隸國」中「ともに以下」「一つの自由國であるまで（改造二月號十九頁下段第十七行目より次頁の初行に至る）抹消すべきを忘れてそのまゝ出したものに付き此に更めて抹消。

反動團體のいろ〳〵

赤松克麿

一

この間、僕は或る西洋婦人から國粹會のことに就いて問かれた。その時こんな會話をかわした。

婦人「國粹會はいつも勞働爭議に干渉しますか」

僕「いゝえ、折々干渉します」

婦人「最近、干渉した例がありますか」

僕「えゝ、最近では去年の七月、北九州の八幡で開いた鑛夫聯合會の宣傳演說が彼等のために攪亂され、麻生君一行が襲擊されたことと、同じく去年の九月に京都の澤田合金會社の爭議の應援演說會で總同盟京都聯合會の同志が彼等に依つて暴行を加へられ、演說會を破壞されたことと、つい先月起つた岡山縣の藤田組農場の小作爭議に彼等が出しやばつたこと位のものです」

婦人「國粹會の行動に就いて警官は默つて居りますか」

僕「さうです、國粹會と警官とは仲好しのやうです」

此の時、婦人は一寸變な顏付きをした。

婦人「國粹會は政府と何か關係があるのですか」

僕「國粹會が出來る時、政友會の某有力者と諒解があつたやうです」

二

國粹會の幹部は大抵、土木請負業者、料理屋若くは女郎屋の亭主だといふ。また博徒の親分が多いといふ。僕は京都の一友人からコンナ話を聞いたことがある。「自分の働いて居る工場にも國粹會員が居るが、彼等にどうして國粹會に入つたのだと聞くと、國粹會に入つて置くと、賭博をしても警察で擧げないからだ。」こうした連中の寄り合ひだから、反動團體としてもシツかりした內容と組織とを持つたものであらう筈がない。唯だ彼等の思想感情及び生活樣式には封建的臭味が多分に殘つて居て、其の親分肌な俠氣と傳統的趣味と幾分有利な經濟力とが一種特異な集團運動を起して居るに過ぎない。とても彼等の運動が發達してイタリーのフアスシスチ團のやうになるとは思はれない。

併し注意すべきことは、支配階級が巧みに斯くの如き反動團體を利用して、勞働運動乃至社會運動を抑壓せんと試みることである。今日の勞働運動乃至社會運動は堂々たる旗幟を掲げて資本家階級に肉迫して居る。勞働爭議に於ても、勞働者側の主張はいつも理路整然として居る。そんな譯で、折々官憲は頭から勞働者を高壓するのに多少躊躇することがある。あまり露骨

に資本家の味方をするのに氣まりわるさを感ずることがある。さういふ時に御先き棒に使ふのに國粹會は持つて來いである。國粹會を使嗾して勞働者に喧嘩を吹つかけらし、それを口實に「秩序維持」の名目で勞働爭議を彈壓するのである。

國粹會が資本家若くは官憲の一別働隊として活動した有力な例證は、外に擧げた京都の澤田合金會社の勞働爭議である。此の事件は國粹會と警察との微妙な關係を窺ふのに絶好な資料であるから少し述べて置かう。

三

大正十一年の九月七日夜、京都三條青年會館に於て爭議批評演說會が開かれた。不思議なことには同日同處で國粹會の總會も催された。宮脇警察部長は、偶然にも爭議演說會と國粹會總會とが同日にあつたことは不幸なことであると云つて居るが、消息通の話によると、國粹會が急に同處で總會を開いたのは、官憲の內命を受けて國粹會が同夜の爭議演說會ブチ壞しの勢揃ひをしたのださうである。同夜約二百名の國粹會員が演說會場に乘り込み、會員には入口で白い木綿の布片を引き裂いて渡した。やがて演說が始まるや、各辯士は何れも臨監の警官のために注意若くは中止を受け、遂に八人目の辯士が中止となるや、二階の一角から「何の中止だ、理由を附け」と怒號するものがあつて、場內が騷しくなつた。處がその時臨監の警部が手を頭上に擧げたと思ふと、演壇の下に陣取つた黑田某（國粹會の柔道師範及び教育部長の肩書を有する男）が直ちに立ち上つて壇上の卓子の脚を捕へてグツト引き下ろした。卓子の水差しはわれて飛び散つた。それと同時に一味の大親分勇山が「ソレ行け」と大聲を發して命令するや、白布を腕に卷いた一團の壯漢は演壇に殺倒し、椅子、十手、棍棒等を揮つて暴れ廻り、場內は處々鮮血に染まるに至つた。當夜百五十名の警官が場の內外の警戒に任じて居たのにも拘らず、此の國粹會員の狼藉に對して何等の手を下さず、全く傍觀否認の體であつたといふ。しかして主催者側の勞働者四名は身體に數個所の傷を受けながらも其晩警察に呼ばれて長時間の訊問を受け、加害者側の國粹會員は一人の檢擧を見なかつた。

事件の翌日、平素顏馴染みの國粹會員の一博徒が爭議團本部へやつて來て、「昨夜は實に面白かつたよ。何しろ親分が警察から賴まれたのだから思ふ存分毆ぐれた。」と豪語したさうである。また騷擾の最中、聯合會の一勞働者はコンナ會話を聞いたといふ。

一警官「こう騷ぎが大きくなつては、君等の方から二三人殺

牲者を出さなくてはなるまいナ」——

一國粹會員「さうですな、今度は三四人の犧牲者は仕方がありますまい。」

勞働問題の演說會や社會主義の演說會で殆んど何の理由もないのに夥しい檢束者を出すことを通例として居るのに、かくの如き國粹會員の暴行を目の前に見ながら、警察が一人の拘引者を出さず、反對に負傷した勞働者を拘引したことは、彼等兩者の微妙なる關係を明示して餘りありと云はねばならぬ。

四

國粹會の外に大和民勞會といふ同じやうな團體がある。折々此の兩者は繩張りの爭ひで血の雨を降らして居る。社會に迷惑をかけるよりは兄弟分同志で爭つて居る方が罪が少ない。大和民勞會で思ひ出すのは、三四年前、自由人聯盟の演說會で同會員が松本淳三君を刺して重傷を負はしたことがある。其時も警察の態度が隨分非難されたやうに覺えて居る。要するに國粹會や大和民勞會はそれ自身有力なる保守的國民運動になる可能性はないが、彼等の猪勇的活動が無產階級運動の鬪爭的場面を險惡化するに役立つことは明かである。時勢が切迫して來ると、支配階級は、國粹會、大和民勞會、過激法案といつたやうな白色恐怖の陣立てを益々必要とするであらう。

國粹會や大和民勞會の相場は大抵決まつて居るが、此の外にやゝ高級な反動團體として近頃世間に傳へられるものに赤化防止團と愛國黨がある。赤化防止團は米村嘉一郎といふ辯護士が中心人物ださうで、最近勞農ロシアの大立物ヨッフェを呼んだのが惡いといつて後藤氏に苦情を持ち込んだといふ。愛國黨側の上杉博士と高畠君とが意氣投合して作つたのださうであるが、反動團體としては最も高級のものであらう。一體、保守的運動の中心人物には俠氣に富んだ親分肌の人が多い。兩君ともさうした處があつて、兩君はつねに子分ともいふべき一群の青年に取りまかれて居る。上杉博士が帝大の三十六番の大講堂の壇上から、憂國の熱誠面に溢るといつたやうな悲痛な態度を以て、得意の憲法論を說く時、長い間保守思想で教育されて來た純樸な學生達はすつかりチヤームされてしまふ。かつて歐洲大戰の眞最中、僕も大學で博士の憲法論を聞いて居た時分だが、博士は學生に向つて、一旦緩急あらば我々はノートを捨てて銃を取る覺悟がなければならぬ。その用意のために日頃から射擊を心得て置かねばならぬと熱辯を以て煽て上げたので、生一本の學生の一隊は急に銃をかついで戸山が原に出掛けたことがあつた。博士は決して純學究ではなくして、こうした實際運動の

操縦が出來る人である。

上杉博士は専制主義を説く一方に普通選擧論と土地國有論とを提唱して居る高畠君は忠君愛國社會主義を奉じて居る。本質は保守的であつても、一面新しい時勢に對する用意を見せて居るから、宣傳が旨く効を奏して、運動の組織が整頓して居れば或る程度の勢力を占めるかも知れない。併し今日の日本は思想の進歩が案外に早くて、知識階級、勞働階級、地方青年等に向つて小ブルヂョア流の自由主義乃至インタナショナル社會主義がドシ／＼浸透しつゝあるから、狂熱的な愛國運動がイタリーのファスシスチ黨程の成功を收めるかどうか疑問である。僕はこの種の運動は我國では大したことは無いやうに思はれる。

反動運動所觀

新居格

一月十八日の夜神川彦松君の歸朝歡迎會が日本工業倶樂部であつた。當夜同君の歐羅巴漫遊談があると云ふので、それを聽くべく久し振りに「並會」に僕は出席したが、神川君の話して呉れた一節は、興味深いものであつた。同君は伊太利のファスシスチーの事から話し出し、巴爾幹諸國の事を詳細に論したが、僕が最も面白いと思つたのはブルガリアとルーマニアとの對比であつた。同君は大様次ぎのやうに云ふ。

「ブルガリアの國内を歩いてもりど一本の煙突さへ見られない。全くの農業國である。その上に大地主もなく、從つて土地兼併の弊は些毫もない。それにも拘らず、同國内では既にボルシェビキーは熾である。これに反してルーマニアは産業も相當榮え、土地兼併の弊も十分あるのだが一向ボルシェヴィキの氣勢は擧がらない。只一人社會主義の議員があるが、其人は社會主義者であるよりもむしろ、個人としての徳望があつて議員になつてゐるのだ相である」と

神川君は話を續けて云ふ「自分はブロ・ボルシェビキーでも

ンチ・ボルシエビキーでもないが事實觀察によると上述の如くである。産業が榮えず産業革命の要のないブルガリアにかくの如くボルシエビキーが熾んな所以が分からない。で自分は一先それを文化の相異だと解釋したいと

氏のそれに關する根據はルーマニアはラチン系の文化である。ブルガリアは云ふまでもなくスラブ系の文化だ。所がスラブは歴史的に見て外來文化の影響を始終受けて來た。昔は東洋の而してピータア大帝時代からは西歐のと云ふのである。外來文化の影響をうけて來た諸國はどうも動搖が多く革命が行はれ易い。そこで氏は伊太利に關連して同國の如きは社會黨の勢力が非常に强いが又傳統的民族的の勢力が牢固として拔くべからざるものがある。そうした固有の文化を持つ國はいくら危く見えてもその反對の勢力もそれに對して强いから案外何ともない。伊國にファスシスチーの擡頭したのも必然であるし又固有的だとするのである。

僕は神川君の語を—(もう一度繰返すが)—慥かに面白く聽いた。で後多少とも考へつゝある。特に日本も外來文化をずつと傳へて來た點に於いて。

× × × × × ×

伊太利人と日本人とその性情がかなり類型的だとは數次耳にする所である。しかし、日本の文化が伊太利のそれのやうに、固有的なものがあるかどうかは少くとも僕には考慮に値する。そのどちらであるかに依つて結論が相反的になるからである。

その事はさて措いて、僕は考へる。僕は社會理論を考へない場合、さうしてボンヤリとこの國の事を情緒の上で感受するとき。僕は慥かにこの國の風土的情感に浸たる。それは數次云ふことであるが、植物の持つ風姿にも、氣候が齎らす特殊な情景にも、僕は矢張り日本的なものを持つだけは否定が出來ぬ。その情感が民族精神とどう交渉するかは別として理窟拔きに以上の事だけは云ひうる。

しかしながら、その情感を別にして理論の範圍に踏み込むと僕は反資本主義が鮮明となる。理論の點ではインタアナショナリズムでありうる。しかし徹底したインタアナショナリズムになり得ても情感だけには風土的な匂ひが拔け切らない。これが僕の現在持つ實感である。

ここで僕はこの國の愛國主義乃至愛國主義と標榜しつゝあるものを見る。具體的に云つてそれらが何んであるか。それは多い局面を持つであらう。國粹會と云ふのがある。僕はまだその組識、綱領、所屬員數、其〻に就いてハッキリした事を知らない。赤化防止團と云ふのがある。それを數次新聞で見る。がそ

の本體、その構成等に就いても知らない。しかし國粹會と云ひ赤化防止團は各々その名の示す如くであるに違ひない。上杉愼吉氏のやうな愛國主義の標榜者も明かにゐる。又外にたいしては民族主義の高擧、內にたいしては社會主義を主張する一派もある。それとは別に國家社會主義の一團がある。

いろんな立場がいろんな情勢を示してゐる。それがこの國の現在である。反位し、交錯し、對峙する。この後の問題はそれらの各の持つ實勢力が解決するだけだ。

× × × ×

伊太利のファスシスチーは今更云ふ迄もなく反社會主義を標榜して崛起した。工場占領にたいして擡頭し、農地にも及んで小作人が同盟して刈入れをしない時に、貨物自動車を驅つて收穫を地主のためにしたりした。日本の國粹會は甲府市で農村の百姓が同市の肥汲みを同盟してやらなかつたとき、國粹會員は肥汲みをやつたと朝日新聞の甲州版で大分前によんだ事があつた。最近岡山の小作爭議にも國粹會の仲裁が這入つたと報道された。國粹會の地方化はかくし傳へられつゝある。しかし、日本の國粹會と伊太利のファスシスチーは本質的に相異がある。その最も重なる點は伊太利のファスシスチーは元は極端な社會主義者であつたムツソリニーの統率になるものだ。全く極端な反動があつた。日本の國粹會にはさうした傳統はない。伊太利のファスシスチーは自發的であつて官製ではない。これに反して日本の國粹會は政府の役人であつたものの暗默の後押しと政黨政治家の肝入りとが發端であつた。その上、ファスシスチーには同國の中產階級的知識階級や、學生が多い。だが日本の國粹會はさうではないらしい。かくの如く兩者は發生の動機構成分子の內容が違ふ。だから、ファスシスチーを伊國國粹黨と云へない事もないが、國粹會を日本のファスシスチーであるとは云へないやうだ。

共故に、日本でかりにファスシスチー類似のものが發生するとすればこれから先きの問題であつてこれまでの問題ではない。

所がこの國でファスシチスト類似のものが起生するか、どうか。起生するとすれば從來の國粹會とは合體するものかどうかと云ふに僕は先づ合體にはしないで別箇の起源を持つのではないかと考へる。

こう云ふものが成立するかしないかは僕は今の所豫測は出來ない。

しかし、一方、インタアナショナリズムの進展も日を追ふて進みつゝあるらしい。而してその組織化が具體的になりつゝあ

るのではないか。その「動」にたいする「反動」もそれに比例して各方面に現はれつゝあるとも見られる。反動の氣勢が特にいろんな方面にそれとなく勃興したとも云へるやうである。それは一國内の情勢である如く世界の現象でもある。

× × × ×

去年の十一月十六日莫斯科に於ける第三インタアナショナルの第四回目の會議がクレムリン宮殿に開催された時、到處の壓迫を打壞する事の綱領が決議された。伊太利に於けるファスシチーの壓迫、土耳古共産黨員にたいする土耳古の壓迫アシアに於ける歐羅巴人種の壓迫、そして黑人種にたいする白色人種の壓迫等だ。第三インタアナショナルはその決議を如何なる方法でその後實行しつゝあるかは僕も研究をしてゐないから知らないが、それを見ても第三インタアナショナルの意圖丈は分かる。

が獨逸に於けるアンチ、セミチシズムの再燃（ラーテナウ、マキシミリアン・ハルデン等の暗殺アインスタインをつけ覘ふとかの噂）は認めていゝ。その事はインタアナショナリズムとナショナリズムとの分流が今の世界の各國に交流しつゝある確證だと思ふと共に將來とも相當むづかしい問題だと思へる。

理論としてのインタアナショナリズムが現實に存するナショナリズムとどう抱合して行くかは實際問題として或る期間重大なものと僕は考へるのである。

尤も愛國主義がその民族性を持たず、迷妄にして固陋なるものである限り、それは自然に滅びる運命を有すべきだ。

誤まれる愛國主義に就いて論ずべき點は多々ある。しかし、それを今一々指摘するのは面倒臭い。一々指摘しないまでも合理性に即するもの丶明知しうる事だから。

僕は何よりも先づ儼然たる事實と存在する社會事實に着眼すべきだと思ふ。さうするとそこにある階級對峙の事實を見遁がす事が出來ない。不合理不平等の存在を閑却して何の生活指標がありえるのだ。そこに僕の囚はれない現實的社會主義の理論が生ずる。その根據が一切の反動的現象と相容れない所である。

武裝した反動團體

山川均

國粹會、民勞會、桐花會、老壯會、經綸學盟、皇國一心會、猶存社、黑龍會、神洲勞働義團、赤化防止團、日く何、日く何日く何――數へればもつとあるかも知れぬ。是等の團體は、何づれも獨自一個の立派な主義主張の下に立つて居るものではあらうが、大ざつぱには、皆な一様に愛國主義の團體と見做されて居る。そこで日本の愛國の運動と愛國の精神とは、先づ是れくらいの團體によつて代表せられて居るものと見做してよい。曾ては國防は、國民一般の分擔であつた。然るに專門の世の中になると、國防は軍人軍閥の專門の職業になつて來た。その如く、愛國主義を專門とする團體の存在が意義あるものとなつたことは、愛國の專門化を意味して居る。

尤も是等の團體は、同時に一面には、總括して反動主義の團體と見做されて居る。そこで今日の世の中――專門の愛國家を必要とする世の中――では、『愛國』といふ言葉と『反動』といふ言葉とは、精密に同意語でないまでも、可なりに密接な關係のある言葉となつて居ることが分る。

□

是等の愛國主義の團體は、各々主張と綱領を異にするやうに運動の方法をも異にする。曾て或る非愛國主義者は、吾々の戰術は投票箱から××までを含むと云つたことがある。愛國主義の運動もその通りである。是等の愛國團體の戰術は、講壇で憲法を振り廻はすことから、大道で棍棒を振り廻はすことまでも含んで居る。

しかし『愛國』の必要が段々焦眉の急となり、その運動が益々戰鬪的となるにつれ、講壇政策の間接行動は、到底有力な棍棒の直接主義に及ばぬことが明かになつて來た。そこで從來は間接行動の主張者であつた愛國主義の學者のうちには、憲法を賣つて棍棒を買ひ、ぼつ／＼巷に出る準備をして居る奇篤な人もある。

□

直接行動が最も重要な運動方法であることは、現に是等の團體のうちで、實際の勢力を持つて居るのは、何と云つても棍棒や匕首を最も多く持つ國粹會である一事によつても知ることが出來る。何と云つても、今日のところでは、愛國主義の運動を代表し、愛國主義の運動を背負ふて立つて居る運動の中心は、國粹會であると云はねばならぬ。昨年京都で、自由法曹團を膺懲したのも國粹會であつた。最近藤田組の小作爭議で、小作組合を叩き伏せたのも國粹會である　近く八幡に開かれる官業勞働者大會に對抗する爲に、一千本の白襷を用意して居るのも國粹會である。そこで現在のところでは、愛國主義の代表的の團體は國粹會であつて、その代表的の運動は、多かれ少かれ武裝した團體行動であると云つてよい。

□

多かれ少かれ武裝した反動主義の團體があることは、戰爭以後に於ける資本主義國に著るしい特徵であると云つてよい。今日いづれの資本主義國にも　此種の武裝團體のない所はない。そして是等の團體は、偶然か必然か、何づれも皆な愛國主義の團體である。

武裝した反動團體の最も光輝ある實例は、云ふまでもなく伊太利のソアスチスチであつた。戰後の伊太利には、社會革命の形勢が熟してゐた。都會の勞働者の間も、地方の農民の間にも革命の精神が漲つてゐた。彼等は既に、革命の道を歩ゆんでゐた。唯だ一つ欠けてゐたものは、この革命的な民衆を統帥する有力な指導力のなかつたことであつた。中產階級化した社會黨と、經濟行動の『獨立』と『政治的中立』といふ脆い組合心理に墮落した勞働總同盟とは、斯ような革命的形勢に必要な、雄乎とした有力な指導を與へることが出來なかつた。それと同時に、この革命的勢力と對立した支配階級にも、一擧に之を壓伏するほどの勇氣と力がなかつた。双方で尻込みをし合つてゐるこの喧嘩の間に、ピストルを突きつけて入つたのが即ちソアスチスチであつた。黑シヤツの仲裁人は双方を顧みて斯う云つた。こゝに實力がある!。こゝにほんとの權力がある!。

□

伊太利の資本家政府は、民衆の革命的勢力に對抗する必要から、この武裝した反動團體の運動を默認して居つた。時には之を助けてゐた。そして武裝した反動團體が、革命的勢力に對して政府の利益となつてゐた範圍に於ては、それは革命に對する現状維持の勢力であつた。けれども武裝した反動團體の存在と行動とを許るし、國家がその存在の爲に是等の武裝團體の力を藉つた——乃至は藉らなければならなかつた——程度だ

けは、その國家は、國家としての實力を失つて居るのである。その國家の機關は、それだけ武裝した私人の團體によつて取つて代られて居るのである。そこで民衆の革命に對する現在の秩序の維持と擁護とに出發する武裝した反動團體の行動は、その結論まで進展すれば、一種の革命であると云つてよい。國家が此の種の武裝團體の存在を認め、その行動を許すことは革命の權利を公認したものである。維と擁護とに出發する武裝的の團體行動は、その結論に於ては、一種の反動主義の革命であると云つてよい。

斯ように現在の資本主義的國家に、多かれ少かれ武裝した反動團體の存在が許るされて居ることは、その程度だけ、資本主義の××××しかけて居ることを意味して居る。そして資本主義の國家が、事實上、革命的行動を承認したことを意味して居る。

□

尤も日本の愛國主義の團體に、ファスチスチに發達する可能性があり、そして日本の社會狀態に、ファスチズムを發達させる可能性があるかどうかは、別問題である、けれども實際の形勢などにはお構ひなく、日本のムソリニたることを夢想するほどに、人間が夢想的になることは不可能なことではない。

（二月五日）

唯だ國體の精華を發揚するのみ

上杉愼吉

一

今度私が同志の靑年と共に經綸學盟なるものの組織せんことを誓約し、斯の國家興亡の機に方りて、幾分なりとも皇恩に報ぜんことを期するの志を固くするや、我々同志の期する所は、固より遠大にして目前に在らず、之を公表するが如き積りは毫

も無かつたのであるが、圖らずも世人の耳目を衝動し、全國の有爲なる青年の書を東西より寄せ、或は來りて私を訪問し、亦心を吐露し、肝膽を披瀝して、共に皇國の爲めに死せんことを誓ふ者の甚だ多く、日を逐ふて絕ゆることなきは、天下の機運既に動かんとするの兆なるか、同志と共に痛快を大呼し居ると雖も、顧みて微力を愧ぢ羽翼大に備はり、根柢ある力を養ひ得て、一擧にして事必ず成るを期するを得るに至るまでは、靜かなること林の如く、動かざること山の如く、一切沈默し居るを以て我々の分なりとして居るのである。されば諸雜誌より我々の計畫に就て寄書せんことを求めらるゝは、實は我々に取りては心外千萬なことであると考へて居る。然れども私一人の志は之を告白することも、何の差支も無きとゝ思ふ、何となれば私は年始年終寢るも、起るも出入進退東に在るも西に往くも、常に唯だ我が國體の精華を發揚せんことを衷心祈願して居るのみであるからである。私は百萬の同志を得んとも、或は私一人とならんとも、私に取りてはつまり同一である。守愚一貫して相變らず、同じ事を志ざし同じ事をして居るのである。改造社の需に應じて今筆を執るも亦同一事を繰り返へすのみ。

二

私は茲に唯だ一事の我が經綸學盟の爲めに辯明し置かざるべからざる事があると思ふ、經綸學盟の事一たび世に傳はるや、人或は之を指して愛國黨と稱し、或は之を伊太利のフアシスチ團に比して、何等か一大運動を起さんとする結社であるが如くに喧傳した、經綸學盟が何等政治的又は社會的運動を爲さんと目論見居る者に非ざるは云ふまでもなきことであるのみならず、之をフアシスチ團に比するが如きは、我々の甚だしき間違なりと自ら甚だ不快なりとする所である、抑もフアシスチ團は何が故にして起れる、伊太利は戰爭中より國內に非國家的なる社會主義者共產主義者が充滿し、戰後に至て益々跋扈張梁遂に工場占領の暴擧をも敢行するに至つたのである、全國殆んど赤化して將に第二の露西亞たらんとするに至つた、之れムアシスチ團の勃然として起り來らざるべからざる所以、愛國の熱血湧くが如く有爲の青年は、伊太利滅亡秋の秋に迫れりと爲し、猛然として起つて狂瀾を既倒に囘へし、祖國の光榮の爲めに身命を擲たんとせるもの即ちフアシスチ團である、我々の志は正に彼等と異なるなきも、我が金甌無缺の日本に於て、毫も彼に於けるが如き事情は發生して居らぬ。我が國に於ても亦社會主義共產主義と號する者二三子あらんも、區々たる耳食者流、片々たる口舌才子のみである、フアシスチ團の蹶起を必要とする實際

の事態は何處にも存在して居らぬ、況んや我が帝國內に於ては斯る事態は決じて生じて來らぬと爲すもの實に我々同志の信念である。我が六千萬人は眞に同胞兄弟である、如何なる場合と雖も、皇室に忠誠を盡くすことを忘るる者ではない。我が國に於ては忠君愛國は資産ある者地位ある者の專賣ではない。否、資産なく地位なき平民たればたる程燃ゆるが如き忠君愛國の熱情を有し、一旦の緩急に當りて一身を鴻毛の輕きに比することを忘れざるは、實に我國民性が世界に無比なる所以である。日清日露の國運を賭する戰爭に光榮ある勝利を得たるは、我が平民の力である、我が國民は貧乏の不平の故を以て、皇室を忘れ國家を忘るる者ではない、我々は斯の奉國殉公の精神に充てる六千萬人の足弟の一人として、益々斯の精神を練磨せんことを期する者である、ファシスチ團の起らざるべからざる原因の、我が國に於て決して發生し來らざるの信念に基立して經綸學盟を起さんとする者である、同胞相鬪ふ伊太利は憐れむべきかな、我々をファシスチ團に比するとは何事ぞや、我々は心より之を不快なり間違なりとする者である。

三

我が經綸學盟は一の學校である、一の學塾たらんことは我々の期する所である、我々同志は今の時勢を見て深憂を懷き、匡濟の志甚だ盛んなるも、時々起り來る事件に心を動かし、政治の變動に追隨して輕佻なる運動を試み、世論の喧々囂々に浮き立ちて、演說會を開いて見たり檄文を飛ばして見たりするが如きは我々の眉を顰めて最も陋なりとする所ある、世潮に浮泛して飛びまはらんには我が同志青年の志は餘りに大である、我々は時事問題には左程興味を持たぬ、斯の內閣に向つて外交の振作を促さんとするの愚の至りなるとを知て居る、斯の議會と政黨とに向つて普通選擧の即行を迫る程にノンキなる時間も心持も持て居らぬ、大體我が同志は現在の儘の政治が何事をも爲すに足らぬのを見て、飽くまで愛想をつかして居るのである、さればこそ經綸同盟を起さんとこそすれ、我々はもつと底力を養ひたいと覺悟して居る。乾坤一擲の大業は口先きや指の先きで出來るものではないと覺悟して居る、我々は目に見ゆる目ざましいことをすることを好まぬ、皇國の爲めに埋め草ともなれば足るとして居る、唯だ着々と分を積み寸を重ねて、限りある力を試めさん日の來るを待つてのみである。

我が經綸學盟の組織は全然學校の組織たらんことを期して居る。私は年長の故を以て指されて校長たり塾頭たり、同志と共に有爲の青年を薫陶して、國恩に報ずるに足る人材を造り成さ

んことを計畫して居る。部を分ち第一部を練思第二部を鍛身と爲し、精神と身體と之を兼ね養ひ、金鐵の精神と身體とを併はせ具はる國家有用の人を得んとする外に、我が經綸學盟の事業は無いものである。大正日本建設の英雄を養はんことを、國體精華發揚の武士を造り出たさんことを、我々は唯だ之を期するのである、經綸學盟の事業は氣長にして且つ質實である。

四

我が同志の内には從來社會主義者と目せられたる者も在る、之れ恐らくは世間の耳目を驚かせる一因であらう、頃者私の未知の門下生と稱する一青年の私に書を寄する者があつた、語氣眞に沈痛を極めて居る。其の大意に曰く自分は十年前尚ほ學校に在りし時は、我は何の爲めに働くかと云ふ疑問に逢着して煩悶した、禪を學び耶蘇教に聽き遂に解決し得ず、偶々先生の著書を讀みて豁然として悟る所あり、爾來安心して日本國民たるの本分を盡くすに努力し、艱難を厭はず辛苦を喜んで暮らして居る、思ふに自分の如き青年は、先生自ら之を知らざるも、天下に少からぬことであらう、然るに今俄かに先生社會主義者と提携すと聞く、自ら我が耳を疑はずんばあらず、我が十年の信念は根本的に動搖せり、先生は自己の責任の重大なることを知るかと、私は之を讀みて自ら大に慚るゝの思を爲したることと云ふまでもない、然れども私は斯の眞摯なる青年に告げて云はんと欲す、私は決して國家を否認する社會主義者と妥協する者に非ざることを、私の國體の精華を發揚せんとする志は終始一貫して益々強きのみならず、國家に對して疑惑を懷き、我が國體を知らざるが如き者は如何なる者たりと雖も、之を寬容せんとは思はぬ、一片耿々の志は知る人ぞ知らん、私は百萬人の同志を得んが爲めと雖も、私の信條を寸分たりとも曲げやうとは思はぬ、然れども凡そ社會主義の何たるは甚だ明瞭ならざるも、私は社會主義の理論と其の實際的主張とは頗る採るべきものあることを信じて居る者である、社會主義の名に恐れて、其の内容を吟味せず、一概に之を近寄せざるが如きは、甚だ卑屈甚だ狹隘、眞に國家人民を憂ふる者の態度ではないと考えて居る、斯て私は社會主義の眞味は、我が國體の精華を發揚するに合一するものありとするの見解を以て、社會主義を研究し社會主義に對して居るのである、彼の一時の不平の感情に驅られて、一切を破壞せんとし、無政府主義ならんとするの傾向を有する社會主義は論ずるに足らぬ、彼等は感情の爲めに人類自らを信ずること能はざるに至り、國家に生くる人類永遠の理想を忘れたる者である、彼等は人類自らをも非認せんとする者である、皆

級鬪爭を主張するが如きは、眞に人類共の者の呪咀である、又彼の耳食者一流一時の流行物を弄ぶが如く、漫に社會主義を口にする者の如きは、固より歯牙にかくるに足らぬ、人若し眞に人類を憂ひ人類を愛するならば、必ずや國家にあらずんば、社會主義の理想も亦成る能はざるを覺らなければならぬであらう、されば眞摯なる社會主義者は、漸く國家主義に目覺め來るのである、然れども社會主義を實現せんが爲めに國家を必要とすると云ふが如き、功利的國家觀は尙ほ執るに足らぬ、國家と社會とは離れたる別個のものではない、國家は理想的なる社會である。社會主義の爲めに國家を利用すべしと爲し、社會主義に冠するに國家を以てするが如きは、また國家をも社會をも知らざる者である、我々は一に國家主義を奉ずる、我が同志の內に社會主義者あらば、彼は最も徹底せる國家主義者である。社會の爲めに國家を蔑視し又は國家を厭倒せんとし、或は社會の爲めに國家を利用せんとするが如きは、吾人の信念に夾雜すべき餘地無き思想である、況んや我が同志の國體の精華に感激せんとき、唯だ國體の精華を發揚せんことを祈願せんのみ、一切の人類の爲めに善なることは、渾て斯の內に包含せらるるのである。

五

漫に之を社會主義者と云ふことと勿れ、漫に我が帝國の前途ある青年の頭に貼り札を附けて、危險思想家としてしまふ勿れ、私は眞に我が國體の精華を信條し、天壤無窮の皇國の光明ある將來を疑はざる者は、動かざる自信と恢廓なる精神とを以て、此の點に甚深の用意あらんことを希ふて止まざる者である。抑も人生誰れか不平なからん、況んや今日の如き沈滯不活潑なる我が日本に於てをや、滿身のエネルギイ張り切れんとする有爲の青年は、不平滿腹何の處にか我が力を試みんとの感情を懷くに至るは當然である、今の世態を見て尙ほ平々然就職問題に沒頭し、世潮に棹さして世と共に推し移らんとするが如き無事平穩なる青年は、末に於て共に天下國家を語るに足らぬ、活きたる日本青年の實力は、何時しか既に此の滿腹の不平を懷ける青年に移てしまつて居るのである、私は多數の社會主義者又は無政府主義者と自稱し又は他稱せらるる青年を知て居る、其の言ふ所は眞に單調である、一本調子である、率直である、手に唾して起たば天下何事をか爲し能はざるあらんと思つて居る、彼等に前後の思慮も無く人の見境も無い、彼等の眼中には富貴も權力もない　一身の利害をしか考へたるとなき老耄之を見ば眞

に驚愕するであらう、然れども興國の活力は彼等に在る、私は日本國家の組體なる信條者として、切つても切れざる同胞兄弟たる日本民族の一人として、滿腔の赤心を明放し、斯のエネルギイの遣り場に煩悶する青年と胸襟を一にして、共に救國濟世の大業を爲し遂げ得んことを確信する者である、私は眞正なる日本精神の彼等に在ることを疑はぬ、老人等は自巳を以て保守的なりとし日本的なりと考え居るも、今の老人なる者は明治五十年間の洋化時代の遺物である、五十年間の洋化模倣が今日の百弊を累積せるの根本たるは、私の屡々論じたる所である、眞に保守的なる眞に日本的なるは、公等の與り知らざる所、焉くんぞ知らん今の所謂る危險なる青年が眞正なる日本精神に目覺め、民族の活力を其の間に集中して、遂に興國の大動力たるに至らんとは。

六

親より傳へたる筋骨の外何物をも有せざる勞働者の、一と筋なる尊皇報國の精神が、かの街路に革命歌を唱へ、工場に怠業する極めて少數なる病的勞働者の爲めに、蔽はれて見はれざるは、實に遺憾千萬である、勞働者は眞に氣の毒である、貧乏の痛苦は之を經驗したる者に非ずんば分らぬ、我々は深く玆に思を致さなければならぬ、然れども一部分子に煽動せられ街路に騒擾する勞働者は、眞に自ら救ふ所以を知る者ではない、又彼等に何の根柢ある實力もない、温袍を着て高樓に美食するの人は之を知らざらんも、我が勞働者の汗は皇國の爲めに流さるゝ汗である、顧みよ日清日露の戰爭に方り、國民中如何なる分子が、一身を鴻毛の輕きに比して、命を鋒鏑に殞とせる、我が貴族と金持とは否品行と不養生と怠惰とに出精し、其の心身を墮落して、徵兵檢査に合格し得ざるに至れる間に、貧乏なる平民は一片の義心銷磨せず、國家の屈辱に憤るの志尙ほまた存し、鍛錬したる筋骨を以て國難に當ることを得るのである、皇國を忘れぬ眞面目なる勞働者は、平素は沈默して其の職に從ひ居るも、一旦の大事起ることあらんには、貴族と金持との如きは物の用に立たざることを熟知して居る、口でなく、手を要する時あることを知て居るのである。

七

何をか國體の精華を發揚すると云ふか、國家の哲理、我が建國の精神、日本帝國の本質、我が國體の本質及び其の精華の何たることの如きは、私が始終講述して居る所であるから、今之を繰り返へすまでもない、然れども今の秋に方りて特に之を大聲

族呼せざるべからざるは、今や大日本帝國は建國以來振古未曾有の機運に遭遇し、世界の舞臺に日本民族の天才と力量とを試むるの一大覺悟を爲さゞるべからざるに、日本國家の日本國家たる所以の本領正に空虛なるの狀態に居るが故である、私は大戰爭以來常に力を極めて日本民族の世界的大使命に當るの秋來れるを說いて居る。一昨年の夏特に一書を著はし、題して『日本人の大使命と新機運』と云ひ、同胞に告げて、其の覺悟を促した、當時同書に序して曰く、『大戰爭は我が日本をして、英米に雁行するの第三强大國たらしめたり、從來黃色人の小國にして此の地位を得たるは、實に歷史上破天荒の現象なりと爲す、世界十三億の有色人種は頻に自奮の念を起し來り、世界は西洋人のみの世界に非ずして、全人類の世界たり、文明は全人類の文明たるに至らんとす、而して其の成ると成らざると、一に我が日本の更に進一進大に興隆するか又は此を頂上として、以後大に振はざるに由らんとす、我が日本人の使命たる眞に偉大なりと云ふべし、然れども飜て自ら省れば、日本は外に對しても、內に於ても、從來のやり方にては進むだけ進みて之以上に進むこと絕望なるに至れり、開國以來五十有餘年長足の進步を遂げて頂上に達し、極度に緊張せる力玆に盡きて、降り坂に轉がり落ちんとす。然れども此の極處に到り着きて、國民は自ら行き詰れるを覺り、今や一轉更新の機運に向へるの曙色東天に耀かんとす、日本人は今如何なる民族にも劣ることなき我が天才と能力に不動の信賴を置き、此の難局窮地に思ひ切りたる大飛躍を爲すの覺悟を定めざるべからず、而して其の本は固より我が國體の精華を發揚するに在らざるべからず、明治維新は之を目的として行はれたり、然れども、開國進取に急して、日本人五十年間の努力は、日本をして今の偉大なる地位と使命とを獲得せしめたるも、一時的功利的偶然的なる發展は、最早之れ以上に進むること能はざるに陷れり、維新の精神は今の一轉の機運に乘じて再び實現せられざるべからず、然らざれば日本は我々の生れ合はせたる今日を起點として衰亡の運に向はんとす、同胞國民何ぞ奮起せざる』と、私の志は世界に於ける日本帝國の重大なる地位を知らしめんよりと寧ろ內に於て思ひ切たる大改革を斷行し、國體の精華を發揚する所以を阻害する一切の制度を除却し、玆に眞正の日本を建設して、空名ならざる萬國無比の日本を造り上げんとするの大覺悟を爲さゞるべからずと爲したのである、私が或は暴風來と絕叫して堅固不倒の日本を造り上げんことを警告し、又或は狂と呼び痴と笑はるゝを厭はず國難來を大呼して臥薪嘗膽の沈痛なる決心を爲すべきことを國民に促がせるも、皆斯の志の外に出でぬのである、私は旣

に大正八年の暮『國體精華の發揚』なる一書を著はして、此の意を解明したることもある、當時曰く『帝國内外の危機益々迫りて、國民精神の緊張益々失はる、何ぞ深憂に堪えん、顧ふに帝國の大に興るべくして頽勢斯の如くなるは、一に國體の精華の大に發揚せられざるに由る、速に百弊を除却し國體の至醇を發し、眞正なる日本を建設せざるべからず、以て擧國を一致し、六千萬人の力を十百倍して、帝國の使命を達成すべし、如何にしてか之を實現すべき、之予の不肖を顧みず本書を著はして、國體精華の發揚を提唱する所以なり、而して其の要目とする所凡そ六一に曰く、思想を陶汰して擧國一心ならしむ二に曰く、擧國を總動と具し國威の宣揚を則す三に曰く、擧國皆兵を實現して大に軍國主義を行ふ、四に曰く資本と勞働とを統制して擧國經濟を一にす、五に曰く民生を整理し國粹を保守して擧國一民ならしむ、六に曰く大權中心の實を擧げ政府を革新し擧國選擧の制を定む。此れ等の事たる皆非常の事たり、非常の決心覺悟を以てするに非ざるよりは之を成就すべからず、彼の時流に浮游して漫に改造を云ふが如き者の與る所に非ず、深く國體に根柢し、確固不動の基礎に立脚し、建國の理想に復るを期して、初めて大改造を行ふべきのみ、今は悠々たる議論に日を消するの秋に非ず、少壯有爲の士奮發興起して、自ら國家を斯の難局に濟ひ、大日本の建設に當るの大覺悟を定めざるべからず』云々と、今同志と共に國體の精華を發揚すべしと爲すも、亦此の外には無いのである、唯だ爾來三年有餘國難益々大にして何時日を逐ふて非に、内外の事默視するに忍びざるものあるに至るも未だ一人の義を天下に唱ふる者あるを聞ざるは、痛恨の至りであると云はねばならぬ、我々は非常の事に當る非常の力を有して居るや否やを知らぬ、我々は唯だ之を養はんと思ふのみである。經綸學盟は未だ成らぬ、其の成るの日は何事を爲さんか、我々に盟約と云へるものがある、曰く『一心天皇ヲ奉シ外ニ向ツテハ日本民族ノ天才ト能力トヲ世界ニ試ミ内ニ在テハ日本民族ノ眞精神ヲ保守シ世界ノ歴史ニ一新時期ヲ開クノ先驅タランコトヲ期ス』と、我々は極端なる保守黨である、而して徹底的革新黨である、否、之に當るの人を養ふの學校である。

國家社會主義でゆく

高畠素之

我々の間に何か新らしい仕事なり運動なりを起さうといふ氣運の漲つてゐることは事實である。然しそれを何んな形で何んな規模を以つて始めるかといふ事は、まだ充分話が纏まつた譯ではない。況んやまだ火蓋を切る所までは進んで居らぬ。隨つて此方面のことについては、何も語る譯にはゆかぬ。然し如何なる形で、如何なる人と、如何なる規模のもとに仕事を始めるにしても、私一個としては從來の國家社會主義的立場から右にも左にも動かうとするものでない事だけは斷言できる。又斷言して置く必要がある。

私は國家主義者である。私は國家主義者なるが故に社會主義者である。私は又社會主義者である。私は社會主義者なるが故に國家主義者である。赤化防止團といふ國家主義の一派は。國家主義者と社會主義者とを咬み合せて兩主義の黑白を決しようとしたさうであるが、私から見れば社會主義と國家主義とを斯く對立させることが既に驚くべき時代錯誤である。赤化防止團一派にして若し眞に國家を憂ふるものであるならば、彼等は必ずや社會主義の實質を承認せねばならぬ。然らざる限り、彼等は口に國家を言ひ、心に國家を憂ふるとも、事實に於ては國家破壞の逆徒たる結果を免れることは出來ないのである。何故であるか。

資本主義といふ制度は、國家共同の一體たるべき國民を二分して、一方には生産機關を獨占する少數資本家の階級と、他方には一切の生産機關を剝脫された多數無資産の階級とを明確に對立せしめるからである。此對立は資本主義の結果であり、且つ前提である。資本主義にとつては、多數の國民は『人格』であつてはならぬ。生産機關の所有者たる少數の『人格』者が依つて餘剩價値を搾取すべき商品の代表でなければならぬ。これは議論ではない。事實である。何人も否認することの出來ぬ事實である。疑ふ者は多數無產者が如何にして生活し居るかを見よ。彼等は共有する唯一の商品たる勞働力を販賣することに依

つてのみ、微かに生活することを許されてゐるではないか。多數國民が若し其勞働力を販賣する以外の方法に依つて生活し得るに至るとすれば、資本主義の前提は忽ちにして倒れるのである。

資本主義のもとに於ては、資本家は强者である。随つて資本主義のもとに於ける、又は資本主義と相並んで存在する一切の制度、一切の機關は資本家に依つて利用せられ得るのである。國家も亦資本家のために利用せられ得る。資本主義は國家の名に依つて、多數國民の人格否定を支持し助長しようとする。かくして現實に目覺めた多數の國民は、資本主義を敵視すると同時に國家をも敵視するやうになる。資本主義の倒れる時は、國家の倒れる時だと信ぜられるやうになる。

資本主義は國家の存立條件たる一切の國土、一切の富力、一切の文化を國家の手から資本家といふ一部少數者の手に移轉せしめる。國家は資本主義のために一切の實質を吸收されやうとしてゐる。資本主義が即ち國家であるかの如く見えて來た。多數國民は勞働力以外に何物も有して居らぬ。國家も亦資本主義の手に奪はれた。多數無産者は愛すべき國家の殆んど一片をも有して居らぬではないか。

社會主義は斯かる非國家的狀勢を一轉して、國家を國民全體の手に返還せしめんとするものである。國家を一部少數者の國家でなく、國民全體の國家たらしめんとするものである。社會主義は資本の私有を撤廢して、土地その他一切の生産機械をば國家の手に返還せしめ、國家の手に依つて産業の管理を行はしめたとするものである。社會主義のもとに始めて國民は共同の一體となり、國家は國民全體を包含する共同の權力體となり得るのであつて、かくの如き社會主義に反對して資本主義の擁護に努めんとする者は、如何に國家を口にし、國家を心にするとも、事實に於ては國家破滅の助長者たる誹りを免れないであらう。

尤も國家主義者が社會主義者を敵視し憎惡することは、必ずしも國家主義者のみが惡いといふ譯ではない。社會主義者にも責任の一半はある。社會主義者は資本主義に向けるべき鋒鋩を國家の上にも向けてゐる。甚だしきになると國家を先づ否定して、資本主義の否定ともそれに含ませようとする者（無政府主義者）がある。かゝる狀態のもとに、國家主義者が一切の社會主義を敵視し撲滅せんとするに至ることは、寔に已むを得ざる歸結と云はねばならぬ。

問題は社會主義者が國家を否定することの可否である。純理論は暫く措く。社會主義者の看破せる産業集中の傾向は、結局

何處に趨歸することになるのであるか。社會主義者は、少數資本家の手に集中した產業が進んで國家の手に集中することを豫想するものでないか。資本主義制度のもとに醸成された生產の社會化は、一切の產業が國家の手に集中することを豫想する時に、始めて領有の社會化と兩立し得るものであつて、かくの如き歸結に到達すべき趨向を現制度の中に看取したことが、實に近世社會主義の『科學的』たる所以ではないか。

然るに言葉の國家化といふことは、現に國家の存立を豫想してゐる。豫め存在せざる國家の手に產業を集中せしめるといふ理屈は立たない。かくて一方に國家を否定しつゝ、他方に產業の國家化を主張するといふ謂ゆる主義者の態度は矛盾を意味することになる。產業國家化の後に與へらるべき國家の運命如何といふ問題は純理の範圍に屬する。少なくとも現實の範圍内に於て國家を否定してかゝる社會主義は、空想的と見るの外はないのである。社會主義者としては國家の立場を強調すればする程、その議論はます〱現實的となり科學的となり、おまけに實力の優つた愛國者たちの物理力に戰慄する必要もないのである。社會主義者は何を好んで非國家的の口吻を弄するのであるか。

要するに我々は國家主義者としては、國家主義者なるが故に社會主義者であり、社會主義者としては、社會主義者なるが故に國家主義者であつて、將來どんな形で新らしい運動を起すにしても此立場だけは變へたくない。たゞ此主張を實現する上に如何なる運動方策を採るかといふ事は、周圍の事情にも依ることで一概には定められぬ。官憲の出かたにも依ることである。官憲が若し我々の運動をも危險視して、かの主義者たちの運動と糞味噌に扱ふならば、我々の運動は勢ひ陰性を帶びて來ることになるのであらう。また若し官憲に物を見る明があつて、公然の道を辿ることが許されるとすれば、議會で獨裁を行ふぐらゐの所まで行かなくては嘘である。更に一端の舊國家主義者と、他端の謂ゆる主義者とが、我々の運動に對して如何なる態度に出るかといふ事も將來の運動方策に影響する所があらう。我々は彼等に對しては、彼等の採る儘の方策を以つて應酬するの外はないと考へてゐる。文章もよし、言論もよし、物理力も亦辭する所ではない。

生活指導原理としてのカトリック教と大乘佛教

大谷尊由

羅馬法王廳の使節交換問題に關しては、さまざまの議論が一時に紛出した。予は使節交換に反對したものゝ一人であり、またこの問題の實際運動については、關係者の一人でもある。しかし使節の交換そのことに關しては、可不可、要不要、尙早等のさまざまの説が出て、それらは贊成、反對それぞれの團體または有志によりて發表せられ、或は宣傳もせられたことであるから、この問題に直接當面してのことを、今更らこゝに繰返さうとは思はぬ。が、この問題に付帶して起きて來た一の見のがせない現象がある。それはこの問題に關して發表せられた諸家の議論のうちに、宗教、即ちカトリック、若くは日本大乘等に對する見解が、それとなく漏らされたのを見ると、皮肉にもこれらの宗教の本質、精神等に對して無理解、若くは全く誤解を證據だてゝるやうな言葉が、多々見受けられたことである。カトリックに對しての知識の缺乏はさることながら、自國の宗教、自國の文化の内容の大部分を形づくつてゐる宗教、即ち日本大乘に對しての理解が、クリスト教に對するそれよりも、更に淺薄であると思はるゝ人々を現代の學界、思想界に相當の位置、權威を有するそれらに見るごときは、皮肉と言はんよりは、悲しむべき事實である。この際、予はこの問題を機緣として、而かもこの問題をしばし離れて、生活原理として、文化基調としての、この兩宗教の本質、精神を剖檢して見たいと思ふ。そして、その必要なることを信ずるものである。

宗教と民族的特性

宗教を以て單なる個的主觀の所產と考へた時代は既に過ぎ去つた。時代の全的生活、民族の大主觀から離れて、個的の主觀のみが、局分的に、孤立的に存立することの不可能にして、有

り得べからざるは、ヘルデル、フイヒテ、ヘーゲルは勿論、最近のヴント等の民族主義、民族心理學の明かに提唱するところであり、我等をして、その眞理なるを、歷史的事實に回顧して痛感せしむるところである。されば宗教も、民族文化の一相として、民族的精神の藝術的流露として、民族的特質の綜合的表現として見らるべき一面を有することを忘れてはならぬ。

もとより宗教は藝術とひとしく、絕對不變の一面を有する。が、しかしそれと同時に、時代と國土とに依て特種の開展をとげる變化流動の一面あることを知らねばならぬ。たとへば佛教は印度に起きたけれども、小乘の徒はその形骸にこだはつて、原始の生命を硬化せしめたが、佛滅五百年後に、大乘の徒があらはれて、こゝにその佛教の根本原理を時代に隨應して開展せしめ、やがて支那を經て日本に傳はり、日本に於ても、鎌倉時代にいたりて、始めて奈良、平安の支那型の殼を破り、日本民族の鎔爐に炒られて、直に佛教の原理は、日本大乘として、それ自身本來の合理的開展を遂げたのである。されば宗教は一面に於て全人類が、その生活の根本、奧底に潛在する生命的欲願の表現であると同時に、時代の全生活、民族の大主觀より生み出したる文化の花でもあるのである。換言すれば その種子は人間普遍の至奧欲求よりして播かれつゝ、しかも民族、國土、時代の土壤、雨露、耕耘を經て生ひ立つたる全的文化の花であるとも言へるのである。

この意味に於て予はカトリツク及び大乘佛教（こゝでは日本大乘）の特質を剖檢するにあたり、少しくその能產の民族性を考察せねばならぬ。

カトリツクの特性

今日のカトリツクはその本山が伊太利にあつて、その信徒は全世界に瀰漫してゐる。基督教はローマカトリツク、ギリシヤ正教、新教の三に大別されるけれども、カトリツクは、信徒の數に於てその第一位に居る。隨つて一民族、一國土の所有に屬して居らぬゆへに、その民族的特性はユニークなものでなく、やゝ茫漠としてはゐる。けれども少しくその原始にさかのぼるときは、そこにきわやかな民族的特質を看取することができる。自分がさゝやかな考察のたどりに依れば、ヘブライの母胎から生れて、ローマに移植せられ、そこなるラテンの土壤を十分に吸ひ込みつゝ、更にゲルマンに接木されて、森然たる今日の大樹となつたかに跡づけらるゝのである。即ちこの三民族の特質が打成凝化せられたものが、このカトリツクであるやうに思はるゝ。然しその原始根柢となるものは、やはりヘブライである

ことはいふまでもない。

今、ローマカトリックの特質を擧げれば切りがないから必要上、二三の特質を大乘佛教のそれと反顯的に指摘し、その淵源を民族的特質に徵證して見たいとおもふ。

ローマカトリック教會の特色として、世人の遍ねく知るところは

一、實體的有神論を固執することである。ヤコブリンデンの「教理詳解」の冒頭に、

人間の此世に生存するは、神を認め、神を愛し、神に事へて、終には天國の幸福を享けんがためなり

と明記せられてある。即ちその生活の全目的、眞意義は、たゞ實體的にして超越的存在なる神（造物主）を認め、神を愛し、これに事へ、やがて地理的に存在する樂土、即ち天國の幸福を享くるにあるとするのであつて、生活を擧げて、この目的のもとに統一されてゐるのである。

二、教會至上主義、世界統一主義　羅馬法王絕對至高主義を奉じ、宣傳し、その成就に努めてゐることである。即ち今日の國家及び君主の最高權を認めず、それらはみな法王の下に統一せらるべきもので、遂には世界を法王の權力下に屈服せしめ宗教的統一のもとに羅馬舊教國家を建設せんとしてゐることである。

三、儀式禮拜が頗る盛大であつて、寧ろそれを生命としてゐるごときである。即ちかの信徒は、その搖籃より墳墓にいたるまで、儀式から儀式への連續を生きるのである。誕生、結婚、葬送等みな教會に於て儀式を行ふのみならず、その禮拜を行ふにあたりては、その殿堂の莊嚴のすさまじきこと、ゴシック式の大會堂の內には、聖壇まばゆく飾られ、十字架像、聖母、十二使徒の木像、聖徒の遺物、鐘、香華、香煙、明燭、金碧燦爛として輝きわたり、こゝに壯重なる音樂が鳴りひゞくときは、一たましひ遠く浮世を離れて、さながら天國に上るが如く、しばし人間界の苦痛を忘れて、言ふべからざる快さに陶醉するのである。

これらの外に猶ほ三位一體の信條、禁欲の勵行等、種々の特色はあるけれども、予が特に大乘佛教のそれと反映的に擧げんとするに當つては、上の三項だけで足りるのである。

個人主義的功利主義

アールマ民族が二派に分れ、一は東に移つてヒンドウクツシユを越え、印度に入つて佛教を生むとともに、他の一派は西のかた地中海を超えて希臘半島に入り、そこに千古たぐひ稀なる

きらびやかのヘラス文明を織り成して、西歐文化の淵源となつたけれども、宗教としては猶ほ彼等は多神教を有するに過ぎなかつた。このときに當つて、すでに唯一神を奉信してゐたヘブライは、まことに宗教的天才のゆたかな民族であつたといふべきである。

しかし彼等の奉信してゐた神は、即ち第一項に擧げたる如く彼等の認め、愛し、事へた神は、造物神であり、超越神であり、又審判賞罰を司どる神であり、更にそれが實體的存在であることを忘れてはならぬ。彼等は何が故にかゝる神を信じたか、否かゝる神を生み出さざるを得なかつたか。

おもふに審判賞罰と、超越的存在とは、造物主に付屬せる性質である。『彼』は自らの創造した物に對して、自己の命令に從ふべきことを要求する。これに從はざるものは罰し、これに隨ふものは祝福する。かゝる審判賞罰の神が、いかにして生れたかと言へば、それは人間の功利心が産んだものである。以下少しくはこれに解明を加ふるであらう。

そもそも災禍の生じ、祝福の來るを以て、自己以外のものが、之れを左右するに依て然かく思ふのは甚だしき迷妄ではあるが、無智なる原始人が、しかく信じてゐたのは無理もない。またかゝる無智の徒を統治するにはかゝる審判賞罰の神の存在を假設し宣傳するのが便利でもあるのである。釋尊在世のときに、第六天の魔王は『世の中はおれが造つたものだ、おれのいふことを聞けば福を與へてやるし、いふことを聞かねば災を下してやる』と言つた。すると釋尊は、さういふ馬鹿なことを言ふものではない、この世は誰の作つたものでもない。禍福は自の業のあらはれであると言はるゝと、第六天の魔王は『私の言ふのは方便です、さう言はねばこの世は治まりません』と言つたといふ事が傳へられて居る。造物主、超越神なるものがあつて、それが造惡のものに災禍を與へ、作善のものに祝福を與へると信ずるのは、無智、無反省のものには止むを得ぬことである。ことに長らく他の强國、民族の壓迫を受けて、國を追はれ、流離困頓を重ねてゐたヘブライ民族が、かゝる神を假想して、これにたより、この神の選民たることを信じて、他日神慮によりて、他の民族國土を征服する日の來ることを念願し期待したのは無理もないことである。しかしながらかゝる造物主、超越神、審判神を假想して、それによりて救はれんとする他律的精神は（その救濟たる、まことに甘い救濟であつて、また部分の救濟であつて、何等全人的、根本的のそれではないこと勿論であるが）これ取りも直さず、無智、無反省の産物である。何が故に然るかと云へば、そもそも災禍・祝福を以て、自己以

外のもの、即ち外他のもの〻なしわざであると思ふのが無智であり、自己批判が不足である。禍福は全體につながれる個體が全體に對する連帶責任である。全體から切り離したる個體のみが受くる禍福といふものは有り得ない。よしや自分一人は神の救ひに依て災禍をまぬがれても、妻や子供はどうするか。自分一家は禍はまぬがれても、それが爲めに受くる社會の災禍はどうするか。これこの禍は、又自らに振りか〻る。

惟ふに自己を眞實に凝視すれば、かならず現前一念の自己の中に、縱に過去遠々劫の、横に十方微塵世界の業緣のつながりを痛感せざるを得ない筈である。ふと物におどろくかすけき心の揺ぎにも、額に皺の苦しく寄るにも、唇の忌はしく結ばる〻にも、長時劫の業のかさなり、十方衆生の緣のつながりを感ぜざるを得ないであらう。さればいかなる禍、いかなる福といへども、みなこれ久遠以來、今日にいたるまでの、自らの業のなしわざであり、吉凶利害、みなこれ自己が全體に對して背負ふべき責任である。悲しくも雄々しく背負ふて立つべく、また自己の分として、智慧あらば、悲喜の涙をたゝへて忍從すべきものである。

全體と自己と、一切と我との關係、因緣をよく識認せるものは、まさに斯の如きの信念に任すべきである。これをこれ覺らずして、唯だ禍を避けむとして、超越的存在の神にすがつて、一時の安きを貪らむとする苟安、僥倖の小功利心が、か〻る審判神を生み出すのである。それは苦しさの餘り、小さき小功利の心からすることではあるが、かくのごとくして自らその業にからまりつ〻、禍をのみ免れんとするは、不可能のことである。たゞ之に依て世間を治むる方便具に使ふ治世家が、外的存在の神を造ることがあるが、それは宗教を第二義に引き下すものであり、神性を墮落せしむる第六天の魔王である。しかし政治家が之れを利用するの可否は別問題として、禍の苦しく、福の欲しさのあまり、か〻る神にすがつて、禍を避け、此を得んとするは、神に向つて無智なる駄々をこねるものである。世間の有識者と稱するものが、往々にして困つたときの神だのみをやるのも、皆このたぐひである。これ即ち祈禱といへる神・人連鎖の形式の捻出された所以である。（小著「親鸞聖人の正しき見方」參照） ともかく斯の如く禍を避けんとし、福を得んとするは、禍・福ともに、全體につながれる個體が、全體に對する責任たることを自覺せざる、無智 無批判の個人主義的功利心に由來するものたるは明かである。予は造物主思想、超越神、審判神を生み出したものは 自己批判の足らざる個人主義的功利心からであると斷言するを憚らざるものである。

この個人主義的功利心の本質をつきつめると、そこにヘブライ民族特有の思想傾向を發見することができる。これは神の實體化を密接の關係のあることである。そも／＼かゝる個人主義的功利心は、何から起るかと言へばこの小自我――全一の大生命より局分せる――の獨立價値を肯定し、而してその自我の實體を固執するところより生ずるのである。この我執が、小功利心の本體である。

全くして一なる、即ち一形を包攝して、無極無窮に開展し流動しゆく大生命から、この小自我を切り離し、この『そらごとたわごと、まことあることなき』小自我を、實體化せんとする我執から、顚倒の禍福に拘泥する功利心を生むのである。かゝる局分的自我を實體化し、肯定するものにかぎり、必ずやその實體的自我の安逸を得んとする。そも／＼全體につながるゆへに、苦痛は一切群生とともに忍受すべきであるにかゝはらず、全一に目ざめざるところから、この功利心を生ずる、即ち、この心は、自我ならぬ、否、自我以外に、外的に救濟神を假想して、これを實體化せずしては止まず、これに頼りておのれ一人のみこの無極の現實界の痛苦をのがれ、偸慢獨善の夢を貪らむとするのである。

要するに超越的唯一神を實體化するといふは、小自我を實體化する執著より生ずることである。この我執がヘブライの一特質であり やがてカトリックの信條の根本となり、今日のカトリツク、並びにカトリツクの歴史を形づくつたものではあるまいか。

大乘佛教の無我の原理

これと反對の傾向に立つものが大乘佛教の無我思想である。往昔釋尊の無我論は、基督教のゴツドに酷似せる婆羅門の大我說を否定した。（たゞ大我說を否定せんが爲めにのみ說かれたのではなく、釋尊は人間の眞實に生くべき最高原理を示さんが爲めに無我の理を敎示せられたのである。）婆羅門は 小我は大我に一致すべしと敎へ、梵（大我）我（小我）は一如なりと說き、この個々の小我のはからひをすてゝ、大我のはからひに一致せよと敎へた。この敎へはいかにも眞宗、若くは一般大乘佛教のそれと似て居り、佛魔一紙とまで言はれるけれども、それが全然佛教と根本的に異なるところは、婆羅門がその大我を實體化せるところにある。大乘佛教は一切の實體化を否定した。この意味に於て佛教は否定の道であり、その敎義は否定の原理である。小我も、大我も、苟くも實體ありと執ぜらるるものは悉く否定した。この否定する端的に、眞實の生命は顯現すると示さ

れたのである。

しかしながら無我とは自我を斷滅することを意味するのではなく、自我の實體化を否定するのである。即ちこの我を否定する當處には、これを否定せしむる力が顯現するに相違ない。この否定の力は眞實の智慧である。無我の原理を體認する智慧である。もしこゝに大乘・小乘の區別を、極めて概括的に云ふならば、否定さるゝ方面の無我を說いたのが小乘佛教であり、その否定する方面の眞實の智慧の開顯されたのが大乘佛教であると言はゞ言はるゝ。

けれどもこの否定もまた否定さるべきである。如何となれば我等が今『我』として執じつゝある人我を否定すれば、いづこに實在するものがあるか。あれば即ちたゞ法　萬物の根源たる然質、若くは勢力）あるのみといふが、所謂我空法有の思想である。しかし此の我空法有の思想も、更に省察を加ふれば、その法體恆有と執ずるのも、またさきの人我の執着の變形に過ぎない。こゝに於て人我も法我も、ともに否定する大否定が起るが、この否定そのものも、否定そのものに執ずれば、やはり一種の我執たるに過ぎなくなる。かくして一切の實體化を否定し去つた端的當處に顯はるゝものこそ、無窮無極無碍に流動し開展する大生命である。

大乘佛教の使命は　すなはちこの一切の實體化、固定化を排し去つて、眞實の大生命を開顯し、躍動せしむるにあつた。大乘佛教の歷史はこの原理の開展の跡に外ならぬ。

造物主と無碍光如來

この大乘佛教が日本民族の綜合的全一主義的精神に觸發して、その本然的開展を遂げたのが、即ち親鸞聖人の淨土眞宗である。大乘佛教の『無我』の精神が、その合理的開展を遂げて、淨土眞宗の『無我爲義』（義なきを以て義とす）の原理となつたのである。

（この間の詳しき說明を小著『愛する同朋へ』に參照せらるれば幸である）

この頃の世間の有識者と稱するもの、または宗教を談ずるもの或はこの度の使節問題に關して、たま〳〵淨土眞宗のことを口にするもの等が、ほとんど此の間の微妙の原理を了解せず、甚しきは、やゝもすると基督教と、淨土眞宗と、（他力と言へる名義にのみ囚はれて）殆どその揆を一にして居る如く言ひ做したりするに到りては無理解もまた甚しいと云はねばならぬ。その第一の誤解は、かのヘブライの造物主、超越神なるゴッドと、淨土眞宗の阿彌陀如來とを同視することである。淨土眞宗の阿

彌陀如來は、彼が如き實體的、外的の存在ではない。

無上佛とまをすは、かたちもなくまします。かたちもましまさぬゆへに自然とはまをすなり。かたちましますとしめすときは、無上涅槃とは申さず。かたちもましまさぬやうを知らんとて、はじめに阿彌陀佛とまをすとぞ聞きならひさうらう。彌陀佛とは自然のやうを知らせん料なり。（親鸞上人『末燈鈔』）

しかしながらこの自然といひ、無上涅槃といふ言葉に囚へられて、即ち自然、無上涅槃等の觀念に執じて、阿彌陀如來とはたゞ理佛に過ぎぬと信ずるものあらば、それば未だ實體的小自我の主觀に凝滯して、盡十方無碍の大如來を拜せさるものである。

さりとてまた壽命無量、光明無量といへる我等とはかけ離れたる外的存在（事佛）を觀念の中に囚へて、これこそ眞實の救濟主なりと執ずるものあらば、これまた對立的の如來、實體的の如來を執ずるものにして、よしこの觀念がいかに强固であつても、我と彼と對立的なるがゆへに、全人的救濟にあづかることはできない。まことに阿彌陀如來たる、超越神的、外的存在でもなく、自己即如來といふごとき內在的汎神論的存在でもなくして、我に即して我とともにこの無邊の現實に手をとりて痛苦に泣きつゝ（爲物身）而かも高く我を超越して理想光明上に我を招きたまふ不可稱不可說不可思議の大實直、大生命（實相身）にてまします。

『盡十方無碍光如來とまをすは、すなはち阿陀彌如來なり。この如來は光明なり。盡十方といふは盡はつくすといふ。ことごとくといふ。十方世界をつくしてことごとくみちたまへるなり。無碍といふはさはることなしとなり。衆生の煩惱惡業にさへられざるなり。光如來とまをすは阿彌陀佛なり。この如來はすなはち不可思議光佛とまをす。この如來は智慧の相なり。十方微塵刹士にみちたまへりとしるべしとなり』（親鸞聖人『尊號眞像銘文』）

阿彌陀如來極樂、淨土等に關して詳細の說明をなす遑なし。大谷光瑞著『極樂莊嚴』『第一義諦』を參照ありたし）

親鸞聖人はその人生宇宙に對する自內證の消息を直白して

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、みな以てそらごと、たわごと、まことあることなきに（概念的固執にすぎざるに）ただ念佛のみぞまことにておはします』

と喝破せられた。即ち我等がこの現象世界——自我も非我も一切くるめて——は、概念、小主觀を以て捉へたるものに過ぎざるゆへに、みな以て虛觀假相であり（概念化を排すれば眞實在

を轉ずれども）そらごと、たわごとであり、たゞ眞實具體の唯一實在は、かの大實在、大生命が自ら名のり出でたる南無阿彌陀佛の名號（たゞ念佛）あるのみである。一切は名號の世界に入りてのみ眞實に轉ずる。故にこの名號は、常に否定の力となりて、あらゆる我執（わがはからひ）と、實體化と、固定化とを破りつゝ、そこに永劫に流るゝ大生命を顯現したまふのである。

たゞしかく云ふも所詮は概念的言詮に陷るの外はない。眞實の理解はない生命道に參入せんとする眞實の第一義的欲求の上にあらはるゝ體驗に俟つより仕方がない。

生活原理としての功利主義全一主義

予の筆は岐路より本線へとかへらねばならぬ。

さてかの超越的、外的存在の神と、局分的（全體より切り離したる）自我とを實體化し固執するカトリツクの信條が、前揭第一項のごとく『神を認め、神を愛し、神に事ふて、遂には天國の幸福を享けんが爲め』となるは、自然の理であり、その究竟の目的は、自己完成、個人主義的享樂主義たるに外ならぬ。（彼等の戒律を忍ぶは、苦痛といへる貨幣を以て天國を買はんとする、即ち天國の快樂を豫想する一種の變體享樂主義に外ならぬ）即ち神と我と唯だ二人の間の消息にのみ唯一の至樂境をもとめて、それを以て最後とする。然るに大乘の菩薩の精神は『衆生無邊誓願度』である。大乘の菩薩の大願は無邊の衆生を濟度しつくさんとするにあるのである。大乘的精神の權化たる親鸞聖人は、比叡山に二十年の修行をしたけれども、聖人はおのれ一人のみ成佛の道を獲得して聖者となり了るに堪えなかつた。聖人は『心月を觀ずといへども、妄雲なほ覆ふ』を痛感したのであるが、心月を觀ずといふは、聖人一人のみ一切有情と離れて佛になりすますことである。聖人は一たび然せんと欲したけれども、一切有情の妄雲は、聖人をして連帶責任を痛感せしめて一切有情のために後もどりせしめられた。即ち叡山を下りて、永劫の塵の巷に沒入したのである。塵の巷に沒入しつゝ、一切有情の苦惱のために泣いて、連續無窮にこれを濟度し盡さんとする法藏菩薩の願心に燃えたのである。聖人の還相回向の教義はこゝに胚胎して居るのである。

願土にいたればすみやかに
無上涅槃を證してぞ
すなはち大悲をおこすなり
これを回向となづけたり（『和讃』）

すなはち全一に目ざめたるものは願土（極樂淨土、理想光明土）

にいたるといへども、おのれひとり光明土にとどまるに堪えずして、その端的刹那に煩惱の林にわけ入り、一切群生の苦惱海に沒入して彼等とともに永へに泣かんとするのである。これ即ち還相回向であつて、世俗時流を超越して、無窮の理想界をめがけて突進しつゝ（聖人として）而かもわれをつながれる此の一切群生海の漂沒者と手をつらね（愚禿として）これらの業苦繋縛をおのが內面に痛感して、これに共鳴悲泣する一の極重惡人（愚禿親鸞の一面）たると同時にこれらの苦惱を一身に背負ふて、かの眞實の生命道に參入せんとする代表者（聖人親鸞の一面）となるのである。

さて斯く敍說し來りて、概括的ではあるが凡そ生活指導原理としてのカトリツクの本質と、大乘佛敎のそれとが對映的に分明になつたやうに思ふ。生活原理としての根本基調は前者が個人主義的功利主義であり、後者が全一的無我主義である。因にこゝに一言誤解をおそれて斷はつて置くが、こゝにいふ無我はトルストイなどのいふ無抵抗主義とは全然同一でないことである。トルストイや、其他クルスチヤニチイにいふ無抵抗主義は其根抵が獨善主義である。たとい全體はどうあらうとも、それに關ぜずして、先づひとり自ら全からむとするのである。惡に抗するなかれといひ、右の頬を打たるれば左の頬を出せといふのは、他の人が『惡』に苦しめられて、即ち『惡』のために追ひ使はれ、おのれを奪はれてゐても、それには關せずして（他人といふのも自らとつながる同朋であるにかゝはらず）先づおのれ一人のみ善からむとし、完からむとするのである。わが無我主義は、全一そのものを統一の中心とするがゆへに、全一のためならば、小自己を忘れて大抵抗を試むることもあるのである。わが無我は決して我の虛無を意味しないのである。

さればカトリツクの個人主義的功利主義はこの全一の大生命より切り離したる小自己を以て生活統一の中心とし、大乘佛敎の全一的無我主義は、小自己を中心としたる統一體系をぶち破りて、全一の大生命の統一體系に織り込まるゝのである。兩者の生活原理は、斯の如く截然として、對映的に明かに區別せらるゝのである。

今、この大乘佛敎の全一主義の原理を以て、かの社會改造に關するもろ〳〵の態度を批判するに、その社會改造は歸するところ個人改造に出發するとのみ云ひ放つものも、局分的自我の獨立價値を肯定するが故に、合理的ではあつても非實際であるまた社會の制度を改造すれば、おのづから全部の改造ができるとするものも、制度そのものより自己を切り離して考へて居るがゆへに、（實は制度もまだ自らの生んだるもので、いかなる制

度があつても、それは自分に連る責任がある）これまた局分的自我の執着の變形たるに過ぎぬ。この兩者が、そのどちらの主張に執着しても、執するところに非實際、不合理が生じて來る。

中世紀の文化内容

再び岐路より（この岐路は、論の當然として一度は行くべきではあつたのだが）歸りて、さて予はかのカトリツクの特色として第二項に擧げたる世界統一、教會至上主義、羅馬法王絶對最高主義を回顧せねばならぬ時が來た。この個人主義的功利主義に立脚せるものが、いかにしてかの世界統一の理想を抱くに到つたかを見るに、これは原始のイエス・クリストの言葉の中には、斯の如き現世的希望は少しも含まれて居らぬやうである。これはセント、パウロが羅馬に傳道して、遂に第四世紀にいたり、基督教が羅馬の國教となつてからのことである。その頃の羅馬は、即ち大羅馬は、當時の唯一の世界であつた大羅馬は、羅馬を中心とせる世界統一を夢みてゐたのである。カトリツクはその理想をいつの間にか取り入れて、遂には彼の如き信條を樹立するにいたつたのであらう。原始基督の言葉の、どこを拾ふてみても羅馬法王なるものゝ存在を容るべきところはない。これは基督教がラテン民族の文化（當時十分にヘレニズムの餘響を受けたる）に衝突して、幾多の辛酸曲折を經、やがて三位一體の教條を捻出せざるを得なくなり、ギリシヤとラテンの風打雨淋を受けて、遂にその原始的生命を固定化し、硬化し、現世的欲望と妥協して、斯のごとき第二義的理想を樹立するにいたつたのである。即ち我等は、彼の第二項には、明瞭に羅馬の影響を看取することができるのである。

しかしながら顧て惟ふに、かの實體的唯一神の信仰そのものゝ中にも、かゝる世界統一、非國家、非君主の理想を豫想し、内含するものが無いではない。

彼等は局分的小自巳を以て生活統一の中心とするがゆへに、その我執から超越神を實體化せんとする。彼等がその實體神と實體我との二者の外に何者をも認めざらんとするのは當然のことである。彼等は神への忠義のために、その信仰を異にするもの、即ち異教徒。異宗派のものに對して、極端の憎惡を抱きこれを絶滅することをもつて神の思召に契ふものとする。これ宗教戰爭の起因である。凡そ世界史上、かの中世暗黒期のごとく暗黒なる時代が又とあらうか。第六七世紀から文藝復興期にいるまでの、この教會中心の世界を見たまへ。何といふ嚴冬の如き蕭條、地獄の如き暗黒、慘憺であらう。たゞにそれは宗教

戰爭（大小さま〴〵あれど）の連續であるのみならず、自由討究は封じられ、藝術の鑑賞は禁ぜられ、希臘の諸天才がものした古典的大製作品はこと〴〵く地下に埋められ、美しきを美しと見る目はみな抉られた。これ皆實體神、唯一神に、ひたらすら忠義を盡さんとして作りなした荒凉たる光景に外ならぬ。

『希臘に於ては斯の如く人體の美を愛し、藝術を尙びし風俗極めて盛なりしが、古文化終に衰頽瓦解して、千年の久しき中世の間は、歐洲の人心夢路をたどりぬ。これは宗敎の夢なり。而も恐ろしき夢なりき。美は誘惑なり、歡は罪惡なり、現世は消えて行く幻の如きもの、罪多き人類の望少き、唯死のみぞ一定なる。審判は免がれ難く、地獄は避くること難しまして天堂に上らむは容易の業ならず。信仰と服從との徵しに何事も辨へずしてあらむこそ神の御心に適はめ。持戒難行の外、處世の道あるべからずと。當代の民衆擧て此の理想を有せり。宜なる哉、思想萎靡して遲鈍となり、才は眠り、智は萎みぬ。聖ベルナルドウスがレマン湖の岸を旅するに當て水の色碧き、葡萄の蔓の豐なる、連峰を照らす日光も皚雪も眼には入らず、帽を被り思に沈みて驢馬の歩みとぼ〴〵と、彼の早行の殘夢ならねど、恍乎として嶺南に下りぬ。憐れなる世かな。』（上田敏氏（藝術の鑑賞））

爭はカトリックによりて創られし文化内容を鬪するごとに、そこに歐洲文明の進展が、いかばかり沮止せられ、發達が害けれたを眺めて暗然とすることである。

即ち彼等は彼等の我執より、人をして我が神に事へしめねば止まず、事ふるにあたりて、その態度が我と同じからねば止まぬ（即ち異宗敎派の存立を承認せぬ）こと、これ取りも直さず人をして我と同じからしめねば止まぬ我執の變形である。大乘佛敎は然らず。大乘佛敎は物をして、その物たらしむる、即ち至一のために彼をして眞實に彼たらしめ、彼をして眞實に彼本質に目ざしめむるにある。かるが故に大乘佛敎の歷史の中には、さま〴〵の民族に傳はり、さま〴〵の國土を經て來たけれども、一回も宗敎戰爭を惹き起さなかつた。支那に於ても宗敎戰爭は一度も起きては居らぬ。日本に於て、殊に近世、法華と念佛とは、仲のわるいものとせられ、落語の種にまでされてゐるけれども、未だ曾て一回も宗敎戰爭を起しては居らぬ。これ即ち南無阿彌陀佛の名號、南無妙法蓮華經の題目そのものに、我執を否定する力があるからである。わが史上、法難の一として傳へらるゝ吉水一門の流罪の際にも、親鸞聖人は、

大師聖人（法然上人）もし流刑に處せられたまはずば我また配所におもむかんや。もしわれ配處におもむかずんば、何に

よつてか邊部の群類を化せむ。これなほ師教の恩致なりとして之れを感受し、そこに全體のために、自らが新生命、新使命の一路を開展せんとして居らるゝ。

變態の享樂主義

翻つてかの個人的主義的功利主義を基調とする生活原理がその當然の開展を遂げて、そこに超越神をのみ認め、超越神の唯一の使者、神意の傳達者たる羅馬法王以外の何物をも尊仰せず、遂にはこの羅馬法王を中心としたる羅馬舊教國家を建設せんとするに到つたのは、自然の徑路と言はねばならぬ。

たゞこゝに常識的に考へて一の疑問の殘るのは、かの個人主義的功利主義の徒が、何ゆへに教會といへる全體のために、個人の利害を犧牲にして、敢て宗教戰爭に殉ずるかといふことである。

なるほど彼等が宗教戰爭の歷史を見るに、彼等のごとく潔く宗教のために自らを犧牲とするを欣ぶものはない。これが即ち彼等の宗教戰爭の殊に殘忍酷烈を極むる原因であり、日本の天草戰爭より引いて、今は物語と俳句の季題とに名殘をとゞむる繪踏のごとき事實に見ても、それは明かなことである。しかしながらこれは自己が全一につながれるを自覺して、部分として全體に殉ずるといふ、『一』に目ざめた自覺よりするのではなくてやはりそれは神への忠義である。神を實體化する以上は、かくの如くならねば止まぬ。即ち彼等の犧牲を拂ふは神の恩寵、賞讚にあづからむとするのである。法皇ウルバン二世が、一〇九五年レルモンに於て宗教會議を開き、その獨特の雄辯を鼓して聖蹟恢復のために東方遠征を說き、この戰に加はるものは、その生涯の罪を免がるべしと絕叫するや、聽衆感激して『これ神の思召なり』と唱和し、いづれも十字架をかざして出征を誓つた。これ十字軍劈頭の事實で史上有名の話題である。この軍に加はることに依て彼等はその罪を免れんとしたのである。この遠征參加が即ち天國に價する、故である。人を屠つて全一殉ずるならば、傷むべしといへども、また止むを得ざるものがある人を屠つて、おのれ一人天國に生るゝに到つては言ふべきところを知らぬ。かくの如きは、その殉死は悲壯に違ひないけれども、また一種の享樂主義の變形であるといつて差支ない。（獨眼なる人に、こゝにかのゲルマンの功利性と殘忍性と一種の自尊性とが、この特性に多分の追加をなしたに相違ないことを看取するであらう）

生命の硬化と流動

予は第三項として殿堂の莊嚴、儀式の嚴格、禮拜場の麗美等を擧げたが、その大本山にいたりては、綺麗絢爛、實に世界にそのたぐひも見ぬ。こゝに入りて卒倒したもののあるといふも恐らく訛傳ではあるまい。

おもふに宗教的感情の高揚は禮拜となつて流露する。禮拜は人間が最高、最敬虔の情操を表現するに最も適當なる、自然なる形式であるからである。禮拜の端的にはその形式には、形式といへども生命が通ふてゐる。しかしそれがカトリツクの如く形式を純形式化して、遂に形式そのものとなり了るに到つてはやはり宗教そのものに、さる傾向を內含してゐるによると見ねばならぬ。

諸君試みにかの殿堂に足を踏み入れて見たまへ。そこには明燭が輝きわたつて居るであらう、りゆうりようたる音樂は響きわたつて居るであらう。金碧の壁畫には使徒の繪像が燦爛として描き出されて居るであらう。そこへ高僧が香爐をもつて現はれ、朗々として讃歎を誦するであらう。その時諸君のたましひは全く現實世界を遊離してしまうであらう。この時の快き陶醉氣分は、長く深く記憶にのこり、一週日にして再びそこに足の爪先は向けらるゝであらう。

おもふに現實は痛苦に充ち滿ちてゐる。痛苦をのぞけば實人生は零であり、苦惱は人生の色彩である。これをしばしでも逃避し、少時でも避難所の中に安逸を貪らんとする陶醉慾は、人間が本來有するところの功利的感情である。ある宗教にして、この陶醉的滿足を人に與ふるに止まるものあるは、止むを得ないことであり、自然に作らるる形式である。わが親鸞聖人は、これを懈慢界なりと敎へ、功利的要求に應じて現はるゝ懈慢邊地なりと示し、これら怯懦の輩は、偶像の三寶を拜することを得れども、眞實の三寶（眞實の生命）を拜することを得ず、生命の進展を沮まれて、金殿に眠ること五百歲なりと訓へて居らるゝ。

轉輪王の皇子の
皇につみを得るゆへに
金鎖をもちてつなぎつゝ
牢獄にいるがごとくなり（『和讃』）

何がゆへに現實の痛苦を遁避して、黃金の牢獄、夢幻の世界に入らうとするのであるかと云へば、それはおのれがつながれる此の全一に目ざめぬからである。全一から小自己を切り離し局分して、小自己中心の統一を作つてをるからである。もし全一に目さむれば、そこにいかばかりの苦痛が來るとも、十分衆生と手を握り、十方衆生を代表して、雄々しくそれに當面すべき

である。それはいたましきことではある。しかしそこには全一に織り込まれ、躍一の生命を體現する悲壯なる踴躍慘憺たる歡喜がある筈である。この眞實の大生命に參入せんとする大勇猛心を缺くところの怯惰の徒、懈慢の人々、それらは、しばし連帶責任の痛苦をのがれて、かの安逸境に陶醉せんとするのである。かくしてその功利的要求に應じて作られたるが、かのカトリツクの世界無比の禮拜場であり、又各所にあるその敎會の儀式である。

しかしながら予はこの會堂、禮拜、儀式を全然否定するものではない。それはこの第一現實――世間人が無反省に漫然と肯定しつゝあるこの俗世――に妄執しつゝあるものをして、その第一現實、即ち俗世が、そらごと、たわごと、まことあることなきを痛感せしめて、眞實の生命道へと漸進せんとするに、最も必要なる門戸である。生命はかならず形式を生むものであるしかしまた生命は必ずその形式を否定し破壞する。人間に普通する至深至奧の生命的欲願は、決して永く人をしてこの要門に停滯することを許さずして、やがてはその型をぶち破つて（否定して）。眞實の生命道へと參入せしむるであらう。即ちこれは大生命への方便道であつて、決してその敵壘ではない。予を以て、無下にこの種の生活樣式、生活原理を貶斥するものと思はるるならば、それは甚だしき誤解である。

以上を以て予は生活指導原理として、兼ねて文化內容としてのカトリツク並に大乘佛敎を十分に剖檢しつくしたとはおもはぬ。殊にラテン精神、ゲルムソ化、日本民族精神等に言及すべき企畫が、早や豫約の紙數つきんとす爲めに、中止せねばならぬこととなつた。たゞたま〱使節問題の興起したのを機緣として、平生懷抱の幾分を舒べ得たことによろこび、更にこの小品を機緣とし、兩者を更に研究せんとする人に、幾分の參考示唆を與へ得れば幸である。

（羅馬使節問題がやかましくなつた、本願寺派が擧つて何故に反對したかその根本理由は我々も知りたいところである。ただし本社の立場については又別にあることを讀者は承知して戴きたい。

――改造記者――

戯曲 愛すればこそ

谷崎潤一郎氏の大名著

本書は明治、大正の藝術壇の代表作として不朽の神品と稱せらる。三角關係の深刻なる戀愛を描いたもので、人間愛慾の惱みがいたくしいまでよく表現されて、讀む人をして一氣に藝術の殿堂へと引ずつて行く、眞に名人の名作で、千古に光輝を放つ快著だ。

大正文壇の藝術的代表作
として國民文藝賞授與

定價壹圓六拾錢
送料拾五錢

第五十版

東京市芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二番

世界三大偉人評傳と學說

山川均著　忽九版

レーニンとトロツキー

定價一圓九十錢　送料十五錢　四六判上製

曠世の大偉人——世界歷史に一大記錄をつくつた彼レーニン、プロレタリアートの爲めに萬丈の氣を吐いた彼レーニンは帳中漸く病の篤きを傳ふ、春は遲々として恨長きとき我々は本書を携へて彼レーニンの偉業を瞑想してゐる。

文學博士鹿子木員信、鐃平名智太郎共著十版發賣

ガンヂと眞理の把持

定價貳圓卅錢　送料十九錢（四六判）

東洋が現代に有する最大の哲人として、又た印度革命の大立物としてレニンと並び稱せらるゝガンヂ氏の哲學の體系たる『眞理の把持』と最近印度に橫流する理想主義的革命の本體を明にす。

鐃平名智太郎編　第五版發賣

ガンヂ審判の日

定價壹圓五十錢　送料十五錢（四六判）

理學博士石原純著　三十六版

增補（アインスタインと）相對性理論

定價貳圓貳拾錢　送料十七錢　四六判上製

ニユートン引力を否定して全科學界を革命せる氏の人となりと、「相對性理論」とを知ることの出來る一番評判のよい評釋は本書です、著者が石原氏であることが何より本書の權威です。

モスコウスキー原著　高橋誠譯

アインスタイン

四版

定價壹圓六十錢　送料拾五錢

東京市芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二

法學博士　福田德

ボルシェヴヰズム研究

◇定價貳圓九十錢◇送料十七錢◇四六判◇

十版

レニンの國家理論、ボルシエヴヰズム、マルキシズムニ關する世界的文獻で、學徒の必讀に値すべき名著、博士の說によればレニンも眞正のマルキストではない、勞農露國を學理的に研究するには本書を措いて他にない。

社會運動と勞銀制度

する老人。女といふ女を一日でたらしてしまう凄い色魔なぞが活躍して、全篇血なまぐさい殺人やねば土のやうな情慾の匂ひで充ちた恐怖すべき大作。しかもそれを裏づけて大ゾラの深甚な人道觀念はまるで潮のやうに凄じく張るのである。この作者の三十に餘る長篇の中で一ばん人間的な魅力を持つたのは何と言つてもこの「獸人」だ。

第二十版發賣

發行所
東京芝區愛宕下町
振替東京八四〇二
改造社

リッケルトを中心として

北昤吉

一

顧みれば、もう既に二年の昔となる。私は一九二一年の三月の末、文部省參事官のK君と共に南獨の旅に出た。有名な溫泉場バーデン・バーデンに二三日滯在して、伯林への歸途ハイデルベルヒの一旅館に投じた。旅館は歐羅巴館（オイロッペーイッシェルホーフ）と稱し、此の地第一の旅館で、北獨逸方面からの新婚の夫婦が新婚旅行の目的地とし、初夜を契るので知れてゐる。氣のせいか二三の新婚らしい二三對が、食堂に我々の注意を惹いた。戰後、珍らしい日本よりの旅客として、我々の異樣な姿が彼等の注意を惹いた如くに。

旭はきらめいて、周圍は既に春らしく、伯林の冷たい鬱陶しいミリウとは著しく異なつてゐた。牛乳もバタもパンも伯林と異つて、農業地のバーデン州丈けあつて、何れも眞正眞銘のものであつた。農業國は、窮乏の際には、流石に底力があると思つた。聯想は露國恢復の意外に早からんことに走り、又全國民の五割餘が農業に從事しつゝ而も食料の不足に苦しむ我國の前途を如何と、浪人の癖に、國士らしい憂を抱いた。

K君と二人で、ネーカーの河岸を沿つて、足を大學に運んだ。國運の變轉と沒交涉なるが如く、ネッカーの河水は、麗しい兩側の山の間を縫うて、遠くライン河に落ち合ふべく、徐かに流れてゐた。河岸から、家屋越しに見えるものは、赤い砂岩（サンドシュタイン）で作られた歷史的なハイデルベルヒ城である。アルト・ハイデルベルヒで獨逸のみならず、全世界に名が轟いてゐる如く、市街も古く、大學も獨逸最古のものであり、山上の古城も十三世紀以來獨逸の隆替興亡を語つてゐる。

學校の事務室に總長秘書を訪ふて、轉學の希望を陳べた。私は當時伯林大學に籍があつたので、伯林より轉學の手續をしてゐたが、當時は講和後未だ間もないことであり、伯林大學以外殊にバイエルン、バーデン諸州の大學は、快く日本人に門戶を開かなかつた。併し私は戰前より機會あらば、獨逸へ來て哲學

リッケルトを中心として

北昤吉

一

顧みれば、もう既に二年の昔となる。私は一九二一年の三月の末、文部省參事官のK君と共に南獨の旅に出た。有名な溫泉場バーデン・バーデンに二三日滯在して、伯林への歸途ハイデルベルヒの一旅館に投じた。旅館は歐羅巴館(オイロツペーイツシエルホーフ)と稱し、此の地第一の旅館で、北獨逸方面からの新婚の夫婦が新婚旅行の目的地とし、初夜を契るので知れてゐる。氣のせいか二三の新婚らしい二三對が、食堂に我々の注意を惹いた。戰後、珍らしい日本よりの旅客として、我々の異樣な姿が彼等の注意を惹いた如くに。

旭はきらめいて、周圍は既に春らしく、伯林の冷たい鬱陶しいミリウとは著しく異なつてゐた。牛乳もバタもパンも伯林と異つて、農業地のバーデン州丈けあつて、何れも眞正眞銘のものであつた。農業國は、窮乏の際には、流石に底力があると思つた。聯想は獨國恢復の意外に早からんことに走り、又全國民の五割餘が農業に從事しつゝ而も食料の不足に苦しむ我國の前途を如何と、浪人の癖に、國士らしい憂を抱いた。

K君と二人で、ネーカーの河岸を沿つて、足を大學に運んだ。國運の變轉と沒交渉なるが如く、ネツカーの河水は、麗しい兩側の山の間を縫うて、遠くライン河に落ち合ふべく、徐かに流れてゐた。河岸から、家屋越しに見えるものは、赤い砂岩(サンドシユタイン)で作られた歷史的なハイデルベルヒ城である。アルト・ハイデルベルヒで獨逸のみならず、全世界に名が響いてゐる如く、市街も古く、大學も獨逸最古のものであり、山上の古城も十三世紀以來獨逸の隆替興亡を語つてゐる。

學校の事務室に總長秘書を訪ふて、轉學の希望を陳べた。私は當時伯林大學に籍があつたので、伯林より轉學の手續をしてゐたが、當時は講和後未だ間もないことであり、伯林大學以外殊にバイエルン、バーデン諸州の大學は、快く日本人に門戶を開かなかつた。併し私は戰前より機會あらば、獨逸へ來て哲學

を研究し度い希望を持つてゐたのだと、事情を話したところが、學校の當局者も其意を諒として、何分便宜を計らうとのことであつた。私は第一の印象で、大學の校舍の如何にも古いのと、其小さいので驚かされたが、こゝで、ヘーゲルも講義した、クーノ・フイツシヤーも、ギンデルバンドも講義した、現に私の師事しやうとしてゐるリツケルト教授もゐると考へては、伽藍許り立派でも、內容の貧弱な米國の大學や、日本の大學よりは一層の懷しみを感ぜざるを得なかつた。

二

大學を辭して後、K君は山上の城に向ひ、私はリツケルト教授の宅に向つた。教授の宅はゲーテが獨逸で一番美術的であると稱讚した古橋（アルテブルユツケ）を越へた、ネツカー河の對岸である。古き特色ある市の城門を通つて、古橋にたゝずんでネツカーの流の來る方に眼を放てば、繪の如き景色である。トライチユケが其の名著「政治學」に大學町としてのハイデルベルヒとボンの山紫水明を稱へて、此の地に生れて詩人たることが出來ないものは、他の何れの地に於ても詩人たることが出來ぬと云つてゐたのは、決して我を欺かなかつた。彼とても必ずしも軍國主義の太鼓を叩くのみが能ではなかつたのだ。此の山水の美である。獨逸浪慢主義の勝地にハイデルベルガーの一團があるのは極めて自然であつた。橋を渡つて、五六分時も歩けば、バーデンの詩人として有名なシエフレルの住宅がある。此の家は樂聖ワグネルが一時住まつてゐたことのあるので、今は大學生の集會所になつてゐる。家の一室には各種のワグネルの寫眞が懸つてゐる。リツケルトの住居は、此の詩人の名にちなんだ、シエフレル街である。シエフレルの住宅の角から廻れば直ぐである。教授の宅に近づく頃、好意心に滿ちた遠來の一旅客は「哲學者道に通せず」（"Kein Eingang zum Philosophenweg"）なる掲示に驚かされた。彼は、ケーニスベルヒにはカントの散歩しなれてゐた道が「哲學者道」と呼ばれてゐたことを知つてゐた。併しハイデルベルヒの「哲學者道」の因緣は何であるか。或はヘーゲルに因んでか。或はクーノ・フイシヤーに由來するか。彼は斯樣な不審を懷きつゝ、ドクトル・リツケルトと標札のかゝつてゐる家の戶口に立つた。黃檀に似た黃い花が咲きかゝつてゐた。獨逸には珍しい小さい篠竹が茂つてゐた。畠地には數羽の鷄が平和な姿を見せてゐた。遠くは河を挾んで、ハイデルベルヒ城が、其の雄大な姿を、城園（ユロスガルテン）の內に現はしてゐる。ゲーテは此の城園に生へてゐる銀杏の葉に因んで歌つてゐる。

“Ist es Ein lebendig Wesen,
das sich in sich selbst getrennt?

Sind es zwei, die sich erlesen,
das man sie als Eines kennt?"

私はリツケルトが此の詩を彼の主著「哲學體系」第一卷の序言に引用して、彼の多元論的立場を辯護してゐるのを思ひ出した。

三

暫時にして、私は教授の應接間に通されて教授を待つてゐた。待つこと數分にして、教授は其の偉大なる體軀を運んで來た。教授の額は理想的の思索家（デンカースチルン）の額であつた。眼は鋭く輝いてゐた。體格は幕の内の力士にも珍らしい程に雄大である。三十貫は優にあらう、好奇心から人相の書物をあさつてゐた筆者は肖像畫で見たカントやダーウインの額にも劣らない大きな額に接しては、一見驚嘆の念が起らざるを得なかつた。ベルグソンに詩人的哲學者の典型を見、クローチエに哲學者王の俤を見た後に、私はリツケルトに於て典型的の學者哲學者を見た。だが、凡ての印象の鋭さに對比して、握つた手は綿の如く柔いものであつた。

私は先づ何等の紹介狀もなく突然に訪ねた失禮を謝し、且つ自分の過去の學歴と現在の希望とを述べて、入學に就いての先生の御盡力を乞ふた。先生は「哲學は藝術以上に國際的のものだから」と云つて、及ぶ限り入學の爲め盡力しやうと誓はれた。そうして對話は無雜作にかはされた。

先生「君は伯林にゐたそうだが、主として誰の講義を聽きました」

客「伯林では政治哲學を主科目とし、哲學を副科目としてゐたので、主としてシユタムラーとクーノーに就き、哲學の方はリールとデソアルを聽きました。」

先生「リールも年取つたから、活氣もなからうと思ふ。個人的にも深く接しましたか」

客「いゝへ、何分伯林大學では學生數が多いので、個人的に接する機會はありませんでした。それに近く、先生も定年制で退さるゝとのことです。」

先生「日本の哲學はどんな有樣ですか。日本特有の哲學がありますか。」

客「日本には一種の人生觀と社會觀はありますが、科學的の意味での日本的哲學はありません。現在の日本哲學は歐米の影響の下に立つてゐます。」

先生「どんな哲學者が日本に有勢ですか」

客「倫理學の方では、英國のグリーンが全盛でしたが、此の頃はリツプスの勢力が擴大しつゝあります。私の先生の藤井教授かシユンヘンでリツプスに就いたのが、一原因となつてゐます。認論識の方では、貴下の「認識の對象」などがかなりに讀まれて

其の傾向は大きい影響を與へてゐます。外にマールブルヒ派の影響も少ではありません。又最近はフッサールの現象論派が注目されてゐます。オイケンは基督教界に甚大な勢力を及ぼし、ベルグソンは、學界にも、一般の思想界にも影響を與へました。ベルグソン學徒なるものはありませんが、全然影響を受けない思想家もありません。プラグマチスムスは、米亞利加に於ても獨逸人の考へてゐる程、有勢ではなく、日本に於ては、ジヤーナリストの群に有勢なるのみです」

先生「夫れは實に面白い。米國では如何なる傾向が主流をなしてゐますか。」

客「學界では、新實在論です。ゼームスの高弟のペリーを始め六人の實在論者か、共同のプログラムを以て一つの書物を書いてゐます。」

先生「實在論には私は反對だが、それは、プラグマテイスムスよりは一歩優つてゐる。」

客「英國でもプラグマテイスムスは餘り有勢でなく、ラッセルアレキサンダー一流の新實在論がヘーゲル派と相並んで、學界に勢力を得てゐます。特にラッセルは其の社會問題に對する見解の爲めに、日本の青年に大持てです」

先生「佛國でベルグソンに會つた相だが、ベルグソンの近況はどうですか。」

客「目下ベルグソンは實踐哲學の方面に關する著作に專念してゐます」

先生「夫れは面白い。ベルグソンは、ヴント等が剽竊者と罵るが、それは間違つてゐる。勿論世人の想像する樣に、彼には獨創力はありませんが。オイケンは同じく通俗的なるにしても、ベルグソンよりは深いと思ふ。」

客「併しオイケンには認識論がなく、ドクマチイシュであると考へますが。

先生「認識論を重視する私としては、勿論君の意見には賛成です」

客「貴下の「生の哲學」にはベルグソンの第一の著作「意識に於ける直接與件について」を、ベルグソン其物の如く獨創的であると稱讚してあるではありませんか。」

先生「實際あの書物はえらい書物です、彼の著作中の壓卷です。創造的進化などの比ではない。」

客「私は其點は同感です。墺のエルザレムに遇つた時、教授もそう云はれました。ベルグソン自身もその點には反對してゐません。」

先生「ベルグソン自身も同樣か。エルザレムの哲學は私は餘り

價値がないと思ふから、あの人の意見などはどうでもいゝとして。君は私の弟子のクローナーのロゴス第一卷のベルグソン論を見たか。あれはベルグソン自身手紙をよこして讃めたものだ」

客「まだ其の論文は讀みません。何れ讀みませう。御序でゞすが、西南學派の代表的學者に就いて御尋ねし度いと思ひます」。

先生「創唱者は勿論私の先生のヰンデルバンドです。併し先生は思想家と云ふよりは寧ろ歴史家ですから、私が西南學派を體系化するに力めました。私の下でドクトル論文を書いたものにはフライブルヒのクローナーとイエナのブルノ・バウフがあるが、クローナーは益々ヘーゲルに走つてゐる。併しヰンデルバンドが近世哲學史に於てカントとフイヒテよりヘーゲルに至る理想主義の發展とを反對性のものと見ないで、其處に共通の精神共通の理想を認めたのが、彼の大なる貢獻であつたのだが、クローナーも矢張り此の見地に立つてゐるのが、他のヘーゲル學徒と異なる所である。バウフはカント學徒ではあるが、私とは餘程異なつてゐる。私から出發して後に一派をなしたものにラスクがあつたが、彼は一九一五年四十歳にして對露戰線で戰沒した。彼の死は啻に西南學派のみならず、獨逸のイデアリスムス共物に取つて大損失である」と暫らく喟然として嘆いてゐたが、更に語を續いて、同じくヰンデルバンドの弟子で、私と同窓とも云ふべき哲學者にエルランゲンのヘンゼルがある。此の人の「倫理學の主要問題」と云ふ書物は小冊ではあるが立派な書物である。此の方面では一番いゝ書物かも知れぬ。其外露西亞で一人立派な學者があつたが、戰爭後消息が解らぬ。日本ではドクトル・ソーダ(左右田喜郎一氏のこと)がフライブルヒで二年間、私の講義を聽いてゐたものだ。親しく私を訪ねたことはないが、其後著作を贈つて呉れた。手紙も呉れたが立派な獨逸語だ」。と云はれて先生は座をはずし、二階の書齋から、左右田氏の書翰と「認識の對象」の日本譯とを持ち來つて私に示された。

四

客「左右田博士とは一面識もないが、西南學派の代表者として日本の學界に重きをなしてゐます。私は同博士が價値を餘りに形式的にのみ説明するには反對ですが、倘ほ將來ある學者たることは疑がありません。此の「認識の對象」の譯は六版を重ねてます。そうして日本で第一の哲學者と云はれてゐる西田博士の序文が附いてゐます」。

先生「六版を重ねましたか。それでは獨逸よりも餘計賣れますね。日本にはそんなに哲學的興味がありますか、君は西田博士の序文を譯して呉れませんか」。

客「承知しました。一度伯林へ歸つて四月には引き越して參りますから、其の際まで右の飜譯を了へて置きます。次に、哲學の飜譯書が六版を重ねることは日本でも勿論珍らしいことです。併し日本の六版は版毎の部數が獨逸に比して遙かに少ないと存じます」。

先生「日本にはどんな哲學者がゐますか」。

客「西田博士以外に、リールに就いたと云はるゝ、目下西南學派系の桑木博士はカンテイアナーとして有名であり、哲學史家にはキンデルバンドに就いた、朝永波多野の二博士があります。此等が代表的です。併し、眞の獨創的の哲學者はまだ一人もありません。何しろ日本も文化的には新しい國ですから。殊に西洋の哲學を研究の對象としてゐる以上、到底、未だ世界的とは稱せらるべき哲學者の出やう筈はありません」。

先生「君は米國のハーバート大學にゐたと云ふが、サンタヤナはどうですか。ゼームス死し、ロイス逝つた後はあの人が唯一の人でせうに」。

客「私が參りました時はサンタヤナは去つてゐませんでした。」

先生「ミュンスターベルヒの亡くなつたことは知つてゐるが、其の後の樣子はどうなつてゐる。」

客「夫れに就いては不思議なことがあります。私が一九一八年の九月始めて英國のケンブリヂに着いて、探し當てた宿が、故のミュンスターベルヒの住宅でした。教授の後任と云ふべき者は弟子のラングフエルド教授です。ゼームスは心理學の名著はありますが、實驗室は持つてゐませんでした。ミュンスターベルヒの最後の著作"Psychology, General and Applied"は御存じでありますか。」

先生「いや知らない。其は何時出版されましたか。此頃は英米の學界のことは一向解りません。思想的封鎖と云ふ有樣だから。」

客「實際さうです。墺太利にエルサレム教授に會つた時、教授はロイスの亡くなつたことを知らずにゐました。私が其の話をしたら初耳だと云つて驚いてゐました。又ベングソンの新著「精神的精力」の出版のことも知りませんでしたから、私は後で一部送つて置きました。」

先生「ミュンスターベルヒは私がフライブルヒで私講師であつた時一緒にゐました。そうして親交を續けてゐました。私との思想的交渉に就いては、デソアル教授がミュンスターベルヒを紀念する小冊子に記述してゐます。」

と云つて、先生は再び立つて書齋に赴かれて、件の小冊子を執つて私に示し、其の一節を朗讀された。ミュンスターベルヒはフライベルヒへ赴いた時はリッケルトが其處にゐた。そうし

て二人は直ちに親交を交び思想的交換が行はれた。ミュンスターベルヒは實驗心理學者ではあつたが、自然科學的方法の限界を知り、斯かる方法では到底解決されない價値の問題があることを確認するに至つた。之はリツケルトの影響に負ふ所が多いと云ふ内容であつた。

客「之は實に意外な記述であります。私はミュンスターベルが形而上學的傾向の價値哲學者たること、殊に此點に於てフイヒテの影響を受けてゐたことは知つてゐます。併しデソアール教授の記してゐる通り、貴下の影響を受けてゐたことは存じませんでした。」

主人「君の御話のミュンスターベルヒの最後の著作はどんな點に特色がありますか」

客「彼はデルタイやヤスパー教授の如く、心理學に二種を分つてゐるが、其の分類は實に詳細であり、徹底的でもあります。私も此の點に興味を持ち、其の書が出版さるゝと同時に、私の奉職してゐた學校に教科用書として採用してゐました。

先生『其の二種の心理學にどんな名稱を與へてゐるか。其の書物は一度見度いものである。』

客「種々の名稱を附してゐるが、Causal Psychology 對 Intentional psych logy の分類です。内容から云へば、die erklärende Psychologie 對 die verstehende Psychologie の對立であります。」

先生「其の區別は故教授の Psychotechnik に立てられたものであるが、新著に於ては更に之を詳細に述べたものらしい。同僚のヤスパー教授は其の著「世界觀の心理」("Psychologie der Weltanschauung") に於て、二種の心理學を區別したとて、自家の獨創を誇つてゐるが、私はミュンスターベルヒが既に先鞭をつけ、且つ一層詳細に説いてゐると主張した。」

客「私はヤスパー教授の著作は見ませんが、貴下の「ロゴス」誌上の御批評と、コーン教授の「カント研究」誌上の批評で内容を知つてゐます。批評に依つて著者を想像しますれば、geistreichとは云へませうが別に獨創的(オリヂナール)とは云へますまい。」

先生「君はベルグソンの哲學に興味を懐いてゐるとのことですが、どの點に就いてゞすか。今でも彼の哲學に近いのでありますか」

客「必ずしもそうではありません。併しベルグソンからは私に取つては殆んど永久的な影響を受けました。彼は私を自然科學的ドクメンから解放しました。人間の生活には、自然科學的概念や方法では取り扱へない或物があることを、彼は私に教へました。併し自然科學的概念で取り扱へない問題があると云ふこ

とは、其が凡ての概念的取扱を許さないと云ふことを意味しませぬ。自然科學的に取扱へない問題の内にも、何等か概念的の取扱の出來るものがあると云ふことを教るものとして、貴下の哲學は有意義の様に思はれます。或物からの解放と云ふ丈けでは積極的の意味はありませんから」

先生「此のことは私の「自然科學的概念構成の限界」なる著作の序文に明かにしてある。ベルグソンと同道し得べき點、並びに彼と袖を分たなければならぬ點共に」

もう時計を出して見ると、可成り時間が經過してゐたので、私は暇を取らなければならぬと感じた。併し私は、もう一つ用件があつた。それはハイデルベルヒ法學部の教授ラートブルヒを訪問することであつた。教授はリッケルト及びラスクの影響を受けた西洋學派系の唯一の法律學者である。マールブルヒ派の法理學者シュタムラー及びケルゼン（維納大學教授）と優に對立し得べき法理學上の名著がある。專門は刑法であるが、西南學派から出發した唯一の法理學的著作の爲めに、法理學者としても注目すべきである。

客「私は元來が政治哲學を專門にしてゐるのであるから、私の專門に關係ある學者としてラートブルヒ教授に注目してゐる。教授はどこに住つてゐますか。」

先生「教授はもとこゝにゐたが、今はキール大學に轉じてゐる。我々に近い學者であるが、而も理想主義から出發して社會主義に歩り、黨籍も社會民主黨に在る筈である。」

客「私は教授の「法律哲學の基礎」（Grundzüge der Rechtsphilosophie）を必ずしも大著だとは思はぬが、佛蘭西のボルドー大學のデュグュイがソリダリテ・ソシアルの思想から、イエリングやイエリネックの國家目的神聖論を攻撃したのよりも一歩を進めて、西南學派の立脚地から、國家が現實に持つてゐる目的と、須らく持たなければならない目的との對立から、國家が現に持つてゐる目的を神聖視する舊式の目的論に反對してゐるのが、彼の學說の强味と信じてゐます、シュタムラーにも斯かる對立はあるが、ラートブルヒの所說が、少くとも此の點では、簡潔で明瞭だと思つてゐます」

先生『ラートブルヒはラスクがクーノフライツシャーの祝賀論文集に寄せた法律哲學の論文に大に影響されたものです。外にカウフマン教授もラスクに影響されたが、此頃は我々より離れつゝある様です。』

客「西南學派は單に歷史哲學に於てのみならず、法理學、政治哲學等に影響すべき運命を持つてゐる様に思はれます。日本の左右田博士の如きは、此の派の立場から經濟哲學の樹立に努力

してゐます。」

先生「夫れも全く可能でしやう。我々の立場はギンデルバンドに依つて暗示されたが、まだ〳〵發展の餘地があります。」

私は先生を此の上煩はすのも氣の毒と思つて暇を取らうとした。先生は先に述べたことを繰り返して更に附け加へた。

『藝術には其の國民でなければどうしても理解されない一面があるが……先生の意味する所は殊にゲーテのファウストであつたことが後に知れた…哲學は一層國際的で或民族の所産であつても他の民族に依つて理解される分量が比較的大きい。我々も世界的の了解を求める。唯獨逸の現在の國情として、我々が進んで握手を求めるのは國民的自負心の問題に觸れるから、今は遠慮勝ちにしてゐるが、他の國民から進んで思想的の提携を求むれば、我々は常に之に應ずる用意をしてゐる。だが、君は御宿が定まりましたか。」

客「まだ見當が附きません」

先生「今妻がゐないから確なことは云へないが、私の所で一室都合出來るかも知れぬ。人數に比して間數の多い私の家は法律上他人に二三の室を提供しなければならぬのです」

私は先生の案内さるゝ儘に私の借り得る見込の室を見、先に差し上げた名刺に伯林の住所を記して、「四月に伯林から引越して來た後また御目にかゝりませう」と述べて、一先づ先生の宅を辭した。先生は懇ろに玄關まで送られて固い握手を與へた。

五

私は四月の末伯林を引き上げてリッケルト教授の指導を受けるが爲めにハイデルベルヒに移つた。日本人としては一人もゐない。周圍は凡て見ず知らずの他人許りであつた。こんな孤獨を感ずる處こそ、哲學の研究にはあつらへ向きだと、朝夕を計らぬ、轉變する時事問題の研究に多忙であつた伯林生活と打つて變つた閑靜な生活を樂しむだ。學校よりの轉學の許可も來た。住所も定めず、氣早の私は再びリッケルトの門を叩いた。先生は相變らず厚意を以て迎へて呉れた。私は先づ「認識の對象」の日本譯の西田博士の序文を手渡した。西田博士の著書も左様であるが、論述の體裁が實になつてゐない。思索の深みは何人も承認しなければないが、博士の哲學的著作の叙述は、飛躍と繰り返しが餘りに甚だしい。ラッセルの如きは、哲學上の中心問題を捕へ之が解決に努力した人では斷じてないが、而も彼が捉へた限りの問題の解決は極めて論理的である。然るに西田博士の著作は哲學的論證の形式を有せず、單に工夫の迹を平板に叙述した丈けである。從つて、右リッケルトの日本譯書の序文の獨譯を手渡するに當つても、短文ながら繰り返しの多いの

が、遺憾に思つた。日本の代表的哲學者も、こんな者かと、先生に蔑まれはすまいかと心配した。所が先生は讀み了つて欣然として言つた。

「之はヰンデルバンドと私との關係を能く見てゐる。併し私の著者の第二版と第三版との差を先驗的心理學より先驗的論理學への立場の變化であると見るのは誤りである。私には此の意味の立場の變化はない。西田博士は私の第三版を見ないから、斯かる誤まつた斷定に陷つたのであらう」と、

客「私は此の學期は貴下の哲學概論の講義と「哲學の論理」の演習に列席したいと考へますが、どんな準備をしたらいゝでせうか。」

先生「哲學概論は主として希臘に於ける哲學を中心として、哲學上の問題と其の解決を取り扱ひ度いと思ふ。哲學上の問題は希臘に於て多く純粹の形ちで現はれてゐる。哲學概論の參考書は色々あるが、キュルペ、パウルゼン及びヰンデルバンドのものが中ではいゝと思ふ。唯ヰンデルバンドの概論は彼の著作中最惡の書であることを忘れてはならぬ。私は曾てフランクフルターフアイツングに掲載した論文に述べた通り、種々缺點がある。ヰンデルバンドを知るには是非プレルーディエンに寄らなければならぬ。殊にあの内のインマヌエル・カントに關する論文は劃紀元的のもので、西南學派の立場があの論文に依つて定まつたといつていゝ位である。なぜ「哲學概論」が悪いかと云ふと、元來はヰンデルバンドは哲學史家で、組織家としては必ずしも偉大でなかつたのが一つの理由であり、第二の理由としては、ヰンデルバンドがあの書を書いてゐた當時は可なりの病人であつたからである。それで内容的に云ふと、あの書物はプレルーディエンの立場と矛盾し、更に西南學派の立場に裏切つたものである。即ち「概論」では Axiologische Probleme を價値問題と同一視してゐるが、斯くては實踐哲學と理論哲學とを對立させるアリストテレスの立場に立つものであつて、實踐哲學の問題即ち價値問題となり、認識論の問題は價値問題以外に置かれることゝなる。併し西南學派の特色は眞と善と美と聖とを凡て價値と見做す點にある。價値には學的のものと非學的のものとあつて、學的のものたる限り價値は理論的に取り扱はれなければならぬ。價値即ち實踐的と見做すのは俗見である。ヰンデルバンドの晩年の作は此の俗見に墮してゐる。又彼は事實判斷と價値判斷との區別が、科學と哲學との區別を可能ならしめると見做してゐたのに、後には以上の區別は、理論問題と實踐問題との區別を根據とされてゐる。之れ彼の立場の混亂である」。此等の理由が重となつて、彼の「概論」が採るべからざ

るものとなるのである。』

此のリツケルトのキンデルバンド「概論」に關する批判は、西南學派系の少壯學者の共通の意見であるのみならず、實はリツケルトの氣付かざる前に、ラスクの高弟ヘリゲル博士が、「概論」の出版と同時に、其の立場の動搖に驚いて、キンデルバンドを訪問し、頗る手嚴しい批評を加へた所が、彼は「之は教育的の目的の爲めである」と不徹底の辯明をしたのみであるとは、筆者が直接、ヘリゲル君に聽いて知つたのである。因に同君は故ラスク遺愛の高弟で、目下ラスクの遺稿を編纂し、近く全集を出さんとしてゐる。リツケルトに云はすると、彼は西南學派に最も精通したもので、今はハイデルベルヒに教鞭を執つてゐるが、近く出版さるべき同君の著作、"Urstoff und Urform"はリツケルトに云はせれば、「神秘主義の批判的論證」であるとのことである。筆者はリツケルトの紹介に依つて、聘して家庭教師とし、西南學派の諸思想家、並びにゲーテ、ニイチエ、エツクハルト、フイヒテ等を協同に研究すること一年有半に及んだが、後には石原博士、大峽教授等が加はつて來た。同君は今日本留學生七八名を集めて、特別にカントとゲーテを講義してゐる。筆者は此の同君との研究時代が、一生涯に於ける、思想上最も實り多く、且つ愉快なる時期であつたことを感謝してゐる。

客「實に"Logik der Philosophie"の演習に就いての御注意を承り度う御座います、」

先生「この語は伊太利のクローチエが先に用ひた語であるが、直接には故ラスクの著書から採つたものである。併し講本としてはラクスの同名の著と、私の「哲學體系」とを用ゐる。從つて此の二冊の書物を讀めば、他に用意はいらぬ。」

客「私は「哲學體系」は一讀しましたが、ラスクの右の著作はまだ讀みません、早速讀みませう。」

先生「ラスクには右の書物以外ドクトル論文の「フイヒテ及びイデアリスム」と「判斷論」があつて、共に立派なものである。彼のドクトル論文の如きは當代稀である。惜いかな彼は戰死したが、此度のゼミナールは彼を弔う意味になる」と語られた。自分もリツケルトには宗匠氣質があると思つたが、一面、獨逸大學の學校と學生との團體的關係よりも或る優秀な一教授と一定の弟子との私塾的關係のあるのをゆかしく思つた。獨逸大學では何學校出何門出などが何等の問題とならず、某々の教授の下で、しかく〜の仕事をしたと云ふ個人的關係のみが意義あるのである。

私は此の時マールブルヒ學派に對する先生の見解を知りたい好奇心で一つの質問を發した。

「貴下の「體系」の序文の中に、貴下の影響を受けた諸學者を列擧してゐるが、其の内にナートルプの名がある。然るにコーエンに就いては、一部分しか理解せぬとのみ短評せぬを加へて、其の名を指示してゐないのはどういふ理由からですか。多少皮肉な意味がありますか。先生は莞爾として笑つて「私はコーエンの様な學者には皮肉は云はぬ。眞面目で云つたのだ」と答へたが、私は依然として一種の皮肉ではないかと考へた。先生に許さすれば、ナートルプやカシラーの云ふところは能く解るがコーエンには何だか解らぬ所があり、それは先生のみでないとのことである。因に、先生は次の冬の學期に「ヘーゲルの論理」について演習をやつたが、私も先生に勸められて、獨逸で第一回目の講演をやつた。題は「ヘーゲルの概念論」に就いてと云ふものであつたが、其の際、マールブルヒ派の形式對內容の論はヘーゲルの所說に似てゐる。殊に形式を創造的の力と見る點に於て似てゐる、コーエンは「覆面せるヘーゲリアナー」であると斷定した。先生は之に附け加へた。

『實際コーエンはヘーゲルに反對するに拘らず二者に類似がある。唯ヘーゲルが眞に十九世紀的であるに反してコーエンは却つて、十八世紀的である。コーエンの最大缺點は等質的連續を說くのみで、異質的連續を說くことの出來ぬことである」と。

西南學派系の若い學者はナートルプは其の「社會的理想主義」と共に、ニコライ・ハルトマンは其「認識の形而上學」と共に、コーエンを離れたものと見做してゐる。

六

私は先生に就くこと一年半即ち三學期に及んだが、私は先生の講義よりも寧ろ先生の演習に加はることを好んだ。日本では學生時代缺席の常習犯であつたが、リツケルト教授の演習には第三學期に二回の缺席をしたのみで常に非常な愉快を以て進んで列席したものだ。先生は私の就いてゐた期間に於て、演習では、「哲學の理論」と「ヘーゲルの論理」と「神秘宗教主としてエツクハルトに就いてを取り扱ひ、講義では「哲學概論」と「ゲーテのファウスト」と「科學と藝術と神秘宗教に於ける觀照生活」（之は先生の「哲學體系」の第二卷の內容をなすものである）を材料とした。以下少しく、講義と演習とを通じて先生の風貌を語つて見やう。

先生は今は西南獨逸理想主義の重鎭であるが、一八三六年に北獨逸、今は自由港となつてゐるダンチツヒの自由黨所屬の名ある一國會議員の息子として生れた。從つて南獨逸人の gemütlich な所はない。先生は寧ろ峻嚴な四角四面な律義な普魯西人の好典型である。詩的な所はあつても、ファウスト劇中の der D

ordsche Dichter"の抽象的、概念的な傾向であつて、決して感覺型ではない。トレルチュ教授もリツケルトの歴史哲學は乳房のないヴエーヌス（"Venus"）の様だと云つたのは、正にリツケルトの一面を道破してゐる。先生の學歴は極めて簡單である、主としてフライブルヒに學び二十七歳同大學で私講師となり、三年にして助教授となり、更に二年にして正教授に任ぜられた。斯く順境に進んだのは、先生がマックス・ウエーバーの推挽に依ること大なりと云はれてゐる。一九一七年ハイデルベルヒに轉ずるまでは、常にフライブルヒにゐたのであるが、先生自身の語る所では、先生の哲學が解剖的批評的なる爲め、カトリク教のみの神學科から成立してゐるフライブルヒの神學部は、同部所屬の學生に先生の講義を聽くことを禁じたとのことである。日本ではリツケルト哲學は反動的でありブルジュワ擁護に利用されてゐるが、フライブルヒでは正に正反對であつたのだ。今では歴史的の著作たる「認識の對象」は先生の就職論文である。以て先生の早熟なることが知れる。

先生の奧樣はソフイーと稱する藝術家肌と世話女房式とを兼ねた賢夫人である。先生の學生時代の青年の戀（ユーゲンドリーベ）からの結婚だとは、私の列席してゐた御茶の席での、先生の同僚のホフマン教授のスパ抜きで知つた。何でも先生は廿三才の時に婚約したらしく、結婚も獨逸人としては極めて早かつたから、相當に世間的の苦勞も早くから嘗めたらしく想像される。先生には三子あつたが、一子は戰役して、他の二子はミユンヘンとフライブルヒに研究してゐる。先生は極度に腦を使つた爲めに、Platzangst と稱する一種の神經性の病氣に罹られてゐる。自宅では何等不便は感じないが、見ず知らずの所へは決して出歩けない。教授會へは極めて稀に其他の社交界へは全然出ず、有名なハイデルベルヒ城まで見たことがないそうである。唯孫弟子のヘリゲル博士をカントが、僕のランペを從へた如く、伴にして「哲學者道」を散歩する位が關の山である。講義にも、奧樣が馬車又は自働車に同乘して學校へ送り迎へをする。教室へ入るには學生のフアウスト君が横綱の土表入に於ける露拂ひの如く先導する。――

哲學概論の講義は、あの樣な思想家の常として極めて主觀的なものである。自分の立場から、種々の學說に對して痛烈に論評する。そうして希臘思想に對しては熱情を以て對する。若きニイチエの希臘研究をも共鳴を以て紹介した。今日の學校教育には基督のみならず希臘思想をもつと注ぎ込まねばならぬと主張する。メーレンドルフの名著「プラトーン論」に對して、學ぶ所多しと一應は謙遜はするものゝナートルプの「フランクフルターツアイツング」上のメーレンドルフに對する批評に同情し

て、件の書が哲學的に大した意義がないと針をさす。同僚のマイヤー教授の「ソクラテス論」に對しても、主要な所を逸して枝葉の點をくだくだしく敍説すると批評した。又プラグマチスムスに對しては、最も無遠慮な攻撃を加へる。相對説は眞理を相對的なりと云ふが、相對説の眞理其物が相對的ならば、相對説は成立しないと云ふ。ベルグソンやニイチエや、近來の大學生にて一讀しないもの丶ないと云はれるスペングラーの「西歐の沒落」に代表せられた「生の哲學」に對しても、生活は哲學でない、生活に對する有意的批判が哲學であると主張して、動もすれば、生の哲學に雷同する學生に警告する。リッケルトは哲學の對象、理想として單なる實用、單なる生活以上のものを認めてゐる。知識の爲めに知識を愛せずしては哲學は消滅すると激語する。ソフイア(知)なき哲學は哲學でないと主張する。學生は授業後に私語し微笑する、先生こそ實際ソフイアを持つてゐると。蓋し先生の奥様はSophieと稱するからである。先生の講義は實に鋭いヰイツトに富んでゐる。併し講義の内容は比較的高級であるから、新參の學生や、殊に女學生には解らぬ。數の上からはヤスパー教授程多くを呼ばない。先生の口辯の如く連發する言葉は"von vornherein"に"So weit ist es klar"であつて、此等の言葉が先生の口から吐かれると、學生は思ひ合ひした樣に微笑する。

ファウストの講義は、講師が講師であり題目が題目であるから、流石に人氣を引いた。若い女生も澤山に集まれば、教授連の奥樣も集まつた。先生は自分に對して此の講義は通俗的だから大したことはあるまいと申されたが、それでも私は都合出來る限り講義に列した。先生は神を善の原理とし、メフイストフエレスを惡の原理とし、そうして人間を中間帝國の原理として觀察し全體の劇の意義を神と惡魔との賭け事、又惡魔と人間との賭け事として解釋することに力めた。そうして惡魔は人間との賭け事に於て勝利を占むことに於て、却て神に負けると解釋しやうとしてゐる。又先生はファウスト劇の第二篇を觀照の生活を經て、活動の生活に移り行くことに要點があると見做してゐる。先生は基督教の歸趣も結局は行であり、獨逸理想主義の目的地も行であると見做し、二者の一致點を高調するが、併し希臘人の觀照の生活を無視した行の生活は餘りに散文的のものと考へ觀照と活動とが、背馳せずして、渾然たる一體をなす所に、ゲーテの人生觀の特色を認めてゐる。第一篇の感能的生活と第二篇の觀照的生活及び活動的生活が全體として先生の完極の哲學の精髓たる"die vollendliche Totalität"を現じてゐるものと解釋してゐる。ナートルプはタコールの獨逸來遊の際の講演

に於てゲーテはTotalitätを代表しタゴールはEinheitを代表すると二者を對照せしめたが、リッケルトもゲーテを以て獨逸精部の精髓たるTotalität, Voll-Endingを藝術的に顯現してゐるものと認めてゐる。從つてゲーテとカントを調和せんとするリッケルトは、其の「哲學體系」の第一卷に於て、哲學の對象と方法と分類の原理とを說いたが第二卷に於ては、科學と藝術と神秘宗教に於ける觀照的生活を、第三卷に於ては、倫理と戀愛と一神的宗教に於ける活動生活を說き、最後に第四卷に於て、此の對立的生活を綜合して渾然融和せしめんと考へてゐる。私一個のみならず、リッケルトの周圍の若き哲學者が、リッケルトの哲學はヘーゲル哲學の音樂的なるに反し、餘りに彫刻的ではないかと疑念を密かに懷いてゐたが、リッケルトは第四卷に於て、觀照の生活も行に終り、行も亦觀照の生活に終る、何れの一端より出發しても循環して他の一端に至る樣、即ち"vollendliche Totalität"を一のKreislauf(環)として說かう、斯くすればAusgangspunkt(出發點)もEndpunkt(到着點)もない眞の完極的總體の眞面目を發揮することが出來ると說明して、我々一同を驚かしたことがある。從來宇宙の全體の秩序を彫刻に於けるシンメトリイの如く表現し來つた哲學者が、如何にして各部分が融通して流るゝ一の音樂的全體を與へることが出來るか、之は將來のリッケルトの努力に待たなければならぬ。併し私は先生の此の企圖の成功に對しては寧ろ懷疑的ならざるを得ない。

既に述べた如く、先生は講義の際は、夫人に伴はれて、馬車で登校する。ハイデルベルヒは山水の美の爲めに旅客の多い所であるが、殊に此頃は丁抹、瑞典、瑞西、和蘭からの所謂「爲替旅行者」が多い。夫れで馬車拂底で雇入れの出來ないことがある。其の時は、馬車がないのでリッケルト教授の休講する旨が掲示される。講義に參集する學生等は、嘗てヘーゲルも講義し、フイッシャーもギンデルバンドも講義したあの歷史的の舊校舍十二番の教室の前の掲示を見て微笑を帶んで引き取る。蓋し"Der mann mit der Droschke"(「馬車の人」)が通り言葉になつてゐるからである。是れには因緣がある。ギンデルバンドの弟子で、「現代の哲學」の著者であり、師の「論理學」の出版者である前の私講師ルーゲ君は、其の極端な右黨的政見と排猶太人的偏見の爲めに、ハイデルベルヒ大學より放逐せられた。其の放逐運動の中樞人物にはギンデルバントの息たる歷史科の教授たるギンデルバンドもゐる。以てルーゲ君が如何に不人望であつたかゞ知れる。彼は一時は國粹黨のハイデルベルヒ支部長まで勤めてゐたが、今は暗殺團の幹部の一人として、其筋の注意人物として、匿名で天下身の措き處なき狀態である。所が

彼が大學より放逐された當時市會堂に於て猶太人の攻撃演説をやり、又大學の幹部が猶太人の勢力に動かされてゐると云ふ理由で幹部の全體と有力の大學教授全體を攻撃して學生の排猶太人的鬪爭までも激成した。其の演説の際彼は云つた、「昔は大哲學者ヰンデルバンドがあつた。今は如何。何れも小人物のみで der Mann mit der Droschke も其の内の一人であるとリッケルトルに八つ當りした。之は今は學生間の話題になつてゐる」併しリッケルトは典型的學者として、フイッシャーよりも更にヰンデルバンドよりも世間人たる要素が毫もなく、超然として「先驗的理想主義」の開展にのみ唯一の興味を注いでゐる。レントゲン光線の研究者としてノーベル賞金を得てゐるレナルド教授が極端右黨的政見の爲めに、暗殺されたラウテノーの死を弔ふ勞働者の示威運動に挑戰的態度を取つて、一夜勞働者集會處（其處にはハイデルベルヒ出身の前の鞍工、今のエーベルト大統領の大きな肖像が掲げられてゐる）に捕虜となつたことがある程の政治的不寛容の雰圍氣の中に、獨りリッケルト教授のみは、政治に超越して、其の價値哲學の體系化にのみ專念してゐる。

七

次に先生の演習に於ける風貌を畫きたい。筆者は英米獨の三大學をのぞいたか、未だハイデルベルヒのリッケルト教授の演習程眞面目な峻嚴なものは經驗しない。混沌たる時局にも拘はらず、先生は一言も學問上のこと以外に口を走らせない。先生の演習は自宅の應接間と食堂とを二間通して行はれる。多い時は六十名を收容するが之れ以上は拒絶する。其の演習には新參の學生のみならず、既に大學を了へた古參のドクトル連も十名位はゐる。牧師あり、中學教師あり、大學の私講師もゐる。こうして演習は題目に應じて古參の一ドクトルが助手を勤める。筆者の列しない時の學期はラスクの遺愛の弟子ヘリゲル博士が助手となつてゐた。筆者の參列した第一學期の演習は「哲學の論理」に關するものであつたが今私講師となつてゐるウインクラー博士助手となり、次の學期は「ヘーゲルの論理」に關する演習であつたが、西南學派の一重鎭ヘンゼル教授の弟子グロックナー博士（同君は「ロゴス」誌へ數回寄稿し又近くは書肆ジーベックよりヘーゲルに關する特色ある一小著を公にした）助手たり、其の次の學期はリッケルトの弟子のクライス博士（同君も「ロゴス」誌に寄稿し、ラスクの審義的價値に關する小著あり）「神秘宗教」に關する演習に助手たり、此の冬の學期は方法論に關する演習であるが（講本は先生の「自然科學的概念構成の限界」とマックスウエーバーの方法論に關する論文集とスペングラーの「西歐の沒落」である）フッサールの弟子た

るマンハイム博士（同君は先達て「カント研究」の特別號に認識論の研究を發表してゐる）助手となつてゐる。其の他特色ある參列者には「價値の超對比性」なる好著の著者ピック博士もあつた。第一學期は日本人としては筆者一人、第二學期目には二人となり、今は八九名の日本學生がゐる。因に記するが、此の內には筆者が日本第一の人格者として畏敬措く能はざる大峽教授があつて、不言の間に不世出の禪的人格を以て列座の人を畏敬せしめたし、又西田博士の秘藏弟子の快男子三木清君來り參じて此の一月末に講演に氣焔を揚げる筈になつてゐる。先生の演習には斯くの如く有望の獨逸哲學者多く集まるのみならず露人あり、瑞西人あり、日本人あり、マイヤー教授やヤスパー教授の演習に氣を吐く若年の學生の如きは閉息せる有樣である。東洋的趣味濃厚で西洋臭ひことの嫌いな、大峽教授すら、先生の指導風りの峻嚴なるには感心して臨濟將軍の概があると歎美してゐた。筆者も有望の少壯學者の群り集まるを見て、當年の常陸山房室の如く感じ、此の國歩艱難なるにも拘はらず、研究の意氣斯くの如く旺盛なるには、顧みて自からに耻ぢ、又日本の學界の現狀をも痛嘆した。實にリッケルト教授の演習に臨める態度は威風堂々として、虎の將に嵎を負へる感があつた。

先生の「哲學の論理」に關する演習に於ては、西南學派の正系を繼げる弟子を慕ふの情痛切なるものがあつた。先生に取つて百人の平凡なる弟子を持つよりは、此のラスク一人を失つたのが、遺憾らしかつた。思想的傳承のなき思想家の寂寥は轉た同情に堪へなかつた。先生が孫弟子のヘリゲル君を熱愛するのも、蓋し故がある。人は先生の思想的不寛容をかこつ、マールブルヒ學派とヘーゲル學派と殊に心理學派に對して、先生の態度は實に不寛容であつた。併し之れ自家に定見あり、一家をなせる哲學者としては免れ難い缺點であらう。思想的寛容が思想的雜食を意味する場合、其は正に無節操を意味する。先生の右の演習に於ては、先生自身とラスクとの共通點を高調すると共に「形式の形式」(die Erom der Form)「ソルレンの優先」(die Priori ät des Sollens) 及び「價値の超對比性」(die Uebergegensätzlich-Keit der Werte)に關する先生と弟子との思想の相違について詳細に語つた。併し其の內容は學問上に興味はあるが、此處は詳論の場所柄ではない。

次に「ヘーゲルの論理」の演習に於ては、リッケルトは自己の立場を最も露骨に現はした。ヘーゲルは先生に取つては寧ろ反駁の機會を與へたものであつた。先生は演習の當初に於て宣言した。ヘーゲル如き徹底的思想家に對して內在的批評は不可能である。何となれば、ヘーゲルの如きは內在的矛盾と不徹底

とがないからである。ヘーゲルの論理のアルフアを承認する者はフメーガをも承認しなければならぬと。それで先生は、ヘーゲルのデイアレクテイクを始めから否認してかゝる。先生は自分とヘーゲルとの差を「否定」の概念に置く。ヘーゲルに依れば或物の否定は當然に積極的の或物を生ずるが、リッケルトに於ては必ずしも左樣ではない。ヘーゲルのデイアレクテイクに對立する先生の das heterologische Prinzip は、ヘーゲルの如く Sein から出發して Nichtsein に行かず、始めから das Eine と das Andere とから二元的に出發する、從つてヘーゲルの如く Thesis, Antithesis, Synthesis と進まずして Thesis, Heterothesis Synthesis に進む。蓋しリッケルトに依れば、否定は現實の場合と價値の場合とに依つて異なる。現實の場合には、或物の否定は必ず單なる無を生ずる。反對のものを在するには、別に積極的の肯定を要する。然るに價値の場合は、之を否定すれば、單なる無を生ずることが出來ると共に、反價値を生ずる。即ち善の否定は無に至ると共に惡を立することも出來る。ヘーゲルの否定概念には、現實に對する否定と價値に對する否定との區別がない。之がヘーゲルの論理の大缺點であるとは、先生の批評である。此の批評は思索には少くとも二つの要素が入るとのリッケルトの主張から來てゐる。有の如き一つの要素からは斷じて出發出來ないとは先生の論理の中心である。從つて先生はヘーゲルに於ても元來は「成」が直觀的の事實であつて、之を說明せんが爲めに Sein と Nichtsein との二種の要素を考へたものだと解してゐる。先生に依ればヘーゲルの Sein と Nichtsein とは Vorgegenstand 又は對象要素に過ぎない、否 das Eine と das andere との二要素に對する不完全なる理解に基づくものである。リッケルトはヘーゲルを成(ウェルデン)を重視するヘラクライトス流の思想家と認めてゐる。

先生はまた、ヘーゲルがゾルレンの哲學者でないことは承認してゐるが、彼を以て價値哲學者の一人だと考へてゐる。先生はヘーゲルを自分の學徒らしく取扱ふ論法は頗る好妙で參列の少壯學者をして點頭微笑せしむるに足るものがある。先生の現實の概念はヘーゲルの夫れと大に異なる。從つて現實をヘーゲルの意味に解するならば、之が價値を離れたものでないことは當然である。多くの場合では合理的なものだとも云へると考へてゐる。先生はヘーゲルの「凡て合理的なものは現實なり、凡て現實なるものは合理的なり」との主張をもぢつて「凡て合理的なるものは單に現實的に非ず、單に現實的なものは合理的に非ず」と云つてゐたが、此言葉は新版の「自然科學的概念構成の限界」の序言に載つてゐる。

私は昨年一月先生に勸められてヘーゲルの「槪念論」に就いて講演を試みた。先生に取つても日本人の講演は始めてであるし、自分に取つても獨逸での講演は始めてである。實に三ケ月間生涯にない努力をして見た。講演の形式に就いては、先生に發音は依然として母國語の影響が甚だしいと評されたが、內容に就いてはヘーゲル論理中最も困難な個所であつたから、自分の努力、殊に多くの參考書を漁つた勞を多し、參列者に向つて更に此の意味を傳へられた。私は此の講演に於て、ヘーゲルとコーエンとの意外に一致點があることゝ、ヰンデルバンドの事實判斷と價値判斷の區別は、實は、ヘーゲルの das Urteil der Notwendigkeit と das Urteil des Begriffs とに基づいてゐることゝ、クーノー・フィッシャーがヘーゲルの判斷論の四分法を攻擊し das Urteil der Notwendigkeit と das Urteil des Begriffs との區別を無用の二重化であると攻擊してゐるのは、ヘーゲルの事實判斷と價値判斷の區別に盲目なるものであることゝを主張した。私のこの主張はカシラーの著書「認識問題」の或る一節にヒントを得たものであるが、自分の主張が餘りに大膽でありはしないかと內心多少不安を感じてゐたが、リツケルトのみならず、二三の少壯學者が私の主張を承認して吳れたのは、顧みて名譽と感じた所であつた。因にヘーゲルは其論理學に於て明かに Urteil と Beurteilung との用法上の區別までもなしてゐる。

八

次に「神秘宗教、主としてエツクハルトに就て」の演習に於ては、講演者中に題目を原始佛教に取るものあり、プラトーンに、プロティヌスに、クザヌスに、スコラ哲學に、ゲーテとタゴールに、現代の大神秘的詩人マリアノ・リルケに エツクハルトに取るものがあつた。私は先生に勸められて臨濟禪に就いて講演を試みた。先生は現代の詩人中リルケを非常に重視してゐる。大學生中にも彼の詩集を耽讀するものが多い。日本の故の岡田氏に似た樣なシュタイナー氏がストツトガルトで神秘的宗教家として大勢力を持つてゐて―獨逸に戰敗の結果としての道德的廢頹と共に、他面、深く靈的生活に沈潜せんとする神秘的傾向があることを忘れてはならぬ―神學家のヴオバミン教授の如きは、シュタイナー氏に就いて演習をやつた程だが、リツケルトは彼を無視してゐた。エツクハルトに就いては先生は意外な理解と同情とを表してゐた。特に彼の「神の國」(Gottesreich)の一文を代表的のものと稱揚してゐた。勿論 Algesiedenheit と題する說教を重視することは忘れなんだが。

リツケルトのタゴール觀は實に要を得たものであつた。タゴ

ールは一昨年瑞西に至つたが獨逸の思想家は反英的の政治的關係もあつたか、彼の誕生日に際して祝賀表を献した。署名者の内にはハルナルクの名もあつた。同じ年に、スペングラーと共に青年に多くの讀者を有する「哲學者の旅行日記」の著者、カントが大學を出て家庭教師となつてゐた貴族の後カイゼルリンク伯—「心情の哲學」（„die Philosonhirdes Herzens"）の友として、智慧の學校（„Weishe tschule"）の經營者として單なる理智の教育に反抗の聲を揚げてゐる生の哲學者カイゼルリンク伯（伯は日本にも來たことがあるが、其の旅行記内の日本觀は彼が如何に優秀な觀察眼の持主なるかを示してゐる、彼は日本の學者が譯もなくカントやフイヒテを讃美するのを皮肉つてゐる）はタゴールをダルムシュタツトに聘した。ナートルプすら我々の複雜なる性格は印度人を理解させないか、印度人の子供の如き單純性は却つて我々を理解し得るとまで稱揚したものである。併しリツケルトはタゴールに就いて、彼は單なる汎神論者である。汎神論は決して神秘宗教ではない。汎神論と萬有在神論とは異なる。ゲーテにも神秘的の要素はあるが、彼は決して眞の神秘論者ではない。況んやタゴールの哲學と詩—我々が獨逸譯に依つて知る限りし—は、ゲーテの如く天才的でなく、又眞の印度的の所もない。ナートルプの如きが彼を稱揚するのが知れない。カイゼルリング伯が、生涯接した内でタゴールとマックス・ウエーバーとが偉大なる人格者であると云つたが、タゴールの思想は人格の大に依つて誇張されてゐるのだらうと批評した。そうしてゲーテとタゴールとの比較を試みた學生に向つて、どこにタゴールに偉大なる所があると追及してゐた。或る日私が先生に御茶に呼ばれてゐた時、先生のタゴール觀は日本の識者の意見と同樣である。私もタゴールは純粹に印度的でなく、歐米思想との妥協の跡多く、ユニテリアン的であると述べた所が、先生も全く同感だと云はれ、且つ君の講演した禪宗などは如何にも神秘的であり、外的特色としても、非概念的、象徴的で殊にアフオリスムスとパラドクソンを喜び、反對の歸一、無知の教義を鼓吹し、靜座に依る直觀を重視する所は神秘論としてはタゴールの比ではないと附け加へられた。

私が先生の依賴を受けて「禪」に就いて第二の講演を試みたのは昨年の六月であつた。演題は「日本の神秘主義」に就いてと揚げて置いた。獨逸人の頭では日本人は政治が巧みで、戰爭が好きで、徹頭徹尾實際的な民族で、神秘主義の如きは薬にしたくもあるまいとの先入見を持つてゐたので、演題其物が興味を惹き附けた。列席すべき資格のないゼミナールの人員外の女學生連も特別の聽講をリツケルトまで願ひ出ると云ふ有様であ

つた。私は此度こそは獨逸人の度膽を拔いてやれ、とても頭ではかなわぬから、此の際は、リッケルトまで烟にまいてやれとの意氣込みで準備に取りかゝつた。文章も一應、ヘリゲル博士に訂正してもらつて完全を期した。所が文章の訂正に取りかゝつたヘリゲル君自身も、本來の神秘的傾向から、感激を以て共鳴して來た。もう勇氣は百倍した。講演の前夜はキンクラー博士に來てもらつて發音の訂正までやつてもらつた。ヘーゲル論理であれ丈け苦心したに拘はらず、先生に未だ母語の發音が强く影響してゐると評されたのが耳に殘つてゐた。それで益々努力した。

講演の内容は、序說と歷史的概說と見性の方法と眞理の本質とに分つたが、重心は觀照的な宗教が如何にして實際的生活に意義を發揮し得るのかの問題の解決に置いた。禪から云へば、悟と行との關係、更に云へば上求菩提と下化衆生の關係、畢竟動中の工夫に過ぎないが、リッケルトから云へば觀照と活動との、先生自身、未だ解決の付いてゐない問題である。自分は先づ日本の神秘宗教に眞言宗があるか、門外漢であるから之れには觸れず、殊に臨濟禪に就いて述べると前置きし、臨濟禪も神秘宗教であつて、自性の徹見を以て目的とするが、此の觀照の宗教から、詩人、畫家、國民的英雄が輩出して日本をして今日あらしめた點に其の特色があり、印度の寂靜主義に墮する神秘教と其の選を異にすることを說き、禪の特長は觀照と實行とを特殊の方法にて一致せしめるにあると說いた。但し禪の本質を明かにするには、歷史的傳統を說く必要があるので、達磨の支那到來、臨濟禪の日本傳來を說いた。達磨の支那渡來の後の梁の武帝との問答に就いてはリッケルトも禪の超功利主義な所にいたく感動した樣であつた。私は禪が支那に於て老莊哲學の外衣を着し、其の表現がアフオリスティッシュになり、パラドックスとなつたことを說き、文字を第二義としながら、文學史に非常な意義を有することゝなつたのは、眞に老子の「無爲の爲」であると說いた。第三方法論に於ては、靜座の形式は瑜珈に似てゐるか、單なる觀照、單なる止水明鏡が極地でなく、悟即ち積極的な宗教的經驗が目的地であり、禪那は單なる道程で重要なるは宗教的經驗である。此は西歐の神秘主義と同樣であるが、西歐に於ては宗教的經驗は少數天才者の僥倖とする所に過ぎないが、禪に於ては、方法論的に宗教經驗に至る途が明かにされ、何人も一定の方法に依つて之に達せられることを說いた。之が爲めに重要な役目を演ずるものは、古人の宗教的經驗と佛教の經典を基礎とする公案である。公案の一事が師家の宗教經驗と相待つて禪宗をして歷史的、客觀的基礎を得さするも

ので、之が西歐の神秘主義の全然主觀的なると異なる點であると述べ、更に臨濟の古則公案と曹洞の現成公案の別を理性的啓示と自然的啓示に比して說明し、古則公案の內容を自利、利他、絕對自由の三境涯に關係させて說明した。最も滑稽であつたのは百丈と馬祖との則に、百丈が馬祖の鼻をねぢる所があるがリツケルト先生は之を以て師匠が弟子を罰したのだと解し、列席のマンハイム博士は師の弟子に對する警告であると解して、其の意見の相異は滿場の笑を買つたが、共に師の弟子に對する無限の慈悲であることを悟り得なかつた。第四に私は禪の眞理內容に就いて下の如く說いた。禪は自性從つて世界の本質の徹見にあるが、之は積極的には規定は出來ぬ。蓋し凡て積極的のものは全體の或る部分を否定したもので、從つて世界の本質を積極的に說明することは、之を限定することである。禪の說明が消極神學の形式を取るのは之が爲めである。禪が積極的に說明せんとすれば、必ず、反對性の二つの定義を利用する。從つて禪には矛盾律は適用せぬ。否進んで大にパラドクソンを利用し、クザヌスの如く反對の歸一を說かなければならぬ。臨濟の四了見の如きは、一切の概念的規定の無効なることを示す一例である。人格的神の如きも、既に概念的規定を受けたもの、神を信ずることに非ず、神と化すること、否神を忌避することが第一義

である。エックハルトが信愛望よりも Abgeschiedenheit が最高道德なりと云つた如く、善惡の彼岸に在つて、價値の超對比性に逍遙することが修養の極地である。印度人の如く隱逃せずカントの如く道德律の爲め對感性的戰鬪を事とせず、現世にあつて、鳥の空中を飛揚するが如く、自由なることが禪の理想の生活である。然らば、如何にして悟りの境地から、活動の境地に至り得るか。此の疑問は既に佛陀に解決されてゐる。佛陀が一度大悟するや、山川草木悉皆成佛すと感じ救濟の必要なければ、直ちに涅槃に入らんと考へたが、自分の大悟せざる當時の不安の心理に對する記憶を緣として、周圍の衆生の苦惱に同感し得て、之を救濟せんが爲め世間的活動に出でた。即ち觀照と活動とをつなぐものは、世間の苦惱に對する同情である。禪は慈悲以上の境地を有するが、此の慈悲が世間的活動の機緣となる。これが禪が神秘的敎にして寂靜主義に墮せざる以所である。「無爲の爲」とは即ち之れであると。

此の以上の講演は幸ひ聽講の學生に非常の感動を與へ、一は外國人なりしが爲めか、滿堂足ずりして祝意を表した。演習としてはかゝる例は絕無であるとは到席せるヘリゲル博士の言であつた。先生も、日本の神秘宗教が西歐の夫れとも、印度の瑜珈派とも異なることが明かになれたのみならず、神秘宗教の本

質が一切の概念的規定を忌み、パラドリソンを好み、アフォリスムスを愛し、非學的直觀的に本質的價値を捉えんとするにあり、此は、歷史と傳統とを異にする東西の神秘宗教に共通するは、自分の神秘主義の本質に關する理解を徹底せしめたといた感謝の意を表しわざ〳〵握手して吳れた程であつた。唯先生は、もう少し、自分の問題としてゐる觀照と活動との關係を明かにしてもらひたかつたと述べ、且つ我々は觀照と活動とを一體ならしめる所に日本精神の特色がある以上、單に東洋的と云ふことを以て印度的寂靜主義の意味に取つてはならぬ、東洋的と云ふ意義には、我々の考ふより更に複雜なる內容があると列座の人々に警告されたには、私も先生の理解の鋭いのに敬服せざるを得なかつた。

　私の講演が了へると一人のコーエン學派の猶太人が、神秘主義は寂靜主義に陷ざるを得ぬではないかと質問をやつたから、自分は神秘的經驗を有する者こそ、之を有せざる者に同情がなければならぬ、而して同情といふ情的要素は吾人を行爲に促すではないかと自分は答へてやつた。此の際數人の女學生も加つてゐて、わざ〳〵私の講演の成功を祝福して吳れたが、其の內の一人は三學期間自分の座席の隣りに席を占めてゐたが、此の熱心なる女哲學者は私の講演の翌週クザーヌスの哲學に就いて講演すべき筈であつたのを突然ピストル自殺を遂げて死んで了つた恐。くは、講演の準備に餘りに頭腦を使ひ過ぎたではないかとの噂があつた。此の國步艱難なる秋に哲學の思索に耽る獨逸人は愚かはた狂か！。

八

　最後に私は此の機會に、先生が御茶飲み話しに述べたこと日本の讀者の爲めに傳へなければならぬ、或る日倫學者としてのリップスに關する評論が出て、私は彼が日本に倫理學者として重要なることを述べた。其の際先生は云はれた。「リップスは實在論者であるから私のカント學徒といふ意味とは違ふ意味でのカント學徒である。併し兎も角も彼はカントに動かされてゐたのであるから、彼の倫理學は正しい方向を示してゐる。彼は獨逸に於て倫理學者として認められてゐないが、此は不當である。日本での評價が寧ろ正しい。唯リップスが Sittlichkeit を現實と見るのは誤まりである。レアールのものは人倫でも、人格でも其儘價値でない、レアールな生活其物が價値でない如くに。」と。即ち先生は所謂生の哲學に反對する如く、有るが儘の人格を直ちに根本的價値と見做す所謂人格主義にも反對であることである。若し有るが儘の人格が即ち價値であるならば、人格の善惡、高下は何を標準として決定することが出來

る。勿論人格を標準として決定することが出來ぬ。人格を批判するには人格以外に立つ標準が、必要となる。

また、或る日所謂文化主義に關する話を私が持ち出した。獨逸には用法はないが日本には「文化主義」なる用法がある。獨逸語で Kulturismus と譯すべきですかと聞いた。先生は、無理に譯せばそうなるが、併し無意味な語だ。自分の哲學は Kulturphilosophie ではあるが、Kulturismus ではない。蓋し、クルトウ、アを實現された Kulturprodukt の意味に取れば、實現されたものは別に努力の對象にならぬ。然らば未だ實現されない價値の實現に努力することを Kulturismus の意味に取るなら之は Prophetentum となる。學としての文化哲學の任務以外である。私の哲學では自然は說明し、價値は了解し、內在的意味は指示するだけのものであると答へられた。此の答は簡單ではあるが、文化主義をリッケルトの名に結び付ける日本の思想は、家此のリッケルトの意味を玩味する必要が、大いにあると思ふ。繰り返して曰ふ、リッケルトの哲學は文化哲學であるが、文化主義ではない。私は此の點に就いて、日本の文化主義者に向つて近く一文を以て教を乞はなければなるまいと思ふ。

九

先生の交遊の範圍は弟子を中心としたもので極めて狹いが、頗る交情密なるものがある。故のジンメルとは極めて親善であつたそうで、彼は猶太人であつたが、未亡人は金髮の純獨逸人で、リッケルトは之を獨逸第一の美人だと稱してゐた。今尙ほ、先生一家とは親しい。又故マックス・ウェーバーの未亡人、有名なるマリアノ・ウェーバーも目下ハイデルベルヒに住まつてゐて、先生に親しんでゐる、弟子のラスクもクローナーも共に猶太人である。從つて狹いながら先生の交遊は國際的であると云へる。自分も每學期少くも一度は御茶に呼ばれたが、其の待遇は質素ではあつたが、好意に滿ちたもので、近くまで敵國であつた獨逸へ來て、こんな厚意を受けてはと、勿體ない氣もした。私は「改造社」の依賴を受けて先生の原稿を日本の讀者の爲めに頂戴し、又先生の著作を日本語に譯述するにも交渉の任に當つたが、先生は戰前に於て、西南學派の哲學が露西亞に盛んに紹介された如く、戰後東洋に傳はる勢を見て常に喜ばれてゐた。左右田博士が共著書を先生に献じたことや、佐竹氏が其の譯書を贈られたことや、「改造」が屢々先生の哲學を紹介したことは、愛兒を戰場に喪ひ、最愛の弟子ラスクを失ひ、獨逸の國運の非を憂ひつゝある先生に取つては意外の慰めであるらしい。弟子に對して極めて峻嚴であつて、一九一七年以來僅かに六人しかドクトル論文を通過させず、女學生の提出する論文の如きは一顧もしない程の先生も、家庭の人としては極めて溫情に富んでゐる。私は先生に私淑した一年有半を、未だに、恐らくは永久に、愉快と感謝とを以て想起するであらう。



曠野の歌

富田砕花

雪原の正午

時刻は正午、
盛れ上り、
さらにみづから盛れ上つて、地平に一線を描きながら
雪原は、
いま、瞳がうつしあます邊際まで
擴がり、擴がり
はてしない夢と幻とを匂はせて
寂然と靜まりかへつてゐる。

この、一切の物の音と響を絶した大自然の懐にあつて、
人は、何で小さい敵意を露にする勇氣が振へやう？
曾ての日に持つた驚きと、畏れを、
少年のごとく匿くすことなく
無邪氣に開いて見せるのであつた。
ともすれば人生の扮飾は
厚く、粗朴な心を掩ひかくしてしまはうとする、
然し、自然はいつも人をそれらの靈魂を蝕む誘ひから守つて
徒な装ひを輕んじ、蔑ませる。

雪のなかの樹

これは念禱の姿である。

全く葉の落ちつくした樹は
無數の枝頭を
夕空へと
一齊に擧げて
無言の祈禱(いのり)を描く。

そして、世界は、いま、
空(むな)しい白さに冴えかへつて
凡ゆるものは聲をのみ
壓し迫るやうに動く『自然』の歩みも
しばらく停められたかたちである。

おお
數限りもない手を擧げて
あらはな祈禱を捧げる
雪の野のなかの
偶然の樹の立姿——

人は一心になつて
ここに、いま、栖路を急ぐ。

霧の家

これは何といふ靜かな混雜さであらう!
『ドン底』を壓搾した姿の
ハルビン驛の四等停車房(スウトンボウチャフアン)
午後三時の冬の日差(ひざし)は
厚く閉ぢた玻璃の窓々から
力なく落ち込んで
四邊(あたり)に怪しい斑の交錯を投げる。

穽(あな)から出て來た獸を想はせる姿
然し神のやうな顏容(かほだち)の西比利(シベリヤ)の百姓(ムジイク)、
君が負ふてゐる『自然』の殘虐も
君自身にとつては何の關りがあらう?

それは君を懾伏するどころか
君がいつもの人の好い哄笑のまへにはいかばかりの關心事と
　して威力を示し得るか、
ホラショウ！　ホラショウ！
私は一切を飛躍して君の手を握る。

これはまた支那苦力（クーリー）の一群である、
凡ゆる人爲の障害を排除してその生活を突き進ませる人々の
　群れである、
その人々は、置かれたところにあつて
その潑剌たる生活を生きる、
おお、汚辱と忍苦の鬪士。

貴女（あなた）の淑（しと）やかな擧止（ものごし）は
（あらゆるものから殘し去られたただ一人で）
そこの飾り氣の無いベンチには應（ふさ）はしくありません、
貴女は、貴女の側近くに置かれた
貴女の唯一の殘された持物であるらしい貧しげな包のなかに
痛ましい物語を持つて居られるやうに思はれる、
私は、貴女を凝視する無禮は敢へてしますまい、
私の眼瞼は熱くなつて來た！

おお、さらに猶太人、荷蘭人、波蘭人
高架索人（カフカスじん）——
その情景を梭のやうに織る
護路軍（ごろぐん）の支那兵士、露西亞人の驛員、日本（ニッポン）の探偵、
これこそ見えない赤い深い霧のなかに泛（うか）ぶ
ガランとした蜃氣樓の内部である。

地平線

いま、自分の立つてゐるところは
五尺に足らぬ、偶然の孤丘である。
雪の曠野は

眼界のかぎりを盡して展べ擴げられてある——
自分が吐く呼氣は、引く吸氣は
高い響を立てて、(それを聞くのは自分だけ!)
瞳(ひとみ)にうつし餘されるばかりの押し默つた大自然のすべてに
電光の如くに照應して、やがてまた自分にかへつて來た、
人は、時として、自分の心臓の鼓動に驚くことがある、
おお、久しく忘れてゐたその驚きよ、

行つても、行つても
さらに遠のく地平線——
憧憬に身をふるはせた旅人は
翔けらうばかりの想ひを放ちつづけて
徒に疲れを覺えてゐる。

松花紅(スンガリー)(スケッチ)

このゴンドラをつつむ風景の
何といふ陰惨さであらう!

否、
何といふ寂しい晴れ晴れしさぞ!

このゴンドラには唄は無いのである、
カチリ、カチリ、
骨の髄を削るかのやうな、
寒く、冷たい音ばかり。

それはゴンドラの漕手(こぎて)の
跳躍する毎に生まれる
棒の尖端の金具(かなぐ)の
呻きだ。

カチリ、カチリ、
水脈のやうにはてなくつづく氷上の橇路を
飾りもないゴンドラが
辷る、辷る、

遠景には、
家から、家への大理石の吊廊下（つりらうか）ででもあることか、
曠野と曠野をつなぐ
鐵橋。(それはまるで黒い虹のやうである。)

夜の街

蒼白く、眼に痛い街燈の光を浴びて、
修道尼のそれのやうな姿に
黒く、厚く、身をつつんで
映畫のなかの人物のやうに
音をも、響をも立てず
何處へ行くのか
婦人?
粉雪のなかを
犇（ひし）とみづからを固く護りながら。

今、
ノウオ・トルゴワヤ街の、
夜も十一時と云へば
行人もやうやく絶えて
シネマの閉場（はね）を待つ
例の辻馬車の可憐な動物や、顏馴染の御者の吐く息は
ポツポツと霧のやうに白く
煙のやうに粉雪のなかにうかがへる。

物盜のやうに
呼吸（いき）を凝らして窺つてゐた自分は
二重に閉した玻璃窓を拭（ふ）き拭き、
屋根裏の堅い寢臺から身を伸ばして
これらの情景のなかを、
夢遊病者ででもあるやうに
屋外に靜かに舞ひ狂ふ粉雪に溶け込んで飛び廻つてゐる。

〔ソヴェート文藝便り〕

——勞農露西亞の劇壇——

昇　曙　夢

今回はソウエート・ロシヤの劇壇の近況を、最近接手したロシヤ新聞紙上の材料によつて紹介することにする。

昨秋ソウエート・ロシヤを出てハルビンに到着した女優リフオニナ嬢は、モスクヴアの劇壇に就いて興味ある消息を傳へて居るが、茲にその大要を紹介する。以下同嬢の談話である。

一、冬のシーズンと上演脚本

今日のロシヤ藝術が西歐藝術に比して少しも後れてゐないばかりか、却つて多くの點に於て遙かに進歩して居ることを、私は非常な歡喜を以てお話しすることが出來ます。九月初め私がモスクヴアを出た時、冬のシーズンはまだ始まつてゐませんでしたが、凡ての劇場の上演目錄は最早決定してゐました。過ぐる夏、多數の劇場は比較的輕い種類の物を上演しました。例へば、エルミタージユ公園では夏のコルシユ座が滿員の盛況を續けましたが、その成功の主なる原因は、『五人のロツシルド』、『ヴア・バンク』、『電話の傍の戀人同志』といつたやうな新奇な喜劇を上演したことでした。勿論それは新經濟政策協會の特別な保護も與つて力がありました。

けれども夏に成功したものが冬にも成功するとは限りません。そこで同じコルシユ座では、この冬のシーズンの出し物として、内容の深い眞面目な數種の脚本を選びました。その内最も興味を惹いて居るのは、新劇作家チヨフキンの作で、聖書中の事實を取扱つた『エシユア・ガノツリ』といふドラマです。この劇はクリストの生涯と事業とに對して合理的批評を試みたもので、いろ〳〵な意味に於てモスクヴアの文壇及び劇壇の注意を集中しました。

『ボリシヨイ・テアトル』（大劇場）の冬のシーズンは九月一日に始まることになつてゐました。最初の出し物は歌劇『雪娘』

で、女優ステパノヴア孃が主役に扮する筈でした。次の出し物は新しい扮裝の下に、ザハロヴア孃とミガエム氏とを主役として、『カルメン』を上演することになつてゐました。舞踊(バレー)は、ゲリツエルとチフオミイロフとを主役とする『白鳥の湖水』で舞臺を開ける豫定でした。

新しい劇場のことに就いてはいろ〳〵噂さがありますが、其所では新しいオペラを若手の俳優が演ずることになつてゐます。それには同時に監督輔導の格で、スタニスラーフスキイ、ペトローフスキイ、メイエルフオリドの如き名優も加はつて居ります。またロンドン巡業中のコミツサルゼーフスキイも舞踊指南のため近く歸國することになつてゐます。同じ新劇場では一週三回は『ロマネスカ』座のメロドラマを上演する筈です。新狂言では、小デユーマの作でフランス革命の事實を取扱つた『赤城のカヴアレル』、『ネリの塔』、ドーデの『アルレジアナ』其他が上演されることに豫定されてゐます。

カバレ『ヂンミイ』座では、クリヒン・ボーリヴォーリスギイ等が非常な成功を見ました。が、何と言つてもシーズンの中心は新たに復興された『ヴアンブーカ』座に集まつたやうです。同座はその母體とも言ふべき『クリヴオエ・ゼルカロ』座と幾分異つた解釋と演出とを見せたので、評判が宜かつたのです。

概してモスクヴアの冬の劇場は皆根本的に改造され、修復され、何の劇場を覗いても衣裳、道具、其他の設備が充分に行き屆いてゐまして、今後の光明なる發展が期待されます云々。

二、歌劇と喜劇物の流行

ハルビンの『ノーウオスチ・ヂイズニ』社は近頃モスクヴアの有名なオペラ女優ケー孃の手紙を受取つたが、それは今のモスクヴア劇壇の狀況特に輕い娛樂的な演藝の消息を傳へたものである。前のリフオニナ孃の談話と合せて、我々は茲にソヴエート劇壇の鳥瞰圖を作ることが出來る。

ケー孃の手紙に據れば、モスクヴアには現在二種のオペラ團があつて、その一團にはグレコフ、ダシコーフスキイ、ヤロンバーフ、ブラギノ、ドブロチイナ孃が屬し、他の『エルミタージユ』で興行して居る團體には、グリーゲリを座頭として、ロストフツエフ、ラドシンスキイ、ズブロゼク等が加はつて居る。兩團體共、特に第二の團體には女優の無いのが認められる。でケー孃の考へに據れば、優秀なるオペラ女優は今日モスクヴアで一季節十五回の招聘に對して三十億から四十億を下らない報酬を受けることが出來るだらうとのことである。

最近歌劇界の明星として有名であつたモナフオフは、咽喉を

痛めた爲に歌劇界を退き、今ではペトログラードの劇團に加はつて居る、以前から知られて居るオペラ俳優のヴアヴイチ、エウエリーボソ、シユヴロヴア孃、ポトプチナ孃其他は目下外國興行中である。

オペラの流行と並んで、モスクヴワではカバレツタ風の輕い演藝物が非常な成功を見て居る。斯種の演藝の最もポプリヤルな施設は『ニエ・ルイダイ』（泣くな）といふカバレで、それはポリシヤヤ・ドミトローフカのスパスキイ横町にある。

俳優達は一般住宅難の影響を受けて、多くは劇場に居住して居る。尤もモスクヴアの劇場は設備が比較的行き屆いて居るから、居心地は左程惡いこともなからうとのことだ。

三、ソウエート劇壇の新事實

ソウエート・ロシヤに於ける劇場國有の時期は既に過ぎ去つて、今では一個の昔話になつて了つた。ハリコウ市の劇場主シユリニコソがベルリンの或知人に送つた手紙に據れば、元彼の所有であつた劇場は今回再び元のまゝで彼の手に歸されたといふことである。そして彼はその手紙に於て、ベルリン滯在中の多くのロシヤ俳優を自分の劇場に招聘し、同時に充分の保障を約束して居る。

ソウエート演劇協會は今回ジーミン氏第一自由オペラ株式會社の規約を承認した。是れは劇場經營を目的とする新しい株式會社の最初の規約である世界大戰前に於てすらロシヤでは演劇關係の株式組織は極めて稀であつた。然るにジーミンのオペラ會社には株主として多數の歌ひ手か加入して居る。そして創立委員會に於て、凡ての俳優から劇場使用人に至るまで皆利益を配當することに決議した。その外創立委員は俳優團のために食堂の建設費として全支出の四十パーセントを負擔した。

第一自由オペラ株式會社の規約に據れば、同會社は單に劇場を經營するばかりでなく、活動寫眞の映畫原板や蓄音機のレコードを製造しまた衣裳道具の賃借料も設定しなければならぬ。斯くして會社は俳優の技藝と共に衣裳道具の所有者を樣々な方法で利用することによつて、利益獲得の可能性を保障することが出來る

革命座はアレキサンドル・ブロークの作『ラムゼス』、『廣場の王』、『十二』の舞臺稽古に取りかかつた。三種共一晩のうちに上演することになつて居る。メイエルフオリドの舞臺装置である。

シムフオニイ協會は、樂長フリードとブレクとが幾多のシムフオニイ音樂會を指揮するためにモスクヴアへ來遊するといふ承諾の通知に接した。

モスクヴアの『ボリショイ・テアトル』ではコーラスのペネフイスのために、ソビノフを主役とするナブラヴニクのオペラ『ドウブローフスキイ』が新たに舞臺の上に蘇つた。

畫家ゴロウインは無踊劇『白鳥の湖水』のために新らしい背景を畫いて居る。

モスクヴアに於けるメイエルフオリドのギーチス座組織の問題は愈々決定して、同座の本部は目下棧敷の配置、修繕、舞臺改築、職員募集、舞臺裝置作業の完成等に向つて、最善の方法を講じて居る。同時に元の『俳優座』の座頭に對しては、新たに組織されたメイエルフオリドの自由劇場に加入するか何うか、九月一日までに各自の意志を表明するやうに言ひ渡した。シズーンの開始は十月一日から十五日までの間に豫定されて居る。上演種目の決定したものは、クロメリンクの『寛大なる夫』イブセンの『ノラ』、スフオーヴオ・コブイリンの『タレルキンの死』、クロデル・アクショーノフの『世紀の寶冠』、セクスピアの『ハムレツト』、マルチンの『夜』、ヴイスピヤンスキイの『九月の夜』、ビーズの歌劇『カルメン』、プロコーフイエフの歌劇『賭博者』と『三つの蜜柑に對する戀』等である。是等は基本の種目で、一年間に上演すべきものであるが、その他の出し物には現代作家の戯曲も、また現代のデイアレクチツクな演劇の要求を滿たし得るやうなメロドラマも取り入れられて居る。尙ほメイエルフオリドの新らしい試みに就てはセルセネーウイチ氏の書いたものを次に引用する。

四、演出法の新しい試み

ソウエート・ロシヤ共和國第一劇場の破壞と同時に、メルエルフオリドは自分の演劇研究所(舞臺附演劇學校の類)を『共産主義劇作家練習所』の手に讓らなければならなかつた。が、この練習所は幾度か失敗を繰返したばかりで閉鎖されて了つたので、研究所は再びメイエルフオリドの手に歸つた。けれどもその間此の老練なる舞臺監督は地下室の生活を送らなければならなかつた。彼は薄暗い小さな研究室に閉籠つて、一團の熱心な青年と共に專心劇術の研究に沒頭した。その中でも特に彼は『藝術娯樂』を『藝術勞働』にする目的を以て所謂ビオメカニツクの研究に從事し、また俳優の生理狀態の改造と人體の凡ゆる運動をリズミカルにすることゝに滿心の努力を注いだ。

メイエルフオリドの考へに據ると、運動はそれみづからに獨立の意味を有するペログリフである。舞臺に於て單に解きほごすことの出來る運動のみがあらねばならぬ。俳優は心理的世界と關係して居るのでなく、專ら生理的世界と交渉して居る。ビ

アエストは難解な曲を理解するためには、その曲を各要素に分解するのであるが、俳優もそれと同じ行き方でなければならぬ。先づ役割をテクニカルに數理的に充分理解した後に、始めて我々は感激の歡喜を自から許すことが出來る『感激は幾何學に於ても詩に於ても必要であるが、歡喜は必ずしも必要でない』とプーシキンは言つた。歡喜はスタニスラーフスキイの所謂『内的經驗』である。その上にスタニスラーフスキイの説は成立つてゐる。將來の俳優には歡喜でなく、堅實な生理的基礎を有する感激性が必要である。斯樣にしてメイエルフオリドはダリクローズの律動的説と俳優の機械的興奮性とから出發しつゝ、その希求に於て、『オープイトヌイ・ゲロイーチエスキイ座』の標榜と殆んど一致して居る。が、同時に目的達成の方法に於ては兩者互ひに異つて居る。即ちメイエルフオリドと其の研究所とは主として研究的な私演を行つて居るが、「オープイトノ・ゲロイーチエスキイ座』は演劇研究の法則其の物を求めて居る。

メイエルフオリドはそのビオメカニック論を基礎として、この冬クロメリンクの『寛大なる夫』をアクショーノフの翻譯で公演した。そしてこの公演は在來のモスクヴアの演劇界が見慣れてゐたものとは非常な相違であつた。第一に劇場内の飲食店といふ飲食店は皆一掃されて居る。それから舞臺には幕もなければ背景も書割もなく、壁は露出したまゝである。演出中でも舞臺監督の助手は舞臺の上を徘徊し、スフレルは眼に見える所に坐つて居る。俳優の扮裝といふものは更に無く、衣裳の代りに研究生の仕事服を着けて居る。舞臺はポポーヴア女史の手に成つた舞臺裝置で一杯に滿たされ、車輪を附けた複雜な機械の塊が恰巧よく廻轉して居る。一見しても、俳優の技術を充分發揮させるために、彼等を最も有利な要件の下に立てようとした苦心の痕が解る。是こそ俳優の不思議な感激の神秘的襲來を破壞した演出である。是こそ俳優自身の苦心、『藝術勞働』（勞働としての藝術）のデモンストレーションである。

劇場の一切の秘密は殘らず眼前に暴露された。觀客を魅惑したのは劇場のアストロノミイではなかつた。メイエルフオリドは劇場と舞臺とを物質的客觀から解放して、劇の唯一の材料たる俳優を第一段に置いた。俳優の中には一人も知名のものは居ない。彼等は皆青年である。けれども彼等が演つて居ることは、所謂名優の創造よりも數等優れて居る。

主役ブリュノに扮したイリンスキイはまだ若い間拔者であるが、既に是迄もその稀なる完成した藝術によつてモスクヴア中を驚かしたことが度々ある。『風』の中のチンオン、『神秘劇ブッフ』のメインシェウイク、それから今日のブリュノがそれで

ある。最も困難とする自分の身體を自由に輕快に驅使して行くその技術更に喜劇から悲劇、悲劇から喜劇と容易に移り行くその輕妙さは驚歎の外はない。エスチューゴに扮したザイチコフは驚くべき奇人である。が、それは競技場の奇人でなく、劇壇の奇人といふ意味である。ステルラに扮したパパノヴア孃は藝が餘程落ちる。けれども凡ての研究を生じて驚かるゝ點は、彼等が複雜な舞臺面を利用したその自信と技術の輕妙さと場面の理解とであつた。舞臺監督の註文の複雜であつたにも拘らず、俳優は皆よくその役割を果したばかりでなく、多くの者は首尾よく自己の技倆を見出した。

然し『寛大なる夫』の演出は同時に幾多の猛烈な非難を喚起した。それには豫てメイエルフオリドの事業に消極的態度を執つて居る國民教化委員會文務省も大に關係して居る。而もそれは文相ルナチールスキイの藝術觀から自然に生じたものである。彼は最近全く演劇折衷論に傾き、アカデミツクな演劇の傳統を熱心に擁護して居る。

ソウエート劇壇に於て注意すべき現象の一つは、この秋國立高等演劇練習所（その中に、ネイエルフオリードの研究所もフルレーゲルの研究所もオープイトノ・ゲロイーチエスキイ座も入つて居る。）がいろんな聲明を發してから、俳優學校生徒の間に所屬劇場の大移動が行はれつゝあることである。即ち多くの青年は從來の小劇場、藝術座、カーネルヌイ座所屬の俳優學校を去つて國立高等演劇練習所へ轉じて居る。是れは國立練習所の公明正大なことを證明する何より有力な具體的事實であると思ふ。（ヴアヴムセルセネーウイチ）

五、大道へ溢れ出した藝術

是れは演劇ではないが、同じ演藝方面のことで、モスクヴアの公園藝術若くは大道演藝といつたやうなことに就いてルソフ氏の書いたものを紹介する。

モスクヴアは是迄も藝術の府であつたが、それが今でも盛んに行はれて居ることは、以上述べた劇壇の消息に就いて見ても分かる。劇場や倶樂部や展覽會や音樂會が如何程開催されても猶ほ不足を訴へるのみで、何所へ行つて見ても毎晩滿員の盛況を續けて居る。斯くしてモスクヴアでは今や藝術が室内から街頭に溢れ出したと言はれて居る。

若し初秋の晩にでもモスクヴアの並木街（遊園地）を通行したら、あたりに響く音樂は絶ず我々の耳を打つであらう。開け放つたレストランからはヴイオリンの音が流れ、其所には素晴らしい美裝をした幾組かのダーマやカヴレルが菓子を食ひ、

コーヒやココアを飲んで居る。けれども此れは以前にもあつたことで敢て奇とするに足らないが、更に數十歩を行くと、流行の服を着けた若い男が帽子も被らずに立つたまゝ、『魔法の笛』の中のアリアを横笛(フリュート)のやうに口笛で吹いて居る。その周圍には人々が群を爲して耳を澄まして居る。此れはツウョールスキイ並木街の印象である。

もつと進むと、枝の茂つた菩提樹の古木の根元に、古い型の立派な帽子を被つた身丈のスラリとした老人が凭りかゝつてゐる。その灰色の縮れ毛が、ツルゲーニエフの『貴族の家』のレンムを想ひ出させる。彼は公衆が聽かうと聽くまいとそれにはお構ひなしに、民謠の顫えたメローディを、ウオルトルンといふ樂器で彈いて居る。その傍には賤しからぬ服裝をした少女が小さい籃を手に持つて立つて居る。籃にはいろんな價格のソウエートの紙幣が少からず放り込まれる。

プーシキンの記念像の傍では更に別な音樂が通行人の足を止める。見ると、石段の上には父子らしい二人の男が坐つて居る。二人共トルコ帽を被り、ルパシュカを着、長靴を穿いて居る。盲目の父は小さな圓い手風琴でロシヤの民謠を奏し、息子は如何にも勿體振つた調子で大きな三絃琴で伴奏して居る。あたりに立つて居る人々は義務的に聽いて居るとしか思はれない。

斯うした孤獨な音樂者は到る所に絶えず出遇すのであるが、その中には眼くらもあれば眼あきもあり、青年もあれば老人もある。そして彼等の中の何人もが損をしないばかりか、相當の收入を得て居る所を見ると、流石はコンムニズムの國だといふことが首肯される。一方ではミューズの宮や同盟館で素晴らしいオーケストラが鳴り響き、聲樂の天才ソビノフが獨唱して居るかと思ふと、一方では並木街で雜多な通行人のために悲しいロマンスや古い民謠を彈ひたり、又は此等の音樂に連れて日常生活のクプレットを歌つたりして居る。

その外我々は、小槌でシンバルを叩いて居るシンバリストや細い指で竪琴を彈いて居るギリシャの娘や、並木街のベンチにゆつたりと腰を卸して居る盲樂師連のオーケストラに度々出會する。また花盛りの遊園地では元氣な若者達が夢中になつてバラライカを演奏して居る所もある。それでゐて通りがゝりの聽衆が惠む喜捨は決して少なくならない。それがため是等の流浪の音樂者達は益々殖えるばかりである。今彼等は方々の市場、廣場、ソコリニキ遊園地、ペトローフスキイ公園までも擴がつて居る。

それにまた歌ひ手が加はる。歌ひ手は、大抵十四歳ぐらゐの少年少女である。エカリテリニンスキイ公園で民衆の散歩行列

をして居る傍で、痩せこけて汚ならしい衣服を着た是等の子供達は音樂に連れて昔の『パイカル』の唄を歌つて居る。が、その子供らしい歌のうちには、何か裂くやうな、年に不相應の聲を張り上げるので、聞いて居るのが心苦しいほどである。

並木街ではよくジプシイの女のソロや音樂者のドウエツトを聞くことがあるが、偶にはまた盲目の乞食が『神の人アレクセイ』の事蹟を鼻聲で物語ることもある。そうかと思ふと、一方には若い畫家がベンチに腰を卸しながら、一定の報酬を取つて、三十分で肖像を描いて居るのもある。是れも矢張り疲勞を知らずに働いて居る。

大道音樂者と云ひ、大道藝術家と云ひ、要するに同じ畑の果實である。嗄枯れた聲、顫える手、昔僻遠な地方の定期市場で吁鳴つたやうな單調な歌――それが皆今では赤都モスクヴアに集まつて來て、高級な音樂と並んで自己の地位を占めて居る。一方にはワグネルの樂劇、七絃のギター、ソビノフの獨唱、他方には餓鬼共の歌、メトニエルの音樂會、マンドリンの演奏――それをごつちやにして苦もなく消化して居る所が赤い都の特長で、此所では藝術までが國際的になつて居る。(エヌ・ルソフ)

――二月五日――

新刊紹介

□小公子（佐々木茂索譯）英國で名高いパネツト夫人の原著を譯したものである。（三圓、東光閣發行）

□私有財産問題（遠藤無吾、戸田貞三共著）「現代社會問題研究」の第七卷である。（一圓八十錢、冬夏社發行）

□エスペラントの本質とエスペラント文學（川原次吉郎、豊川善曄共譯）エスペラントの本質及び其の文學の將來を知らんとするもの丶好資料。（一圓、日本エスペラント社發行）

□走馬燈（室生犀星著）中篇小說叢書の第五篇。（七十錢、新潮社發行）

□我等は如何にして自己を救ふべき乎（中島爾仲譯）エスピタテートスの隨感錄を譯したものである。（二圓五十錢、早稻田大學出版部發行）

□宗教的理性（金子大榮著）宗教に關する論文を輯めたもの。（一圓三十錢、中外出版株式會社發行）

□鳳（大關柊郎著）著者の海外遊學初期の作品たる戯曲集。（一圓九十錢、文泉堂發行）

□信仰の曙（三木露風著）修道院に於ける詩集。（一圓八十錢、新潮社發行）

□自治民政と佛教（加藤咄堂著）自治に關聯して佛教を說いたもの。（一圓八十錢、丙午出版社發行）

「いびつ」を愛する心理

安田徳太郎

一　理想の美しさ

女の美しさといふものは民族や風土時代とともに、男の勝手氣儘に變るものだときめこめば、美しさといふ奴は、つまりは男がきめた、一つの契約のやうなものになる。だから「おれの氣に入つた」といふのが、美の本質といつてよい。ところが男はよく彫刻の像を眺めて、自分の氣に入りそうもない、言ひかへれば、自分の欲求を刺戟しそうもない、あの冷かな端正な美に驚嘆の聲をはなつてゐるのは可笑な事だ。だがからいふ理想の美しさに感心してゐるのは、實をいふと、男達の紋切形にすぎないのだ。希臘人はこの人の世で、鉦大鼓をたゝいてもみつかる見込のない、比率の正しい端正な姿を讃へることを敎へてくれた。が偶然こんな女に出くはしても、それは自然の産物でなくて、自然の結構な餘興と申す方がよい。現代に生を享けた男なら、誰がすきこのんで、ミロのヴヰナスのやうな氷にも似て冷かな、つんとすました美しさを愛するものか？それよりはやつぱり、巴里の街をうろついてゐるやさしい、やはらかい、愛嬌に輝いた女どもに惚れこむに相違あるまい。

レミ・ド・グウルモン

佛蘭西のある閨秀作家は、萬人の耳目を聳えたゝした自分の天才をなげすてゝ一日でも「美しい女」としての聲名を博したいものだと嘆いたとか。亞米利加のある女學生は、自殺を決行しやうとする際に認めた書置の中に、自分がすごした短い人生のうちで、一番知りたかつた事は、自分が果しい美しい女かどうかを、眞面目な青年からきつぱり斷言してほしい事だつたと告白してゐたとか。美しさが女性の運命と生活に及ぼす偉大な力を、こゝにとりたてゝ喋々する必要はなからう。一匹の雌鴨をとりまいて、數匹の雄鴨がめいめい命のかぎり、いろ〳〵自分の卓れてゐるところを見せやうとする。羽搏をしたり、嘴を水中にいれたり、首を伸したり、ぐあ〳〵と鳴いたり雌の近くに泳ぎよつたり、遠く離れたりして、眞劍に雌鴨の注意を惹かうとあせつてゐる。鳥類と同じ動物の人類の雄も、「美しい女」をとりかこんで、雄鴨にも劣らぬ涙ぐましい努力をして、この女の注意を自分に向けやうとする。かくて美しい女を中心に音樂

も生れやうし、藝術も生れやうし、闘爭も起らうし、悲劇も起らうし、喜劇も起つてくるだらう。誠に天才を棄てゝ「美しい女」としての聲名を博したいものだらう。

古代印度の人々は理想の美を具へた女を「蓮華の女」とたゝへて、「愛經」の中にかう形容してゐる。『歩む姿は白鳥のごとく、その芳ばしさは檀香のごとく、その肌の滑かさ柔かさは象のごとく、その聲は雌をとらへたコリカ鳥の囀のごとく、その汗は麝香のごとく目は羚羊のごとく、その鼻は胡麻の蕾のごとく、その唇の赤さは珊瑚のごとく、その齒の白きは亞刺比亞の素馨のごとく、頸の丸きは黄金の塔のごとく、乳房はヴイルワの花のごとし。』と。

同じく印度のカリヤナマラのものしたといふ「アンナガランガ」(愛神の舞臺)にも、妻として娶るべき女といふところに同じ詩句が載つてゐる。『可愛さは睡蓮の葉のやうに金色のかゞやきに飾られ髪の毛は蜜蜂のやうに黒々とし、顔は滿月のやうに丸く、目は羚羊の潤みをたゝへ、鼻は胡麻の花に似、美しい齒なみ、美しい耳、郭公をおもはす音聲、頸は眞珠の光澤をもち、唇は紅玉、手足は桃色、腹しなやかに、太股は芭蕉の幹のやうに眞直に、臀廣く、臍深く、歩む姿は象のやうにゆるやかに、しかも飾くなく優しく麗しい。』

これ等印度の愛欲詩人の叙述を、たとへばオギット「愛の藝術」の詩にくらぶれば一そう感興が深い。わたしは神々の名前で飾へた羅典語の原詩よりも、解りやすいために、カルル・エトリンゲルの現代譯に從つておかう。

容色は水晶のごとき滑らかさをわれは讃へん。
底ふかく人の心を惹きやすき目、
足は小さきを熱愛すべし。
ほそきとは手のあひ言葉なり。
頬は心のけだかさを外に教へん。
したやかな容姿をわれは歌はん。
甘き櫻の實のごとき口、
聲は鐘のごとく朗かにひゞく。
唇は珊瑚にも似、
口は薔薇、齒は眞珠、
頸は白鳥の白きを愛さん。

かゝる詩句から我々は、比率の正しい、才高慢顔の陰影もみとめられない、生氣の溢れた女を想像することが出來る。洋の東西をとはず、理想の美しさは殆んど同じ方向をとつてゐる。シユトラッツ博士は瓜哇で美人繪葉書を求めて、その土地の人に美しいと思ふ女を、撰り出して與れと言つた時、瓜哇人の美しいとする女と、ヨオロッパ人の美しいとする女の標準に、あまり大きな差のないのに驚いたと述べてゐる。即ち第二次性的特徴

の中分なき發達が、美の標準となつてゐるのだ。併しかういふ理想の美しさが、稀有なものであることはレミ・ド・グルウモンも申したとほりである。

時代の嗜好とか流行の變遷によつて、この標準が幾分か動搖もするだらうが、兎角この標準に近い女ほど美しい女と讃仰されるのだ。美術史や文學史や風俗史が、この變遷を敎へてくれるだらうし、美の本質は美學者や解剖學者が知らしてもくれやう。婦人運動の先覺者のあのリリイ・ブラウンが新しい女型として、『やはらかいマドンナ式の容貌の代りに――面長なはつきりした輪廓。眞心の溢れた温い眼眸の代りに――智的な沈痛な情熱の閃く目……』と述べてゐるのは、我々に意味深い未來を敎へてくれてゐる。

二　倦怠と刺戟

飽きやすく倦みやすいのは人の心の常である。だがこの世の中に欠伸ほど危險なものはない。眞理探究に飽き果てた老フアウストが、あゝと欠伸をして、「あゝおれは哲學も法理學も醫學も……。」と歎息をはなつた瞬間、見事メフイストフエレスの誘惑にひつかゝつたのである。この欠伸を「悲壯な欠伸」と命名しておかう。フアウストは誘惑されても、乙女マルガレエテのやうな女性を得たから文句はないが、うつかり欠伸をした爲に、貧乏籤をひいた人が澤山ある。實驗心理に倦み果てゝ、あゝと欠伸をした途端、千里眼の山師にひつかかつた博士や、定量分析に「悲壯な欠伸」をした揚句、萬有還銀のおやぢに誘惑された敎授もある。結婚三年ならずに倦怠の心が頭を擡げたはづみに、隨性の女に攫はれた男もある。だからかういふ呼吸をのみこんでゐる人々は、欠伸の出ない前に氣分轉換をやつて、メフイストフエレスの誘惑にかゝらぬやうにしてゐる。

佛のフロオベルは「ボヴアリイ夫人」の中で最もたくみに、この倦怠と刺戟の核心を描いてくれた。話は三四郎然たる主人公シャルル・ボヴアリイが、はじめて醫學校にはひつて揭示場に解剖學、病理學、藥物學、化學、植物學、臨床講義と、今まで名前さへ聞いたことのない課目を讀んで、茫然としてゐるところから始まる。『彼は一體何を講じてゐるのかさつぱり解らなかつた。耳を敧てゝみたが、やつぱり捉へどころがなかつた。それでも一生懸命に勉强もし、人並にノオトも製本さしてみた。毎日神妙に敎室に出てみたし、一日たりともかりそめに、欠席しやうとさへ思はなかつた。丁度調馬場の馬が目隱しをされて、自分が今何をしてゐるかを辨へずに、同じ處をくる／＼廻つてゐるやうに、日常のこま／＼した學課を復習した……。ある日のこと學

校に行くのを失敬した。その翌日は講義に出るのを中止した。怠惰の甘味をかみしめながら、日一日と欠席がふへてきた。カフエに入りこむ事をおぼえて、ドミノオ（骨牌）に夢中になつた。毎晩のやうに濁つた部屋に入りびたつて、大理石の卓子の上へ、羊の骨で作つた骰子を投げつけた。それは「自由といふものゝ實物教授にも思へて、彼の得意はおのづからまして來た。「世の中（モンド）」への手ほどきであり、同時に「禁斷の歡樂」への近づきである。丁度その部屋に這入らうと、ハンドルに手をかけた瞬間に、彼は殆んど肉感にも近い歡喜を禁じ得なかつたのだ。今まで壓へつけてゐた色々の慾望が、しだいに頭を出しはじめた。女に歌つてやる端歌をおぼえこんだり、ペランゼに現になつたり、ポンスのつくり方を習つたり、そしておしまひには口說くことまで辨へるやうになつた。』

MŒURS DE PROVINCE と銘うつた小說だけに、その心理描寫は實に見上げたものだ。我々のまはりにもブルヂョア育ちの無數のシャルル・ボヴアリイがうろ〳〵してゐるのを見るそれからお上みの忠實な番犬となつて、そこ〳〵にしかつめらしく修養の話や、地方自治や、忠君愛國の一手販賣をやつて、賄賂で別莊を建てゝ威張つてゐる奴は、その學生時代にはえてして社交術とか號してシャルル以上の「不逞ポン人」ぶりを發揮してゐたのを知らしておかう。

裸體の美に飽き果てた野蕃人は、自然の美の醜化と誇張とさへ望んだ。アフリカの土人の女は自分の胸、腹、背中、四肢に色々の創痕をつけて、刺戟に渴してゐる男達をひきつけやうとしてゐる。ペルの女達は年頃になると白い齒をわざとぬき、ホツテントツテンは臀部の異常に大きいのを讃美し、英領コロンビイでは頭部を人工的に長くひきのばし、さらにすゝむと、身體に刺靑、粉飾を施す。かやうな奇怪な風習は、自然の惠んだありのまゝの肉體に馴れきつて、さらに強い刺戟を求めやうとした、男性の欲求の結果に外ならないのだ。肉體自己の醜化と誇張に飽き果てた時こゝに衣服が發明された。シュトラッツの「婦人の衣服」といふ本によると、衣服の起原は裸體をかくすためでなくて、裸體を飾るためであつた。『羞恥は衣服の起原（ウルザッヘ）でなく、衣服の結果（フォルゲ）である。その起原ではかくすといふ事が衣服の目的でなく、飾るといふ事が衣服の目的であつた。……飾りたいといふ衝動は人類に先天的のものである。』と述べてゐる。裸體のバカイリ人は舞踏や祭の時だけ衣服をつけた。一番原始的な形式は、恥毛に枯草などをつけて、男の目を惹かうとした事からはじまる。かくして原始的の衣服が次第に變化され誇張されて、現代の見事な衣服に進化して來たといへる。

性的生活において」、新しい刺戟を求める要求はさらに顯著だ。徳川時代の人々は、傾城狂ひに飽き果てゝの後茶道を漁つた。フロツホ博士は病的性慾の第一の誘因として、人類が新しい刺戟に渇する事實を擧げて、「性慾上のすべての顚錯、異常、畸形、不合理は實に『人類』といふ屬に特有な、變化を求める心に基いてゐる。』と述べてゐる。我々の棲んでゐる現代社會を觀察してみれば、いかに人々が刺戟を求め、不自然を求め、一歩進んで醜惡を求めて、爛熟した神經の昂奮に快感を求めてゐるか！ 眞直な松をわざと曲げたり、朝顔やダリヤのかはり咲きに垂誕したりいびつの茶碗や德利に萬金を投じたり、立つて渡れそうもない反橋をかけて欲んだり、今にも壞れかけそうな歪んだ門をくぐつて得意がつたり、聲をわざとつぶしたやうな音樂に流涕したりして、若しかういふ趣味が理解出來ぬ人は、趣味の解らぬ人、藝術を解せぬ人話せぬ人、一轉して低級な人と罵倒を受けなければならぬ。そして苟も「高尙な人」の仲間入を志す人は、眼でも「いびつ」を愛する心を涵養しなくてはならぬのだ。大根や蕪菁は低級な食物だ。そしてやつぱり海膽とか、からすみとか、鶴の吸物とか、すつぽんとかに舌鼓をうたねばならぬし、若しそういふものを生れて以來一度も舌に載せた事のない人は、話せない人の仲間に無理やりに入れられてしまふ。

なほ「いびつ」を愛する心が闡展すると、我々の日常生活の一擧一動にも現れてくる人。々は天眞爛漫な心情を、子供臭いとか修養が足りないとか白眼視して、老成と澁味でかたまつた陰鬱な、歪みのはひた心を尊重する。出征をする夫を見送る時に、わつと泣いたがために修養のない女だと指彈されたり、「侍の子は腹がへつても饑ゑはない」と見えを切つたがために、天晴とほめられたりする。又芝居で本來の人間性と「いびつ」を愛する心が相亂れるデレンマの腹藝に感激し、さらにこの「いびつ」を愛する心が見事人間性を屈服した瞬間には觀劇客は我を忘れて「成駒や」とどよめくまでになる。

なほ亢進すると探檢とか冒險とかに興味をもつやうになる。金と時間に餘裕のある人々はアルペン・ストツクをつき、リユツクザツクを背にして、はるか日本アルプスに足をむける。絶巓の上に立つて神經の苛々しさと微動に快感を貪つたり　お花畑に千古の雪とならんで咲き誇つてゐる處女の貞操を蹂躙したりして、心行くばかり飽くことを知らない病的性慾を追求して行く。獨逸のスウデルマンがかう言つてゐる。

"Und Liebes Abenteuer?"

"Wenn Ihr das Abenteuer tienen wolle."

（冒險と仰しやるのは、戀の冒險のことを仰しやるんですね。）そして日本アルプスから下界におりてくると、彼等はスウデルマンの言ふ「戀の冒險」に鞍替へする。筆の立つ人はその深刻な自分の性的經驗を美しく飾つて一躍して大詩人となる。かういふ人には日常の茶飯事を卑しむべき淺薄なる深刻味のないものとけなしつけてゐる。數萬の虐げられた人々が、その日その日の生活に、身を切るやうな深刻味を味つてゐるのを冷嘲して、さらに深刻なものさらに神秘なものをさかしまはらうとする。常識はづれや病的の行爲を、深刻だとか神秘だとか崇拜して、變人や狂人を天才だと珍重して、かつぎまはる人々もある。又かういふ人心の機微を利用して、畸人の保護色を身につけて、またゝく間に出世をする人もある。獨逸學者はかやうな人々を一束にして、Hypererotismus（ヒペルエロチスムス）と名づけて色情狂の一種だといつてゐる。

三　撰擇

L'amour est enfant de Boheme
Ie n'a jamais connu de loi.
カルメン

美學者の提唱する美の標準解剖學者の提唱する理想の美は、客觀的には絕對的なものであらうか、主觀的になると多少動搖するし、又一轉して戀愛となると、忽ち破壞されてしまふ。だから「戀は盲目」とも、「戀は思案の外」ともいふのである。男女あひひく親和力の法則を考へてみた人は澤山あり、學說も色々作られてみたが、科學的には何等知るところがない。そしてやはりカルメンの「戀は浮浪の子供。ついで掟といふのを知らないのよ。」といふ一句が美しい眞理として輝いてゐる。

人生そのものが、日に見えない絲、人力以上の力によつて操られ、飜弄さるゝと觀じてゐる日本人は、すべてを運命や宿命に諦めをつけ、すべてを前世の因果といふ範疇（カテゴリイ）に入れるのを常とす樹の陰にやどり、一河の流をくむのも、これ皆他生の緣であるからである。ショペンハウエルは彼の獨自の哲學から出發して、『すべての人は自分に欠けてゐるものを愛す。眞の情熱が生れてくるためには、これを化學の譬喩でいへば、酸とアルカリが中和して鹽を作るやうに、二人の中が中和されなければならぬ。』と述べてゐる。だから金髮のものは高色や褐色の毛のものを愛し、背の高いものは背の低いものを愛して、次代を平均にひきもどそうとする。ダアギンの雌雄淘汰の學說もこれと同じことを意味してゐる。オツトオ・ワイニンゲルは男の中にも女のやうな男もあり、女の中にも男のやうな女のある事實か

ら、男女の各個體には、男といふ要素Mと、女といふ要素Wが、種々の割合で共存してゐると考へた。そして『性的に一つになるためには常に全き男（M）と全き女（W）か相近くやうになる』といふ有名な法則を立てた。詳しくいふと

$$M_1 = \frac{3}{4}M + \frac{1}{4}W$$

といふ、男の要素（メンリヒ）を三、女の要素（ワイブリヒ）を一だけ持つた男はいつも、

$$W_1 = \frac{3}{4}W + \frac{1}{4}M$$

女の要素（ワイブリヒ）を三、男の要素（メンリヒ）を一だけ持つた女に性的にひかれることになる。

併し日本でも「似たもの夫婦」といふ位で、自分に似たものにひかれる場合もある。レオナルド・ダ・ヴンチがあの「斷片」（Frammenti letterari e filosofici）の第一七六頁で、畫家がカンバスの上へ知らず識らずに、自分に似た姿を描く傾向があることより、『若し畫家が自分の身體に似た人、自分がカンバスに描いたやうな人に出會ふと忽ちその人を愛する。多數の人は自分自身に似た女に戀をして、そういふ女を自分のものにしやうとする。』と述べてゐる。ゲエテがシャロット・フオン・シュタインで、『戀人は二人とも粗野か、二人とも溫和でなくてはならぬといふ掟が出來る。そうでないと。二人は互に理解しあふことが出來ないのだ。二人が精神的に共通點を持つほど、戀の生命は長い』と言つたのもかういふ事實を物語つてゐる。

解剖學者のヘルマン・フオルは、夫婦が生活を共にする間に、精神的方面ばかりでなく、身體的方面も互に似てくると考へてゐたが、丁度伊太利亞のニッツァ市に滯在中、リギエラ地方に新婚旅行をする、若い夫婦を次から次へと觀察してゐるうちに、大概の夫婦に於てその外貌が非常に似てゐるに氣がついた。そこで二五一組の夫婦の寫眞をとつてしらべたところ、若夫婦一九八組中一三二組　即ち六六・六六%が似、老夫婦五三組中三八組、即ち七一、七〇、%が似てゐたと報告した。心理學者のハヴエロック・エリスも三〇%組の夫婦のうち一七組は背が同等、一三組は背が不等であつたと報告したり、又生物學者のカアル・ピアルソンが七七四組の夫婦について、紅彩の同色である傾向を見つけた。彼はなほ詳細に身長、筋肉、毛髮の色、手と足、輪廓、胸腔、目等をしらべて、同傾向のある事實を「ビオメトリカ」に報告した。

男女の自由意志のまゝに撰擇された、もつとも確かだと信じた組合せの中にも、なほ痛ましい不調和と矛盾を見ひ出すことがある。幻滅から懷疑、女人嫌惡に變ずる人もある。又所謂兩性は別の國に棲んでゐるのだと諦めをつける人もある。メチニコオフはこれ等を「兩性の不調和」で說明しやうとした。そして

現代人がいかにこの不調和に惱み、この不調和がいかに無數の惡の源泉となるかを述べた。キッシュ博士は獨逸の百姓級階に現時行はれてゐる Probehiraten（見本結婚）の風習に羨望の眼をはつた。そして『感受性の强い熱情的なセンチメンタルな女が、あとになつて自分の結婚の組合せが、ゲエテの親和力の定義にも、ダアギンの雌雄淘汰の學說にも、あてはまつてゐないのに氣がつく。そして夫と自分がほんの他人であること、自分が夫に理解されないこと、そして夫以外の男に親和的にひかれるの見つけて愕然とするであらう。』と言葉をついでゐる。

大概の人はかゝる撰擇が須臾の間に、電光石火的に決せられるとしてゐる。二人が目と目をかはす瞬間に、二人の運命が決せられるとしてゐる。日本でいふ「みそめる」といふ事である。併しかやうな電光石火的の撰擇が、一つの見掛け、一つの妄想であつて、あまり幸福を齎すものでないことを、佛蘭西のフェレ博士が呉々述べてゐる。一見してもかういふ戀愛が健全な性的本能のあらはれでなくて、性的本能の病徵と見做す場合が多く、神經疾患に罹つてゐる患者には殊にこれが多く、色情狂に現れる戀愛は常にこの突發形式を採つてゐるとまで言つてゐる。又英國のパアトンが「陰鬱の解剖」の中で次の插話を話つてゐる。

アリスチネプスの町で、フイロカリヌスといふ男が偶然見知らぬ美しい娘とすれちがつた。男がふりむいて見かへした途端、娘もふりかへつてにつこと笑つた。

Ill dies lethi Primus
Primusque malorum
Causa fuit――
（これこそわたしの破滅の最初の瞬間であつた、
そしてわたしの不幸のはじまりであつた

突發形式についてクロツケの『Osphrésiologie』に面白い話がのつてゐる。一五七二年巴里のルウブル宮殿で舞踏會があつた時、皇女が踊りまはつて上氣をして、氣分がわるいので化粧部屋にはひつた。宮女達は皇女のシャツをとりかへてやつた　皇女が部屋を出ると入れちがひに、アンチュ公爵（關理三世）が髮をとくためにやつてきた。そしてつひ同音てゝさきの脫ぎすてたシャツで顏を拭うたその瞬間彼は皇女に狂ふばかりの情熱を感じたと書いてある。なほどつかで見た事があるやうなといふ妄想卽ち déjà vu といふのがかういふ突發戀愛をひきおこしやすく、さらに「その面影」が一そう强い力をふるつてくる。スタンダアルが「戀愛（ドゥムウル）について」で、一人の男がある女を愛してゐた。その女は非常にやせて、その上あばた面であつた。ところがその愛人はまもなく病死した。二年後男はロオマ

で二人の女と知合ひになつた。一人は素敵な美人で、一人は非常にやせたあばた面の女であつた。男は忽ちそのあばた面の女と戀に陷つたと。即ちこのあばたを見ると、昔の戀人と暮したこまかい思ひ出が胸に迫つてくるのである。だから醜さがこの男には、何にも代へられぬ美しさになつてしまつたのである。

さらに病的を帶びてくると撰擇の中心がある象徴にかぎられてくる。フエリックス・ルウボオ博士の有名な『Traité de l'impuissance』といふ本の第三七三頁にさういふ男について書かれてゐる。彼は子供時代に父の別莊(シャトウ)で育てられて、そこから外へは出なかつた。そして十九歳で兵學校にはひるため、始めて別莊を出た。この田舍に寂しく暮してゐた頃、丁度十四歳の時に、家族の親友である二十一歳の若い夫人によつて始めて戀の洗禮を受けた。その女はブロントで英吉利風に髮をゆつてゐた。この秘密な戀をかくすために、女にあひびきを眞晝に撰んだ。そして夫人は晝の衣裳(コスチウム・ド・ジュウル)をつけたまゝ、即ち半靴をはいて、コルセットをつけ、絹地の上衣を着たまゝで男と關係した。この女の姿が彼の性的生活のみならず、彼の全生涯に運命的な影響を與へた。男はその後はブロンドの英吉利風に髮をゆつた、半靴をはき、コルセットを締め、絹地の上衣を着た女にのみ、戀と刺戟を感ずるやうになつた。その姿以外の女は、彼の官能には一顧の價値もないやうになつた。

同じやうな例はフエレ博士の『L'instinct sexuel』の第二六五頁にある。Bといふ男はたゞ髮の毛の赤い女にのみ戀を感じた。女が老いてゐやうが、若くあらうが、美しくあらうが、無標緻であらうが、上品であらうが、下品であらうが、そんな事は問題でなく、たゞ「髮の毛の赤い女」といふのが、彼の戀愛の焦點となつてゐた、さういふ理想の女を見ると、男は色々の手段で女に近づかうとした。たとへ遠くからでもさういふ女を一目でも見ると、急ち不可抗的に戀の衝動が爆發したBは自分の奇妙な衝動を、十八歳の時始めて關係した初戀の女が丁度赤い髮の毛だつたに歸してゐる。即ちXとBの衝動生活は最初の女によつて見事に運命づけられたことになる。

かういふやうにある一點、又はある象徴に、愛慾や衝動が收斂されるのを科學上フエチシスムス(Fetischismus)といふ。この言葉は葡萄牙語の fetisso から來たもので、「人の心を魅する物」とか、「魔性を具へた物」とかの意味で、羅典語の fatum の變化したものである。フエチシスムスはもと野蕃人が、森羅萬象に神秘な精靈ありとして、自然物や石や動物、または偶像を祭つた儀式に名づけてゐたが、一八八七年佛蘭西の心理學者ビネが、「戀愛に於けるフエシスム」といふ論文で、始めて科

學の中へ用ひてゐたのである。ビネはつゞいて「實驗心理研究」で色々のフエチシスムスを報告した。彼の言葉を借りて言へば、『健全な戀愛もやつぱり色々の複雜したフエチシスムの集つて出來上つたものといへる。だから健全な戀愛では、フエチシスムスは多神教と譬へてもよい。唯一の刺戟からでなく、多數の刺戟から生じた交響樂（シンフォニイ）といへる。では病的のはどうして起るか？ ある一つの事を熱愛するあまり、他のすべてのものが壓倒された瞬間に起るのだ。……健全な戀愛とは圓滿に調和を保つたものをいふ。男は愛人の一切の要素肉體の各部分、精神のすべてのあらはれを平等に愛する時に健全といへる。性的顚錯ではこの調和が見事に破られて、全體によつて刺戟される代りに、一部分によつて刺戟される。換言すれば部分が全體の代表者となり、附屬物が主人となりすまし、多神教が一神教に變る、フエチツクな戀愛とは劇の一齣だ。一人の役者が舞臺の前に進んで主役を演ずるのにあたつてゐる。』と。ビネが端緒を開いてくれたこの概念から、色々の世界が開けてくる。そして益々靜かに我々の世界に目をやる時、唯一の刺戟から生じた撰擇、即ちフエチシスムが現代の人心を深く侵蝕してゐることに、驚を喫するであらう。

四　象徴

人類は優越、威嚴、支配力を何かの形、即ち象徴で現したがる。古代の繪畫を見ると、畫中の多數の人物のうちで、王者とか支配者を表現するのに、その人物を他の人々に撰んで特に大きく描いた。大きいといふ事が原始人には、支配とか優越を示すものであつたのだ。今でも同じ聯想の遺物が殘つてゐて、ある雜誌では主筆の文章は特に大きい字で印刷して、これは偉人の書いてある文章であるぞと暗にほのめかしてある。新聞にのる雜誌の廣告を見る人々は、印刷された題目や名前の文字の大きさによつてその人の偉さの階級をつけたがる。その次は偉い人物だけ、他の人物より一段高く描く、即ち臺の上にのせてやるとか、馬や羊の上にのせてやつて、この人物が支配力を有してゐる事を示す。「お山の大將」といふ言葉、逆に「下に下に」といふ言葉は、こういふ心の消息を物語つてゐる。子供の遊戲を觀察すると、一人の子供が支配者となり、他の子供達が被征服者となつて、それを示すために、支配者へ色々の物品を捧げると、その子供は「うん許してやる」と言ふ。即ち捧げ物とか贈品をしてくるといふことが、その人の偉いといふ事を暗示してゐるのだ。偉さを示すのに、自分がやるのと、人にやつて貰ふのとの二つに分ける。後者は俗にいふ宣傳である。悲將の神格を示すために、

主は乙女マリアから處女生殖で誕生して來たといふ。生れる時に奇蹟があつたとか、生れた時に齒が生えてゐたとか、色々神秘なものをくつつけて、その人の凡人でない事を證明してやらうとする。

お客の前で自分の細君や女中をわざと手ひどく叱りとばす主人は、家庭に於ける自分の地位を誇示してゐるのだ。院長が美しい女患者がくると、自分の威厳を飾るために、わざと看護婦や助手を叱りつけるのも同じ心理といへる。自分の先輩や上官の名前を、本人のゐない前で呼びすてにしたり「うんあいつか」とか言つて、同輩以下に取扱つて、自分の威厳を高めてゐる人もある。目下の者から手紙を貰つて、律義に返事を出すのは威厳をおとすと、返事を書かぬ人もある。大家になる程雑誌の原稿は、五六度催促しなければ貰へぬといふのも、同じ種類にはひるだらう。即ちさう輕く注文に應ずのは安つぽい。即ち重々しいといふ事が、偉さの象徴となつてゐるのだ。

背景によつて自分の優越を象徴するのもよく用ゐられる。京都の言葉で言へば、「人をだしに使ふ」といふ事である。癈兵が自分が本當の癈兵であるのを示すために、各官省の證明書を並べるやうに、親友の名前に當代の名士をづらりとならべる人が澤山ある。「何々氏の令息だ。どうだ。」と會の名前をだしに使ふ人もある　女性にありがちなのは、「お邸に參上します」といふ言葉の中に、十二分の虚榮を滿足さす人もある。哲學に興味を持つてゐるとか、天文學が自分の唯一の趣味だとか標榜して、自分が金錢に淡白な、仙人にも近い人間であることをほのめかす男、かういふ男達は出來るだけ色氣のない學問、哲學とか天文學とか植物學とかを愛好して、色氣の方はこつそり實地にまはして、すましこんでゐるのを普通とする。

かういふ譯で人間の値は大抵外に現れた象徴で極る場合が多い。即ち部分によつて全體が察せられるのである。鬚をひねつて「えへん」といふと、それだけで偉い人、支配階級の人をあらはしてゐる。だから鬚の生える見込の少ない事は支配階級にもぐりこむ事を志望してゐる青年には、大きな煩悶になるさうだ。女でも鬚を生やした男らしい男をすくのは事實らしい。併しショペンハウエルは「鬚を剃りおとすことは、文化の高いしるしだ。」と喝破してゐるし、又ある學者は歐米の女達に有鬚の男か、無鬚の男か、どちらを好むか質問したところ、大抵の女は無鬚の方を好むといつたと報告してゐる。獨逸のヒルシュフエルド博士は、先天的に男の鬚を見ると非常な嫌惡を感ずる四十女の例を擧げてゐる。

「わたしはほんの子供の時からでも、新聞廣告に「鬚に別の最

高の飾」とか、「鬚は男の誇」とかいふ文句や、又「毛生え藥」推奬の文句を見ますと非常な腹立たしさを感じました。……いつの時代、又どこの國で、鬚を生やした男が戀の勝利者となりませうぞ。苟も天才と讃へられる人は、たとへ鬚があつても、大概はつる〳〵に剃り落してゐるぢやありませんか？ 御覽なさい。ナポレオン、シイザア、ルウテル、フンボルト、ゲエテ、シラア、モルトケ、そのほか多數の精神界の英雄は髯を生やしてゐないでせう。…わたしの考へを申しますと、――實際亂暴に聞えないと信じてゐますが――十字架にかゝつてゐる基督の悲しく痛々しく結んだその唇を鬚が掩うてゐなかつたなら、主の姿はもとつと莊嚴にもつと深刻に見えませうのに。鬚は野蕃と暴力の象徴であります。わたしは鬚などで嚇しつけない、自信の強い男をのみ愛します。』

鬚の生える見込のない男には、この獨逸女の氣焰は百萬の味方を得たやうに思へるだらうが、悲しい哉、日本の娘は男の眞實よりも男の附屬物を愛したがる。觀兵式に帽子の上にひら〳〵する羽に惚れこんで、若い將校に結婚を申込んだ娘があるし、自分の門に毎朝響く馬蹄のかつぽかつぽといふ音に惚れこんで、馬上の凛々しい男に戀をした女もある。當代の女達は健全な戀愛を知らない。そしてビネの言つたやうなフェチックな戀愛に陶醉してゐる。角帽に戀をする女は數へきれぬほどころがつてゐる。娘達は角帽のうらに「戀はやさしき野邊の花よ」といふ場面を描いてゐる。角帽を戴く男は、丸帽を戴く男を壓倒して戀の勝利者となつてゐる。さういふ女の病的なフェチシスムにつけこんで、僞大學生が横行して、角帽といふ餌で良家の子女を蹂躪して行く。なほ角帽には色々種類はあるが、娘の愛好するのは、「大學」といふ字の周圍にぐちゃ〳〵した飾のないものだ。かういふフェチックな女が増加してくる結果、俄然昇格運動と高等學校增設運動が現れて來た。男のすべてが角帽になれば、女達は角帽に倦怠して、次の新しい刺戟を求めるに相違ない。丸に飽き角に飽き果て末は、龜の甲印でも愛好するだらう。さらに角帽自身よりも脊て角帽を戴いた男といふ象徴に惚れこむ女も厭ほどある。中には白門や黑門は厭だ。赤門でなくてはと門に惚れこむ馬鹿門もある。

女が男を撰擇する時には、男の全體を究めずに、男の象徴に衝動を收斂する。肩書とか學歴とか、財産とか、御門のある家とか、借家が何軒あるとか、職業が何とか、帝展の招待日に行ける家とか、いち〳〵數へるのも煩い位人様々に變異がある。さらにダイヤモンドをくれる位の男とか、自動車に乘せてくれる男とかいふ象徴もある。色女をこしらへたり、放蕩をする位の

甲斐性のある男でなくては、將來の見込がないと、スピロヘエタ・パリイダやゴノコッケンの巣窟へ、みすみす飛びこむ勇敢な娘もある。これ等を生物學的に觀察すれば、女性は種族保存といふ大きな使命を、自然より課せられてゐる。自分の子供の生命を保持するに最も必要な要件、即ち「經濟」といふのが、配偶者選擇にあたつて大きな焦點となつてゐるからだ。これを心理學的に考察すれば、女性の心は子供型に近い。即ち子供の心をひくやうな、外のきらびやかさに注意がむけられるからだ。

一體がこぞつて病的に亢進すると、象徴が人生の最も重大なものになる。裸一貫では道も歩けず、さらに又一人歩きまでが險呑になつてくる。本を出す時は大家の序文が必要であるし、結婚の席には借物の博士や華族が必要であるし、旅行をする時は大勢の家來が必要である。そして家來共が一寸わきみをしてゐる隙に、大事の主人が惡漢に心臓を突かれていつの間にやら、白玉樓中の人になつてゐたりする悲劇も起つてくる。併し象徴と内容があべこべの事が澤山ある。トルストイは自分が禁慾が出來なかつたために、禁慾しなくてはならぬ世界の人に説教した。禿茶瓶のちぢむさい男だと輕蔑してみると、それが人も許し我も許す世界的の大學者であつたり、美髯をくはへた實に氣持のよさそうな紳士だと崇拜してゐると、二三日後の新聞にそれが稀代の色魔だとあつたりする喜劇も起つてくる。

獨逸女が次のやうに書いてゐる。

「丁度四年前に、わたしは今の夫のRと知合ひになりました。生れは瑞西で、お話しにならぬ程の醜男でございます。その妹も御同様無縹緻で、二人は孤兒でございました。わたしはある會で懇意になつて、その場ですぐにその人に惚れこみました。その人が非常な醜男であるといふ事が、大變氣に入つたのでございます。わたしはいつでも顔の醜い男が好きなのです。でもわたしは醜い男の中に常に黄金のやうに輝いた善良な心を、見出す事が出來るのであります。世にいふ好男子は、わたしには見るのも不愉快でございます、」

五　フエチシスムス

フエチシスムスの對照となるものを三つに分類する。第一は身體の各部。手、足、鼻、耳、眼、毛髪、鬚、頸、乳房、臀部、性的器管、腓。第二は身體の機能。歩行、音聲、眼眸、體臭、毛髪の色。第三は衣服とその附屬物。其他。ビネはフエチシスムスを「大」と「小」即ちpetit fetichisme とgrand fetichismeの二つにわけた。「小」のは全體から特に一部分をひきたゝして愛好する。ある色彩、ある形、異性のある特徴を特別に愛する「大」

になると全體が消えて一部分だけを愛好する。異性のハンケチならハンケチだけ、靴なら靴だけを愛する。身體各部では鼻とか耳は少くない。毛髪は非常に多い。日本では結髪の形式が非常に發達し複雜してゐるのを見ても想像がつく。伊太利のガブリエル・ダヌンチオが「歡樂(ピヤチエレ)」と、いふ小説の中でこの毛髪のフエチシスムスを描いてゐる。

「學校でわたし達はどれ程、あなたの髪の毛を櫛でといてあげたいと思つたかを御存じない!」とドンナ・フランチスカは尋ねた。「みんながといてあげたいばかりに、毎日喧嘩がおこり、血が流れるまでに大きくなりましたわね。カルロツタ・フイオルデリゼさんと、ガブリエル・ワンニさんの間に起つたあの光景は、一生忘れることが出來ません。まるで氣が狂つたやうでしたわ、マリア・バンデネリさんの髪をとくといふのが、學校のだれもかもの憧れの的となり、それが流行となつて、全校に擴つて禁止や訓示、罰則が出來るまでになりました。それでもわたし達は髪の毛を切りたい迄になつて來ました。マリアさん、御存じない!あなたの踵まで垂れてゐる黑い髪の毛にみんながのぼせ上つたことを。夜が來ると幾度胸が一杯になつて涙が滲み出たかわかりません。ガブリエル・ワンニさんは嫉妬のあまり、剪刀で知らぬ間に人の髪を切りましたね。本當にガブリエルさんは頭が變になつたんでせう。」……アンドレアスは、どの友達も自分のやうな童なほ暗い林のやうな、黑いこまかい髪の毛を、持つてゐなかつたのを思ひかへしました。髪の毛に戀をして、情熱と嫉妬で一杯になつて、手と櫛でこの生きてゐる寶に觸れやうと心を燃した若い娘達の話は、アンドレアスには、自分のおくつた修道院生活の、美しい時のやうなエピソオドにおもへた。」

同性愛の色彩を帶びてはゐるが、病的の傾向がはつきり現れてゐる。

手のフエチシスムスも多い。ビネはBといふ男の例を擧げてゐる。この男は女性の美しい手だけに衝動を持つて、つひに手相見の職業に身を投ずる迄の經過を報知してゐる。職業の撰擇にエロテツクな部分愛が力をふるふことをヒルシユフエルド博士も述べてゐる。そしてカルデラツクといふ名前の男が寶石に病的の愛著を感じて、つひに玉匠の職業を撰ぶといふ、ホフマンの「スクデリの夫人」といふ小説の梗概を例として擧げてゐる。

足のフエテツクは非常に普遍的だ。纏足を悦ぶ支那人は、國民全體が病的になつてゐるといへる。支那人にとつては女性の足が愛慾の焦點となつて、「鞵一捻紅才三寸長」と、その小さい足に情を寄せる詩文は山ほどある。日本でもこの頃の足の小説を書く人があるが、一番はじめに書いたのは佛蘭西の小説家レテイフ・ド・ラ・ブルトヌ(一七三四―一八〇六)である。この人はごく子供の時から、女性の美しい足や、美しい靴に敏感で。足がすべてのものであつた。美しい足の女に全生涯幾度となく、狂氣に近いほど熱烈に戀をした。即ち一生を女の足でおくつたとまで言はれてゐる。四歲の時にはじめてアガアト・テリユといふ女の足に熱烈になり、ついでスザンヌ・コラといふ女の足に

戀をした。父はこの子供の早熟を懼れてオオセル市の活版屋に小僧に出してしまつた。レティフは印刷などせずに、そこの美しい足のおかみを誘惑した。その當時の回想が彼の生涯に浮び上つて、パラノン夫人といふ名でその女のことを自分の小説のあちらこちらに書いたのである。彼は足の小説ばかり書いたが、その中でも一七八五年頃に出した「美しい足」(Le joli pied)といふのは、さういふ病的がいかに成長して行くかを分析する上に非常に興味ある材料とされてゐる。原文から少し譯すことにする。

『サントパレは不思議な性癖をもつてゐた。美しさといふものはいつも同じ強さの印象を與へなかつた。女の美しい容姿、美しい胸はどこでも讃へられるものである。華奢なすらりとした腰、綺麗な手は彼を動かしはしたが、一番強く彼をひきつけるもの、何のこだわりもなく全筋肉の緣を微動さすものは、美しい足であつたのだ。この自然にこれ以上に魅力のある美しさはなかつた。誠にすべてのものはこれによつて纖細に完全になるとさへ思はれた。この性癖は若いサントパレの心には理屈の問題でなくて、子供時代にも現れてゐた一つの本能であつたのだ。女の美しいスリツパを見るその瞬間にはうれしさに身慄を感ずるのであつた。たとへ足が美しくはなくても、上品な靴さへ穿つてをれば、女の身體の美しさのすべてをひきたゝすやうに思へた。』

『ある日の十時、聖デニ街をとほつた。セビュルクル教會に行かうと家から出た若い夫人が、美しくサントパレの目に映つた。このあでやかな姿をちらと見た瞬時、若者は自分の愛する誘惑物を探した。自然はこの夫人のために思ひきり美しく惠んでゐた。白金で刺繍をしたスリツパの中から、人形にでもついてゐさうな小さい足がのぞいてゐた。歩くたびに足は輕く心地よく動いた。サントパレは恍惚とし、目がくらみ夢中になつて、その女のあとをつけた。彼はづうと跡をつけた。とう〱女は自分の家にはいつてしまつた。彼は女の住家をみとゞけて、毎日その目を奪ふやうな足を見るために出掛けた。』

『ある日のこと、ヴヰウ・オオグユスタン街の靴屋に使に行つた時、彼はそこで非常に氣持のよい靴を見つけた。あまりにうまく出來上つてゐるので、だれが注文した靴かと尋たね。靴屋はマニ侯爵夫人のおはきになるのだと答へた。サントパレはどうかしてその貴婦人を一日でも見たいと考へた。定めし夫人は美しいだらう。だが夫人だから、忽論正しい若い主人がたへず側にゐるだらう。しかし煩惱の淺ましさ、彼はもう一度靴屋に行つた。そしてその靴を貴婦人のところへ持つて行き、一度穿い

て貰つた後何かの賞をつけて持つて、歸つて、自分に讓つてくれと頼つた。美しい靴のはきぞめを莊嚴にするために、サントパレは小僧の風をして主人について行つた。サントパレンは思ひきり澤山その靴に金を拂ひ、主人はそれと同じもう一足を作つた。サントパレはこの紀念の靴を大切に保存した。』

足のフエチツクと靴のフエチツクが、同じものであることがこゝにあらはれてゐる。

身體の部分はこれでやめて機能を少し書く。ヨオロツパの女達が、日本人や支那人といふ異種民族の留學生に非常にひかれて、戀愛關係をつくるのをフエチシスムスで説明してゐる人がある。即ち見馴れない特長、異國情調がロマンチツクなフエチツクな感情を若い娘におこさすのだ。日本でも「異人さん」といふ中にフエチツクな衝動を起す人が澤山ある。アレキサンダア・デユマが "la maison du Vent" で、テノオルの歌手の聲にすつくり現になつて、自分の夫を捨てた物語を書いてゐる。ビネも聲樂家と結婚する男女は、おそらく聲の部分愛が原因となつてゐないだらうかと述べてゐる。サド風の男が女の涙を見て快感を求めるのは、涙の部分愛ともいへる。

衣服については先のルウボオ博士の例が參考にもなる。華族の息子や殿様が小間使といふ姿に衝動を收斂したり、醫者が看護婦といふ姿に衝動を收斂するのもフエチシスムスであらう。ガルエ博士が "La Fetichistes" といふ本の第五八頁にモオチから聞いたのだと面白い例を擧げてゐる。即ちある上流の家の若い男が結婚式の花嫁の晴着を見る時だけ衝動がうごめいてくる。花嫁の晴着だけが官能を動かすので、それをつけてゐる女は全然無關係だつた。このフエチツクな感情をみたすために、男はボワ・ド・ブロオヌの側のレストランスの門口で一日の大部をすごすのを常とした。そこにゐるとよく結婚式の發車が眺められたからである。かういふのを佛蘭西學者は Voir(見る)から變化した字の、Voyeur(見る人)といふ名前をつけてゐる。中心人物にならなくてもよい、傍觀者として見るだけで充分だ氣分にしたるだけで充分だといふことを意味してゐるのだ。日本の「あやかりたい」があたつてゐる。結婚の媒介を五十組したとか、百組したとか誇つてゐる人はこの種類にはひる。名門にこびりついて、アリストクラチカルな氣分に觸れてみたいといふのもこの種類にはひる。

フエチツクな人々は又蒐集狂(collectionnur)になる。女の靴とか、髮の毛とか、ハンケチとかを集めて、これを並べて見るだけで愉快さを感じる。西洋の本には澤山例が書かれてゐるが引用するのをやめにする。日本でも狸の陰嚢ばかり蒐集する紳

士があるが、これも多少性的に色づけられてゐるらしい。

以上簡單にフエチシスムスの本體を述べたが、何故かやうな現象が人間の心に生ずるかの原因を究めるために、泰西の學者は色々の臆說を出した。ビネは子供時代に起つたある出來事から深い印象を受けて、それが生涯を支配すると述べてゐる。フロイド教授もあの「性慾說の三つの論文」の一九頁から第二四頁に渡つて色々論じて、第一はビネの言つたやうな子供時代に受けた性的印象、即ち俗語でいふ「初戀の粘着力」(die Haftfähigkeit einer ersten Liebe beim Normalen. On revient toujours à ses Premiers amours.)第二に無意識に我々を支配する「象徵の聯想」(eine dem Betroffenen meist nicht bewusste symbolische Gedankenverbindung)例へば足といふのは神話では早くから性的象徵であり、「毛皮の上衣」(Pelz)は陰阜の被毛の聯想をよび起すやうな事實。性現象を有機的に考へやうとしたヒルシュフエルド博士は、丁度呼吸中樞の昂奮性を炭酸が高めるやうに、性中樞の昂奮性を高めるホルモンとしてのアンドリン(Andrin)とギネチン(Gynäzin)の割合と作用力に基いてゐると說明を試みた。

新刊紹介

□**日蓮より觀たる親鸞**（淸水梁山著）日蓮の教旨から親鸞を批判したもの。（三圓、丙午出版社發行）

□**現代歐洲政治及社會史**（渡邊幾治郎譯）米國の少壯史家シャピロの原著を譯したものである。（三圓八十錢、早稻田大學出版部發行）

□**世の中へ**（加能作次郎著）中篇小說叢書の第三篇。（七十錢、新潮社發行）

□**東經正義**（細井肇著）鮮滿叢書の第五篇で東經正義の譯解附錄に朝鮮問題講演集あり。（二圓、自由討究社發行）

□**戀しき國**（山地白雨遺稿）詩人山地白雨の遺稿を友人吼崖君が蒐めたものである。（二圓、自由討究社發行）

□**蘆芝**（久保田万太郎著）中篇小說叢書の第七篇。（七十錢、新潮社發行）

□**明暗の街**（谷崎精二著）大都市の一隅に住む文學者生活の記錄。（七十錢、新潮社發行）

□**間違ひ感違ひ**（樋口麗陽著）誤り易いことなどを擧げて常識養成に資したるもの。（二圓三十錢、實業之日本社發行）

□**夢を喰ふ人**（松永延造著）長篇創作である。（二圓五十錢、京文社發行）

文藝局創設、國立劇場設立問題

劇場設立について

長與善郎

國立劇場を建てる事の可否は問題になるのがおかしいと思ふ。政府の金で建てるにしろ私立的に建てるにしろ、劇場拂底の今の日本にそれが一つ出來る事に反對する理由がどこにあらう。簡單な事ではないか。又簡單に見ておけばいゝ事ではないか。

馬鹿者に限つて簡單な事に七面倒な議論を鬪したがるもんだ。今時いかなる手段によつて、いかなる劇場が立つたにしろ、どうせ理想的なものが出來、理想的な效果が擧げられると夢みる馬鹿がどこにあらうか。誰がその結果をムキになつて買ひ被らう。僕とても此惡趣味流行の今時、劇場が一つ位增へた事によつて、日本の演劇が少しでも良くならうとは夢みてはゐない。併しそれは今日の日本政府に信用がおけないからと云ふよりは、實はむしろその政府なるものゝ母親である民衆を代表したつもりでゐる所謂インテリゲンチア達の趣味に信用がおけないからの事である。政府には方針はあるにしろ、趣味と云ふものはない。併し所謂インテリゲンチアにはその時世々々の趣味がある。現在東京市内や、到る處に建てられるあの四角い冷たい建築は政府の趣味で出來たのではない。アメリカロシヤの眞似をするより能のない現代日本のインテリゲンチアの趣味から生れるのだ。そして藝術の佳しあし、盛衰を左右し支配するものは政府の性質ではなくして、實にインテリゲンチアの趣味である。もし政府の性質がわるければ善い藝術は生れ得ぬと云ふならばルネサンス時代の藝術はどうなのだ。ルイ十四世時代の藝術はどうなのだ。

今の日本の政體や、資本主義的社會組織が決して善いものでないと云ふ事は三つの子供だつて知つてゐると云つてもいゝ位の事だ。それを今頃、とに角藝術家を以て自任してゐる者が、レーニン張りか何かの新しい思想家だと云ふやうな顔つきで、今更らしく說明して、そんな不正な資本から何の善きものが建つかと云ふ反對をしたものだ。その鈍さ、その現れ方、そのキザさに僕はあきれるものだ。

どつちがおくれてゐるかその人達は云ふのだらう。全くどつちがおくれてゐると云ふよりない。今の政府がどんなものかと云ふ位を知り乍ら、決してその出來榮へを當てにしないが、とに角建てるものが劇場なのであるから、政府でも何でも利用出來るものはして建てるのもよからう位の處で贊成する者と、口角泡を飛ばして政府不信任を唱へるものと。

今の政府の金や、資本家の金で善き寺を建て、理想的學校を造る事は不可能であらう。しかし藝術は違ふ。淫亂奸惡な暴君から金を貰つてもシステインの壁畫は出來るのだ。マルクスが大統領になつたからとて必ずしも善き藝術が出來るとは限らない。そこが藝術の面白い處なのだ。

僕は今の政府を信じないからと云つて今の民衆や今の社會主義者を買ひ被る事は出來ない。どつちかと云へば正直な話、秋田雨雀君達に治められるよりは今の政府の御厄介になつてゐる方がまだしもよつぽど安心なのだ。之は少し脫線だが、僕が今後の劇場に信用がおけないのも、本當云ふと秋田雨雀君達のヘンな過激派趣味がそこへ侵入して來相だからだ。

政治やいろ〳〵の點では知らない。しかし藝術の赤化許りは禁物だ。

劇に軍國主義が混入る事を心配してゐる人達があるが、その點民衆はすなほだ。いくら惡い宣傳をしやうとしたつてつまらない物は見度がらない。今時忠臣藏をその忠義ぶりに感心して見る馬鹿がどこにあるか。

どうせ一人々々の勝手で考へるのだ。秋田君や中村吉藏君は今の歌舞伎劇を劇場から追つ拂つて其代りに自分達が書くプロレタリア劇か民衆劇を演るやうにならなくちあ駄目だと思つてゐるだらうが、僕に云はせれば、又さう云ふものを演つてくれるよりは劇場を今の儘にしておいてくれるか、或はあの「荊洲城」や「名和長年」や「井伊大老」の代りに僕のものでも入れてくれた方がどんなにいゝかと考へてゐるのだ。いや、僕のものはとに角として、「井伊大老」よりは忠臣藏や勸進帳の方が誰が見たつて面白い事はたしかだらう。

秋田君の說に依ると來年は失業者がもつと多くなると云ふ。劇場設立に出せる丈けの金が萬一政府にあるならばその金をそんな事に使つてゐるべきであらうか。僕らはそれらの失業者を桝に觀て、安閑と芝居を見て居られるだらうかと秋田君は云ふ。僕は冷たい皮肉を云ふのは嫌いだが、かう云ふ事をあゝ云ふ席上で得々と述べ立て得る人の顔を見てゐると、イヤ味を通りこして實際ヘンな氣がして來る。「人の前で多勢に聞こえるやうに祈る」のはかう云ふ人達だが、自分で芝居を書いてゐて、よく見物へも行き、其他の事にはどこ迄道德家なのか知らないが、よくもあんな事が云へたものと思ふ。本當の腹……とは一寸からかい度くなる。さう云ふ事を無反省に云ふ秋田君達も、政府を買い被つた形ではあらうとも藝術家として劇場設立に贊成する僕らと果してどつちが理想家であらう。西洋人に對する新人としての體裁がそんなに怖いのだらうか。

中村君達は自分の子供を今の政府の教育が施されてゐる學校へ通學させてゐないのかも知れないが、僕らは自分の子供をとに角今の學校へ通はせてゐると同じ程度——否、もつと遙かに氣輕な程度で、單純に此劇場設立の問題に贊成するのがすなほだと思ふ。實際に立つものかどうかは知らないが。

國立劇場設立反對論

中村吉藏

勞農ロシアでは國立若くは國營の劇場が都市到る處に設けられて、新民衆文化運動の機關になつてゐるといふ事である、官僚主義や資本家階級本位の國家、政府が崩壞すると共に、その手に依つて支持せられた舊文化が崩壞し去り、それに代つて眞の民衆主義、民衆本位（或はプロレタリア本位と云つても善いだらうが、自分は敢て民衆本位と云ふ）の基礎に立つ國家、政府が、創建されて、その手に依つて新文化の芽生えが培はれつゝあるのは極めて當然な事態でもあり、又期待さるべき事實でもある、新らしき酒は新らしき革嚢に盛らるべきである、若し古き革嚢に盛られたら、盛つたものが裂けるか、盛られたものが腐敗、變味するかのいづれかである、

その好い先例は獨逸の王立劇場である、カイザーは劇藝術の保護、獎勵を口にしたには違ひない一の代表的な國民劇場として全獨逸國民に範を垂れる意氣込みであつたには違ひない、併し、カイザーが實際、保護獎勵したものは自己の權力を固めるに都合の善い官僚主義や資本家階級擁護に便利な舊道德、舊思想の傳統劇か、若くは現代と直接關係のない古典劇の保存に留まつてゐたではないか？イプセンの「人形の家」すら、あらゆる各國の民間の資本家劇場がそれを演じ古して後、即千九百年代に入つて、最早何等の危險がないと見極めが附いてから始めて之を上演し

た、イヤ、獨逸劇壇に藝術的革命を起したハウプトマンの處女作は、官憲にも、資本家階級にも何等の關係のない、純粹な藝術家、乃至藝術愛好者のグルプに依つて上演されたではないか！　その後ハウプトマンの幾多の大作が現れたが、王立劇場とは全然風馬牛であつた、唯ずつと晩年になつて「沈鐘」が上演されたかと記憶するが、それも民間の資本家劇場が上演し古した後で、怯づ／＼手にかけたので、これが、王立劇場の行き方である、それ許りではない、民間の資本家劇場は、商賣にさへなれば、社會主義傾向の强い劇でも隨分平氣で上演する、併し、王立劇場は商賣氣を離れてゐる丈け、それ丈、毛嫌がひどい、そんな傾向の劇を拒絕するに止まらないで、却つて之に對抗して忠君愛國主義の劇を盛んに上演したりなどする、即新思想新藝術に對する一大防壁としての任務がこの種の劇場に課せられる精神的租稅である、

　では佛蘭西の國立劇場は何うかといふに、これは共和國政府の擁護の下にある丈、獨逸の王立劇場程度の、露骨な反動主義は取らない、併し、そこで演ぜられるのは主として古典劇である、佛蘭西の民衆の潑剌たる新生命の躍り出るやうな、劇藝術は皆、民間の小劇場から生れてゐる、今日でも新らしい運動は、皆、然うである、

　日本で若し國立劇場が設けられたら何うなるだらう！　日本は勿論、佛蘭西流の共和國ではない、そして舊獨逸帝國の權力思想や、官僚主義は喜んで模倣され、繼承されて來てゐる國柄である、最も現在の民間資本家劇場の上演に對してすら、元老とか、大官とか、上流閥とか乃至その末輩に至るまで自己の抱持する舊道德觀、若くは御都合主義に抵觸すると見ると、忽ち橫合から喙を容れる、或は黑手を加へるのが一の習慣になつてゐる、民間の劇場にすら、然うである、それが國立の名に於て、彼等の勢力範圍に入つて來ると、彼等の舊道德觀や御都合主義が暴壓的に劇藝術の上にふり翳される事はいかな近視者流にも見透されねばならない今回の提案者とか聞く國民文藝會は、官僚、資本家、一部の作家等から成る思想上、藝術上の一種の勞資協調會であるらしく、その中には浪花節で國民思想を善導したり、國粹會を起して勞働運動に對抗させたりする事を發明したとかいふ噂の床次前內相も關係してゐると聞いたら、こうした國立劇場設立の提唱の前途も略豫想されるではないか！　又、この事を問題として劇作家協會は本來、一の職業組合であり、又一の勞働組合である、彼自身の立場は常に嚴肅に、明確に自覺されてゐなければならない、然るに無批判に、無反省に、勞資協調的文化運動のお先棒に立つて徒らに國立劇場の美名に憧がれ、新らしい酒を舊い革囊に盛らうとするのは、極めて無邪氣な、無智な小兒輩であるか、然らずんば、自己の心狀の墮落を自覺せざるものと識者から嗤笑されても申譯はない事になる、時代の先覺であり豫言者であるべき筈の、劇作家の地位、信用にも關する一大問題でなければならない。或は藝術のための藝術、即ち、官僚主義や資本家階級と何等の關係がなく、又民衆主義や、社會革命と沒交涉な劇藝術が、國立劇場に於て擁護せられ、存立する事を主張するものもあらう、多少さうしたものもあるかも知れない、併し、人間の實生活を眞面目に取扱ふてゐる藝術なら今日の社會の必然的に傾斜角度、進化方向と、全然無關係であり得る筈はない、官僚や資本家階級の反感を買はない筈はない、又それを買ふ丈その藝術には眞實味があり、痛切味があるのだ、それが民衆のための劇藝術であり、又眞の民衆本位の劇藝術である、そしてこの種のものと、國立劇場とは、勢、對蹠的の地位に立たねばならない、

　要するに、社會狀態、政治狀態が眞に民衆主義、民衆本位のものに近づき若くは革まつ

た時代には、國立、乃至國營劇場は必然の、又、至當の設備である、而もこれを今日、現實の問題として取扱ひその請願運動までやらうとするのは無用であるのみならず、却つて有害であり、民衆を裏切り、眞の劇藝術を冒瀆するものである」

私には沒交渉

澤田正二郎

○

國民文藝會、及び劇作家協會の有志から、政府に、國立劇場建設案を提唱するといふ話は、時折、新聞紙上で散見して知つてはゐるが、未だその具體的の案を聞いてゐない私は、今、これが是非を云々する資格を持たない。しかし、その性質の如何なるものであるかを、大概、想像することは出來るから、ほんの、私一個の想像するところによつて、極く簡單に、意見を述べることにする。

「國立劇場」といふ名稱の劇場が建設されることそれだけは、勿論いゝことであるには相違ない。けれどもそれには自らいろ〳〵の條件が伴ふであらう。この條件こそ最も大きな問題である。まづ、これを經營處理する人、上場さるべき脚本、出場する俳優、等、々、それらは、民衆の意志に立脚したものでなければならぬことは云ふまでもない。

○

私は、國民文藝會といふ團體が、何時、如何なる人々によつて組織せられ、これまで何んな仕事をして來たものであるかといふことを、まだよく知らない。が、これも、ある意味での偉い人々や、ブルジョワ階級の人だちの集であることだけは噂に聞いてゐる。──その國民文藝會の會員や、劇作家協會の有志たちが、如何に偉い、權力の强い人々であつてみても、亦、その人々の提唱によつて、定めし廣大で、且立派であらうと思はれる國立劇場が建設されるとしても、劇場や劇作家だけによつて演劇が生れないといふことは、小學校の兒童といへども知るの道理である。

舞臺に出て働く者は誰か。芝居を觀に來て吳れる者は誰か。國立劇場建設案を提唱せむとする人々が、その劇場の勞働者であるべき俳優や、その財源であるべき觀客、卽ち民衆を度外視してゐることは、既に根本に於て誤つてゐる。初め、俳優にはかり、民衆の意を汲まなかつたといふことは、最も大なる失策である。血と肉とを提供して働く俳優に重きを置かず、又、一番大切なる觀客を尊重せずに作製されたる建築は、表面、如何に立派を裝ふものであつても、もう一度問直さない以上、それは支離滅裂たるものであらうと思はれる。

○

この間の演劇改善問題にしても然うである。多勢の俳優を呼んで、「是非意見を聽かしてもらいたい」などゝいくら問つたところで、當事者は、何優の何の意見一つ何の參考にしたであらうか。既に前もつて作製されてゐたのであるらしい、發表されたあの新規則といふのを見て、私たちはある不快の念を抱かずには居られなかつたのである。演劇といふものを構成する上に於て、一つの權利を持つてゐる藝術家としての私たちは、いつまで、斯うした侮辱に甘んじてゐてはならない。權力に壓迫されてゐてはならない。

○

今後の、實社會に必要な文化的事業は、すべて民衆を基礎としたものでなければならぬ。民衆の意志をよく體得し、そこに立脚點を置いたものでない限り、その仕事は、中核のない空虚なものである。

人は、一時の人氣とりの爲や、ある調子の出來心から事を企ててはならない。さうした仕事は、それが如何に聞えよき社會的事業であるやうに見えても、個人の道樂仕事と選擇

され易い。また人は、自己の利益の爲めに關係なき他人を滿させてはならない。まだほんたうに醒めきれない人間たちの、野人や慾求を滿足せしむべく、道具に使はるゝ人々ほど、迷惑で悲慘なものはない。

私は、今度の、この國立劇場建設の提唱をそんな淺薄な思慮から出發したものとは思つてゐない。また疑つてみたくもない。けれども私は、こんな仕事に加擔する何らの義務を感じない。この意味に於て、私たちを無視してかゝつたこの企に、贊成、不贊成を唱ふる必要を私は認めない。むしろ、國民文藝會そのものが資本家となつて、極めて民衆的な、模範劇場を建設して、自ら主張する理想的な興行法を實施して吳れることを望む。その方が、官僚や、劇家協會などを糾合するよりも、いくらでも厄介を免かれるばかりでなく、遙かに有意義な仕事であるやうにも思はれる。

○

假令、この提議が可決通過して、所謂國立劇場が建設されたとしても、其處には、何處かの有名な役者たちが專屬にでもなつて、大きな立派な部屋に納まることを何よりの名譽と心得ながら、依然として、時代に逆行した、民衆とは緣遠い、愚劇を繰り返すに過ぎないであらう。新時代に生きむとする、ほんとうに眼醒めたる俳優にして、幾人、この擧に贊成の意を表するであらう。

兎に角、私の想像によるといま提唱されむとしつゝ國立劇場は、私などの如き、無名な、新參な、平民俳優には、全然沒交涉であるやうに思はれる。（二月五日）

文藝局設置及び國立劇場運動に關して

村松正俊

由來日本人が官僚好きであり、官權萬能主義であることはよく知られてゐる。それは一面からいふと、官吏共が、西洋にいへば、「公僕」であることを忘れて、「人民」共のヒルに位して威張つてゐることと同じ心理から來てゐるといつていいであらう。その根元するところは東洋流の政治思想から出てゐると共に、また日本特有の官僚主義からも發してゐるのである。奴隷根性といふことがあるが、今や日本のすべてを擧げて奴隷根性をもたないものはない。上に阿附し、下に威張るのは單に屬吏輩のこととのみ思つてはならない。奴隷根性のないものは革命家であり叛逆者であるが、日本の革命家や叛逆者はやはり官僚的革命家であり、叛逆者である。さうして一見獨立不覊の觀がある文藝家もまたつひにさういふ官僚氣質から脫し切れないらしい。

日本人の官僚好きがそれほど甚しいにかかはらず、從來文學者が好んで官僚の徒となりたがらなかつたように見えるのは一つの不思議であつた。卽ち日本の文藝家は、自ら文藝の士であることに滿足してゐるように見えた。しかしさう考へるのは實は皮相の見解である。いままで文藝家が官僚とならなかつたのは、ならないのでなくして、なれないと最初から自分で卑下して、局限してゐたのである。自らを弱者と見なしてあきらめてゐたのである。德川時代の劇作者のあるものが、官に反抗してゐるやうに見立て、諷刺や皮肉を連發したことは、實は自ら弱者であつて官權の矢面に立ち得なかつたことから來てゐる。同樣に明治から大正への藝術家は腹のなかに官僚を非難してゐても、實は官僚になりたくてたまらなかつたのである。漱石が博士を辭したといふことは單に江戶子の輕いつむじを曲げたにすぎない。その他のものはみな官僚になりたがつて、さうして自ら卑下してゐたのである。從つて文展が開かれると、畫家はその當落を以つて自己の生命としてゐた。當

調渡濟美の會員が勅任待遇であれば、みなそれになりたがつてゐる。即ち機會さへあれば、いつでも官僚と結託したいのである。

その機會はいつ來たか。文藝の士は久しくいはゆる野にゐた、彼らは官僚の力を、ただの民衆と共に怖れてゐた。それに近づくことは出來なかつた。しかしつひに例へば小村欣一氏の如き人物が官僚の中から天下つて來ると、それのいふことは一一尤もとして文藝家の間に流過した。さうしてだんだん官僚と近づいて見ると、はじめてその力によつて自分の位置を高めて見たいと思ひ出したのである。さういふ本一方がやはり奴隷根性で、官僚的であることには間違ひない。さうして一個の文藝の士として滿足せずに、官吏的待遇を得んとしたのである。そこに文藝局設置運動や國立劇場設立運動がはじまつたのである。

單に問題を文藝局設置及び國立劇場設立にのみ限るならば、そのことは當り前なことで、今更議論する必要もない位であらう。さつきからいつた議論をあべこべに、官僚に自省させ、反省させるために、つまり官吏共も實は人民より偉くもないといふことや、文藝家及官吏共が馬鹿にしたり、輕蔑したりするほど低いものでないといふことを反省させるためには、官僚的な相當な待遇を文藝家に與へる位必要はあると思はれる。帝觀廳の官吏共と文藝家が會合してゐるとき、前者がそつくりかへつてゐるのに、後者がペコペコする理由は毫もないからである。さうでないにしたところで、普通の事務として文部省ぐらいの一局に文藝局のあることは當然であらう。それは政治的意味もあり得るのである。

また國立劇場でもさうである。劇もまた生活の一部なのである。ギリシヤの古代のやうに宗教的政治的意味をもつ必要はないが、しかし近代に於ける劇は充分一つの生活とするに足りる。それは政治とか、新聞事業とか、商業とかとひとしい生活の一部門である。さういふものを今迄極度に輕蔑してゐたのが惡いのである。單なる教化機關として現代に於ては何といつても學校と新聞雜誌と劇場を缺くことは出來ない。その意味に於て國立劇場があつても差し支へない。官立學校がある以上異とするに足りないではないか。尤も雜誌新聞の國有がないのと同樣にいけないといへばそれまでであるが、學校と劇場と雜誌新聞との間にはもとより差がある。國立劇場の一つぐらゐあつたところでそれが非常な重大事件となるわけのものではない。民衆の建てる劇場と並んで國立劇場がそれだけの方針で別に經營しても惡いことにはならないであらう。それが丁度必らず新聞と並んで官報みたいになると豫言は出來ない。

問題はそれにはない。今問題となつてゐるのは今日の文藝家諸氏がさういふことの運動を起さうとしてゐることである。聞くところによれば議會に國立劇場設立の請願をしようとするさうである。それは少し愚劣である。誰が考へ出したか知らないが、議會の請願などは採擇になつたところで、實は何の役にも立たないのである。今の議會の有樣を見れば誰にもそれが分るであらう。某町に三等郵便局を設置する請願ならば役に立つかも知れない。また某市に鐵道を布設する請願ならばいいかも知れない。さうして政黨の根據地の有權者に署名させるならば有効であらう、しかし今の議會がどうして國立劇場設置の請願を採擇するであらうか。一面からいつて、今の代議士共に藝術は分らない。それはプロレタリヤが現代の文學が分らないといふ意味以上である。野田大塊は病をかいて俳句をひねることは出來る。小川射山は漢詩ぐらゐつくるかも知れない。しかし彼等の一人として文學が解り、劇が解るであらうか。彼等が劇などを昔風に考へてゐることはたしかである。また一面に實質的に國民文藝會員や劇作家協會員

がいくら束になつたところで、ある一代議士の根拠さへ動かすことが出來ない。議員共には有權者が大切である。そんな地盤も動かせないものがいくら運動したところで通過する筈がない。それは今の議會を見れば誰れでもいへる筈である。

ところで實際上に議會に請願して無駄なことは右の通りであるが、理論的にさういふ運動を起す必要があるか否か大に疑はしい。國立劇場や文藝局は社會がその欲するときに必然的にこしらへてくれる、ものであつてわがほんとうの存在性のある請求である。單に西洋にあるからといつたところで、西洋には西洋の事情があり、日本には日本の理由がある。盲目的な模倣は卻つて事をこはすのみである。國民文藝會や劇作家協會の諸君にのみ必要や名譽は決してすぐに民衆や社會の必要や名譽とはならない。もしこの運動の裏面にさういつたやうな官僚氣分があるのだとすればなほのことである。奴隷根性はすてなければならない、革命の精神は常に必要である。さうしてあらゆる存在が社會に依據してゐるとすれば、國立劇場の問題でもまたさうでなければならない。さうすると問題はもつとひろく考へなければならないのである。

國立劇場、及文藝局設立に就て

小村欣一

我々の間に國立劇場の話が持上つたのは、舊臘二十一日警視總監官邸に於ける演劇改善の分科委員會の席上であつた。既に屢々會合を重ねた改善會議に於て、我々は種々なる事を痛感したが、わけても藝術と經濟は兩立しないといふこと、言ひ換へれば、獨りコムマーシヤアリズムに演劇の如き民衆藝術を委ねて置けないことを明確に感得したのであつた。勿論、營利を目的とする興行に、純藝術の發現と、民衆に好都合の條件とを要求するのは一面から言へば無理な所もある。興行師は飽くまで利益を得なければ立ち行かない以上、たとへ非藝術なものでも、それが民衆の嗜好にあひ、歡心を得るものと信じたならば進んで演ずるのは當然である。興行師に言はせれば、結局客さえ大入なれば大滿足なのだ、然しこゝに恐るべき民衆の趣味が無意識の間に行はれる、と思ふ。概して興行師は客數本位である。客を少しでも多く呼び入れる事しか思はない。惡く言へば客を釣ることばかり考へてゐるのである。斯ういふ事を目的にした脚本の選び方、芝居の立て方が藝術的に見ていゝ筈が無い。一面から言へば、民衆が喜びさえすれば、それでいゝ様に思はれるが、民衆が果して正當な純眞な藝術的理解を有してゐるだらうか、露骨に言へば藝術的にも思想的にも本當の意味に於て目醒めてゐるものは極く少數の人の様に思はれる、然しコンマーシヤリズムの興行師は、この目醒めてゐる少數の民衆を相手にしてはゐないので、目醒めざる多數の民衆にこそ觀客の基礎を置いてゐる。其所に民衆に取て危險が横はるのである。又興行師は營利的立場から、有產階級が今日の相當に見物に來る事を知つてゐる。彼等は社會政策家ではない。一家の生活が困難で芝居に來られない人は來なくていゝのである、來るだけの餘裕のある人だけ來ればいゝのである。事實今日では劇場に見物に出掛け得る經濟的地位にある人は決して少くない、從つて入場料の如きも、相當多額料金を要求する。然し自分はこゝで興行師を難じやうとしてゐるものではない、コンマーシヤリズムに立脚した興行が、現代の營業としては正當なことをして行きつゝあると同時に、社會多數の民衆(殊に中流以下)からは非常に隔離しつゝあることを言ひたいのである。上述の理由から言つても、我々は既に藝術たる

演劇を向上せしむる上に於て、民衆化する上に於て根本的な方法を考へねばならないのである。然るに此の演劇の業たるや至誠難のものであつて、理想な劇場を設けるにしても經營して行くにしても、營利的經營法でない限り民間の有志富豪の資力の迚も及ぶ所ではない、且又、それ自體國家的に考ふべきものである以上、當然の歸結として茲に國立劇場の設置を考へねばならぬ。

先日來國立劇場設置請願の說が報道されてからこれについて種々の意見もあるが、我々は今日演劇が如何に我國の社會文化機關として內容のものであるか、又今日如何に社會民衆が演劇を要求してゐるかを考へて見ることは、直接に又間接に國立劇場設置の趣意を明にすることにもなると思ふ。

我々は先づ雜誌に就て見れば、殆んど有力な雜誌で今日戯曲を載せないものは一つも無い位いである。新聞紙には劇藝術に關する理論、又は批評が毎日表はれる。新しい劇團が組織される。若い俳優が各々個性に從つて研究を作る、女優が從來と異つた見地から重用されて來る。各大學には劇研究會、又は新劇同盟が設けられる。家庭的には室內劇が提唱されて來る。凡そ今日程、劇が民衆に要望されてゐる時はないのである。此の意味に於ても、實際的に民衆的な劇場の設置は必要であると思ふ。

然らば民衆的國立劇場を設置して如何なる利益を享受し得かる、此點に就き國立劇場設立と共に、民衆は料金の上に於て安易に入場し得るとしても、最も重大な出し物に本當の宜い藝術が上演されない事を危んでゐる諸君がある、然し此の諸君は同時に國立劇場に反對してゐるので、自分は此處で反對說に就て考へて見たいと思ふ。

今日迄、新聞に散見した反對論の大體の要旨は左の三つの理由に盡きてゐるやうである。

(1) 國立劇場に贊成するといふことは新しき思想家として、致命的なものである。それは明に官憲に對する屈服である。從來の國家によりて民衆敎化の目的で施された藝術的施設で成功したものはない。

(2) 何處の國立劇場でも理想的演劇をやつてゐるものは無い。如何なる理由の下に、本質的な立派な演劇が上演されてゐるか。

(3) 國立劇場は今日折角演劇が民衆に移りかけて本質的によくならうとする狀態を防害するものだ。

(一)國立劇場に贊成するといふ事は明に官憲に對する屈服だとか思想家として致命的なものがとかいふ論者は、自分の見る所では全然我々とは現在の出發點が違ふと思ふのである。國家を認めない、又絕對的に官憲に反感を持つ思想的立場から言ふならば、(例へばそれがコムシユニズムであらうとダヾイズムであらうと、)何處まで行つても今日の國家組織、社會組織、經濟組織と續く以上國立劇場は否定さるべきものだ。然し此の反對論が果して今日の民衆の全體の反對であらうか、民衆全體が非國家的思想になり、又絕對的に官憲に反感を持つ時代にのみ、右の國立劇場反對論は實際に有意義であるのではあるまいか。

(二)に就いては、反對論は國立劇場で理想的演劇が行はれないといふことがあるが、これは恐らく論者が思ひ違ひか或は出鱈目である。實際の例から言つても外國で國立劇場が、本質的に、藝術を演出してゐるのは明かな事實である、例へば佛蘭西には四つの國立劇場と二つの市立劇場があるが、いづれも新しい藝術的な作品、アナトール・フランスだとか、プリユー、レニエ、イプセン、キユーレル、の作品が上演されてゐるのである。且又、論者が言ふ通り、民衆の求むる演劇は民衆の思想、感情、慾望を行動(アクション)に導くもので

なければいけないとしても、我國の今日の文化及社會心理に於て、これに全く反する非藝術的演劇が行はれやうとは思はれない。假令官憲が經營するとしても其當局者次第である。官憲なるものを概念的に分らずやときめ込むのは今日の實情に遠い、そこに誤解がある。尙第三に、反對論者は、今日折角演劇が民衆に移りかけて本質的によくならうとしてゐる狀態を防害するものだといふのも、自分には受取れないのである。演劇が今日民衆の要望を受けてゐる事は事實であるが、演劇はまた、民衆の手に渡らうとはしてゐると思はない、我々は今國立劇場と云ふ手段によつて「コムマーシヤリズム」から脫した演劇を民衆の手に渡したいのだ。

此等の點から見るも、我々は直に反對說を肯定することは出來ないのである。尤も我々は設立と共に直に理想的な經營が出來るものとは考へてゐない。然し、如何に考へても、現在のコムマーシヤクズムに立脚した演劇に比し善いものを演出し得られると思ふのである。又必ずしも第一義的に實現が出來なくてもいゝ何かしら善いものを作り出さうとする努力を盡して見たいと思ふのである。然し國立劇場を十分に善くするもせぬも民衆の力次第であることとは無論の話だ。若し夫れ國立劇場設立の財源の如きは、一步を進めた剩餘を以てすれば容易であると思ふが是も民衆自身が設立の意志を持ち輿論を起さねば出來ないことである。尙念のために一言するが、今日未だに舊套の思想を脫し得ない政治家がゐるが、彼等より見れば、劇場設立は或は單に娛樂機關の如く見るかもしれない。然し今日の如き過渡期に於て、演劇が自由の空氣に生き、又悲慘なる人間の生活が演劇に接することによりて調和され慰安されゆくことは、政治的立場から見るも一種の安全辨として必要なものであることを悟れば此種政治家も輿論の聲に大に傾聽するに相違ない。

次に、文藝局の設置は自分は知らなかつた問題であるが、自分一個人の意見としては、文藝的よりも、寧ろ文化省なるものを希望してゐることを一言したい。此の文化省では、主に新聞雜誌、其他出版に關する官憲の立場からの實際的仕事をなし、文藝、美術、演劇、娛樂其他すべて國民生活を幸福にする精神的方面に關し積極的に（又民衆と協力して）統一した行政をするのである斯くして新しき文化の向上に務めたならばと思ふのである。

從來の此の方面の既設機關は、内務省、警視廳等多くは其對象に向つて、單に取締りを目的にして仕事をして居たに過ぎないが、今日自分の考へてゐるものは更に積極的なもので、廣い意味に於て、眞に我國民の向上をたすけてゆくものを希望してゐるのである。

（二月五日）

國立劇場設立請願運動に反對する理由

秋田雨雀

國立劇場設立反對に關しては、私は今年一月九、十、十一日に渉つて讀賣新聞に、二月二、三日に渉つて都新聞に論じて置いた。私の議論はこの二つで充分に言ひ盡されてゐると思ふから、こゝでは私はたゞこの運動が劇作家協會に提議された前後の模樣を報じて正しく物を見やうとする人達の參考に供しやうと思ふ。

一體今日のやうに、各國とも政府の意思と民衆の意思とが相反して進んでゐる時代に、藝術家が政府の官吏と協調したり、政府に藝術に關する請願をしたりすることは、無節操、無反省以上の行爲であると私は考へる。『これがもし世界の藝術家、思想家達に知られたら恥しい話だ！』と私が決議の席上で叫んだのはその爲めだ。劇作家協會員の中の數名の者が、政府關係の人と知己で、その人達と

一緒に國立劇場請願運動を起すなら、私達は何も言はないつもりだつた。それは要するにその人達の自由だからである。

だが提案者は反對者少數であると知りながら、議決によつて劇作協會全體をその運動に參加させやうとしたことが、私達の怒りを買つた。少くとも私は劇作家協會の二三の若い人達、全く社會意識を缺いてゐるとその時思はれた人達が、提出者さへ思慮を拂つてゐる瞬間に、勝ち誇つた態度で雷同的決議を迫つたのを見て、人事ながら恥しく思つた。その時、私は、この人達こそ率先して反對の氣勢を擧げるが常道であるのにと情けなくさへ思つた。然もこの提案は劇作家協會自發のものでなく、受動的提案であつたことを彼等は知つてゐない筈がなかつたのだ。

國立劇場請願運動の提案は、提出者の説明に從へば、國民文藝會から共同運動をすゝめられたものださうである。特に小村欣一氏から今運動すれば必ずしも不可能でないかも知れないと言はれたといふことであつた。小村氏は何んな人であるか、そんなことは問題ではない、たゞ國民文藝會は官吏と政治家と資本家と藝術家との協調機關であり、劇作家協會は純然たる藝術家の職業組合であることを注意しなければならない。この二つの團體が國立の動機が全く異つてゐることを意識さへしてゐれば、提出者はもつと明瞭な意識を持つてゐたらうし、會員も亦たあんな個性のない雷同的決議をしなかつたらうと思ふ。

もし、將來このやうにして劇作家協會が明瞭な意識を持たないで進んだら、恐く最後には、國民文藝會によつて精神的に買收された精神なき一個の營利團體となるだらうと思はる。現に世間には、この二つの團體を姉妹關係でもあるやうに思つてゐる者が多いやうだ。もし劇作家協會が個性ある藝術團體であり、劇作家協會員が正しい意味での藝術家であるならば、國民文藝會のやうな協調團體を監視し、批判し、ある場合には勇敢に挑戰すべきが正當で、決して彼に依つたり、彼に動されたりすべきものではない。

一月十九日及び一月三十日の劇作家協會は無意識に、ある意味で無頓着に自己の社會意識と藝術意識の缺乏を自ら曝露してゐたばかりでなく、正しく物を論議して行かうと思ふ少數者に對して、多數決的暴力を強要したもといふことが出來る。然し私は過ぎ去つたことを徒らに責めやうとは思はない、私達は此度の出來事によつて、劇作家協會存立の意義を自覺したことを喜ばなければならない！

左に私の反對意見を個條書として擧げて置く。

一、政府の意志と民衆の意志とが相反してゐる。
一、民衆の藝術は民衆自身で。
一、民衆の思想は民衆自身で。
一、從來の國家思想は藝術思想と一致しない。
一、國立劇場はいゝ藝術を生み得ない。（劇作參照）
一、國立劇場の管理と、その思想は、藝術家を妥協的にさせ、且つ約束を二分する。
一、ヨオロッパの國立劇場は殆んど藝術的に失敗してゐる。（目下のロシアは別だ。）
一、日本の演劇運動に支配階級の權力を容れたくない。（日本の演劇の歴史はそれを敎へる。）

以上

覺え書

山本有三

ドイツの私立劇場は多く金持のユダヤ人がやつてゐる。そこで私ははじめから考へた。『さすがはユダヤ人だ。金儲にかけては拔目が

ない。』と。ところが彼等は儲けるどころか損をしてゐることが分つた。ドイツでは芝居は儲からないのである。市立劇場や、國立劇場（大戰前は王室劇場）はそれ〳〵市なり、國家なりから補助を得てゐるからやつてゆけるけれど、私立だと何處からも補助がないから、先づ手一ぱいに行けば上等、大低は損をしてゐるのである。それで私はまた不審になつた。金儲の外餘念のないユダヤの商人が、どうして損をする芝居に手を出すのだらう。併しそれにはわけがあるのだつた。演劇といふやうな文化的な爲事にたづさはつてゐると、ユダヤ人として排斥されるやうなことがないばかりではなく、一般から紳士として尊敬されるからである。それ故彼等は損失を忍んでも敢て芝居に關係するのだといふことが分つた。歐洲でユダヤ人が常人として取扱はれないことに對しては公憤を感ずるけれども、それは今論じようとすることゝは問題が別だから觸れないことにする。たゞこゝにこの話を持つて來たのは、ドイツでは演劇は主として文化的事業であつて、營業としては成立たないものであるといふことを、眞先に知つて貰ひたいと思つたからである。

一體藝術は如何なる藝術であらうとも營利事業と兩立しないのが原則である。そしてそれが藝術的であればある程、この原則によへ當はまる。別して演劇といふ藝術は、特殊の裝置をした劇場を必要とするし、特殊の技能を持つた俳優がゐなければならず、それから脚本、背景、衣裳、小道具、電氣、音樂等各種の藝術が寄り合つて統一するゝところの、所謂綜合藝術であるから、仕込（しこみ）の上にこんなに金のかゝる藝術はない。然も鑑賞の上からいふと、最も公共的の性質を帶びてゐるものであるから、是非とも誰にも見られるやうな仕組になつてゐなければならない。即ち觀劇料は安くなくつてはいけない。（出來るなら無料がいゝ）だからこの根本義から押して行くと、演劇を興行するといふことは、絕對に損をするゝことである。儲かるなぞといふこと夢にもあり得ないことなのである。ドイツの芝居が儲からないのは當然のことである。ところが日本の今日の劇場は、この原則に反して、みな儲けようとしてゐる。何となれば今の劇場は一つとして資本主義の劇場でないものはないからである。即ち個人經營でなければ、株式、合資、合名等の組織になつてゐて、何れも營利を第一の目的とし、文化とか藝術とかに關しては、殆顧慮するところがないからである。その結果は、既に仕込の高い藝術であるにもかゝはらず、儲けようとしたり、稅を課せらりたりするので、觀覽料はいやが上に高いものになつて來る。そして觀覽料が高いとそれを見る人は自ら限られて來るから、見物人は金持とか藝者などの階級が多いことになる。從て脚本はそれ等の見物を目當にしたものが上演されるので、概して低級なものが跋扈することになる。だから內的には非藝術的なものとなり、外的には觀覽料が恐しく高くなつて、演劇本來の原則とは正反對の現象を來すことになる。そして今日は正にさうした時代の絕頂にある。

昨今演劇改善の聲が喧しいがこれは當然の叫びである。本來儲けるべき筈でないものを、今の興行主は儲けようとかゝつてゐるのであるからこれが誤謬の根本である。それ故改善の第一は實に此點に向けられなければならない。それには劇場當事者の自覺を喚起する事が急務であるが、一方彼等が文化的に進む限り、彼等を尊敬すると共に、その損失に對しては國家又は地方自治體が補助金を與へることも一つの方法であらうと思ふ。けれども現在の資本主義の劇場を離れて、全く非營利的な國立劇場を建設することは、刻下の問題として更に〳〵急務である。出來ることなら兩者ならび行はれるのが一番いゝと思ふが、それは經濟上殆望めないことであるから、今は

國立劇場のことについてだけ論じようと思ふ。

さて國立劇場の話であるが、もしある金持があつて、演劇の使命を理解し、そのために金を出してくれる人があれば、敢て國家で劇場を立てゝくれなくつてもよいのである。ところが美術の場合であると富豪は保護をすることがあるが、演劇に對して金を出すといふことは全然ない。それは美術であると獨專することが出來るけれども、演劇は公共的なものであるから獨專することが出來ないからである。もう一つの理由は演劇は前にもいつた通り非常に金のかゝる藝術であるから如何なる富豪であつてもさう〳〵は保護がしきれないからである。それ故かういふ藝術は國家で保護するより外には誰にも保護が出來ないのである。それも藝術に對して國家が今まで保護をしてゐないのなら格別、文化に對しては文科大學を、音樂に關しては音樂學校を、美術に關しては美術學校や、古社寺保存會や、帝展などを起してそれ〳〵保護奬勵をやつてゐるのであるから、同じ藝術の一つである演劇に對しても國家は當然保護をする義務がある。それを今日まで國家でも手をつけず、一般の者も默つてゐたのは實に不思議な話である。殊に演劇は他の藝術よりも人心に及ぼす影響は遙に深く、且つ廣いものであるのに、これを營利業者に任せて顧なかつたのは緩慢を通り越して寧ろ失態といつてもよい位である。

國家で劇場を建てることになれば、それは無論非營業的なものであるし、年々補助金を交附される事であるから、入場料は極めて安くすることが出來る。（場合によつては無料にする事も出來る）それに演劇を商賣にやるのでないから、ある種の見物に迎合する必要もなく、從て内容は藝術本位の立て方をしても少しも心配がない。また、さうであるから本當に文化的な事業となつて行くのである。いひかへれば國立劇を起すといふことは、資本主義の劇場によつて誤まられて來た演劇を、その本來の使命に立ち返らせることである。もつと手つ取りばやい言葉でいへば、よい芝居を大勢の人に安く見せることである。勿論かういつたからといつて、現實の世界では　さう理想的な芝居が直ぐに行はれるとは夢想しないが、併し現實よりも遙に〳〵よいものになることは疑をいれない。

ところがこれに對して二三の異論者を發見したことは遺憾である。併しその人達の意見をよく味つて見ると、決してあの人々も國立劇場には反對ではないのである。寧ろ大賛成者なのである。何となればあの人達は國立劇場そのものに反對なのではなくつて、今の國家、乃至は今の官僚の一部に反對なのに過ぎないから。恐く誰にしたつて正面から國立劇場建設に反對を唱へることは出來まいと思ふ。殊に平生民衆の味方を以て任じてゐる人々が、民衆の爲めの國立劇場に反對するいはれはない筈である。ただこれをどう運用するかといふ點になると　いろ〳〵意見もあることとゝ思ふが、兎に角かうしたものが建つといふことは、文化の爲めにも、民衆の爲めにも、いゝことに相違ないのだから、小さな反感や、潔癖は止めて、一つの大きなもののためにお互に共力したいものである。反對者の意見に對してはいひたいことが大いにあるが、今日はたゞ國立劇場の必要なことだけを叫んで筆を擱くことにする。

讀書欄

ポール夫妻共著『プロレットカルト』

饒平名智太郎

最近讀んだといふわけではないが、年末から月餘に亙る旅行の間で、私はこの本の大半を譯了した、そして近々改造社から出版されることになつてゐるから、少こしこゝで提燈を持たして貰ふことにする。

この本は一九二一年六月に倫敦の Leonard Parsons, Ltd. から發行されてゐる。著者は、エデン・ポール、シダー・ポールの夫妻で。彼等の創意に就いては、私は豫て、『創造的革命』といふ本を通して知つてゐた。何でも、野坂鐵君の話に依ると、兩人とも英國共產黨のメンベーで、シダー君は四十臺の人で語學に堪能な、英國共產黨切つての理論家だそうだ。

私がこの本を初めて讀んだとき、實に、おゝこゝに最良の本あり！と思つた。私は正直この本から教へられるところが多かつた、それといふのは私が直接してゐる幾多の問題を解決してくれたことにもよろう。

プロレットカルト即ちプロレタリアン・カルチユアーに關する理論と實際とも考察するに、この本は唯一の本だ。實際の各國に於けるプロレットカルトの狀態を歷史的に概觀し、特に、革命前期のプロレットカルト即ち獨立勞働階級教育の最も發達した英國と、革命後期のプロレットカルトが實現されつゝある露國の現狀に就ては最も詳しい、われ〳〵は、この本によつて、われ〳〵の、われ〳〵によつて管理される、われ〳〵自身の利益を目的とする敎育の必要を考へさせられることが深い。われ〳〵の前に横たはる三つの協同作戰の手段、即ち政治的組織と、勞働組合側の團結行動と、プロレタリアン・カルチユアーのうちで、最後の手段即ちプロレットカルトが、全然イニシエーテヴの時代を出てゐないわが日本に於ては、この本は裨益するところが少くないと信ずる。

この本が日本の無產階級運動の前衛を以つて任ずる人だちから大いに考慮され、中にも小牧君や新居君等の注意を惹く所があつたといふこと、又早稻田方面では、實地にプロレットカルト・クラスを創設する計畫があるといふことを、最近、聞き知つた、私は大いに愉快を感じた。

『ロシヤの悲劇』其他

室伏高信

アレキサンダー・バアクマンとエムマ・ゴオルドマンの二人の無政府主義者の名は種々な意味で今の日本の社會主義リテラチユウアのうちには出てくる。そのバアクマンとゴオルドマンは今伯林にゐるが、最近の私のところへ次の三冊の本を送つてきてくれた。

1, Alexander Berkman, Russian Tragedies
2, 〃, The Kronstadt Rebelion
3, Emma Goldman, The Crushing of the Russian Revolution

このうち前二冊はロシヤ革命叢書としてバアクマンが引續き出版してゐるものでこの外にも何く既刊のものが一冊ある。

「ロシヤの悲劇」の表紙裏にバアクマンは「自由社會は虛言のうへに建てるとは出來ない」と書きつけてゐます。このことは無論ボルシエヴヰキの虛言と云ふことの意味である。ボルシエヴヰキの側から出る夥しい宣傳書を彼は虛言だと云ふてゐるのである。そしてこの所謂虛言宣傳に對してロシヤ革命の眞相も傳へると云ふのが此叢書刊行の趣旨だと云ふ。

ボルが虛言宣傳をするかアナが虛言をもつてロシヤ革命を傷つけつゝあるかは人によつて見るところが違ふであらうが、バアクマンの書いたものゝうちには可成教へられるところが多い。私のやうにロシヤ革命をボルの出版物によつてばかり（それだけでも數百册になる）研究してゐるものにとつてはこうしたアナ側のものを見るのは非常にためになる。「クロンスタット・レベリヨン」は特に具體的な事實の記錄であるだけ役に立つ。

萬國欄

最近のドイツ

北昤吉

私は昨年の十一月ハンブルグから、日本郵船會社の汽船としては、レコード破りのスピードを出す新造の長崎丸で、若膨歸つて來た所謂歸朝者の一人である。ドイツに就いて最新の知識を懷いて來たと、他人にいはれても否といはれぬ破目にある。殊に私は一九二〇年のカップ博士の反動革命後すぐ伯林に入つて彼れ是れ二年七ケ月ドイツにゐたのであるから、革命後のドイツを能く見たとは云へなくとも、少くとも長く見たと云ふ資格は充分にある。此の最小限度の有資格者として、此の頃のドイツに於ける二個の顯著なる現象について談らうと思ふ。

第一はドイツの國民思想が非常に混亂して矛盾と反對が多いといふことである。若し政黨の政綱が、國民の夫れ〳〵の階級地位に即した人生觀の表現であるとしたならば、如何なる非常手段を以てしても帝政を復活しやうとする「獨逸國粹國民黨」からレエニンをも不徹底な妥協家と認めて「獨逸統一共產黨」から分離して一派をなしてゐる「獨逸共產勞働黨」までを包容してゐる現在のドイツは思想的無政府に近いほどに混沌たることは否まれぬ、勿論此等の兩極端の要素が平衡を保つて有機的統一をなしてゐるならば、所謂「反對の歸一」の原理が實現されたことによるが、現在のドイツには之は認められぬ。一度ビスマルク的の上からの鐵血的統一が失はれてからは、反對性の相撃相殺が一般的な現象となつてゐる。サンタヤナの所謂エコチズムに促はれてゐるドイツ人は、自己の小主觀を絕對化して、政治上の獨在主義（ソリピスムス）又は分主主義（パンチクラリスムス）の弊害を露骨に現はしてゐる。政治的不寬容更に其の極端としての政治的暗殺が頻々として發生してゐる。

批評の機會反對の自由を奪つて、反對黨を謀反人視する政治的不寬容は、民衆生活に於てのみならず、大學生活にも及んでゐる。現在のドイツの大學の學生は自治的憲法を有してゐるが、學生團は帝政黨より共產黨までの各種の政黨を反影して互に角打き合つてゐる非戰論の教授ニコライ擁護團と排斥團とのいがみ合ひは其の著しい例であつた。又ラウテナウ暗殺の際、ドイツ政府は國葬の故を以て大學の休講を命じたが、ハイデルベルヒ大學ではノーベル賞金の受領者レナルド教授は政府及び大學當局の命令を無視し之が爲め學生等は教授を襲擊するものと擁護するものとの二派に分れて相爭つた。此んな事は小學にも及んでゐる。教師共者にも帝政黨あり共和黨あつて、小學生の柔軟なる頭腦は徒らに混亂するのみであるが、五月の勞働祭を國祭日としやうとする社會黨の提案が少數の差で議會に破れると勞働者の子弟は勝手に休學したが、斯くの如きは小學教育の上で著しい事態であらねばならぬ。

第二の著しい現象は或る種の中產階級の人々の窮迫である。ドイツの現在に於て勢力あるものは資本の力と勞働者の團體である。此の何れかの勢力に關係なき種類の人々は悲慘なものである。ドイツに於ては、現在では、勞働者丈けでは勿論政治は出來ないが、之を無視しても政治は出來ぬ。而も資本家とプロレタリアとは決戰をすれば、共倒れになる。一方勝つて他が全敗することは豫期されぬ。從つて二者は妥協する。スチンネスはドイツの桂公にして、社會黨は當年の政友會である。二者は時々小ぜり合はするが多くは妥協し、時に情意投合する。シャイデマンはカッセルの市長、ノスケはハンノヴァーの良二千石、鞍工出身のエベルト君は大統領である。實に情意投合せる政友會の首領の如く何れも名譽職に就いてゐる。ドイツ社會黨は其の形大黨なる點に於て、幹部專制なる點に於て、政綱の融通のきく點に於て、實にドイツの政友會である。リープクネヒト及びハーゼルに對する幹部の壓迫、殊に戰時中エーベルト一派が官權と結托して、獨立社會黨の機關紙

の爭奪戰に於けるドイツ社會黨の幹部專制と其のオポーチュニスト的態度は正に政友會以上である。革命後社會黨が伯林大學を社會主義化せんとて推した所謂「革命教授」レンシュ君が今はスチンネスの機關紙に主筆なるが如き、ベルンシュタインが聯立內閣も亦階級鬪爭の一形式なりと强辯せる如き、更に法華經の行者ならぬ、註釋者たるカウツキーが資本主義的社會より社會主義的社會に至る過渡期にはプロレタリアットの獨裁政治ありとマルクスの云つたのは誤りで、此の過渡期には資本家と社會主義者との聯合內閣の時代ありといつて、後ればせに修正派に詫び證文を出した如き、獨逸社會黨が自由黨の後身政友會ならんとする經過を說明してゐる。

斯く資本家とプロレタリアとの妥協は資本家を利せしむると共にプロレタリアを有福ならしめた、伯林の街路の撒水夫は大學教授以上の收入を得、大學の助教授の如きは其の收入非熟練勞働者の收入よりも遙かに些き有様となつた。生產者專ら(?)は所謂中產階級中の月給取階級、更に小金を所持して其の利子によつて生活せるもの、一二軒の借家を有つて家賃にて渡世するもの殊に退職軍人、其他恩給生活者等は緊急狀態に陷れた。此等の階級の人々は鞏固なる團結を有しないが爲めに、自からの運命を救ふことが出來ない。

人若し何故にドイツの革命は徹底せざりしかを問はんと欲せば、先づ政友會に行つて問へ。政友會は何故に革命に熱中しないかと。革命は最も壓迫せられたる分子の暗中飛躍である。佛蘭西革命に於ても、露西亞革命に於ても、最も壓迫せられたるものは農民であつたから、農民革命が勃發した。ドイツのプロレターリアは千金の子、故なくして街頭に死するものではない。

若しドイツに革命が繰り返さるゝとせば、所謂中產階級中最も悲慘にして團結ある退職軍人を因子とするであらう。伊太利の黑シャツ黨は單なる反動黨に非ず、資本家の不當利得とプロレタリヤの比較的有福に對する中產階級中の最も悲慘にして而も少數ながら鞏固なる團結を有するものゝ反抗運動である。近頃ミュンヘンに灰シャツ黨の成立を傳へて來た、プロレタリヤ以下に落ちてゐる成貧階級の擡頭として意義がある。而して勢力を占むるならば中心は退職軍人であらう。

米國K、K、K、の運動

伊藤登

相反する二つの思想が對立するとき、それに決定的の力を與へるには、常に組織された暴力を先要條件とする。そしてそれが白色である場合たると赤色である場合たると、を問はず、組織されたる近代社會にあつては、其の潮流の有する諸勢力は、何時でも組織化されなければならないといふ考へは、ムゾリニを俟つまでもなく、明らかに看取し得られる近代社會運動の一大特徴の一つである。これまでは、棒とタールとフヱザリングとを武器として變幻出沒したK、K、K、（クラックスクラン）が、最近特に昨年の春頃から、著しく其の組織を擴大して、暴力戰略を國家の權力に向ける樣になつたのは、明白に如上の事實を裏書するものに外ならない。斯の如き、即ちすべての國家權力を把握せんとする此の秘密結社の計畫は、昨年の秋、舉行された總選擧の際當選議員中の數名が純然たるK、K、K、の所屬員であつたことが暴露するに及んで、漸く世間の耳目を聳動せしむるに到つた。米國に於て、近代社會の生んだ最も祕密的で、且つ最も恐るべき脅威を、現在米國人に與へつゝあるこの特異なK、K、H、運動の近況を茲に通信しておく。

一般に最初、此の結社に加入する際には、すべての人に次の如き宣誓を強要する。「私が今、K、K、K、の社士に私の忠順を誓ふと俱に、私は此處に、今後、其の名譽と、智能ある市民としての誠實とにかけて、K、K、K、の社士、帝國陛下、及陛下の指導下にあるすべての勢力に對する、不死にして間斷なき忠順を、保障し、誓言する。私は此處に、

K、K、K、の祀士の帝王の權威の前に、無制限の忠順を示す。神よ、私の忠誠と、誠意とに於て、吾々の進路に向つて確乎たる歩みを續けさせ給へ。」

これまでの嚴式な傳說的な運動形式から、政治圈内に喰ひ込まふとするに當つて、其の最初の手段が質から數へと移動しだした。今これ等の結社に果して幾何の人員があるかは非常に秘密にして居るので確かには判らないが、千九百十五年、歐洲大戰中に再組織されて以來、五ケ年間に約五千人位に過ぎなかつた。所が、現在では、これが支部を持つて居ない州は全米中一つもないと云ふ勢ひであつて、去年の八月、イー、ワイ、クラーク氏の報ずる所では、壹週間に壹萬人の割合で增大しつゝあると云つて居る。同月の調書によると、――だけで二萬人、クラニズムの最も盛んなテキサスでは、已に彼等の政治的威力をすら持つに到つた事は、昨秋の選擧が示して居る。

彼等が如何に急速に、政治圈内に侵入しつゝあるかは、次のワシントンのクランから其の本部に宛てた手紙によつても察する事が出來る。

「……。ワシントン、ではクランは、目下素晴しい勢ひで發展して居る。此の州で最も特徵ある事は、國民の最も信頼し、國民にとつて最も重要な地位にある名士が、吾等の仲間に這入つてきて、吾々の說く所に信じの誠を捧げて居る、と云ふ事である。……此の團體も今では一千人に近いのだから、近い中に陛下の宮庭に其の團體存在の認可を願ひ出るであらう。……。」（千九百二十二年六月二十日附）彼等の最近の標語『先づ黨員の數、次いで力』は、特に紐育の如き大都市に施す彼等の戰略を言ひ現はすものである。紐育の「帝王の使節」はイー・デイ・スミス氏であるが、流石に、紐育のやうな近代化した大都市ではK、K、の鬪も、甚だ頭を惱やまして居るらしい。最近ある人の手に落ちた此の結社のオーガナイザーの手紙だといつて發表されたものに依ると、紐育でも、已に壹千人以上の准黨員があつて、其の中には、紐育水上署長があり、大新聞の記者が五人あり、倫陀警察の某々大官が四人もあるさうである。

オレゴン州は西北地方ポートランド州は中部地方、各々一帶の中心地であるが、最近發表された報告の中に下の如うな一節がある。『ワイオミンの「帝王の使節」からの報告では、當該地方の壹千人以下の人口の小都市で、吾々は一ケ月に百二十五人の黨員を贏ち得た。然るに今、十ケ月の後には約二倍してゐる。斯の如き事實が、公道五十哩はなれた一寒村に於て見る事が出來るのは、如何にも興味ある事である。……。モンタナ州でも、ワイオミンでも、クランの數は、過去數迴の間に驚く可く增加した。今に、「帝王國」としての正式の發表をして、單獨組織を作る事が出來るであらう。』

此等以外に、公式のクラン黨には屬しないが、其の支流として婦人のクラン團が、近時甚だ注目すべき狀態にある。を中心とする『白色亞米利加プロテスタント研究俱樂部（W. A. P. S. C.）は、昨年五月始めて設立されたものであるにも拘らず、已に其の加入者一萬二千人を算するといはれて居る。此の俱樂部入會の誓言の一節に、「私は此處に誓ふ。私は私が家に在る間は、亞米利加生れの白色若くはプロテスタントに非ざる如何なる人間をも、本團體に屬す可き團員の子供の教師及び看護婦として、決して雇用すまじく、或は又、如何なる斯の如き人間をも斯の如き職業に推薦する事を拒むであらう事を」といふやうなことがある。同樣な團體は、テキサスで三つもあるが、最も勢力のあるのが、『見えざる帝國の貴婦人會』である。

かくして、黑人を根絶して白人種の優越を確保することを、その發生目的とするこのK、K、K、は、今やその當初の目的を擴大して宗教及び勞動者に社會運動に對して反動的に對抗するのみならず政治的の權力をも把握せんとしつゝある。が、彼等が、かの伊太利のフアシスチーの如く、その信奉する暴力によつて政權を獲取し得るか否かは、一に時日の推移に待たなければ斷じ難いところである。

讀書雜感

木村泰賢

◎自分にとりては、讀書は三度の食事の如きものである。之なくしては一日も生存することが出來ぬ。乍併、何人も三度の食事に對しては特別の興味と執着とのなきが如くに、自分の讀書にありても亦左樣である。特に全心を沒入して飽かず熟讀玩味してゐるといふ一書又は數書を有せざるは、顧みて讀書子として非常に淋しき心地もする。これ目下の自分にとりては專門の研究が忙しいので、而もそれが爲には絕えず關係資料や參考書を涉獵するの必要があるので、他に興味を惹くやうな幾多の書籍あるも之を顧みてゐる遑がないからである。而してこの結果として、自分の讀書は段々と機械的になり、從てその智識や趣嗜も稍もすれば一局部に偏するやうになることは、自分自身も能く承知し且つ恐れてゐる所である。自分が一けの讀書生として常に理想としてゐる所は、專門書の涉獵を中心としたからも餘力を以て、廣く專門外に關する書籍にも目を通ふし、種々の事象を正當に批判し且つ味得しべき理解力と見識とを養はむとする所にある。而して今の讀書生活のその理想に添ふことの出來ないのは、恰も、きまり切つた定食の外に趣味としての食事をとり得ざると同じく、甚しく沒趣味生活たるを免れずとは不斷に自分の痛感してゐる所である。而もこは獨り自分一個許りの焦慮ではないらしい。專門の學究に沒頭してゐる人々の中には自分と同じ悩みを抱く人の尠からざることは、先輩知人の座談などからも推知し得らるゝのである。思へば讀書することゝ讀書の趣味の一致することも亦難い哉と言ふべきか。せめて夏期休暇だけでも、職業的讀書を廢して趣味的讀書に耽くるを

得ばいかに幸福であらう。

◎之に就て思ひ起さるゝことは英獨の間に於ける學者的教養の相違である。獨逸の學者は大抵、所謂大學系の人々で、殊に名ある專門家は概ね大學の教授である。彼等はその初め學生として大學で研究し、學位を得るに及ぶや、私講師として大學の職員となり、それより員外教授、正教授と進み次第にその學問を大成するといふ順序を經てゐるのである。反之、英國にありては——勿論、右樣の經過による大學教授としての學者も尠くはないけれども——學者と雖も必ずしも初より專門學に志して而もその大學內で大成すと限つてはゐない。政治家より學者に拔けた人もあれば官吏にして有名な專門的著述を公にしたものもあり、宣教師より特殊の專門家となれる人もあるといふ工合である。即ち言ひ得るならば本職の側ら趣味として學問し讀書してゐる間に、知らず〳〵の中に專門學者となつた人は非常に多いのである。自分の專門の立場から言つても梵語、印度哲學、佛教などをやる學者は獨逸では概ね初より斯學に志した人で而も大學教授の地位を占めてゐるけれども英國にありては素人（アマチュアー）の大成者にして大學教授以上に名高い人が尠くはないのである。巴利佛教學者として名高いリス、デイヴイヅ氏は本と錫蘭島に於ける司法官より拔けた人であるし、先頃「印度教及び佛教」といふ大冊を公にした、エリオツト氏は現に駐日英國大使であるといふ有樣である。一事は萬事で、凡ての方面に於て英國にはかゝる種類の學者の尠からざるは最も注目すべき事象である。而もそは必ずしも今に初まつたことではなく、昔より英國の學風として左樣の傾向があつたものである。哲學の例をとつて見ても、獨逸に於ける代表的哲學者は概ね教授であつたに對して、英國のそれは概ね他の職業に從事した人々であつた。ベーコンでもロツクでもバークレーでもヒエームでも凡て職業的哲學者ではなく、全く素人として哲學的興味から出發して遂に所謂英國哲學を建設するに到つたのである。

然らばこの傾向の相違はいかなる結果を產み出してゐるかといふに、獨逸の學者は流石に初より專門家として而も所謂大學風の教養を受けただけに、その專門とする所に於て極めて緻密の點にまで進むを特色とする。微に入り細に入りて、而も型には

めて論究し行くの結果として、可なりに下等な素質の人でも遂には何等かの成績を擧げることになるのである。乍併、その餘りに馬車馬的に進むの弊としては專門外のことに關しては、稍々もすれば極めて無智で從てその趣味性格も可なり固陋たるを免れざる學者が尠くはない。之に對して英國學者の成績は――殊に趣味から出發した人にありては――往々にして餘りに常識的となり、所謂科學的(wissenschaftlich)たるを缺くの弊を伴ふことは珍らしくはないけれども、また流石に趣味から出發しただけにその到れるものとなれば所謂職業的學者の到底、及び得ざる境地を開拓する人も尠くはないのである。常識と商業の國と見ゆる英國に時々一時代を劃すべき學者の輩出したのも所詮この素人的趣味性の浸透の結果ではなからうかと自分は觀察してゐるのである。從て英國の學者は總じて趣味も廣く人格も圓滿で、何事も談じ合うても相當に理解を有する所、人として極めて快感を與ふるものあるのも勿論である。

◎然らば學者的敎養としてこの何れを撰ぶべきかといふに、勿論、或一事を成功しやうとするには、獨逸流によるのは便宜であらう。殊に現今の如くに凡ての學問は段々と細かに分科し行く時代にありては一事に對して馬車馬的に進むにあらざれば、目立つた成績を擧ぐるに可なりに困難なものがある。乍併、學者も人である限り、自分としては矢張、英國流の餘裕のある研究法なり讀出法なりを羨まずには居られぬ。殊に官吏、技師、宣敎師などにしてその餘暇を以て、本職以外のことに關して種々の書を涉獵するものゝ多きことは、讀書といへば學生、敎師、職業的學者に限るかの如くに心得てゐる日本の風習に對比して實に羨望に堪へざるものがあるのである。一千九百廿年(大正九年)の秋に牛津に國際的哲學大會があつた際、自分も聽講者の一人として出席した。英佛米より出席した種々の哲學者に接するの愉快も去ることではあるけれども、特に自分の感に打たれたことは、是等哲學者の間に伍して、バルフヲーア、ハルデーン等知名の政治家が、種々の問題に關してその意見を述べたことであつた。政治家といへば單に政權爭奪のために政界を泳してゐる連中許りと日本を標準として考へてゐた自分は之を見て流石に英國だと尠からず感に打たれた次第であつたのであ

る。英國にウイルソン流の學者的政治家のあるや否は自分の知らぬ所ではあるけれども、政治家にして哲學を談じ得る人のある所を以て察すれば、學者にして政治を談じて而も第一流たり得る人も尠くはあるまいと思ふ。何事も分業の世であるから、雜駁たる讀書、雜駁なる智識を以て滿足することは勿論、大に避けねばならぬ。しかし如何なる職業に從事するにせよ、時々專門外の書を讀みて智識と趣味を廣くするの必要のあることは、自分で痛感してゐることだけに廣く一般にも薦めて日本の讀書界を高上したいと思ふ。

◎讀書欄に筆をとりながら、やゝ脫線しかけた。最後に本欄の趣意に添ふべく、自分の專門とする所、若しくはそれに近き立場よりして、こゝで現今日本に企てられてゐる東洋の古典に關する三大翻譯事業を指摘したいと思ふ。

三大翻譯事業とは第一は光壽會の譯經事業、第二は世界聖典文庫の奧義書(ウパニシャッド)全譯、第三は國民文庫刊行會の國譯漢文大成である。是等の事業は既に種々の形で盛に世に廣告せられてゐるから、こゝに改めて紹介的說明を要しまいと思ふけれども、極めて簡單にその事業の性質を述ぶれば——第一の光壽會は大谷尊瑞氏の發起にかゝるもので、從來、佛教は凡て漢譯のみを通して研究されたのを不完全とし、直接に梵本を之を邦譯せんとして起した事業である。やつとその緒についた許りであるから、未だ著しき成蹟を擧げて居らぬけれども、高楠、榊の兩博士を顧問として東西兩京に涉りて種々の學者がこの事業のために力を致してゐるからその成功の曉には佛典の研究及び通俗化に貢獻するものが尠くはあるまいと思ふ。佛教渡來以後千三百年を經て、日本としては初めての事業であるから、讀書界としても最も注目して然るべきものである。

第二の奧義書全譯は世界聖典全集會の事業で、專ら高楠博士を中心として東大の印度哲學及梵文學關係の執筆にかゝるものである。歐洲にありてはこの奧義書は已に百年も前から研究され從てこれに關する數多の著譯もあるけれども、日本にありては、其名は已に可なりに聞えてゐながら、未だ何等の譯書のなつかたのが今やこの譯によつてその缺を補ひ印度思想の研究に對して一大文獻を加ふることになつたのである。殊にこの奧

義書の特色とすべきは奥義書の名を有する聖典を殆ど全部網羅せしむとしたことで實に一百有餘種に上るのである。之を歐洲に於ける最大譯書たるドイセン氏の「六十奥義書」(Sechzig upanishads des vedas) に比しても、實に約五十數の多數を含んでゐる譯で、この意味に於てこの事業は奥義書に關する翻譯中世界最大のものであるといふことが出來るのである。

第三の國譯漢文大成は國民文庫刊行會が國譯大藏經の事業に引續いて企てたもので、服部、幸田、宇野、鹽谷等の諸博士を初めとして、十數の專門家の執筆にかゝるものである。所謂諸子百家に渉りて——中には邦譯するに極めて困難なものあるにも關らず——苟も名ある支那の古典を全部網羅して、國譯と同時に註釋を加へた所、眞に驚嘆に價すべきものがある。之に依つて從來、專門家のみに開かれてゐた文學、哲學、史學に關する支那の古典的文獻が一般に解放さるゝことになつたのは日本文化の進展上、最も注意すべき事業と言はねばならぬ。

以上の三大事業は何れも一新時期を劃すべき性質のものであるが、而も偶然時を同じうして計劃され進捗してゐるといふことは、月並の言ひ分ではあるけれども、所謂、聖代の慶事と言つて然るべきであらう。殊に自分の是等に對して意味深く感ずる所以は、一つには是等は凡て自分の外遊中に計劃され歸朝と同時にその進展を見せられたといふことゝ、も一つには、外遊二ケ年半の間に我國は可なりに濃厚に歐米化した側らに、尙ほ、かゝる業が着々として成功してゐるのは、東洋文化の價値を認むる人の尠からざるを示されたことゝである。國家存在の意義その文化的價値といふことに就て、多少考へさせられて來た自分としては、かゝる事業の進展を見て一種の衝動を受けざるを得ぬのである。アインシュタインを讀むもよし、マルクスを研究するもよし。しかし、日本人としては、その文化の性質上、かゝる種類の東洋文化に關する書籍を少しも一通り味つて置くことを忘れてはならぬと思ふ。

我國に行はるゝ租税論爭

堀江歸一

租税制度と政治

一國の租税制度が如何なる方針に依つて、構成されて居るか又如何なる狀態に在るかと云ふことは、要するに其國の政治の動き方に依つて定まる問題である。歐洲戰爭の爲めに、交戰諸國の租税制度は混亂に混亂を重ね、殆ど一定の系統とする所を失つたやうなものゝ、尙ほ租税の負擔を國民に分配するに就ては餘程多くの程度まで民主的思想に支配されることの著しきものがある。戰前に於ては固より其通りであつて、如何なる國の税法も偶然的利得であるとか、金額の大なる所得であるとか、相續に依る所得であるとか、財產から生ずる所得とか云ふやうな課税目的物に對しては、其收得者の納税力を增進するの故を以つて、反對の性質を有する目的物に對するよりも、重率の租税を賦課し、其增收に依賴して、歳計を維持する結果動もすれば社會下層階級に苛重の負擔を加へる虞れある消費税は之を特殊の目的物に局限する方針に出でた。唯佛蘭西の如きは、從來消費税や、專賣業の收入に依賴する傾向が著しきことを免かれなかつたが、近年に至つては、頻に累進所得税を加重し、又相續税にも重きを置き、而して其所得税に於ては納税者の人的狀況例へば教養す可き兒童なり、扶養を要する人なりが一家族中に幾人ありて、家長の納税力に幾何の減縮を來すかと云ふやうな事情を顧みて、税額の決定に斟酌を加へる方針に出でた。又北米合衆國に於ても、多年直接税を中央財政に於て、依賴するを得なかつたが、千九百十三年の憲法改正は此成例を一新し、同年を以つて國税としての所得税法が成立して以來、歐洲戰爭に臨んでは、所得税の税率は兩三回に亙つて加重され、遂に世界の累進税法を通じて、最高税率の記錄を示すに至つたばかりでなく、同時に相續税も亦國税たる地位を占め、戰前と戰後とを

比較すれば、合衆國の租稅制度は殆ど其面目を一變し、形態を更新したものと云へる。若し夫れ英國の所得稅が戰時財政に於て、最高稅率五割一分六厘の高きに上つた一事を擧げたならば、如何に英國が所得に對する課稅に重きを置くかを理解し得るであらう。固より歐米諸國と雖も、消費稅を利用しない譯ではない。消費稅の徵收の容易であり、又其負擔に對して異論や、反對の少ないことは、諸國を驅つて、消費稅の收入に依賴せしめたに相違ないが、尙ほ一方に直接稅の收入を重要視し、其收入を增加することに伴つて生ずる不便困難に對抗したことは、吾人の何としても閑却す可からざる事實に屬するのである。

租稅制度の律される方針

戰時に於て斯く端を發した直接稅尊重の傾向は必ずしも戰時經費の膨脹の急なるに當つて、己むを得ず行はれた所と見ることが出來ず、戰後の今日に於ても依然として其趣きを存して、渝らない、或は將來に亙つて、渝らないかも知れないと思はれる。即ち此趨調には動かす可からざる根柢があるのであつて、而して其根柢として私は政治上に於ては、デモクラシーの思潮を擧げ、財政上に於ては、納稅力說を示すことに躊躇しない。換言すれば戰時から戰後に至る租稅制度に右に述べた異動を來したのは、租稅制度が斯の如き思潮と學說とに支配される結果として、見る可きものであつて、今日に於ては如何なる國も租稅の賦課に就ては、第一租稅をして國民の納稅力に伴はしめること、第二個人の有形的要求であり、又主要の要求であるものを充足する方便を蠶食するが如き租稅は之を賦課せざること、第三偶爾的利得又は不勞利得に課稅し、是等を社會共同の所有に移すこと、第四大なる富の私人の掌裡に歸する勢を防遏する計畫の下に、課稅することの四大方針を根據としなければならぬことゝ爲つた。斯る方針を以つて、租稅制度を組織してこそ、富の分配に於ける公正を重んずる社會思想と租稅負擔の公平を主とする財政學說と、正に一致す可き所に於て、一致したのであつて、其諸國の財政殊に租稅制度を利導しつゝあることも亦偶然であるとしないのである。

或は以上擧げた租稅の四原則はアダム、スミスの有名なる四原則に比較して、大差なしとする人があるかも知れない。然しスミスの四原則なるものは、其第一に於てこそ、租稅負擔の公平の重んじられなければならぬこと、即ち國民の收入に比例して、租稅の分配されなければならぬことを論じたが、第二以下

第四に至る原則は何れも稅務行政に於て、立法者又は爲政家の服膺す可き要件を述べたのであつて、觀察の下し方に據れば、些々たる事柄とも云へる。當時は或は之を以つて足れりとしたかも知れない。政治に於て、財政に於て、租稅負擔の分配を律する學說の更新された以上は、租稅の原則亦スミス時代の舊套に依ることを許されざるに至つたのである。

租稅の原則と我國の稅制

如上の見地から、我國現在の租稅制度を觀察したならば、何人も其時代後れの要素に富んで居ることに、一驚を喫せざるを得ないであらう。先づ租稅負擔の分配に關する狀況から考へると、大正十二年度豫算に於て、租稅の收入總額七億四千三百七十六萬圓の內、直接稅の系統に屬し、納稅者自身の負擔に歸する地租所得稅營業稅並に相續稅の收入は三億三千五百二十五萬二千餘圓であつて、他の四億八百五十一萬圓は盡く消費稅系統の租稅であり、而して此外に同種の國民負擔である郵便電信電話收入、森林收入、專賣局益金等を合したもの〻三億二千二百四十九萬圓に上ることを知つたならば、我國に於て國民の財產所得、收益等に對する租稅と、國民の消費に對する租稅との間に、如何に均衡を失して居るかを認めるに苦しまないであらう前者に屬する租稅は多く國民中、納稅力に豐なる者を限つて、其負擔を及ぼすを得るし、殊に財產、所得、收益等の免稅額を或る程度以上の高さに置くことに依つて、優に納稅者をして負擔の重きに苦しましめざるを得る道理である。然るに、我國に於ては所得稅の如き、近年稍や改正されたと云ふもの〻、尙ほ八百圓以上の所得に對して、遠慮なく課稅の及ぶのは勿論、地租は小規模の自作農に對する負擔と爲り、如何なる小賣商店の主人も其賣上金額に對し、建物の賃貸價格に對し、將た又其從業者に對して、營業稅を賦課されることを免がれないし、資本として生產上に活用する價値なき相續財產に對しても、亦納稅を强ひられざるを得ない。直接稅系統の租稅は專ら有產者階級の負擔に歸するとか、最も善く納稅力に對して、比例を保つとか云ふことは、財政學上の學說であり、又諸外國に於てこそ、其通り實行されて居るかも知れないが、我國に於ては全然事實に相違し、直接稅系統の租稅に屬するものでありながら、尙ほ中流以下の階級に重き負擔を及ぼしつ〻あることは、掩ふ可からざる所に屬する。若し夫れ酒、砂糖、醬油、織物に對する租稅なり、海關稅なり、將た又煙草鹽に適用される專賣事業の收

益なり、郵便電信電話の料金なりに至つては、其負擔に就て、負擔者の貧富の狀態を問はない結果、貧者の負擔の富者に對するよりも、比較的重きことは、免かる可からざる勢であつて、我國現時の租税制度――更に之を廣く云へば收入制度は極端なる程度まで、消費税に偏倚し、不公平なる負擔を國民に及ぼしつゝあること、論を俟たないのである。

我國租税制度に於ける積弊

我國に於て斯る不公平なる租税制度の成立したのは一朝夕の事ではなく、多年來の積弊である。即ち從來我國に於て、幾多の機會に臨んで、增税の行はれるや、常に選ばれたものは、消費税の類であつた一方に、税制整理の下に、多少なりとも税率輕減の行はれたものは、地租の如き、營業税の如き、相續税の如き直接税系統の租税に外なかつた。大正九年所得税法の改正に依つて、此税目に梢や見る可き程度に於て、增收の行はれたことの如きは、稀に見るの異例であつて、多くの場合に於ては直接税は幾回にも輕減された一方に、消費税の加重されることは、渝らざる所と爲り、斯る方針の繰返されるに隨つて、租税制度をして消費税に偏倚せしめる事實の動かす可からざるものを生じたのである。私を以つて見れば、斯の如きは我國に於ける團體的勢力を基礎とする政治の缺點を最も露骨に表明したものとするの外はない。即ち我國の衆議院が以前から農民の代表者を以つて充たされ、又近年全國大小の都市が獨立の選擧區と爲つてから、商工業の代表者中、衆議院に議席を持つ者の數も亦少なからざるに至つた。斯くて前者が地租輕減論を主張すれば、後者亦負けず、劣らずに營業税輕減論を以つて、之に應酬することを辭さない。而して消費税の如きに至れば、其納税者は負擔を他人に轉嫁せしめ得ることに安んじて、增税に對して必ずしも深く反對をしない、寧ろ增税を機會として、增税された金額以上に物資の代價を引上げることを望むかも知れず、又斯る增率に依つて、小規模の當業者が次第に競爭場裡に跡を絕つて、大規模經營者に便宜を與へることを有利とする事情もあるであらう。而して代價騰貴の形に於て、實質消費税を負擔する消費者は全國に散在して居つて、團體としての意識を持たなければ、階級としての行動にも出でない、何人も議會に於て消費者の利益を代表することに努力しないことの結果、政府の方から見れば、消費税こそ最も增徴し易き租税であつて、一方に輕減するに値しない租税と爲るのである。

衆議院の租税制度に對して、間違つた方針を取ること、斯の如くであるとすれば、貴族院の如きは、最も公正無私の立場に立つて、右の方針を矯制す可き筈であり、又此事が二院制度の存在する根據でなければならないのに、他の問題に就ては兎に角、税制問題に就ては、無智の然らしめる所か、私心の致す所か、貴族院の態度には殆ど稱揚す可きものゝあるを認めない。即ち所得税とか、相續税とか、貴族院議員の頭上に落下し來る租税に對しては、院内に於て屢々議論が惹起され、又實際に其輕減を主張して憚らない。我國に於て諸外國の趨勢に反して、相續税が減率を加へられ、今日殆ど名義上の收入を國庫に與へるに止る狀態に在るが如き、表面の理由は家族制を擁護する爲めに、租税に依つて、家産を傾さしめないと云ふ事に存するとしても實際は政府自ら貴族院の意嚮に迎合する結果に外ならないのである。然も貴族院は一般國民の負擔に歸する租税に對しては、果して幾何の程度に於て、眞面目に考量する所あるかと云へば、從來の事實に徴して、私は其大なるものあるを信じない。政府が徴税の容易を理由として、消費税に偏倚する租税制度を採用するとした所で、貴族院が國民全體に及ぼす利害に着眼して、之を沮止するが如き態度に出ることは、殆ど絶無であつて、多くの場合を通じて、政府の方針に附和雷同し以つて財政の基礎を鞏固にするを得たりと稱するようである。斯の如くして種々の方面から、我國租税制度が國民に及ぼす負擔に於て、公平を缺くに至つたものである以上は、之を矯制するには當局者が一方に確乎たる信念を持すると共に、他の一方に非常の勇氣を以つて、事に臨まなければならぬ道理である。然るに從來我國に行はれつゝある減税論とか、税制整理論とか云ふものには、甚だ感服す可かざる跡のあると共に、今回政府の議會に提出した税法整理の諸法案にも亦大なる缺陷ありとせざるを得ない。

營業税改廢の問題

近頃我國に於て盛に商工都市に行はれるに至つた租税に關する議論は營業税全廢論であつて、政府も亦之に動かされたものと見へ、各種營業に於ける課税標準に對する税額に輕減を加へて、營業税に千九百八十三萬圓の減收を生ずる提案をして居る。然しながら我國に於て改廢を要する租税は獨り一の營業税のみに止まるものでない、又税率の苛重なるものも亦營業税のみに限られない。然るに政府が今一の營業税を諸税法の內から抽き出して、若干の整理輕減を加へようとするのは、世間に行はれつゝある營業税全廢論に迎合し、少なくとも全廢論の鋒

錯を回避しようとする意に出でたものであつて何等誠意の認む可きものあるを知らない。我國營業稅法の運用の頗る困難であり、納稅者たる商工業者の階級に徵稅上の壓迫を加へつゝあることは、爭ふ可からざる事實である。然し租稅制度の體系から云へば、我國の營業稅は地租と相對的關係に居るものであつて、前者が商工業者に對する收益稅であれば、後者は農業者に對する收益であり、兩種の租稅が租稅制度に網羅されるので、農商工業者の總てに對する負擔に均衡が保たれ、租稅に最も重んず可き負擔の公平と、負擔の普及とを必要とする原則が行はれるのである。私は必ずしも營業稅の全廢に反對するものではない、國稅としての營業稅を全廢して、何等の支障を見ないような國家財政の狀態の生ずるに至ることは、私の希望して已まない所であるが、營業稅にして全廢す可きものである以上は、地稅も之を全廢しなければならぬ。而して斯く片端しから重要なる直接稅系統の租稅を國稅の內から、排除して、財政上に若干の違算を生ずる虞れなしとするを得るであらうか、又假に何等の違算を生じないとしても、尙ほ斯る廢稅に依つて我國の租稅制度をして畸形的のものに墮せしめる憂なきを得るであらうか、租稅制度の畸形的と爲ることを免かれしめようとする以上は、地租營業稅の全廢される一方に、之と均衡を保つ程度に於て消費稅の負擔の輕減されることを必要とする次第であり、斯くて租稅全體の負擔を公平ならしめるを得るに至るのであるが、斯の如きは何人と雖も、之を期するを得ないであらう。

大正十二年度豫算案に據れば、地租の收入は七千四百三十萬餘圓、營業稅の收入は四千九百四十七萬餘圓であり、合計一億二千三百七十七萬餘圓と爲る。國稅としての兩稅を廢止して、一方に是等を地方の財源に充てたならば、國庫の地方團體に交付す可き金額に或る程度の削減を加へ、地方團體をして地方的地租なり、地方的營業稅なりの收入に依つて、財政上に自立の計に就かしめるを得る譯であるから、中央財政は必ずしも兩稅收入の合計額一億二千三百萬圓を塡補することを要しないであらう。然も此收入額の大半が兩稅廢止に依つて、國庫の缺陷と爲ることは、豫め覺悟しなければならぬ所であり、隨つて兩稅廢止の曉に於て、廢稅論者は果して政府をして右の缺損額に相當する收入の餘裕を生ずるだけの行政整理を行はしめるだけの成算があるかどうか、行政整理に依つて、財源を捻出することが不可能であるとすれば、兩稅に代つて負擔の公平であり、又徵收の容易である新稅を起すを得る確乎たる見込があるかどう

か。廢稅論者は此點に於て、自家の計畫を天下に示す可き責任を持つのであつて、此責任を閑却し、漠然營業稅廢す可しとか、地租廢す可しとか、呼號するのは、却つて識者の信を失ふ所以たらざるを得ない。而して假に行政整理に依つて、地租と營業稅とを全廢する餘裕があるとしても、從來我國租稅制度に於て偏倚したる消費稅に手を觸れずして、獨り直接稅のみを輕減することの不合理であつて、益々從來の弊害を加重するに至る一事に就ても、思を致さなければならぬ。

政府の姑息なる提案

此點から考へれば、政府が今回稅制整理と稱して、營業稅に些細の輕減を加へんとしたことの如き、誠に詰らぬ企てゝあるとするの外はない。政府は之を以つて商工業者の歡心を結ばうとする考へであらうが、隴を得て蜀を望むのは、人事の常であつて、商工業者は營業稅の輕減よりは、其全廢されることを主張して已まない一方に、農業者亦營業稅に對する均衡上、地租の輕減若しくは全廢を要求するに至つた。憲政會が地租輕減を提案したのに相對して、政友會が地租を地方財源とする建議案を議會に提出したことの如き、又革新俱樂部が殆ど廢稅案一手引受けの任に當つて居ることの如き、誠に當世の政黨なるものが選擧民の利害や、感情を尊重するに急であつて、他を顧みざる卑劣なる態度を示すものであつて、吾人の陋とする所である。斯の如くであれば、我國に於ては政黨あるが故に、却つて租稅制度に破壞を招くの結果を生ぜざるを得ないのである。政府が今回議會に提案した營業稅法改正案に於て最も著しい點は從來物品販賣業、銀行業保險業、金錢貸付業、物品貸付業、製造業印刷業、出版業、寫眞業に營業稅を賦課するに當り、營業者の使用する建物の賃貸價格を課稅目標として、若干の稅率を課して居つたのであるが、之を廢除し、賃貸價格を課稅目標とする營業を倉庫業、席貸業、料理店業、旅人宿業に限らうとする一事である。何故に政府は斯る改正を發案するに至つたかと云へば、物品販賣業以下の諸業に於ては、建物の賃貸價格が營業收益の多寡を律する上に、直接の關係を持たない一方に、建物賃貸價格の決定が從來稅務官吏と納稅者との間に、常に爭議を惹起す種子と爲つた事實に顧みたものであらう。即ち改正の效果の及ぶ所は或る四五の營業者に對して、營業稅の負擔を緩和するだけの話であつて、他の種類の營業者に對して、課稅目標として、建物賃貸價格の殘存することゝ、其査定の不確實であ

ることゝに依つて、納税者に苦痛を及ぼし、不公正を加へる弊害は遁る所あるを見ない。斯るものを以つて、税法の整理とか改正とか稱するに至つては、殆ど其意を存する所を知るに苦しむのである。

如何にも營業税法には實施の當初から、今日に至るまで、常に反對の聲を絶たないやうなものゝ反對論は時日の經過し、營業税の負擔の納税者に慣れるに隨つて、薄くなつたことは、爭ふ可からざる事實であつて、我國營業税の場合に就て、私は佛國のカナールの云つた「古い税は良税である」とする格言を想起して、已まないのである。而して近年餘り強い反對論に接しなかつた營業税に對して、兩三年來遽に廢税の説を聞くに至つたのは、何故であるかと云へば、其根本の原因は好景氣時代に於ては、負擔に堪えられた税が不景氣時代に爲つて、堪え切れなく爲つたことの一事に歸着する。然らば營業税の全廢論の如きは、租税の本質に關係する問題ではなくして、景氣不景氣に隨伴する一時的事相に過ぎない、若しも他年不景氣の状況が一掃されたならば、今日廢税論に熱中する人々の態度も亦一變することを疑はないのである。

農村振興と地租

或は近年農村の疲弊の甚だしきを救濟し、緩和する爲めに、地租を地方財源に委讓するとか、或は地租に減率を施さうとか云ふ議論も行はれるやうである。農村の一部が疲弊して居るとは、恰も今日商工業都市が不景氣の打撃を蒙つて、困憊を極めつゝあるのと、趣きを一にする。然しながら農村疲弊の原因は果して何れに在りとするを得るであらうか。社會の全體を蔽ひつゝある不景氣の如き、其一般的原因であることは、論を俟たないが、更に特殊の原因としては（一）米價の下落の急劇に起つたこと、（二）米價の下落と相對して、一般物價の下落するに至らないこと、（三）農業勞働者が不足勝ちであり、其賃銀の不廉であること、（四）生絲工業や、織物業の不振である爲めに農業以外の仕事例へば養蠶業や、賃機業で收入を得て居つた農家に大なる違産を生ずるに至つたことを擧げなければならぬ。隨つて農村の疲弊した状況を救濟するには、其由來に遡つて、其れ〴〵の政策を施すことを要する。租税殊に地租の負擔の重い爲めに、農村が如何なる程度まで困憊して居るか、其證左の擧げられない場合に、獨り地租を輕減して、得たりとするが如き

は、思はざるの甚だしきものである。

營業稅と地租との兩者を國稅から除いて、地方財源に委讓する、斯くて國庫收入の上に生じた缺陷が行政整理に依る經費の緊縮に依つて塡補されゝば兎に角、一億二三千萬圓の餘裕を△出する程度の行政整理が行はれるが如き、在來の政黨內閣や、官僚內閣に列する人々を以てしては、容易に望まれない所であつて、廢稅の次に生ずる問題は必ず新稅の賦課に歸着するのである。然も今日我國の財政狀態に於て、新稅として如何なる稅目が擧げられるであらうか。財產稅とか、特別所得稅とか云ふようなものは、或は之に當る稅目であるかも知れない。然しながら是等の稅目が租稅として地租や、營業稅に比較して、如何なる點に於て勝つて居ると云ふ證據を示し得る人があらうかどうか、一個の問題たらざるを得ない。財產は必ずしも納稅力の表示として、完全なるものと見るを得ない。不動產たると、動產たるとを問はず、其價格査定に大なる困難の伴ふのみならず不動產に比較して、動產の所有者に依つて、財產の隱匿され、移轉される機會の多いことの動かす可からざる事實である以上は、財產稅は動產所有者と不動產所有者との間に於て、更に之を切言すれば都市の住民と農村の住民との間に於て、負擔に大なる不公平を生ぜざれば已まないであらう。而して動產の內に所有者に收益を與へない種類のもの即ち書畫骨董什器の類の增加するのは、社會生活に於ける進步の齎す事實であつて、隨つて一般財產稅を賦課する場合には、此類の財產に對する課稅の逸す可からざるものであることは論を俟たないが、然らば如何にして是等に向つて、公正なる課稅を爲すを得るかと云へば、何人も評價を公平にする上に於て、脫稅を防止する上に於て、其道なきことに、苦しまざるを得ないであらう。然らば地租營業稅が國稅として不適當である、宜しく地方財源に委讓す可しと云ふ議論が正しいとした所で、是等に代る可き新稅目が地租營業稅に讓らざる缺點を持つて居るとしたならば、何としても地租營業稅の廢止論に根據ありとするを得ないのである。

政府は今回提案した稅制整理案に於て、一の石油消費稅廢止を計畫し、之に依つて六十五萬圓の減收を豫期して居る。是れが政府に於て消費稅の方面に試みた唯一ツの稅制整理であるが消費稅を整理するに當つて、諸他の消費稅は之を閑却して、獨り石油消費稅を廢稅の目的物にしたのは如何なる理由に基くものであるか。鹽專賣法の如き、之を撤去しない限り、內地鹽の增收を得ようとしても、得ることの出來ないことは、夙に世人

の認める所であり、國民に廉價なる鹽を供給しようとする以上は、專賣法の廢止は焦眉の急であるのに、政府は此點に於て何事をも爲さない、通行稅織物消費稅の如きも、廢止の理由の存することは、今も昔も變らない所であるのに、遂に政府の顧みる所と爲らない、酒稅の如きも、稅額の重きに失する結果として、一方に酒の品質が粗惡に爲り、他の一方に酒造業が大資本家の手に集中される傾きを生じつゝあるのであつて、今日に於ては減率の必要を訴へつゝありとも見られる。斯る場合に政府の計畫する稅制整理が甚だしく常調を失したものであつて、單に營業稅全廢論に迎合する爲めに、營業稅を輕減することを以つて、整理の骨子とし、負擔者なり、其代表者なりが一ツの團體的威力を以つて、政府に廢稅の急を迫らないものは、如何に負擔が重からうが、稅法に缺陷があらうが、之を顧みないと云ふに至つには、何とした片手落ちの政治であらうか、抑も亦一部階級の利害に偏私した政治であらうか、私は我國に於て行はれる租稅關係の論爭に徵しても、將た又政府の計畫した整理案に照しても、政治上に於ける缺陷が稅制上の弱點を大ならしめつゝあるものであると云ふ感を催ほすことを禁ずる能はざる次第である。而して我國民が何時まで斯る不公平なる租稅の負擔に堪へて、忍從を事とするであらうか、是れ亦一個の疑問に屬するのである。

私は政府が所得稅の徵收を完全にする必要から。保全會社の取締に關する法律を工風したことに就て、我國民に遵法的精神の乏しいことを嘆ずるものである。如何なる法律と雖も、國民の遵法的精神に依賴して、始めて其効果を擧げるを得るのであつて、若しも國民に此精神を缺き、各自の見地に於て、不便とする法律の束縛から、漏脫することを考へて居つたならば、結局國家と國民と相率いて、煩瑣なる法律を制定し、又之を施行されるの弊を醸すに至るに過ぎないのである。我國の所得稅に於て、個人が變態的株式會社を組織して、個人所得に對する累進稅の負擔を免かれたのは、舊來常に見る所であつた。斯くて大正九年の所得稅法に於て、資產家や、事業家が會社を通じて、得る所得に對する査定を嚴重にすると、彼等は親戚同族を集めて、保全會社を組織し、各自の家計に要する費用まで、此會社の支出に仰がせて、各自の所得と爲す可き收入を少なくすると共に、保全會社の留保所得をも少なくし、以つて當然負擔す可き所得稅の負擔を回避する手段に出でた。斯くて政府は今回の改正に於て、

法人と其株主又は社員及び親族使用人其他特殊の關係ありと

認むる者との間に於ける行爲に付き、所得稅逋脫の目的ありと認むる場合に於ては、政府は其行爲に拘はらず、其認むる所に依り、所得金額を計算することを得と云ふ最も包括的規定を設けるに至つた。斯の如きは卒然として之を見れば、專制的規定であつて、立憲國たり、法治國たる我國に甚だ不釣合の觀を免かれないが、然も斯る規定あるに至らしめた一原因は我國民に遵法的精神に乏しく、例へば所得稅に不可なる規定があるとか、又は其稅率が重いとか云ふ場合に表面から合理的方法に依り、又合法的手段に訴へて、之を改正しようと努力せず、脫稅に依賴して、自分一個の負擔を輕うしようとする弊風がある爲めに、政府をして之に當ることの必要から、上記の如き專制的手段の實行を已むを得ざるに至らしめた次第である。或は稅率の苛重である場合に、逋脫の手段を弄ぶのは、人情の然らしめる所であると云ふ辯解も行はれるかも知れないが、法律の存在する以上は、如何なる惡法であつても、之に服從する、唯其惡法であると考へられる限り、國民は死力を以つて、最も早い機會に之を廢止することに努めるこそ、立憲國民として爲す所であるとしなければならぬ。國民に遵法的精神を缺くことは、却つて愚圖愚圖の間に惡法を存續せしめる所以であつて、私の與せざる所である。

外國の物眞似を排す

我國に於て行はれつゝある租稅論爭に接して、私の甚だ不思議に感ずる所は、外國に於ける事實を直譯して、其直輸入を謀らうとする傾向の著しいことである。我國營業稅の母法は實に佛蘭西の營業職業稅であつた。而して今や佛蘭西に於て同稅の廢止されるに至つて、我國に於ても亦營業稅廢止の議論が起つた。佛蘭西に於て營業稅廢止に伴ふ歲計上の缺陷を塡補する爲めに、特別所得稅の制度が起ると、我國にも同樣の主張を生じた。更に近年獨逸に於て財產稅法の發達著しきを告げるや、我國に於ては、頻に財產稅創設を必要とする議論を生ずることゝ爲つた。偶中か、模倣か、孰れとも判斷を下さないが、何としても我國の租稅論が外國に行はれる所に追隨するに急であることは、爭ふ可からざる事實に屬する。然も我國には我國特殊の事情があるとすれば、斯る模倣追隨を離れて、一家の說の存せざる可からざることは、勿論であつて、私が自主的租稅論の起ることを希望して止まない所以である。

時評

羅馬法王の國際的地位について

恒藤恭

日本國政府が羅馬法王廳と使節を交換することが、日本の國民の立場から見て望ましい事柄であるか否かといふ問題については、私は相當の程度の確信を以て判斷を下し得るだけの準備をもつてゐない。玆には唯、日本國政府が羅馬法王廳と使節を交換することが、國際法の原則に違反するものでないといふ點だけを、指摘したいと思ふ。

今年の一月の初めに發表された所の、佛教聯合會の『羅馬法王廳に外交代表者駐派に對する反對宣言書』を見ると、反對理由が五項目揭げてある中の第一項には、『帝國政府と羅馬法王廳との全權公使の交換に依り、羅馬法王を國家の元首と公認するは、國際公法上の原則に反す』と記してある。羅馬法王廳との使節交換に反對する人々の多くが、その反對理由の一つとして、右のやうな事由を加へてゐるか如何かは、私にはよく分らないけれど、少くとも有力なる反對論者の中に、さうした態度をとる人々があるやうに思はれる。けれども私の考へでは、かやうな反對理由は、妥當でない、言ひ換へると、羅馬法王廳との使節交換は、決して國際法の原則に牴觸するものではない。そして、羅馬法王廳への使節駐派に關する豫算の運命が、如何樣に決定しやうとも、それには拘はりなく、國家が羅馬法王廳と使節を交換することは、國際法の原則から見て、如何に判斷さるべきであるかといふ理論的問題は、それ自身正しき解答をあたへられるべき必要がある。

右に擧げた佛教聯合會の反對宣言書は、『帝國政府と羅馬法王廳との全權公使の交換に依り、羅馬法王を國家の元首と公認す

るは』と述べてゐるが、この命題それ自身があやまちに陥つてゐる。或る國家が羅馬法王廳と外交使節を交換したところで、そのために該國家は羅馬法王を國家の元首として公認するものといふことは能きない。かやうな謬つた命題が正しいものとして立てられる所以は、國際法學者の中に、『國家のみが相互に外交使節を交換することを得る』といふ學説を唱へる人々があるからだと思はれる。若しも斯かる學説が正しいとすれば、法王廳と使節を交換する國家は、法王を國家の最高機關として承認するものであるとも言ひ得られるであらう。

『國家のみが相互に外交使節を交換し得る』といふ學説は、『國家のみが謂はゆる國際社會の一員たり得る』といふ、より根本的な前提の上に立脚するものであるが、この前提その者は、抽象的に、超現實的に想定された國際法の概念によつて支持されてゐる。すなはち斯かる學説をとなへる國際法學者たちは、『國際法とは國家と國家との間の權利關係のみを規律する法である』といふ定義から出發して、『それ故國家のみが國際法の原則に基いて相互に外交使節を交換し得る』と論じ、更に『國家の元首でない羅馬法王と、或る國家が外交使節を交換するのは、國際法の原則に違反する』と主張するのである。

かうした論理は、形式的には缺陷を含むものではないけれどそれだけでは、その斷定しやうとする内容の正當性は保證されない。先づ或る國家が羅馬法王廳に外交使節を派遣するのは、國際法の原則に遵據して行ふ所爲であるか否かといふ點を考へる必要がある。この場合に、外交使節といふ概念その者に囚はれて、この問題を決定することは正當でない。但し假りに、其れは國際法の原則に遵據する所爲であるとしても、右の論理の第一前提たる『國際法は國家と國家との間の權利關係のみを規律する法である』といふ命題が、果して右の論理的關聯を支持して、その結論を正當ならしめるだけの力をもつてゐるかといふことは、甚だ疑はしい。むしろ私は、この場合に、學者が一種の概念法學的偏見に囚はれて、自繩自縛の結果に陷つてゐる例證に會するやうに思ふ。

『國際法は國家と國家との間の權利關係のみを規律する法である』といふ概念規定が、それ自ら謬つてゐるといふのではないけれど、今日の國際社會において現實に妥當しつゝある『國際法』が、この定義に全く適合するか否かといふことは、右の定義その者によつては決定しえられぬ問題である。國際社會において現に妥當してゐる國際法は、一の歴史的個性的文化現象たるのであつて、その性質は、經驗的考察に訴へて之を認識する外はない。單に『國際法』といふ名辭の言語的構成のみに注意

を集中して、國際法は國家間においてのみ妥當する法であるといふ規定が、歴史的個性的現象としての國際法の概念としても妥當すると思惟するのは、すでに概念法學的なる獨斷的謬見に陷つたものと言はなければならぬ。『國際社會』といふのも、ひとしく一の歴史的個性的概念たるのであつて、その論理的規定は、必ず現實の歴史的現象の經驗的考察に基くことを要し、抽象的に超經驗的に、單なる概念の分析と綜合とによつて獲得され能ふものではない。勿論、歴史的現象としての國際社會が、『國際社會』なる名稱によつて指示されるのは、主として國家をその構成員とするからであるが、さりとて普通の意味における國家のみが、專ら國際社會の構成員であらねばならぬといふ要求は、國際社會の事實的性質その者からは生まれない。現實の國際社會の構成員の中に、國家以外の分子が加はるときは、現實の國際社會が、かの抽象的超經驗的に規定された國際社會の概念にぴつたりと適合しなくなることは、論を俟たないけれどそのために生活事實としての國際社會その者が何等かの痛痒を感じるものではない。

私たちは、概念法學的自繩自縛から解放された見地に立つて國際法なり國際法上の人格者なりの問題を考察しなければならぬ。斯かる見地から觀るときは、歴史的現象としての國際法は法理的人格者としての國家と國家との關係を規律するものとして發生し發達したのであるけれど、國家に非ざれば國際法上の主體たることを得ないといふ國際法の原則は、國際法その者の本質から抽き出されることも能きず、またその成立を經驗的に證明する事實を擧示することも能きない。むしろ國際社會の構成員たる諸國家が適當又は必要とみとめる以上は、國家以外の團體又は個人を國際法上の主體として承認することは、國際法の本質上毫も妨げない事柄である。例へば、國際聯盟が國家たる性質を有するか否かといふことは、興味ある問題であるが——そして國際聯盟が國際法上の人格者であるか否かといふことは、吟味を要する問題ではあるが——假令國際聯盟が從來の意義における國家の範疇に當て篏らないとしても、國際聯盟は能く國際法上の人格者たり能ふわけである。同樣に羅馬法王又は羅馬法王廳が國際法上の人格者たり得るか否かといふことは、それが國家の元首又は國家その者であるか否かといふことゝ、論理的に關聯するものではない。

羅馬法王又は羅馬法王廳のいづれかゞ、國際法上の主體としてみとめられることは、國際法の法理上可能であるとして、この法理的可能性の下に、果して事實上その孰れかゞ國際法上の主體としてみとめられてゐるかといふことは、現實の歴史的現

象の觀察によつて判斷する外はない。それは兎もあれ、日本國が羅馬法王廳と外交使節を交換することが、國際法の原則に違反するものでないといふことを指摘すれば、私の目的にとつては十分である。更にまた斯かる法理的可能性に基いて、日本國政府が羅馬法王と外交使節を交換することが、日本の國民の立場からみて望ましい政策であるか否かといふことも、初めにことはつた如く、私の議論の範圍外の問題である。唯斯かる政策に反對する人々が、その反對理由の中に、この日本國政府の企圖が國際法の原則に違反すべき性質のものであるといふことを加へるのは、その反對主張の權威を傷けこそすれ、增大するものではないことを明かにしたいと思ふのである。繰り返していふと、反對論者が、法律上の議論に重大なる反對の根據を置くといふことは、それ以外の反對の根據が十分確實でないために法律論などを持ち出すのではないかといふやうな疑惑の念を局外者に抱かせぬとも限らない。殊にその援用する所の法律學上の學說が、右にのべたやうに必ずしも正當なものでないとすると、一層さうした疑惑の念を生ぜしめ易いであらう。この點からいふと、二月一日の京都佛教徒大會で決議した宣言文の中に國際法の原則に違反する云々といふやうな主張が加へられてゐないことは、反對論の立て方として前記の佛教聯合會の宣言書よりは遙かに進步してゐるものと言ひえられる。

なほ序に言ひそへて置くが、羅馬法王廳との使節交換に反對する人々の中には、羅馬加特力教の法王至上主義は國家至上主義と相容れないものであるから、法王と使節を交換することは日本の國體と兩立しないと論じる者があるやうであるが、若しかやうな議論が正當なものであるならば、同じ論法は、多くの外國に對しても向けられるべき筈のものであつて、近代の資本主義的國家の權力者たちは、その本音を吐かせるならば、いづれか利己的國家至上主義たらぬはあるまじく、さうした國家至上主義は、嚴密なる論理的意義においては、到底互ひに兩立し能はぬものであると言はねばならぬ。けれども、事實上は或る程度に利己的國家至上主義を互ひに制限して國家と國家とが交際するといふのであるならば、國家至上主義と加特力教の法王至上主義との間にも調和の途は求め得られるであらう。だからこの種の反對理由も、必竟國際社會の存立條件に對する理解の不足に基くものといふべく、かうした論法を尙ぶならば、勞農露西亞との使節交換の如きことに對しては、一層熱心に反對せねばならぬこととなるであらう。（一九三二・二・六）

恐れられた水平運動

山川均

革新倶樂部の星島代議士は、水平社運動として知られてゐる部落民の差別撤廢運動と、之に對して政府の施設に就て、衆議院に質問書を提出した。二月四日の一新聞には、之を註釋した次の如き記事がある。

『水平社の差別撤廢運動は、關西地方を中心に全國三百萬の部落民を糾合して、最近非常な勢力をもつて來た、これには內務當局も流石に恐れをなしたが、昨年までは部落改良費に二十一萬圓の豫算を計上し、三百戶以上の部落の道路改修其他に充てゝゐるが、今年度からは地方改良費と改稱して、四十九萬圓を計上し、從來の二十一萬圓を控除した三十八萬圓で部落民に學費を補給し、中心人物たるべきものを養成して將來その部落の改善に從事させ、また部落民の感情を融合する機關の創設といふやうなことに充てゝゐる……』

本年の豫算は有らゆる方面に經費削減が行はれたにも拘らず『反對に豫算を增加したのは、教育費の國庫補助費と、內務省の社會局と、この地方改良費あるものだけである』。これ程までに其筋が熱心を示した『地方改良』の眞意は果して何處にあるだらう。之が質問者の當然に起した疑ひであつて、星島氏は『以上の如く表面に美名を掲げてゐるものゝ、地方改良費の使途には尙ほ頗る疑はしいものがある』と云ひ、『部落民の視察、監督、取締等に密かに心を痛めてゐるらしく、今豫算を增して益々之を嚴重にすることになれば、それだけ部落を惡化し、水平運動に油を注ぐことゝなつて、其結果は由々しき大事を惹起かすも知れない』と、政治家らしい憂慮を抱かれてゐる。

□

この新聞記事を其儘に受取つたなら、先づ第一に不思議なことは、部落民の差別撤廢を要求する水平運動が一大勢力となつたのを見て、內務當局が『恐れをなし』たことである。全國三百萬の部落民は、過去幾百年の間、不當の壓迫と不當の迫害と不當の差別的待遇とを受けて來た。彼等は今、永年の間、故な

くして不當に受けてゐたものを日本の社會に返上しやうとして居るだけである。謂ゆる部落民を、部落民なるが爲に、永久に虐げて行かうとする人々でない限りは、水平社の運動に對して『恐れをなす』筈はない。

□

第二に不思議なことは、政府が所謂特種部落を改善しやうといふことである。日本の社會は、彼等の上に不當の壓迫と謂はれなき迫害とを蒙らしてゐた。若し改善すべきものがあるならばそれは特種部落ではなくて、三百萬の同胞に理由なき迫害を加へて怪まぬが如き社會である。特殊部落を改善するといふ言葉のうちには、既に同胞の一部を差別的に待遇する眞理が露骨に現はれてゐる。政府が若し改善する積りなら、部落を改善しやうなどといふ其の偏見に滿ちた、傲慢な生意氣な心得から改善すべきである。

□

第三に不思議なことは、政府は謂はゆる『改善』によつて、水平運動を阻止し得るかの如く考へて居ることである。政府の『改善』が、若し水平運動の要求して居るところのものを與へ得るならば、政府は始めて『改善』によつて水平運動を阻止することが出來るだらう。けれども政府の與へんとするものと、水平運動の取らうとして居るものとは、全く相反してゐる。政府は與へんとして居るのである。水平運動は取らうとして居るのである。

□

明治の維新は、彼等を『穢多』でなくした代りに『新平民』にした。『穢多』の待遇が『新平民』の待遇に變つたのは、『特殊部落改善費』が『地方改善費』に變つたほどの變化である。彼等は既に、與へられるものに失望した。彼等は今、欲するものを取らうとする。曾ては社會から逃がれ隱れることによつて、迫害と輕蔑とを免かれやうとした。彼等は今や『穢多』を誇りとして、『穢多』の權利を主張する時が來た。水平社の運動は、與へられんとする運動ではなくて、取らうとする運動である。それは虐げられた民族の權利の宣言である。

この嚴粛な被抑壓階級の權利の宣言を聽いた時、吾々は唯粛然として襟を正さなければならぬ。そして吾々の祖先が彼等の上に不當に加へた迫害に對して衷心から彼等のまへに陳謝しなければならぬ。吾々には苟も、彼等を『改善』しやうといふやうな傲慢な不遜な考へを捨てゝ、唯だ彼等の取らうとするものを取らしめねばならぬ。この光輝ある被抑壓階級の運動とその精神とは、四十九萬圓を以て買ふことは出來ぬ。否な四十九萬

圓を四十九倍した『地方改善費』を以て買ふことは出來ぬ。四十九萬圓によつて、部落の警察力を增すことが出來るだらう。密偵と間諜とを增すことは出來るだらう。そして部落民のうちに富裕分子を懷柔し、彼等の中から、自己の種族に裏切る『中心人物』を養成することは出來るだらう。然しながら歴史的使命を負ふた被抑壓階級の光輝ある運動は、すべて是等のものを一蹴して進むに相違ない。そして水平運動を威嚇し、懷柔し、彈壓し、誘惑する一切の『改善』の企てが試みに盡された時、政府は始めて、ほんとに『恐れをなす』時が來るだらう。

（二月七日）

農村問題と諸政黨

室伏高信

○

農村問題はこの議會きつての大問題である。議會がこの點に目をつけなければならなくなつたことは自己反省の時がきたことであるべきである。私は敢て自己反省であるべきであると云ふ。今の議會には私の言ふことの意味は分る筈がない。私自身も今こゝで自分の思ふことの原理を組織立つて話そうとしてゐるのではない。私の考は「改造」の四月號に載せて頂くことになるであらうと思ふ。それは無論單なる農民問題ではない。文明、文化、人生觀の根本問題である。この問題になれなくては農民問題を論んずることはできない。議會はこの問題にふれることなくて農村問題を解決しようと云ふてゐる。僞瞞は政治家の職分である。政治家をしてその最後の斷末魔まで僞瞞せしめるがいゝ。しかも僞瞞によつて何ものも解決されることはできない。議會が若しほんとうに農村のことを口にするなら靜に一、二時間を反省して見るがいゝ。議會は農村の問題を解決することのできる性質をもつてゐるか。議會のある限り農村問題は解決難を重ねてゆくのではないか。これだけのことを考へて見るがいゝ。今の政治家に私の言ふことが分らうとは私は思は

ない。人生における政治の位置を徹底的に理解してゐる人だけが私の言葉の意味を解してくれるであらう。議會は何のために必要であるかの理由を思へ。政治の原理からそれを思へ。社會發達の理論からそれを思へ。農民と議會とは如何なる關係に立つか。農民のために議會は必要であるのか。或は議會のために農民が必要であるのか。政友會は農民黨だと云ふものがある。それ位ひ愚ろかな僞りはない。憲政會も農民黨のお株を取らうとあせつてゐると云ふことである。等しく僞りである。權力を目的とする政黨は如何なる意味においても農民黨であることはできない。農民黨と稱するものが徒に多くして農村の益々疲弊することを思へ。政友會は過去十數年權勢の側にある。農民黨と稱する政友會が殆んど常に絕對多數を制しながら農村がいよ〳〵困廢して行くのは何のためであるかを思へ。政友會が農民黨の假面をかぶりながら實際には反農民黨であつたがためでなくて何んであらう。否、一切の政黨は反農民的なのだ。農民的であるがためではなくて反農民的であるがゆえに政黨が必要なのだ。

○

農は國の本だと云ふことを昔から云ふてきた。農は慥に人間生活の本なのだ。しかも今日の國家生活において農は果して國の本であるか。國の本であるべき中心力があるか。國の本としての地位を占めてゐるか。農は國の本だと云ふことは今日では地方民をおだてあげる政治家の口上に過ぎないものではないか。農村の疲弊から地方民が何ごとかに氣がつき始めた時に政治家は無論この農民に何ものかを與へねばならぬ。農民のためにではなくて自分の地位のためにである。彼等は最も安價なものを與へた。農は國の本だと云ふ言葉がこれなのだ。政友會も憲政會もそういふた。憲政會の宣言書によると農業の盛衰は直に國運の消長に關すると書きたてた。政友會の農村振興に關する建議案と云ふものを讀む。これまたその劈頭に曰く、農村の盛衰は直に國運の消長に關すると。安價な贈物である。若し大商工業家が政治家に訴へたとしたらどうだらう。無論こうした想像は愚ろかな想像である。商工業家は決して政治家に訴へはしない。政治家が商工業家に訴へるのだ、商工業家は主人である。政治家はその執行委員であり、書記であり、それ以下である、商工業家はだまつて工業倶樂部の安樂椅子に腰かけてゐればいゝ。政治家はついてくる。うるさいほどついてくる。經濟的權力のあるところに政治的權力が發生してゐるからである。だが一寸こうした愚ろかな出來事が天から落下したものと假定せよ。政治家は何んと云ふだらう。工商は國の本だと云ふだら

うではないか。否、そんなことを云ふこと必要でもないまでに工商が國の本なのだ。實際にそうなのだから言葉のうへで餘計なことを云ふ必要がなくなつてゐるのだ。政治家に欺むかるゝことなかれ。農は國の本でもなく、國は農のために存在するのでもないのだ。農民はぢつとして考へるがいゝ。農民だけがほんとうに考へる力を幾分かあまされてゐる。時代を變へる力はこゝに根を据えてゐることを思へ。そして農は國の本だと云ふ空しい形容詞を政治家に返還せよ。またそして政治家は農民の政治家でないことを明確に意識して、政治と農民との關係を根本的に考へて見るべきである。

○

政友會は地租委讓を說いてゐる。無論これが政友會の宿案でもなく提唱でもない。政友會は附從者なのである。しかも政友會のごとき大政黨が地租委讓を彼の政策とするに至つたことは政治家の政略としては上出來である。憲政會が地租二厘減以上出でることのできなかつた時に政友會が進んで地租委讓を提案してゐることは政略として慥に一步を拔いてゐる。思ふに憲政會の幹部には多くの財政家がゐる。若槻氏のごときは財政家として、財政問題の論客としても日本一である。政友會の高橋氏や憲政會の濱口氏は、兎ても若槻氏の足もとにだも及ばない。頭の質が丸で違つてゐる。彼の頭腦の明晰さは今の政治家の間にあつて一人水準を高く拔き出でゝゐる。しかも若槻氏にせよ、濱口氏にせよ。財政のメキヤニズムから一步を出ることはできない。彼等自身がメキヤニツクである。無生命である。野に生きんとする人間の心の呼び求めてゐることは彼等の頭には分つてゐない。彼等の頭はたゞ財政のやりくりのうへに働いてゐる。こゝにおひて今日の財政上で最も合理的なことが彼等の頭の到達しうる最高所なのである。彼等はその最高所に立つた。それが地租二厘減案なのである。人間の智慧の如何にみじめなものであるかをまじ〳〵と味はざるをえないではないか。地租二厘減をもつて農民を救ふことができるか。農民の疲弊はしかく安價な疲弊であるか。憲政會に財政家は滿ちてゐる。大藏大臣候補者が幾人か並んでゐる。そして凡てが死んでゐる。憲政會は今度の試練に當つて彼が生ける政黨でなくて冷たい死屍であることを立派に證據立てた。この次の選擧は一年後に迫まつてゐる。この選擧で憲政會が如何なる運命に落ちるかもこの地租問題で分つてしまつたかに思はれる。

政友會は政略の點では一步を拔いてゐる。地租委讓案が憲政會の二厘減案に比べて人氣を呼ぶであらうと云ふことは疑の餘地がない。人氣取りだと云ふて非難するの必要はない。それが

政治家の職分なのだ。政治家を買被るなかれ。政治家とは人間の害悪の代表者なのだ。ステエツマンとポリチシアンとを區別する小ざかしい學者があることを私も知つてゐる。區別したり分析したりは學者の營業である。欲するものをして勝手に分類もし分析もさせるがいゝ。しかも世界のどこに謂ふところのステエツマンと云ふものがあるか。たゞの一人でもいゝから名前を舉げて見るがいゝ。クラツドスオンを崇拜する人が今にあるだらう。ロイド・ジョオヂを大政治家だと云つて擔ぎ廻る人さへもある。しかも彼等が如何に欺瞞的な政治家であるかを思へ。私は武藤金吉と島田三郎とが同一類型の政治家だとは云はない。しかも島田三郎も政治家であるかぎり僞瞞者である。品格のいゝ僞瞞者である。僞瞞に上手と下手とがある。上品と下品とがある。革新俱樂部は上品で下手なのだ。憲政會は下品で下手なのだ。政友會は下品で上手なのだ　地租委譲論はこの意味での最上策である。無論政友會にどれだけの實行上の誠意があるかは一つの疑問である。これを法律案としないで建議案とし、大正十二年度から實行を期しないで何時から實行を期するかさへ明らかにしないのはこの邊の消息を明らかにしてゐるに相違ない。しかも國民を欺くのにはこの邊のところで充分である。それだけでも愚ろかな農民、政治と農民との關係を理解しきらない中途半端の農民は、この邊のところで嬉しがつてゐるに相違ない。それで充分なのだ。政友會としてはそれで充分なのだ。大正十三年は總選擧の年である。その時のことを考へなくては今日の農民問題は起つてはこない。議會の農民問題とは選擧政策の問題である。次の議會には農民問題は一層八釜ましいであらう。憲政會もその二厘減案を放棄するの止むなきに至るであらう。地租委譲は次の議會には實際計劃として生れてくるであらう、それとともに選擧權の大擴張が實現されるであらう。政友會の一議員の名論によると普通選擧は日本の國體に添はないと云ふことである――ロオマ法王廳遣使も日本の國體に添はないと云ふことである！帝國議會は日本の國體に添ふか如何。日本魂がフロツクコオトを着て椅子のうへに腰かけてゐるなぞは正しく日本の國體に添はぬわけである！　そこで政友會は日本の國體にたゞふべき選擧權の擴張を企てるに相違ない。流石に政友會の幹部は智者である。日本の「國體に添ふべき選舉權擴張」の新案を考へ出してゐるであらう。多分戶主選擧と云ふようなことになるだらう。地租委譲と選擧權擴張とを次の議會で「我黨」の手で實行した政友會が凱旋將軍のような勢で來年の總選擧に望むであらう。こゝに政友會の將來は當分萬々歲である。憲政會はその地盤の一部を政友會に他の一部を革新

倶樂部若しくは實業御用團に奪はれて今日以上の悲境に陷ゐるであらう。選擧政策としての農村問題はそれで充分である。

革新倶樂部の農村政策は一層進んでゐるといへばいへるであらう。地租委讓と營業税委讓を提案してゐるからである。無責任だと云ふ非難も一方にある。財源をどうするかの點からである。しかも財源は餘裕綽々である。陸海軍を全廢せよ。毎年四億七、八千萬圓の金を使つてゐる陸海軍を全廢したと假定せよ。地租七千四百萬圓、營業税五千萬圓弱を廢止しても若しくは地方に委讓しても尚ほ餘剩の費途に困するであらう。通行税一千萬圓砂糖消費税四千萬圓その他多くの惡税の廢止もできるである。必要な多くの文化的施設にも向けることができるであらう。財源のあるとないとは考へ方一つである。不要の軍備――特に農民に何の軍備が必要であるかを思へ。――を今日のごとくに尨大に維持する限り財源はないであらう。革新倶樂部にして若し侵略主義を放棄する政治家の集まりであると假定せよ。軍備を今日の三分の一に減んずることに異論はなかるべきである。空論呼ばかりをすることは反動家の常套語である。侵略主義の殘骸がくつついてゐるかぎり軍備の三分の二減は空論だと考へるに違いない。侵略主義を徹底的に捨てざる限り軍備縮少を口にすること勿れ。世界が軍備縮少を行ひつゝある時は侵略論者の正に乘ずべき時である。佛蘭西の反動政治こそ彼等のよつて範とすべきものではないか。しかも一度侵略主義を奇麗さつぱりと捨てたとせよ。三分の二の軍備を廢止することは政治常識と化するであらう。そして財政家は財源の多きに苦しむこととなるであらう。だから革新倶樂部の地租、營業税二つともに地方に委讓しようとする政策は本來は決して空論でも何んでもない。それが空論であるのは革新倶樂部に軍備についての徹底した政策がないからである。犬養氏の所謂經濟的軍備と云つたような變形侵略主義以上に軍備についての徹底政策をもつてゐないからである。

○

われ／＼にとつて問題となることは地租委讓（または營業税をも含めて）が實行可能であるかないかの點ではない。この種の政策が農村の疲弊を救ひうるかどうかの問題である。特に政友會の主張するように軍備縮少によることなくして地租委讓を實行したと假定せよ。農民の負擔は何等かの形において再來するに相違ないであらう。農民は右に與へられて左に奪はれるのである。それが政友會の云ふてゐるように行政整理によつて穴塡めされるかどうかは一つの問題である　行政整理の餘地は無論あまつてゐる。十四億の財政のうちから七千萬圓のやりくり

は不可能だとはいはれぬ。地租委讓卽ち國税としての地租を廢止するにしても地租廢止そのものの廢止でないことは勿論である。從つて地方自治體の財政は地租の委讓によつて好影響をうけるに相違ない。行詰まつた地方財政がそれによつて一つの救濟の道を與へられるであらうことはわれ〳〵のやうな財政の門外漢にも察せられる。しかも地方財政の救濟と地方民の救濟とを區別せよ。地租委讓によつて農民が如何ほどの影響をうけるであらうか。行政整理によつて失業者を生じ事業を縮小したとしたら人民は再び奪はれることとはならぬか。それによつて人民は差引殆んど何ものをも得ないこととはならぬか。これによつて農民と非農民との間における負擔の割合を幾分か變更することがないとはいはれぬであらう。それによつて農民のうちで地主の一部若しくは自作農が何ものかを與へられるかも知れぬ。小作人と地主との懸隔がいよ〳〵大きくなるであらう。勿論小作人もこれによつて間接にうるところがないとはいへぬ。小作人はこれを小作爭議に利用することは幾分かできるであらう。それが間接の利益だといへばいへるであらう。また反對に行政整理から失業者が生じ、勞働豫備軍が地方にまで增加したとしたら小作爭議において小作人は一層不利益の立場にも立つであらう。しかもわれ〳〵がこゝに一考しなければならないことがある。小作人問題の根本義は小作人の分前の大小の問題であらうか。言葉を變へていへば地主の搾取の程度の問題であらうか。地主は慥に搾取者である。この搾取を全然廢止したとせよ。小作人は得るところはあらう。しかも小作人は何ほどをえるであらうかを思へ。それは問題の一端の解決ではある。根本的の解決ではあり能はぬ。自作農の困窮はそれを證據立てゝゐるではないか。自作農の困窮は小商人の困窮と同一理法から解釋することはできぬ。それは小企業であるがゆえに困窮してゐるのではない。小作人の農業。大地主の土地のうへに行はれる農業も小企業であることにおいては變りがない。然らば農村問題の鍵は今日まで殆んど人々の論んじてゐないところになくてはならぬ。

○

政治家が農民問題と云ふ時にはそれは無論地主問題である。地方代議士の可成りの部分が地主である。地主でなくても地主の代理人である。だから彼等が農民問題とは地主問題である。農村救濟とは地主救濟である。帝國農會、中央農事協會、農民聯盟、いろ〳〵の團體が農民の名において組織されてゐる。それがみな地主の團體であることは誰一人疑ふものもない。農民聯盟は地主聯盟である。土を踏まない地方有閑懐手階級の同盟

である。從つてそれは主として對小作人同盟である。農民派代議士とはこの一派の政治的執行委員會である。この地主の一團に對して眞面目に農村救濟を求めることは勿論大きな撞着である。だが地主對小作人の問題だけが重大であるのではない。もつと根本的問題がある。農村對都會の問題がそれである。

○

農民一般の租税が輕減されたと假定せよ。何人がそれによつて得るであらうか。地主か小作人か自作農か。この三者の凡てであるか。或る人は地主だと答へるであらう。或る人は小作人も得るところがあると答へるであらう。或人はまた自作農を計へるであらう。更に最も樂天的な人（若しくは最も僞瞞的な人は）農民の凡てが得ると答へるであらう。一見してそうありそうに見える。ぴか／＼光るものの凡てを金だと言ふことと勿れ。僅に農民はこれによつて欺かれるのである地主のポケットに十圓札が若しくは百圓札が一時は殖えるであらう。小作人の懐にも五十錢紙幣が何枚か一時は殖えるかも知れぬ。その十圓札、百圓札若しくは五十錢紙幣が結局どう處分されるか。それによつて農民の生活に何ものが加へられるか。否、紙幣または貨幣は何のために存在するかを思へ。金融狀態が惡るきがために農民は貧窮してゐるのか。紙幣貨幣をもたないために農村は疲弊してゐるか。昔の農村と比較して考へて見よ。

政友會も憲政會も若しくは農民（地主）の諸團體も、農村疲弊の理由の一つを金融缺乏にあるとなしてゐる。從つて農村救濟のために地方金融擴大の必要を說いてゐる。それは農村經濟を論んずる多くの專門學者の通說のごとくでもある。何と云ふ淺見であらう。私の云はんとすることは勿論今の政治家や學者に分つてもらへるとは思はぬ。私の考を理解せしめるためには私はの考をもつと組織的に述べる必要があらう。私はその機會を今日は捕えない。私はこゝにはたゞ一つの問題を提出して置くだけで滿足してゐるほかはない。金融と農村との關係の問題である。金融増進によつて農村が救はれるか、若しくは逆に疲弊するかの點である。この一つの問題を正しく考へ及ぶものは今日の中心問題の琴線に觸れることができはせぬか。

○

農民よ。長夜の眠りから醒めよ。世間の所謂覺醒ではない。文明ではない。土の親しみに還れ。その立場から汝の敵が何れにあるかを思へ。

改造社哲學書

◇文學博士 米田庄太郎著（文化哲學叢書第一篇）
リッケルトの歴史哲學（八版）
定價四圓七十錢　送料廿三錢

◇文學士 板垣鷹穗著（文化哲學叢書第二篇）
新カント派の歴史哲學（四版）
定價壹圓五十錢　送料十五錢

◇文學博士 朝永三十郎著
カントの平和論（五版）
定價壹圓五十錢　送料十五錢

◇文學博士 米田庄太郎著
現代文化人の心理（十三版）
定價貳圓七十錢　送料十九錢

◇ラッセル原著 宮本鐵之助譯
數理哲學概論（四版）
定價貳圓八十錢　送料十九錢

◇理學博士 桑木彧雄著
物理學と認識（四版）
定價壹圓五十錢　送料十五錢

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

三月號創作



女と影（第二稿）

ポオル・クロオデル作
山内義雄譯

荒凉たるあたり。下手、石の道標ありて「幽明界」の文字を刻む。舞臺の奥には紙の帷を垂れて、一面靄のこめた氣持をあらはす。上手、半ば帷にかくれた石燈籠があつて、二三段上つた燈籠のなかには微かに灯が入つてゐる。

下手の橋をわたつて武士が從者を伴れて來かゝる。上手、帷のかげに灯つてゐる燈籠は、武士が過ぐる年に失うた亡き妻の菩提のために建てたものである。

武士は立留つて燈籠に刻まれた亡き妻の名をよみ、しばらくは物思ひに沈む。

と、帷のうへがパッと明るむと同時にそのなかに影がさして、はじめは朦朧としてゐたが、それが段々小さくなるに從つて益々はつきりして、しまひに一人の女の影となつてあらはれる。

この時、下手から武士の妻をのせた輿が出る。舞臺にさし懸ると、妻は輿から下りる。妻が影の方に歩みよるにしたがつて、亡き妻のその影は段々薄くなり軈て消えてしまふ。

「今わしは失うた妻の姿をありありと見た。」と武士が云ふ。

「それは何うやら夢幻しでも御覧あそばしたので御座いませう。」と妻が曰ふ。「こゝに居りますのは、これ、この妾で御座います。むかしの高名な畫匠の描いた花のうへには、まことの蜂が蜜をもとめにまゐつたとやら申します。やまと歌も人の心を種として、よろずの言の葉となるものとか。人の一念といふは恐ろしいもの、思つたゞけでその影が、これ、これほど厚い錦の帷のその中から浮き出して、どこ何處までもと後を慕うてまゐります。」

唄（女）

春にして桃の小枝のことといへば、
春にして桃の小枝のことといへば、
風の搖る、桃のえだ、桃の小枝のことといへば、

この時、帷のうへに桃の枝の影があらはれはじめる。

一ふしごとに葉はしげり
一言ごとに花は咲く。

枝はすつかり帷のうへに影をうつす。

唄（武士）

枝に花咲くその國は、春のみなれや、

日かげも射さぬその國は、春のみなれや、これやこれ常夏(とこなつ)の國。
初花の香に醉ひ痴(し)れて、狂ひつ舞ふは羽蟲のみかは、
水無月の蝶(てふ)のかげ。

この唄につれて、彼方こなたに大きな蝶のかげがあらはれる。妻は手をあげて武士の眼をさへぎることなし。と、枝も蝶の影も消えてしまふ。

唄(女)

靄のこめたるその奥に、まことに人のかげあらば、
いざ語らはん、言葉はもとより空(あだ)なれば、いでや三味の音にさそはん。
あだな此の世の言の葉なれば、よしやきこえぬものかはしらね、
唄にことよせ思ひを云はせ、やさしい糸なら聞えもしやう。

妻は三味線をひく。武士は突然その手をとゞめる。すると帷のむかふでしばらく三味の音がつゞく。

唄(女)

身にそふ影のあるごとく、聲よびかはすこだまあり。
この世にあらぬうた聲の、

この世にあらぬうた聲の、
たゆたひながらひゞくなり。

妻はうたひ止める。と、帷のうしろでは唄が暫らくつゞいてゐて、それが壓しころされたやうな笑ひ聲でおはる。

その時、帷のうへにはまた女の影があらはれ、帷のまへなる妻は、わが身でこの影を隱さうとするかのごとく、その影のまへに立ち上れば、妻のすがたと影とがピツタリあふ。武士は影を捉へやうとする。すると妻は間に立つて武士を遮る。このあひだ妻と影とはおなじ動作でうごく。

武士は妻の手をとつて帷から引きはなす。して太刀を拔いて妻と影とのあひだの目に見えぬ糸をきる。妻はばつたり倒れる。影はその儘立つてゐて、軈てゆるやかな足どりで武士から遠のいてゆく。

武士は刀を手にして詰寄る。影も一足ごとに退る。燈籠のところまで來たとき、影は振り返つて武士を待つものゝやうに立留る。武士は帷のなかへ一太刀切りおろす。刀をあらためると血潮が垂れてゐる。同時に妻がキヤツと叫んで息絶える。すると燈籠の灯もフツと消える。武士は蹣めきながら退場。

幕

「羽衣會上演臺本」

la cloison.)

(La FEMME chante.)

Ami! comme il y a une ombre des corps, ainsi il y a un reflet des voix.

La voix qui chante au delà de ce monde visible,

La voix qui chante au delà de ce monde visible ne cesse de se prepager en ondes successives.

(Elle se tait.)

On entend une voix de l'autre côté de la cloison qui continue la chanson et qui finit en une espèce de rire étouffé.

L'OMRRE de la Femme morte réapparaît sur l'écran, mais la FEMME vivante se met devant elle en sorte que l'OMBRE et le corps coïncident. Le GUERRIER cherche à saisir l'OMBRE, mais la FEMME l'empêche en se mettant devant lui. Chacun des mouvements de la FEMME est reproduit par l'OMRRE.

Le GUERRIER prend la FEMME par les mains et l'éloigne de l'écran. Puis il tire son sabre et d'un grand coup tranche le lien invisible qui rejoignait la FEMME et l'OMBRE. L'OMBRE s'éloigne à pas de plus en plus lents.

Le GUERRIER l'épée à la main se rapproche. A chaque pas qu'il fait, l'OMBRE fait un pas. Quand elle est près de la lanterne, elle se retourne et l'attend.

Le GUERRIER donne un grand coup de sabre dans l'écran. Il retire son arme toute sanglante.

La FEMME pousse un cri et meurt. La lumière de la lanterne s'éteint. Le GUERRIER se retire en chancelant.

Quelques notes d'un luth derrère la cloison que suit un faible éclat de rire.

Tokio, Décembre 1922.

(La FEMME chante.)

Si-je parle d'une branche de pêcher au printemps
Oui, si je parle d'une branche de pêcher au printemps,
Une branche de pêcher, une branche de pêcher que le vent agite

(La branche commence à se dessiner sur l'écran)

Chaque vers lui ajoute un rameau,
Chaque mot lui ajoute une fleur.

(La branche s'est complètement dessinée sur le mur.)

(Le GUERRIER chante.)

Là où cette branche fleurit, ce n'est pas le printemps seulement,
Là où ne brille pas le soleil de la terre, ce n'est pas le printemps seulement, c'est l'éternel été.
Ce ne sont pas les petites mouches folles que les jeunes fleurs attirent, ce sont les grands papillons du sixième mois.

(Et en effet ça et là apparaissent de grands papillons. La FEMME lui met la main sur les yeux. La branche et les papillons disparaissent)

(La FEMME chante.)

Si vraiment quelqu'un nous écoute derrière cette cloison de brouillard,
Ecoute, je vais lui parler, non pas avec la voix profane, mais avec le chant et la musique.
Là où la voix profane n' atteint pas, là où nos paroles ne sont pas comprises,
La douce musique parvient et l'accent de ce chant qui porte les paroles.

(Elle commence à jouer du luth. Tout à coup le GUERRIER l'interrompt, la musique continue derrière

LA FEMME ET SON OMBRE

PAUL CLAUDEL

Un pays sauvage et solitaire. Sur une borne de pierre à gauche on lit l'inscription: Frontière entre les deux Mondes. Le fond de la scène est formé par un vaste écran de papier qui est censé représenter le brouillard. A droite, une lanterne de pierre à moitié enfoncée dans l'écran à laquelle on accède par quelques marches et dans laquelle brûle une faible lumière.

Par le pont de gauche arrive avec sa suite un GUERRIER de l'ancien temps. La lanterne qui brûle à droite (derrière l'écran) est censé commémorer la Femme qu'il aimait et qu'il a perdue.

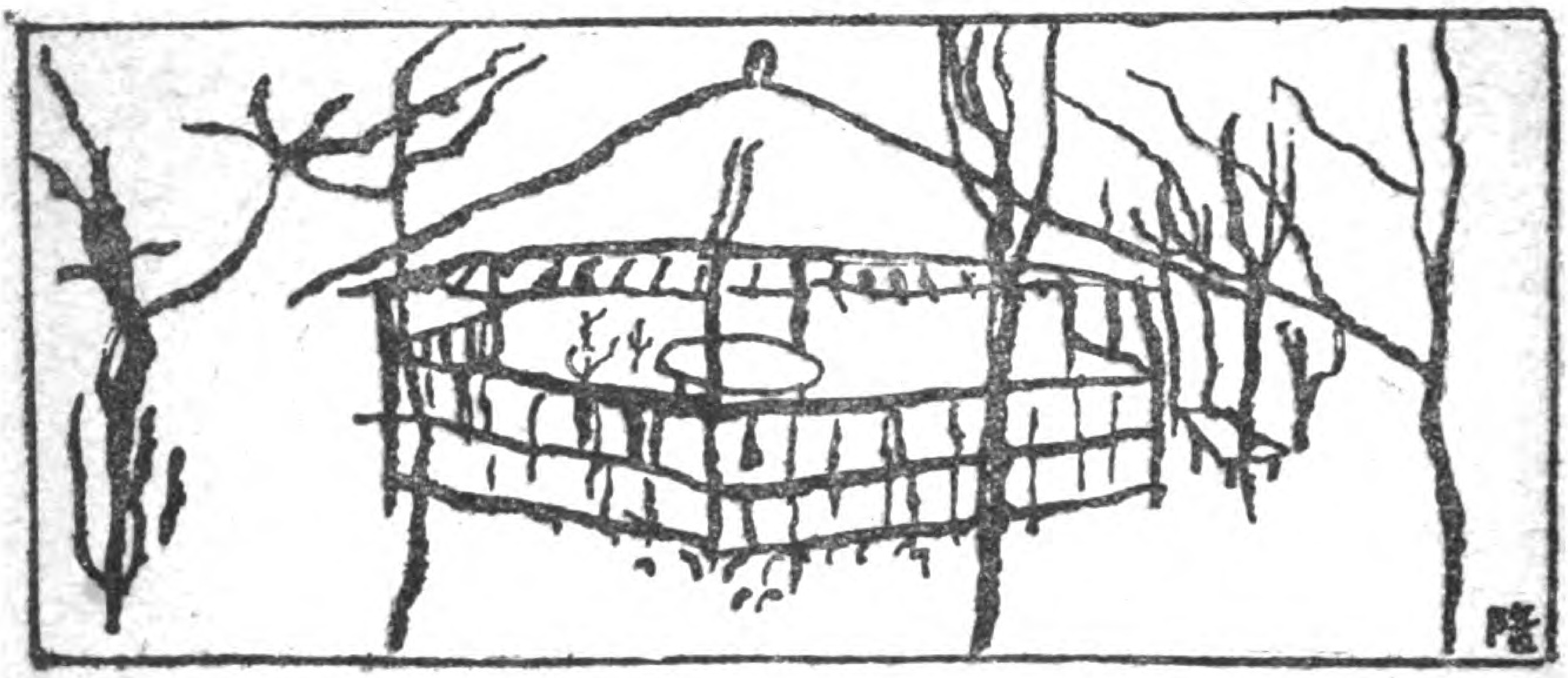
Il s'arrête et lit le nom de la Femme sur l'inscription de la lanterne, et reste quelques temps en méditation.

Une lumière apparaît sur l'écran, au centre de laquelle apparaît une OMBRE vague qui, petit à petit, se précise jusqu'à ce qu'elle devienne celle d'une femme.

A ce moment la FEMME vivante arrive dans un palanquin d'où elle descend au côté gauche de la scène. A mesure qu'elle se rapproche, l'OMBRE de la Femme morte diminue et s'évanouit.

Là, dit le seigneur, je viens de voir apparaître l'ombre de la Femme qui fut la mienne autrefois.

Rêve! dit la FEMME. Illusion vaine! C'est moi qui suis la réalité. N'as-tu pas entendu que certains grands peintres peignaient sur le papier des fleurs si vraies que les abeilles venaient y butiner? Il est écrit que la poésie de Yamato a pour semence le cœur humain d'où elle se développe en un myriade de feuilles de paroles. De même l'imagination de l'homme est assez forte pour projeter son ombre sur ce mur très épais qui nous entoure et partout où nous allons ne cesse de nous accompagner.



郊外の貧しき街より

諏訪三郎

なんでもそのときのに、勞働祭（メーデー）の日のことをかいたのを記憶してゐるから、たぶん去年の六月頃であつたらう？　君のとこへ久し振りで手紙をあげたのは。さうすると、また一年餘りも無沙汰をしてしまつた。君は怒つてゐないかね。この前の長たらしい僕の手紙に對して、感想めいた返事をくれてから、その後君からは、つひこの間近〻結婚するといふ事を報せてくれたのまでに十三本も手紙を貰つてゐる。このやうに一ケ月に略（ほゞ）一回の割で便りを受けてゐるのだに、僕は一度として返事を出さなかつた。君に出さない位だから、他の友人などには無論出さない。仕事の必要に迫られて書いたのは別として、まつたく僕は、この一年餘りといふもの、手紙らしい手紙を書かないで過して來たのだ。何故僕がかうも手紙を書くのを厭つてゐるのかは僕がそれを長い間書かなかつたといふ事實から君は察してくれるだらう。このことは、この前の手紙でも一寸辯解しておいた筈だが、僕は、自分の氣持が勝れてゐないときには、どうしても――相手が親しければ親しいだけに――手紙をかくやうなしんみりとした氣持になれないのだ。君などにもいつも濟まない濟まないと心で詫びながらも、ついその氣持ちになれずしてゐる中に、今日になつてしまつた。えらい

無沙汰をしたものだ。何うか恕してくれ。僕のことになると何ら彼もいゝ意味にのみとつてくれる君のことだから、まさか怒つてなどゐまいと思ふが、――それでも相手の態度が餘りひど過ぎると、どんな調子から怒らないとも限らないものだ――若し不滿にでも思つてゐるのなら、僕の憐れな辯だと思つて氣を取りなほしてくれ。まつたく僕は何も申譯の口實として言ふのではないがこの一年餘りといふもの、親しい友に宛てゝ手紙をかいて見ようといふやうな晴々しい氣持は唯の一度とてもなかつた。それだけに、たゞ據りどころもない寂しい日が續いたわけだ。といつたからとて、滿更らなかつたといふ譯でもそれアないさ。どうかした機會から、快よい落着きのある靜かな氣持ちになれることもある。然し、哀しいことにはそれが三四時間と續いたことがないのだ。梅雨どきの晴れた空のやうに、惜しいほどすぐに陰鬱しく曇つてくるのだ。荒れてくるのだ。

大原君――この前の手紙に僕は、家庭をもつてから急に年をとつたやうな氣がすると書いたね。容易に萎れさうもない原稿を、もう十年近くもかうして書き續けてゐる中に、體が何處となく弱つて疲れが出て來てならない、然しその疲れた體を疊の上に横へてなどゐるとき、何ものにも侵されさうにもない不惑な靜けさがやつてくるのだ――とも書いて送つた筈だが、それはなにも自分の倦れた心境を誇らうとしての衒氣からでもなく、また誰かゞ言つてるやうな、文章を能くするが故に感情を誇張したわけでもなかつたのだ。實際あの當時は、そんな氣持ちになれたのだ。人一倍の情熱家で、そのことに青春時代を苦しみ通したやうな僕が、一人の戀人に近い女と結婚した當時の落着きが、僕にそんな氣持ちを與へたのかもしれない。然し、まだ僕位の年配のものが詠嘆的にいふ絶對とか永遠とかいふ言葉がいかに不確かなものであるかといふことを說明するかのやうに、その頃の僕の不惑の境地も、いつとはなしに箔を落して影を潜めてしまつた。謂はゞ、結婚によつて一時落着いた僕は、その結婚生活によつて再び落着きを失つて行つたのだ。君にもまだ報せてないが、去年の九月には妻が男の子を生んだ。（至つて健康體だから喜んでくれ。）それでなくてさへ毎月の拂ひに閊へてゐた僕の家では、それからといふものはまつたくお話にもならない窮乏がやつて來たのだ。さうすると、經濟に不馴れた妻などは、毎日それを苦に病んで、泣き顏ばかりしてゐる。僕も苦しくなつて何うかして收入を殖さうとい

ろいろ考へ飽んだ末、僕はまるで門毎に物乞ふ者の味ふやうなさもしさと恥しさとを感じながら自分の書いた小說を金に換へようとして持ち廻つたのだ。ところが、いろんな事を言つて讃めてくれた人は幾人かあつたが、それだといつて僕の原稿を發表してくれるといふやうな人は一人としてゐなかつた。さうなると、僕の作品などにはてんから理解を有たない妻などは、いくら持ち廻つても金にならないといふとだけを以て、僕の作品は勿論のこと、才能や將來にまで見切りをつけてしまつたかのやうに失望してしまつたのだ。こんな風だから、萬事が一寸したことからもお互の感情が尖つてくる。淺猿しい口爭ひさへ續くのだ。僕も脆くも渦卷の中に捲き込まれて焦りだして來たのだ。そして、小說でも書かうとする青年の誰もが有つ當るべからざる自尊心も、自負心も、僕にはどうやら危なくなつてしまつた。いや、それが失くなつたからといふのではなく、依然として存在してゐるのかも知れないが、それを被ひつくしても餘りあるやうな大きな疑惑が湧いて來たのだ。「花咲かぬ薔薇はない」といつて、僕をその薔薇に譬えて賞讃もし、激勵もしてくれた人もあつたが、さうした人の斡旋によつても、原稿がいつかな世に出られそうもない狀態にあるので、もしかすると、一生花咲かぬ薔薇で終つてしまふのではないかなどゝ考へられてくると、僕の心は情ないほど哀れに、暗くなつてくるのだ。これも僕の作品を理解してくれる一人はまた、藝術家は制作することそれ自體が報酬であり、滿足であり、享樂であるべき筈だ、それを發表されないからつて悄氣る必要はないなどと言つてくれたが、この前君のところへ手紙を書いた頃の僕もそんな氣慨で一圖に制作に從事したものだ。然し、僕の此頃のやうに、家庭を持ち、子供さへ出來て貧乏してゐるとそんな氣持ばかりでもゐられなくなる。それとは全然別な立場から、何分にも金が欲しいのだ。この原稿が世に發表され、金になつたらといふことを、つく〲考へることもある。さうしてたゞ心だけが無性に焦つてくるのだ。—だから僕はその後とても——いまとてもだ——勤め以外の時間は出來るだけ制作をすることに費してゐるが、どうやら僕には依然のやうな感興がなくなつて來た、氣分なども馬鹿に硬つて來てゐる。たゞそればかりでなく、感興の乘らないのを無理に書かうとするために、その書かうとしてゐる材料を、うん〱苦しみながら引つぱつてゐるやうな不自然な氣分さへ感じて來て、なんだか原稿を書くといふことが馬鹿らしく意味のないことのやうに思はれたり、またこんな

風ではいくら書いたところで無駄なことのやうにも考へられるのだ。

大原君

かうして僕がいま君に宛てゝ手紙を書いてゐるといふ事實から、君は僕の昨今を靜かな餘裕のあるものとでも思ふであらう。然し、僕の生活が依然として停滯してゐる限り、そして日常の生活から超越するには、凡ての意味で未だ〱若い僕のことだもの、何うして靜かな氣持ちなどになれるものか。──こんな言ひ方をしたら君は、僕の言ふことを何う解していゝかわからなくなるであらう。が、實はかうなのだ。僕の生活も氣分も、依然として動きのとれない、濁つた泥水のやうなものなのだが、さういふ僕の心を引き立たせて、君へ手紙を書かせるやうな一つの新事實が起きたのだ。その事を是非君へ報せようといふ氣分が、いまこの長い手紙を書かせることになつたのだ。手紙を出さないとなると一行の端書さへ書かない僕が──一年餘りもたつてから、大抵の友人ならばもう忘れ去つてしまひさうな頃になつて──手紙を書くかと思ふと、とつても長いものを書く。それも、手紙であるものやら、感想文であるものやら、薩張り譯のわからないやうなこんなものを書く。──なんだか僕が精神病にでも罹つてゐるみたいだね。尤も僕自身では健在だと思つてゐるが。

この前の手紙で僕は、ある一人の老人のことを書いて送つた。君も記憶してゐてくれるであらう。君もあの當時僕にくれた手紙で「……實に愛すべき老人だ」と感想を述べてゐた位だから。──あの歲暮近い酷寒の人通りもなくなつた夜の街を、下帶も締めずに古るぼけた襯衣一枚の裸體で歩いて、交番の巡査に咎められたあの年寄りのことだ。年寄は巡査が嚇かすと、少しも要領の得ない返答ばかりして、おまけにこんな往來に立たせられてゐると風邪を引きさうだからと言つて、交番の中に入つて行つた。巡査も手古擦つて放免しようとすると、こゝで許されたつて、また次の交番の前を通るとまた嚇かされるから困るといつて、交番の中に入つたきり動かうともしなかつた。花見頃だつたが、僕の家に近い

S通りで、これも一時ざわめいた大通りが、めつきり人通りも減つて靜まつた頃だつたが、まるで拳鬪でもしさうなぎこちない姿勢で出鱈目踊りを踊つて、いつとなく圓を造つて集つて來たこの邊の子供や内儀さんたちを擽ぐらせては得意になつてゐたところが、市内の方から驅走して來た自働車を逃げ損ねて怪我したのはまだしもとして、恰度そこに通りかゝつた巡査の調べに對して、「いきなり自働車がやつてきやアがつたので、猶いめえましくなつて癪にさはつたから、わざと打つかつてやつたんだ」といつて、あべこべに巡査から小つぴどく嚇かされたあの愛すべき年寄りのことだ。この年寄りのことは、僕にはいまでもあの當時と少しも變らない感興を以て、深く心の奥底に泌み込んでゐる。いや、この頃の方がいろんな想像や憧憬やらが附和されて來て、寧ろその懷しい印象はだんだん深められて來たやうだ。まつたく僕は何うといふものかあの年寄りがたまらなく好きなのだ。何故好きだか？、かういふと話は横道へそれて冗くなりそうだから、こゝではたゞ僕が非常に好きだと定めておいてくれ。そして、その後とても僕はよくこの年寄りを思ひ出したものだ。ことにそれが、勤め先に於て上役から不當な服從を餘儀なくされてゐるやうな場合、幾ら働いたつて極りきつた月給しかとれずに、月末の支拂ひなどに困つてゐるときなどに思ひ出されてくると、この年寄は僕に、一種の皮肉な苦笑を敎へてくれるのだ。この他にも、いろんな理由から、また理由なしに、惱ましく悲しい場合、疑惑と絶望とに虐まれるやうなとき、よくこの年寄りは僕の心の奥底から微笑みながら浮んで來て、あるときは諦めを、世の定めを、またあるときは光を、力を――と、さまぐ＼な、その場の危急を救ふに必要な能きをよく與へてくれたものだ。このことは、もつと詳しく言はないと君にはあまり唐突に聞えるかも知れないが、兎に角僕は、この年寄りを思ひ出すことによつて、よく慰められもし、勵まされても來た。そして、このことは、今後とてもさうであることに變りはないのであらう。こんな風だから僕は、往來を歩いてゐるときなど、勞働者風の穢ない身なりをした痩せこけた年寄りに行き逢ふやうなことがあると、

「おぢいさんではないかしら？」

と、すぐこの年寄りの事を思ひ出して、注意して見るのが常であつた。そしてその都度失望ばかりして來たのであつ

た。――さうだ、幾回失望したことか――ところが僕は、つひこの間、實に意外なところで、この年寄りに邂逅ふ機會を得たのだ。僕が前に言つた一つの新しい事實といつたのは要するにこの事なのだ。繰返していふが、僕の生活は、いま落着のない慌しさに低迷してゐる。然しあの年寄りのことをいろ〳〵と思ひ浮べながら筆を取つてゐる僕には、寂しく悩ましい心にも、何處となく靜かなゆとりが出來てゐるのだ。この靜けさこそ、道を求めて行く人のみが惠まれる尊い境地のやうにさへ思へてくるのだ。何うしたのか僕の眼には涙さへ滲んで來たやうだ。

僕はいま勤めから歸つて來たところだ。社に於ては、いつもの例に洩れず、不快なことや癪に觸るやうなことばかりが多かつたが、かうして机に向つてゐる僕の氣分は、昨夜これを書き出したときのと少しも損はれずに居るのを悦しく思ふ。

大原君――僕は今朝勤めに出かける途中で考へたことだが、昨夜僕がいつた年寄りのことを書く前に、君に便りをしてから後の一年餘りの間に、僕の家の周圍に起つた二三の事件を是非聽いて貰ひたいのだ。厭に思はせ振りをさせるとでも思ふかも知れないが、そんな成心からでは決してない、せめてこの久し振りの、そしてこの機會を逸したらまたいつ書くか知れない手紙の中で、長い間沈默して來た僕が、いろいろと君に愬えて見たいのだ。それにしても、年寄の事を先きに書いてしまへば、いつまたもとの暗鬱な心になるかも計り知れないし、また年寄りのことを書き終らない限りは、この靜かな氣分が持續されることゝ思ふからなのだ。

思ひがけないときに僕は、君と二人して間借して自炊生活をしてゐた當時のことを回想されて來て、つひ小一時間ばかりは追憶の情禁じ得ないものがあつて筆を擱いてしまつた。あの當時のことは、言ひ知れぬ苦勞もあつただけに、それだけ懐しいものばかりぢやないか(!)生活と勉學との資を求める爲めに、車も曳き、銀座通りの道路も堀り、荷揚

人足にもなつてやうやく專門學校を卒業した二人は、法律を學んだ君が一勞働者となり、機械學を修めた僕は、小說作家にならうとする便宜から雜誌記者になつてしまつた。世間的にいふと二人ともとんだぐれ出しかたぢやないか。然しそれだけに僕等の立場には道を求めようとする切實なるものがあるのだが、その一人の僕が、この頃は健康を損ねる、妻や子供を有つ、それに貧すれば鈍するで、道も道だが金が欲しくてならないなどとばかりくよくよして來て、そんなことが原因になつて、家庭の圓滿は破れ、殆ど何も出來ないほど惱んでゐるなどと君に愬えなくてならぬ僕を憫んでくれ。然し、階級に入らずして心を得ずだ、僕もせめてこんな言葉を心に言つて見ながら、こゝしばらく隱忍する積りだ。その中に道も開けて來よう。僕は決してまだまだ自分を見限つて居ないのだから、それだけは安心してくれ。——オヤ！、僕はこんな泣言を君に言ふのではなかつたのだ。いつも自分ながら、この頃の自分を心に責めてゐるので、つい愚痴になつてしまつた——。實は僕からういふことを君に言はうとしたのだ。君と僕との第二の故鄕ともいふべきものは、あの人間生活のどん底に蠢く勞働社會なのだ。君などは折角の社會的榮達をさへ捨てゝ、故鄕忘じ難しとでもいふのか再び勞働者の群へ歸つて行つた位だ。それだけに我々二人は、故鄕の人々を懷しむといふ意味から、彼等の悲慘なる生活を無條件で理解し、敬愛出來るのだが、その反面には、こゝにその生活難なり、勞働難なりに就いて、諄々と絕叫する人があるとしたら、それを聞いた僕はその叫びに同情しながら——尤も場合とその相手にもよることだが——その人へ向つて僕は、「いまの世の中では、そんなこと當り前のことだ」と言つてやりたいやうな氣のすることが逐々あるのだ。殊に、さういふ哀れな人の話を、いたつて話下手の人から諄々と間接に聞かされるやうな場合、その話手に向つて、いかにも冷淡さうにさう言つてやりたいやうな氣持になつて、その話を聞くのが煩しくなることがあるのだ。何うだ？ 君にはそんな經驗がないか。實は僕はその事を怖れてゐるのだ。——何しろ僕は話下手だからね——。君にもそんな經驗があつて、折角僕がこれから書かうとする事件を、「なるほどそれは氣の毒だ。しかしそれをことあらためて言つて見たつて何になる。世間にはさらにあることだからね。」などと君が冷淡に、讀むことにたゞ煩しさを感じるやうならば、君にも氣の毒だし、またそれでは僕も詰らない。さうだ君、こんなにだらだらして長い手紙なのだから、もし君

が面白くないと思つたなら、あとは讀むことを止してそこにしるしでも附けて返してくれたまへ。君が面白くないことを僕一人面白がつてゐる事柄に就いて僕はも一度考へて見るから……。それで僕は、數多くある出來事の中から——何しろ、低地でもないのに、下水の設備が全然缺けてゐるところから、年中じめ／＼としけつてゐて、泥溝と塵芥との腐れた臭ひが堪えずむつとして漲つてゐるやうな土地に、一間か二間しかない長屋が、壞れかゝつてごちや／＼と建ち並んでゐるやうな僕の家のある貧しい街には、到底普通人の想像も出來ないやうな悲慘な事件が日に日を追ふて絕え間ないのだが——それらの事件は何れまた後の機會に讓つて、今度は、少しでも僕の家と交渉のあつたことに就いて書いて見やうと思ふ——。

何しろ僕の家のやうな貧乏街では、塀とか門とか、庭とかいふものは何の家にだつてない。臺所へでも、入口へでも出れば、すぐ隣近所の七八軒の家の人々と、否應なしに顏を合せなければならぬやうになつてゐる。かうして僕の家庭生活は、單に僕と妻と子供だけのそれでなく、同時にこの近所の人をも半成員（？）として含めなければならぬやうになつてゐるのだ。それだから家庭の平和を保つ爲めには、延いては周圍の人々とも融和しなければならぬのだ。かういふ考から僕が、この地に家庭を持つたとき以來——自分から云ふのもをかしいが——如何に敬虔な心持ちでこの周圍の人々に對して來たことか。ところが、いまになつてはそんな心掛けもさんざんに失敗してしまつた。しかしそれは、世間知らない僕にとつてはいゝ經驗であつた。僕はそのことを寂しく笑つて君に語らうと思ふ

先に僕は、僕等の經濟的生活が悲慘なほど貧しいものだと言つたが、それでも見榮を張る積りならそのへんの一寸した家には入れるものを、さうした周圍への反感からかうした所で住んでゐる位だから、まだまだ周圍の人達に較べればいゝ方なのだ。一寸例を擧げてみると、右隣りの家は、ある華族とかいふ邸の火の番をしてゐる年寄り夫婦だが、これは二人だけなら食つてだけなら行かれるのだらうが、その娘さんだといふ三十近い病身の女が、三人もの子供を伴れて出戻つてきてゐるのだ。前の家はといふと、足のわるい——なんでも炭坑で働いて冷えたとかいふことだ——中年ものゝ夫婦暮しだ。子供も居ないが、その代り一定の職業といふものを有ち得ないで。夜晩くなつてから、汚ない音樂

杖に縋つて、カンテラ——坑内で使つたものだらう——を下げながら、毎晩東京の方へと出かけて行くのだが、人の噂によると、これ程たよりない、當のならない仕事はないであらう。君はこれだけ言つただけで、この人の仕事が何んであるか、大方見當がつくであらう。ずつと前のことだが、二人して古雑誌商賣を初めて緣日廻りをした當時、三ケ月にも亙つた長雨にすつかり元までですつてしまつたことがあつたが、あのとき二人の間に冗談のやうに裝ひながら、ある程度の眞面目さで、「資本が入るぢやアなし、ひとつやつて見るか？」……と多分君が話し出したのだと思ふが、あの仕事なのだ。僕はあのときも、そんな職業——淺草公園のやうな夜晩くまで人混みのする場所で、人通りがなくなつてしまつてから、落し物を探して歩く——があるのかしらと信じかねてゐたが、そして今も不審がつてゐるが、どうやらこのからだの不自由な人は、その職業によつて危く生存を續けてゐるのださうだ。もう一軒、僕の裏の家のことを語らしてくれたまへ。この家は今年の春に人が變つて、現在は大塚さんと言つて、文部省の雇をしてゐるといふ三十五六の働盛りの中年者でありながら、いつも社會の下敷きばかりにされて來て、すつかり凋みきつてしまつたやうな主人と、いかにも榮養不良らしい顏色の悪るい細君と、この夫婦に似て發育のわるい二人の子供との四人暮しであるが、僕の家とは裏處が目と鼻との間にあるところから、妻などは一番懇意にしてゐたのだ。そして、この家の生活狀態を語るものに、こんな話がある。——それは、この大塚さんが越して來て間のない頃であつた。三日に一度位廻つてくる魚屋が、この近所の家の共同井戸であるその側に盤臺をおろして、商ひをしてゐると、貧しくありながら至つて暇の多いこの邊の内儀さん達が、めいめいに寄り集つて來て、いろんなものを買つてゐた。

「お茶は澤山あるんですけど、うちでは魚がないと食べられないので………。」

「うちでもね、豚を買つて來てあるんだがあなた、一品ではさむしうござんしてねえ。」

「わたしはまた、本當のことをいふと、魚なんてバサバサしたものは厭なんですけど、といつてこの邊では食べるものは他に何もありませんでね………。」

こんな事を各々が喋つて居ながら、しかも内心、各々がお互の言葉をいゝ加減なものと心にも止めずに、まことしや

かに話合つてゐるところへ、大塚さんの細君は、二人の子供の手を引いて、表通りの方からここへ通りかゝつたのであつたが、近所の人が皆買つてゐるので、それに、「奥さんあなたも如何ですか？」とか言つた人もあつたので、細君はその竪臺へ近寄つて、切味の値段などを氣も進まないらしく訊いてゐると、その側に不安さうな顏をして眺めてゐた七つになる女の子は、

「…………だつて母アさん、うちにまだおあしがあるの？」

と、怯づ／＼しながら言つたさうだ。」

「なにを言ふのよこの子は。あなたが無駄費ひをするから母アさんがあゝ言つたのよ。」

細君は、かう平氣さうに笑つて言つたが、その口元の邊は、ぴくぴくと震へて來て、蒼い顏がいつさう蒼黑くなつて來た。そして、人に氣付かれないやうに、その女の子の細腕を強く抓つた。

「うそだ、うそだ！」

痛さも痛かつたのであらう、女の子は、泣きながら、それでも不安らしい聲をはりあげて、

「母アさん、行かうよ、よう行かうよ。」

と、無理に母親の手を引張つて伴れて行かうとした。かうして、大塚さんの細君がそこから去りかけて、まだ三間と行かない中に、

「ねえ……子供ほど正直なものはありませんわねえ！」かう苦笑しながら言つたものがあつた。内儀さんたちは皆んな擽つたさうに笑つた。

「本當でさアね、子供だけは嘘はいへやしませんや」中年を過ぎたらしい魚屋までが、こんないかにも心ないことを、しかも輕蔑しきつた調子で言つた。

僕はこの話を、妻から聞いたのであつたが、いかにも珍らしいことのやうに話す妻をまで、僕はいかに淺猿しく思つたことであらう。人を撲るといふことが如何に野蠻な行爲であるか位のことは十分に知つてゐる僕も、かういふ話をいか

にも面白さうに話すものが、自分の妻だと思ふと、いつさう腹立しくなつて來て、聞き終つてしまふといきなり彼女の頬をいやといふほど撲りつけたものだ。すると妻は、「おかしければあなただつて笑ふぢやないの。滑稽だから滑稽だつていつたつていゝでせう?」こんな口の利き方をして僕に負けてゐなかつた。まア、こんな犬も喰はないとかいふ夫婦喧嘩の話はこゝではこれだけにしておくとして、この魚屋事件が起きてから、それまでも引込み勝ちな大塚さんの細君は、いつさう家の中にばかり閉ぢ籠るやうになつてしまつた。それでも大塚さんの細君は、僕の家とは最も近所であり、それに女同志の年齢の上でも、この邊では最も二人が近い關係からでもあつたらうが、僕の留守などには、二人の子供を伴れてよく遊びに來てゐた。こんなわけで、大塚さんの家とは自然と取りわけ懇意になつたのだつた。

　人の性質にもよるであらうが――僕などもさうだが――大塚さんの細君なども、人一倍貧乏といふことを非常に氣にする人であつた。だから大抵は一日中、暮らし向きのことに氣を腐らして苛々してゐた。僕の家などへ遊びに來ても、自分の家が如何に貧しく困つてゐるかといふことは露骨に言はなかつたけれども、かう物價が高くてはかゝりが嵩むので容易でないとか、何處の醬油は何處のに較べて×錢易いが、その代りどうも水が混つてゐるらしいとか、牛肉を一回食べるなら、魚を三回食べられるし、魚を一回食べる代りにそれで子供に幾回もお菓子を買つてやられるとか、私のやうな月給生活者はさういふことをいちいち考へなくては金は使へない、とかいふやうなことばかりを話してゐた。

「あの人と話してると、氣がくさ〳〵して嫌ひ!」

　これも貧乏を氣にしてゐる僕の妻などは、自分の痛い傷に觸れられるやうな氣がして、かう僕に滾したほどであつた。

　それに、大塚さんといふ人が家中では至つて氣難しい人で、細君の貧乏話の相手には少しもなつてやらないので、細君は、上が女で下が男の、七つと六つになる子供たちを相手に、自家の貧しい經濟狀態に就いて、一錢だつての濫費も愼み、警戒することの必要や、現在の在り高を話して、これだけで月末までやつて行かねばならぬこの母親が、如何に苦しい立場にあるかといふことなどを、訴へるやうに嚙んで含めるやうに、毎日聞かしてゐるらしかつた。あの魚屋の

ときなども、母親の財布の中をよく知つてゐる女の子は、もし母親が、それを忘れて買ふやうなことがあつたら？と心を傷めたのであらう……。

「小母さん、それいくらで買つたの？」

女の子は、僕の家に遊びに來てゐて、よくかういふことを妻に訊ねるのであつた。菓子袋や、おもちやや、子供の好きさうな品物をみつけると、すぐ欲しくなると見えて、といつて吳れて欲しいといふことも言ひ兼ねて、

「そこにあるものなアに？小母さん」

何かかう眩しいものをでもみつめるやうに眼をパチパチさせながら、せがむやうに訊ねるのが常であつた。

「しいちやんの家では買へなのよ、小母さん。」

かう泣面をかいて憐みを求めるやうにするのだつた。そして、菓子でもあげやうものなら、

「ありがたうございます」

と、まるで、古るい禮儀を守る大人の者のするやうな叮寧過ぎるお叩頭をしたかと思ふと、「さようなら、しいちやん歸るわ。」とすぐ家に歸つてしまふのだつた。このことは與へるものをして非常に失望させるものであつた。

あるときなどこの女の子は、新調したやうに見える僕の着物――その實は二回も裏返した仕立直しの袷がかけてあるのを見て、

「小母さんの家ではいゝのね。着物が幾らも出來て」

と單なる世辭ではない、心からの羨望を表しながら、「幾らとられたの？小母さん」と例のことを訊ねたさうだ。あるときなどは、僕が、僕の袴を縫ひ直しする間といつて、麻布の兄から洋服を借りてそれを着て家に歸つて來ると、この女の子はいきなり驅けつけて來て、

「小父さん、何處から借りて來たの？」

と聞くのだつた。僕も、内心氣が引けてゐたところなので、この思はぬ詰問に逢ふと、少なからず狼狽したが、

「借りてなんか來やしませんよ。これは小父さんのですよ。」
と、むつとすることも出來ず、又不機嫌な心を見拔かれまいとして言つた。
「あら、嘘よ。だつて小父さんは今朝着物を着てらつしたでせうオ」
と、狡るさうに僕の瞳を捉えて笑つたものだ。僕はこのときほど、この小ましやくれた子供を憎いと思つたことはなかつた。といつて何うして怒ることが出來るものか。——然し、少しよくこの邊の子供を觀察して見ると、皆んなこの子のやうなのばかりだ。貧しい街には、それア子供が多勢居るのだが。——

大原君、

かうして大塚さんと僕の家とがだん／＼懇意になつて來るにつれて、いろんな品物の遣り取りが女達によつて始められた。そして僕の家よりは子供も多く、收入の少いらしい大塚さんの家と、貧しい癖にものをやることの好きな僕等夫婦との間には、贈答する量に於ても、質に於てもそこに自然と差別が出來て來たことは事實だつた。このことがとんだ禍の原となるやうな日が來たのだ。

もうこの手紙を書き續けてから、今晩で四晩目になつた。ところで僕の家では、この四晩目の間、これといふ格別の變りもなく、いたつて平凡な日を送つて來た。そして、たゞ一つの小さな出來事として、この頃やうやく傳ひ／＼するやうになつた子供が、鏡臺の上に置いた二錢銅貨を弄つてゐる中に、どこかへ失くしてしまつた事だつた。この事は、たゞこれだけのことゝして濟んでくれゝばなんでもなかつたのだつたが、妻が失くなつたことに氣が附くと、それは熱心に探しだしたのだ。ところが、何處へやつたものやら、どうしても探しあてられないので、妻は、まだ何も分らない子供まで叱り出したりして、なほその在所を知らうと焦りだした。
「子供にそんなこと言つたつて無理ぢやないか。なければないでいゝから止せよ。」

しまひには僕までが我慢が出來なくなつて、かう怒鳴つてしまつた。

「だつて、勿體ないんですもの。」妻は、僕のいふことなどには耳をかさないで、「え丶？坊や、どつちへないないしたの。どつち？　あつち？……こつち？」などゝ、あまりに眞劍に訊くので、たうとう子供は泣き出してしまつた。

僕は、なんだか僕の一家が、ばかに淺猿しく思はれて來て、悲しくなつて來たので默つてしまつた。胸の動悸だけが激しく急しく打つてゐた。いつたいこのことは、昨夜起つたことなのだが、そして、妻はたうとう探しあてずにしまつたのだが、彼女はその夜一晩その失くなつた二錢銅貨に執着して、それを口にしながらくよくよしてゐた。これは、僕が床の中に入つてから考へたことだが、僕はこの一つの銅貨がみつからなかつたことを、本當に感謝した。もしも、あの銅貨が見つけ出されたなら、妻は必ずそれを持つて、子供を抱いて通りへ出て行つたに違ひない。――妻は、下町の貧しい家に育つた丈け、金の値を非常に重大視するが、それでゐて、考へなしにあればあるだけ、無性に金を使ひたがる女なのだ――そして、一つか二つの菓子を買つて來て、それを彼女と子供とが僕の前でおいしさうに食べてゐるとしたら何うだらう？　その光景を頭に描いただけでも、僕は堪らない氣がした。僕は更に考へて見た。強ゐられる忍辱、餘儀なくされる虚僞、それらを誠しやかに裝ふ心ならぬ愛想のよい服從、その上の勤勞によつて、やうやく得たこの月給といふ不淨な端した金の更らに幾千分の一かの銅貨一枚が、僕の家庭に、これほど重用な地位を占めてゐるかと思ふと僕は泣きたい位であつた。まつたく僕は、當然過ぎる權利の享受であるところの給料も、凡てが僞りの上になされた事の、そして與へる者の心からは、まるで捨てゞもするかのやうに、恩惠たつぷりに與へられるのかと思ふと、それによつて生活しなければならぬ自分を、癪にもなつたし、また情けなくもなつて來た。何もいまになつて考へた事ではないが、こんなことを思ふにつけ、早くこんな生活からのがれたいと切に考へさせられた。然し僕のやうな無産者は、何處かへ雇はれでもしなければ、いまのところ生活の資料を得るわけには行かないのだが、さうすると、かうした苦痛にうち克つて行くのが、人間として強い所以になるのだらうか。それだとすると、強い人間なんてものは、えらい痩我慢の強いものなんだね。

大原君

前に述べたやうな譯で、昨夜は君へのこの手紙も一行だつて書けずにしまつた。然し、いまかうして机に向つてゐると、――いつもの僕ならばこんな場合には沈默の慰撫にうなづいてゐるときなのだが――君に語ることによつて元氣づけられてゐる。手紙の續きを書くことにしやう。――

僕のわるい癖として、話はまた横道に延びて行きさうだ。といつてこの事を話さないと、前の大塚さんとの話が兎がつかないのだから我慢してくれ。ところで、僕の家から大通りへ出る途中に、カメノコたわしの内職をしてゐる四十近い夫婦ものがゐる。小勝さんといつて、十三になつた女の子の他には、猫が一匹飼はれてゐる家だ。この主人といふのは、もと岐阜の方で料理屋をやつてゐたのださうだが、その土地の藝者と出來合つた擧句、東京へ出て來たのださうだ。そしていろんな事業に手を出しては失敗に失敗を重ねて、いまは、共稼ぎの内職をして約ましく活してゐるのだつた。そしてその藝者といふのが、いまゐる三十位の、やせぎすな、色の淺黑い内儀さんなのだ。内儀さんは、いまでは白粉一つつけないほど素人になつてゐるが、それでも若い時分のことが忘れかねると見えて、よく話するときに、「藝者はよくこれを食べますよ」とか、「あの人は藝者のやうに氣前のいゝ人ですわね」とか、「藝者のやうに美しい人ね」とか藝者といふものを理想的の標準に置くのが癖であつた。この言葉は、藝者ほどの享樂もせずに過して來たやうなこの邊の内儀さん達には、聽きづらいものであつた。しかし、主人もいゝ人であつたが、内儀さんはそれア少しの惡氣もない正直な人だつたので、評判のいゝ家だつた。そして、この小勝さんの隣家は、女髮結だつた。それも、杉板の一尺四方位のものに、下手な文字で「女髮結」といふ看板を出してゐるところから、誰もその家をさう呼ぶのだつたが、この邊ではお錢を出して髮結ふ人などのゐないせいか、それとも結方が下手なためか、或はその二つの理由からかも知れないが、僕はこの家に客のあつたのなどは滅多に見たことがない位だ。良人は土方だつたが、どうしたのかこの人もあまり仕事には出ず、始終酒ばかり飲んでゐた。そしてこの家には、石切りが同居してゐた。この石切りはもう三十も越した働盛りの男だがそれにいゝ金を取つてゐるとのことだが、まだ獨身者なのだ。僕がこれから話さうとすることは、この

男に大いに關係してゐる事件なのだが、それは、この男の下宿してゐる女髪結と向ひ合つたところに、六十を越したお爺さんの勞働者と、まるで親子ほども年が違ふ――もとは板橋の女郎であつたのを八年前にお爺さんが身受けしたのだといふ――女との二人暮しの家がある。むしやくしやした長い髯を生やしてゐる、まるで日露戰爭で戰死したマカローフ提督のやうな風采のお爺さんは、内儀さんと一緒に砲兵工廠に雇はれてゐて、丁度蟻がその塔を築きあげるやうな長い努力で、千圓近い貯蓄さへ出來、他からは羨やましがられてゐた。ところが去年も暮に近いときになつて、このお爺さんの細君と石切りの男とが、同じ晩に何處かへ姿を隱してしまつた。その翌朝になつて初めてそれを知つたお爺さんは、いかにも平靜な態度で「いままでも怪しいとは思つていたが、まさかこんな馬鹿なことを仕出かしやがるとは考へなかつた。しかしよござんす。俺はもうそんな碌でなしには構つてません」から髪結の家の人にも、また、お爺さんがもつともよく懇意にしてゐる小勝さんの人達にも話して勤めに出懸けて行つたが、その翌る日には、勤めの方も休んで、二人の搜索願を警察に願ひ出たり、心當りを自分で行つて探ねてみたりした。それから三日といふものお爺さんは、勤めにも出かけずに毎日どこかへ探しに行つたりしたが、その三日目の夕方、二人の居所は警察の手によつて探し當てられて、そして伴れて歸られた。男は、髪結さんの家に行き「もう決してこんな迷惑をかけません」と言つて、その晩すぐ何處へか越して行つたさうだし、女は、お爺さんの許に來て、オイ〱泣いてばかりゐた。

「お前みてえな畜生にも劣る奴は、俺には少しの未練もねえんだが、あんまり手前達の仕打が癪に觸るから引摑んで警察に出してやらうとしたんだ。間男をした奴ア昔は打首だ……いまに見ろ、二人とも牢へ打ち込んでやるから……」お爺さんは、かう落着のある聲で言つたかと思ふと、「手前みてえなあまアは、いつまで經つても淫賣の癖が抜けやがらねんだな」と、苛々しさうに聲を荒げたりした。

お爺さんは、女の戻つて來た晩は、通りへも聞えるやうな大きな聲で、女を怒鳴りつけたり、撲りつけたりしたが、その翌る朝には、何事もなかつたやうに二人して一緒に勤めに出かけて行つた。そして女が歸つて三日目の晩にはお爺さんは「よく考へて見たが、まだ若いお前が、俺のやうな年寄りと暮らすのはさぞ詰らないだらうから、これからはお

前の好きな者と仲好く暮らしたがいゝだらう」といふ意味の事を、思ひ遣り深かさうに諄々言つてから、離緣狀に二百圓を添えて心よく女と別れる話まで持ち出したのださうだ。しかし、いざ實行する段になると、お爺さんは、金を出して買つて來た女であるし、また八年も一緒に棲んで來た女房でもある女と別れるにはいろんな未練が湧いて來た。普通にやつてゐては到底殘りさうもない金を無理に少しづつ貯めたものを、二百圓と纏めて渡すことにも未練はあつたらう、さうした擧句は、たゞ離緣狀だけは女のいふまゝに書いて渡しはしたが、女だけはどうしても手離す氣にはなれずに無理におし止めてもと通り同棲してゐた。それから二三日目の間は、お爺さんと女との間に、毎夜のやうにいさかひがあつたが、いつかそれもなくなつてしまつた。近所では、これでまるく納まつたとばかり思つてゐたのだつたが、年も越えてつひ最近になつてから、盂蘭盆がもうぢきだといふ日隙日に、女は實家へ中元に行くのだといつて、近所の酒屋から取つたビールを提げて家を出た。お爺さんは、他に二圓を包んで「これは俺れからだ」と言つて、女に渡したほど機嫌よく女の里歸りを許したさうだが、女が出懸けた後で、一つの暗い焦々した疑惑が湧いて來た。それは、女の持つて行つたビールであるが、いつぞやこれも里へ歸らうとする女に「ビールでも持つて行くか？」とお爺さんが言つたら、女は「そんなものを飮むものがないから」と素氣なく斷つて砂糖を持つて行つたことがあつた。年老つた兩親への贈物として、そのとき女が反對したのも、滿更ら女のわるい癖の拗ねくれ根性からばかりではないらしかつた。それだのに今年に限つてビールを持つて行く……お爺さんはかう思ふとすぐあの酒の好きな石切りの男を、思ひ出さずにはゐられなかつた。それに女は、泊らずに歸るといつて家を出ながら、このことはお爺さんも幾度となく念を押したのだつたが、たうとうその晩は遲くまで寢ずに待つてゐたお爺さんをすつかり怒らしてしまつた。女はその翌る日も歸らず、三日目の晩、それもお爺さんが碌に飮めもしない酒に醉つて寢てしまつてから女は洒蛙々々と歸つて來た。そして着更へをして火鉢の側で一服してゐると、すつかり熟睡してゐる筈のお爺さんが、何ものにか彈ね飛ばされたやうにいきなりむつくと起きあがつたかと思ふと、ものをも言はず女を撲りつけたのださうだ。ところかまはず撲る蹴るのその權幕には、いつもならばお爺さんなんどを子供のやうに馬鹿にしてゐる女も、餘程怖れをなしたと見えて、

「ご免たらねお前さん、話はあとで分るぢやないかね、みんな、默つてゝ亂暴したつて分らないぢやないか！　痛ッ痛いわよ……」

　こんな悲鳴をあげたりした。

　このとき、近所の三軒ばかりの家の、一度締め閉ざされた窓口の板戸が、細目に明けられた。そして、そこから覗いてゐる幾つかの眼には、お爺さんの家の窓前に佇つて、中の樣子を窺つてゐる黒い一人の男の姿がうつゝた。そのものゝ誰だかを知ると、いまにも怖ろしい嵐が捲きあがつて來さうなので、見てゐる人々の胸は初めの好奇心からおしつけられるやうな息苦しさまでに緊張して來たかと思ふと、その黒い影の男は、突然中に向つて荒々しく怒鳴りつけた。

「おとき！おとき！　そんな爺々蹴飛して出て來い。離縁した女が何を仕樣とおほきなお世話だ。しやらくせえことしやがると、俺が承知しねえぞ、老耄！」

　かういひながら黒い男は、着物の裾をからげたり、腕をまくしあげたり、いまにも何にかに飛びかゝりさうな身構えをした。

「なんだア、こなやらう！」

　中からお爺さんの狂ふた聲が、何處か弱々しい影をつくつて挑戰して來た。そして、ドタ〳〵と器物でも拋るやうな音がして來た。

「こいつらア、二人とも生かして置かねえぞ！」

　かういふ聲と殆ど同時に、内から格子戸が勢づけて開いて、女が先に、それを追ふやうに出齒庖丁を持つたお爺さんが、跣足のまゝで飛び出した。黒い男は女を自身の背後の方に押し退けておいて、お爺さんの鼻先へ飛び出した。年寄りの方が先づ顏のあたりを摸ぐられてよろ〳〵と横へふらついた。それから間もなく「ちゝイ切りやがつたな！」かう大仰に怒鳴る男の聲がした。

それまで、その光景を覗いてゐた人達は、このとき、「かゝり合ひになつちや困る」と思ふと、また、言ひ合したやうにそほつと雨戸を閉めてしまつた。

大原君、僕はたれかに、東京の人は人の居る所でなければ喧嘩はしない——といふ話を聽いたことがあるが、まさかこの二人も見てゐる人が居なくなつたから止した譯でもなからうが、それからまもなく格闘を止してしまつて、「この野郎交番へ來い」「手前こそ警察へ來い！」などゝお互にお互を交番に引立てゝ訴へ出た。姦通罪と殺傷罪との故を以てゞあらう、そして、喧嘩場から姿を隠した女もすぐ捕つてしまつて、三人はその夜からS警察署の拘留場に抛りこまれてしまつたのだ。ところが、この事件のために僕等の組合——これは所謂隣り三軒兩隣りといつた近所のつきあひのことで、僕等の組合は、いさゝかその趣きを異にして、一つの共同井戸を使ふ家作の全部を含んでゐる小さな相互扶助的なつきあひのことだ——の間に、一つの問題が起きたのだ。それは、拘留されてゐる三人の中でも、たゞお爺さんだけには實に同情すべきもので、可愛さうでもあるから、組合で據金しあつて、辨當の差上れをしやうではないかといふ話を小勝さんが持ち出したのだ。この相談は、僕の家へも、裏の大塚さんへも話があつた。丁度その時は僕が留守のときだつたので、妻は、僕が歸つて來てから話して確かな返辭をしますといつて挨拶しておいたさうだが、內心は大いに不贊成であつた。何しろ、組合の中だと云つても、こゝへ越して來てこの方、つひぞ一度だつて挨拶したこともなし、それにお爺さんが金に困つてゐる人ならまだしも、我々には少しもない貯蓄をさへ相當にある人へ對して、そんな差し出がましい事をする必要はないと彼女は僕の前で反對してゐた。そして、これまでも何か少さな出來事でも起るとお互に相談し合つたやうに、妻と大塚さんの細君とはこのことに就いてもまた相談し合つたものだ。大塚さんの細君などは、妻のいふ言葉と同じやうな事を言つた上、それに、よしそんな事をしてやつたとして、お爺さんからほんとに感謝されるのは、小勝さんだけで、私たちは小勝さんにさう言はれたから出したもので、決して心からの親切などゝは先方から思はれない、それでは、小勝さんだけをいゝ人にする爲めに金を出すやうなもので詰らない、だからこんな相談に乘ることは厭だとかなり露骨なことまでも話合つた。これらの話を僕は妻からきかされたとき、妻や大塚さんの細君の言ひ分

も一應は尤ものやうに思はれたし、また僕には別な考へもあつた。それは、矢張りこの事件でもつとも氣の毒な立場にあるのはお爺さんで、それだけにお爺さんは僕にも一番同情された。それと反對に、石切りの男と女とを憎い奴だと不快に思つたことだ。この考へはいまでも變りはないが、といつて、お爺さんにだけ特別な好意を實際的に示すといふやうな氣にはどういふものかなれないのだ。何しろ男女の關係のことだもの。つき詰めてみれば、誰を善いといひ、誰を惡るいといふことが出來やう。いつ僕がその石切りの立場に立たないと斷言出來やう。まつたく愛欲の惱みにこそ長い間の人間が誰も彼もが苦しんで來た道だ。それが迷路から死へとまでも進む道であるとは、幾多の愛欲の犧牲者が、あり〳〵と人生の地圖に畫き示した暗礁であるが、それを知りつゝもそこへ行かずには止まない人々の心を、單なる自分の感情だけで具體的な行爲で律したくなかつたのだ。それに、貯蓄さへあるといふお爺さんが、他人から惠みを受ける心持をも考へてみなければならなかつた。どうせこんな事件の性質として、二三日も經つと警察の示談で容易に事濟みになるのだらうが、その僅かな間の差入れの爲めに、十幾軒かある組合をいちいちお爺さんがお禮に廻ることを餘儀なくされるのだらうが、――お爺さんが面目ながつてそれを欲しなくとも、情誼に厚い小勝さんがそれをさせずにおかないだらうから――さうだとすると、いゝ年をしたお爺さんの姿があまりに慘めでもあり、當人もまた、こんな變目（？）に逢ふなら、いつそまづいながらも警察で出す辨當を食べてゐた方がましだつたと思ひやしないかしら……何しろこんな考へから、僕の家では、相談を受けたまゝ返辭もせずに二日はかりなほざりにして置く中に、金を出すことに反對な人々の側から盛んに氣勢があげられた。

「女房を盗まれたからつて、そんなことにいちいち金を出した日にア、おまんまを食つて行かれませんやね」

隣りのお婆さんなどはこんなことまで言つた。こんな譯で、凡そ組合の皆が皆差入れに反對なことは、いつとはなしに小勝さんの耳にも洩れたと見えて、この相談は決定を見るまでに運ばれないで、一日經ち二日經ちしてゐる中に、豫想通り三人は警察から取り下げられた。女は警察での誓言通りお爺さんと一緒にもとの家に歸つて來た。そしてこれも僕が想像した通り、お爺さんは歸つて來たその晩、小勝さんと一緒に、「いろ〳〵御心配をかけて濟みませんでした」と

いふ意味のことを言つて、いちいち組合を廻つて歩いた。

小勝さんとお爺さんとが僕の家へ來たのは僕達が夕餐を濟したときであつた。格子戸の開く音と、そのときの挨拶よで、それと直覺した僕は、妻を挨拶に出した。小勝さんの取濟した顔を見るのも剛腹だつたし、またお爺さんと顔を合せるのも氣の毒でならなかつたからだ。然し、その應接してゐる話聲は、何しろ狹い家のことだから、はつきりと手に取るやうに聞えて來た。嗄れて太い、そして怯々としてものいふお爺さんの恐縮しきつた聲、低いながら歯切れのいゝ落着き拂つた小勝さんの田舍訛りのある調子——こんな氣の毒な結果を豫期してゐた僕は、然も、差入れもして貰はないのにその禮を述べて歩くお爺さんが堪らなかつた。僕の家を出たお爺さん達は、僕の家の軒下を通つて後の大塚さんに行つた。僕の家で述べた調子と少しも違はない言葉がそこで繰返されてゐるのが、はつきりと僕の家まで聞えて來た。小勝さんについで、あの皺むしやな顔のお爺さんが、何遍もぴよこぴよこと無器量に頭を下げてゐる樣が僕の頭にありありと描かれて來た。さうした聲と、幻影との中で、大塚さんの細君のいそいそした挨拶も杜切れ〳〵に聞えて來た。そして細君の聲が一段と低められたとき、あたりが急に靜かになつて、そして僕の聽覺が本能的にそれを聞かうとして鋭敏になつたので、その小さく囁く大塚さんの細君の聲をもはつきりと聽きとることが出來た。

「………實はね小勝さんの旦那樣」細君は、他人を尊敬するといふよりは、自分がこんな貧乏こそしてをれ、これまでは如何に上品な生活をして來たかといふことを吹聽するやうな勿體ぶつた調子で憚るやうに言ひ出した。「……あのこなひだのお話でございましたが、實は、御返事も申上げずに失禮いたしましたが、實は、……私の宅では、何しろ田舍者で何も分りませんので、皆さまのお指圖にならひませうと思ひまして、實は……前の××さんの奥さんに御相談しましたのですが、××さんではなんだかばしばしなさいませんので愚圖々々して居りまして、……實は今朝も良人から叱られましたのでしたが……」もつと何事かを言はうとしてゐると、それを小勝さんが輕く引取つて

「なアに、どういたしまして、どうもいろ〳〵お騷せいたしやして、申譯もござやせんです」などと世辭よく受けてゐた。

急に僕は咄となつて來た。僕の氣性としていきなり飛び出して行つて怒鳴りつけてやりたいやうな憤りに燃えて來たのだつたが、僕はふとあることに氣づくと、見る見る中に泣面をかくやうな苦笑が唇に浮んで來た。……さうだらう、あんなに仰々しく御禮を言はれたら、誰しも差入れに反對した手前、氣が咎められるであらう、それを申譯するのにあんなことを陰でいふのは、いかにもこの世間にありさうなことである。それをいま僕がはしなくも聽いたのに過ぎないのだ。むきになつて惱るほど他愛もないことのやうにも思はれて來て、却つて馬鹿に淋しくなつて來てしまつた。僕はかうした暗い氣持ちで、妻は（？）と思つてその方を振り向いて見ると、彼女は子供に添乳をしてゐたが少しも感づいてゐなかつた。僕はなにかなしに吻と安心した。

この事件は、こんなことでひと先づ鳧をつけたが、その後になつても、僕の心には、あの小勝さんに囁いた大塚さんの細君の言葉が、さう氣にしてゐる積りでもないのに、意地惡くこびりついてときどき頭を擡げるのであつた。そして、次に語らうとするも一つの小さな出來事とともに、僕のやうな長屋住にあつては、家庭の平和はその環境との折り合ひが必要だといふ考へから、強めてそれらと融合しやうとして來た僕の努力は、無殘にも絕望を感じさせられたのだ。

離合の機緣などゝいふものは、實に一寸した些末なことによつて支配されるものだ。近所の人の口がうるさいと言つて、交ることを强いて避けてゐた大塚さんの細君は、お爺さんへの差入れの相談が緣をなくして、それからといふものはよく井戸端などで、近所の女達と、少しく誇張していふと半日も世間咄で過すやうな交際好きな如才ない人になつてしまつてゐた。ところが、陰には更らに影が附き纏ふもので、その井戸端で内密に話したといふ大塚さんの細君のを、話わさわざ僕の妻に聞かせてくれる女があつた。

「……あの差入れのことでもね、わたしの家ではどちらでもいゝ位に思つてましたのですが、××さんで全然反對だとおつしやいますものですから……」細君は、こんなことをそこでもよく繰返したさうだ。「……それにこれはほんの内密なのですが、××さんの家では、なかなか金をつましくしてらつしやる癖にね、私の家などへはそれあ、いろんなものを下さるんですよ。御親切からなのでせうが、あなた、うちではそれあ迷惑してゐますわ。なにもねあなた、私の家

が貧乏だからつて、何にも××さんからいたゞきものをしなくては食べて行かれないといふ譯でもありませんのにね。良人などもそれをひどく厭がりまして、お前などもあまり深入りはするなんて言つてますのですよ。」かういふことを繰返し繰返しいつて、同意を求めようとしたが、私は默つてなんともいひませんでした——とその女はそのときの自分の態度をまで附け加へて妻に言つた。さうかと思ふと、もと通りに僕の家へ遊びに來る大塚さんの細君は、近所の人が僕等のことを噂してゐるといふことをいろいろと話すのであつた。僕の勤め時間が一定しないのや、頭の毛を長くしてゐることなどを以て、雜誌記者だといつてるが、何が記者だかあてになるものぢやない、その邊の金持の邸へ行つては小使でも貰つてゐるのだらう——などゝいふものもあると告口した。……これらの惡口は、皆んな僕等夫婦と信實ありげにつきあつてゐる人達によつてされものだから、それを聽いた僕も一時は不快さを禁じ得なかつた。もともと人の噂などを仕合ふのを好きな質なのだが、毎日のやうにうるさくいふ僕の注意によつてそれを愼んでゐる妻などの口惜しがりやうつたらまた格別であつた。僕に聽かしてゐながら彼女は涙ぐんでゐた。「もうあんな卑怯な人達の顏を見るのも厭ツ！」とんだ機會から彼女一人が人格者になつてしまつた妻は、こんなことをヒステリツクに叫んだりした。

大原君、僕等がまだ學校に通つてゐた時分、二人は金のありさうな學生とはなるべく交際しないやうにしてゐたものだつた。それは君も知つてる通り、我々が餘り貧しかつた爲めだつたね。さういふ學生と同等の交際は勿論出來ないし、といつて我々の氣象としてさういふ人々からいつも恩惠的な態度に出られることは、自分達がどんな不自由をするよりも厭なことであつたからであつた。僕はあの當時の、この幾分か僻んでゐる心の經驗を、家庭を持つてからでも決して忘れはしなかつた。或る人にとつては他人から物を贈られるといふことを非常に迷惑がる場合がある。だから、唯ものを贈るといふことでも、相當に考へた上でなければならないといふやうなことを、僕は新婚時代の妻にも繰返し話したことであつた。だから、大塚さんへの場合でも、僕等はかうした注意を怠りはしなかつたのだつたけれども、先方に言はすれば、それが幾ら誠意を籠めたものでも、そこに優劣の差異が出來る事が既に面白くなかつたのだらう、といつて同等な贈與をするには、經濟が許さなかつた。——かういふ場合、大抵の人は自分を憫れますに、人を怨むものだ——こ

れ位の氣持を辨へない僕でもなかつたのだが、つひ自分達がその優越的な地位に在つたので、自分よがりな考へに陷ちて、大塚さんの迷惑がつてゐるのに氣附かないでゐたのだらう――こんな風に先方の立場にも理解されてくるが、といつてからも物事が曲解されるといふことはなんといふ寂しい事であらう。君などは、こんな詰らない世間の陰口に僕などが捉へられてゐるかと思ふと、さぞ歯痒くさへ思ふであらうが――僕自身またさう感じてゐるのだが――これらの噂話を聽いてから僕は、僕の書く小説に理解を持たない妻に對したやうに、隣近所の人々に對しても、ほんの上面ばかりの挨拶こそすれ、すつかり失望してしまつて心の扉を閉ぢてしまつた。それでも妻だけは、これも陰では何んと言つて惱つてみても、表面だけは、これまでと少しも變りなく、大塚さんの細君へも、その他の内儀さん達とも、愛想よくつきあつてゐる。――

さて、これから僕は、この手紙の初めに書いた、僕が一年振りで再會する機會を得た一人の年老いた勞働者のことを語らうとするのだが、また話は横道へ進んで行きさうだ。……いつ頃であつたか僕はそれをはつきりと記憶しないが、なんでもまだ寒い時分のことであつたと思ふ。僕は、雜誌の方の關係から知り合になつた友人から、こんな話をきいたことがあつた。それはその友人が、奥羽地方へ旅行しようとして上野驛の二等待合室で發車時間を待つてゐると、あの左側の壁に抉られたやうに出來てゐる石炭ストーヴの前に、醜くい身なりをした一人の勞働者風の男が、ひろびろと立ち塞がるやうに場所を取つて、暖をとつてゐるのを目撃したのださうだ。友人は――淡い階級意識からでもあつたらう――この場所柄も辨へぬ男の振舞に、むつと反感を抱いたさうだ。ところがそこへ入つて來た驛夫が、その男を見ると急に顔色を變へて――驛夫もこんな男が二等待合室にゐることの如何に不當であるかといふ事に義憤を感じたのであらう――つかつかとその男の側に寄つて行つて、いかにも輕蔑しきつた調子で、

「おい君、こゝは君達の居るところぢやねえぢやないか？　お客樣が迷惑だ、さあ行つてくれ！」

から言つたさうだ。すると、男はそんな生優しい驛夫の譴突くなどには負けずに、傲然とした勢で怒鳴りかへしたのだつて、

「何んだと、こゝが何うしたつてえんだい、巫山戯たこたア拔かすねえ！洋服着た男がゐていゝなら、こちとらだつて油こそついてるが洋服を着てらアね」男はせゝら笑つて取り合ふともしなかつた。

「何んだと！」驛夫は嚇と憤つて來た。「こゝがどこだか君には分らねえのなら、入口の札を見て來い！ なんと書いてあるか分るぢやないか」

「なんと書いてあるのか、見ねえうちから分らねえや、こちとら字なんどは憚かんながら、爪の垢ほども讀めねえからな。」なんだかこの男は、文字の讀めないことを手柄のやうに言つてゐた。

「冗談いつちやいけねえ、あれ位のを讀めねえなんて誤間化すな。なんでもいゝからこゝはお前たちの入るところぢやないんだから、何つかへ行つてくれ。お前がこゝでがん張つていちやア、お客樣が迷惑だから。」

「お客樣が迷惑だと？ こちとらだつて立派なお客樣だア……それに字の讀めねえものに、こゝが一等だか三等だか、こちとらこそお前に欺まされやしねえや。……それに、あつちよりはこゝの方がずつと暖つたけえし、ゐる人も上品で氣持がいゝや」その男は、かういひながら思ひ思ひの場所からこの光景を見てゐた人々の方を、にやりとした眼付きでぐるりと一瞥してから、「……奥さんだつて、お孃樣だつて、品物が上等で見心地もいゝやね。」と、皮肉さうに笑つた。

この亂暴な男の態度に、驛夫は、もう口も利けないほど、激昂してしまつたのださうだ。いきなりその男の肩を摑へると、引擦り出さうとして怒鳴つた。

「この野郎、さア警官へ渡すから出ろ！」

しかし、その男の方が體格もずつと勝れてゐるので、驛夫の思ふやうにはならなかつた。

「しやらくせえ眞似するねえ、よーし、手前などに伴れて行かれねえたつて、どこへだつて行つてやらア、手前こそ出て來い、字の讀めねえものに、一等も三等も區別があるけえ。」

かういつて男は先に立つて待合室を出ようとしたとき、恰度そこへ出合頭に巡査が入つて來た。すると、まるで飼犬がその主人に逢つて尾を振りながら甘えるやうに、驛夫は昂奮し切つた表情の中にも、追從するやうな微笑を漂へながら、警官にぴよこりと叩頭をした。そして、その男を指しながら、

「この男、二等待合室に入つて居りますので……」から訴え初めたとき、警官は、その商賣馴れた睨みで、その男の方をぐつと睨めたのださうだ。すると、それ迄當る可からざる氣勢をあげてゐたその男は、驛夫の言葉を中途から引つたくつて、警官の方に向つて、頭をぺこ〳〵下げ初めた。

「旦那、どうもへえ、なにさま寒うござんしたもんで、つひすまねえとは思ひながらやりましたんで……どうも濟みません。勘辨してやつておくんなせえ。なにさまこの寒さでございやすので……。」

男が、かういひながら、すつかり奴隷的な態度に出たとき、心地よげな微笑を浮べたのは、獨り驛夫ばかりでなく、僕の友人も、そこに居合せた凡ての人々も、思はずくすりと笑ひ出したのださうだ。警官はその男を、一言二言可成り烈しい言葉で叱りつけたさうだが、何しろ相手がぺこ〳〵お叩頭ばかりして詫びてゐるので、いつまで惱つてゐる譯にも行かないと見えて、その男はまもなく放免されたのださうだ。その男が、つひいまの出來事などはすつかり忘れてしまつてるかのやうに、悠々と濶歩しながら、構内の人混みを掻き分けるやうにして、上野公園の方へ消えて行く後姿を見送つてゐた僕の友人は、無智ではあるが、或はその男に思想など〻名づくべきものはないかも知れないが、確に「彼自身の言葉」を持つてゐるその男が、馬鹿に痛快に感じられて來たさうだ。

大原君――なんとこの二等待合室を騒がした男の態度が、僕がこれから語らうとする年老ひた一勞働者の、あの交番に於ける巡査への態度に酷似してゐることだらう。僕は友人よりこの話を聽いたとき、一時はそれと決めてしまつて、

「よくまア、巡査に厄介をかけるお爺さんだなア……」

と、思はず微笑を洩らしたものだ。然し、その年齢や風采などを尋ねて見ると、どうやら別人らしかつた。その男といふのは、まだ二十七八の、そして體格が素晴らしいほど發達してゐて、顏色の淺黑い、際立つて太い眉毛は、鼻柱のと

こで落合つてゐるやうな人だつたさうだ。僕はこのとき、淡い失望を感じながらも、「これは、近い中にあのお爺さんに逢はれるかも知れないな」と、どう云ふ理由からでもなしに、さう思ひ込んだものだ。そして、それからといふものは、いつさう往來のそれらしい人に注意を怠らなかつた。

　それは、友人からこんな話を聽いてからは三四ケ月は經つてゐるが、現在からいへばつひ最近のことであつた。日中は連日の厳しい暑さに照りつけられてゐたが、その夕方には珍らしく、天地を一擲の下に洗ひ晒してしまひさうな猛烈な夕立がやつて來た。なにしろその日も到底雨の降りさうもないのを滾しながら朝家を出かけた位だから、僕には雨具の用意は勿論なかつた。電車へ乘る間も、降りてからも、困ることを十分知りながら、そして借りようと思へば借りられないこともない傘をどうしたのか僕は更ら借りずに社を出てしまつた。いまから考へて見ると、この蒸苦しい眞夏に厚ぼつたいセルの袴をはいて、洗ひ晒しの浴衣を着て毎日勤めてゐる自分の見苦しい姿に愛想をつかして、何うにでもなれといつた自棄心からの發作らしかつた。――恥しい告白だが僕は、惣ひ智識階級とかいふ生活に入つたばつかりに、こんな自棄心さへとき〲起るのだ。――電車に乘る間に早くも僕の體はすつかり水の中を潜つて來たやうに濡れてしまつてゐた。電車の中の人達が呆氣に取られて僕の姿を見てゐたが、僕は、それらの人を涼しい顏附で見返すといふやうな負惜みさへ仕出かしたものだ。どの停留場にも、この驟雨の中に雨具や履物を持つた人が澤山佇つてゐた。ことに××の終點には、降りる人が多いだけにまた出迎へる人達も多かつた。しつきりなしに駛つてくる電車、そしてその兩方の小さな出口から降りて來る人々の間へ雨具を持つた人々の瞳は注意深くむけられてゐた。その誰かの歸りを待つてる人の中には子供もまたお婆さんなども混つてゐたが、僕には、僕の妻位の若い奥さんらしい女が一番多いやうな氣がした。そしてそれらの若い奥さんたちは、いかにも生活そのものを享樂してゐるかのやうに、さつぱりと身についたなりをして、匂やかに化粧をしてゐた。どの人も僕の妻などよりは優れて美しく見えた。丈の高い華車な足駄、それにすげられてあるビロードの青や水色や桃色の鼻緒、さま〲な模樣のつまかけ、さては夕立の卷き起す微風に飜られてゐる裾褄などまでが、僕にはなんとなく美しく、馬鹿に羨しいものゝやうに感じられて來たものだ。それといふの

かういつて男は先に立つて待合室を出ようとしたとき、恰度そこへ出合頭に巡査が入つて來た。すると、まるで飼犬がその主人に逢つて尾を振りながら甘えるやうに、驛夫は畏縮し切つた表情の中にも、追從するやうな微笑を湛へながら、警官にぴよこりと叩頭をした。そして、その男を指しながら、

「この男、二等待合室に入つて居りますので……」から訴え初めたとき、警官は、その商賣馴れた睨みで、その男の方をぐつと睨めたのださうだ。すると、それ迄當る可からざる氣勢をあげてゐたその男は、驛夫の言葉を中途から引つたくつて、警官の方に向つて、頭をぺこ〳〵下げ初めた。

「旦那、どうもへえ、なにさま寒うござんしたもんで、つひすまねえとは思ひながらやりましたんで……どうも濟みません。勘辨してやつておくんなせえ。なにさまこの寒さでござえやすので……。」

男が、かういひながら、すつかり奴隷的な態度に出たとき、心地よげな微笑を浮べたのは、獨り驛夫ばかりでなく、僕の友人も、そこに居合せた凡ての人々も、思はずくすりと笑ひ出したのださうだ。警官はその男を、一言二言可成り烈しい言葉で叱りつけたさうだが、何しろ相手がぺこ〳〵お叩頭ばかりして詫びてゐるので、いつまで憤つてゐる譯にも行かないと見えて、その男はまもなく放免されたのださうだ。その男が、つひいまの出來事などはすつかり忘れてしまつてるかのやうに、悠々と濶歩しながら、構内の人混みを掻き分けるやうにして、上野公園の方へ消えて行く後姿を見送つてゐた僕の友人は、無智ではあるが、或はその男に思想などゝ名づくべきものはないかも知れないが、確に「彼自身の言葉」を持つてゐるその男が、馬鹿に痛快に感じられて來たさうだ。

　大原君――なんとこの二等待合室を騷がした男の態度が、僕がこれから語らうとする年老ひた一勞働者の、あの交番に於ける巡査への態度に酷似してゐることだらう。僕は友人よりこの話を聽いたとき、一時はそれと決めてしまつて、

「よくまア、巡査に厄介をかけるお爺さんだなア……」

と、思はず微笑を洩らしたものだ。然し、その年齡や風采などを尋ねて見ると、どうやら別人らしかつた。その男といふのは、まだ二十七八の、そして體格が素晴らしいほど發達してゐて、顏色の淺黑い、際立つて太い眉毛は、鼻柱のと

こで落合つてゐるやうな人だつたさうだ。僕はこのとき、淡い失望を感じながらも、「これは、近い中にあのお爺さんに逢はれるかも知れないな」と、どう云ふ理由からでもなしに、さう思ひ込んだものだ。そして、それからといふものは、いつさう往來のそれらしい人に注意を怠らなかつた。

それは、友人からこんな話を聽いてからは三四ケ月は經つてゐるが、現在からいへばつひ最近のことであつた。日中は連日の嚴しい暑さに照りつけられてゐたが、その夕方には珍らしく、天地を一擲の下に洗ひ晒してしまひさうな猛烈な夕立がやつて來た。なにしろその日も到底雨の降りさうもないのを滾しながら朝家を出かけた位だから、僕には雨具の用意は勿論なかつた。電車へ乘る間も、降りてからも、困ることを十分知りながら、そして借りようと思へば借りられないこともない傘をどうしたのか僕は更ら借りずに社を出てしまつた。いまから考へて見ると、この蒸苦しい眞夏に厚ぼつたいセルの袴をはいて、洗ひ晒しの浴衣を着て毎日勤めてゐる自分の見苦しい姿に愛想をつかして、何うにでもなれといつた自棄心からの發作らしかつた。——恥しい告白だが僕は、憖ひ智識階級とかいふ生活に入つたばつかりに、こんな自棄心さへとき〳〵起るのだ。——電車に乘る間に早くも僕の體はすつかり水の中を潜つて來たやうに濡れてしまつてゐた。電車の中の人達が呆氣に取られて僕の姿を見てゐたが、僕は、それらの人を涼しい顔附で見返すといふやうな負惜みさへ仕出かしたものだ。どの停留場にも、この驟雨の中に雨具や履物を持つた人が澤山佇つてゐた。ことに××の終點には、降りる人が多いだけにまた出迎へる人達も多かつた。しつきりなしに駛つてくる電車、そしてその兩方の小さな出口から降りて來る人々の間へ雨具を持つた人々の瞳は注意深くむけられてゐた。その誰かの歸りを待つてる人の中には子供もまたお婆さんなども混つてゐたが、僕には、僕の妻位の若い奥さんらしい女が一番多いやうな氣がした。そしてそれらの若い奥さんたちは、いかにも生活そのものを享樂してゐるかのやうに、さつぱりと身についたなりをして、匂やかに化粧をしてゐた。どの人も僕の妻などよりは優れて美しく見えた。丈の高い華車な足駄、それにすげられてあるビロードの青や水色や桃色の鼻緒、さま〳〵な模様のつまかけ、さては夕立の卷き起す微風に嬲られてゐる裾褄などまでが、僕にはなんとなく美しく、馬鹿に羨しいもの丶やうに感じられて來たものだ。それといふの

も、妻と同棲するやうになつてこゝに家を持つてからでも、幾回となく僕も途中で驟雨に逢つたことがあるが、彼女はつひぞ一度として雨具の心配をしてくれたことがなかつたので、この日もどうせさうであらうと決めてかゝると、堪らなくかうした女達の心遣りが羨しくなつたからであつたらう。電車から降りた僕は、彼女が迎へに來てゐるだらうといふ期待など毛頭もない癖に、しかもその雨具を持つて歸りを待つてゐる人々の群が、一町ほども亂れて續いてゐる中から、自分の歸りを待つてゐる親切な妻の姿を見出さうとするかのやうな眼付きを以て――それは、將軍が三軍の貔貅を閲兵するときのやうな樣子と氣持とでだ――ゆる〳〵と歩いたものだ。そして、その閲兵が終つてしまふと、將軍の心は、なんともいひない寂しさに襲はれて、自分といふものがばかに味氣なく感じられて來たものだ。……僕は更らに二町ほども隔つてゐる市外へ走る私設線の發着場まで行く間を、どうにでもなれといふ心で、悠々と落着き拂つて歩いたものだ。

大原君――普通ならば僕の歸り途は、電車でSまで來て、そこからもとの仲仙道であつた、そして今は寂れきつてゐるあの大通りを歩くことものゝ三十分間もかゝつて家に着くのであつたが、この驟雨でわざ〳〵××へ迂つて更らに私設電車を利用したのだつた。フオームには恰度電車が入つてゐたので、すぐそれに乘れた。この電車には雨に濡れた人もかなり乘つてゐたが、といつて僕のやうなものはゐなかつた。雨具を持つて××まで迎へに來たらしい細君と、その細君の心盡しに快く浸つてゐるやうな勤歸りの男との幾組かも乘つてゐた。僕はこゝでも自分の氣持を僞つて呑氣さうな顏をして車の中程に立つてゐた。

箱の小さな電車にはもう八分通りも乘客が詰つた頃であつた。車掌台の方で、乘客らしい一人の哀願するやうな聲と、車掌らしい剛々しい聲とで言ひ爭ふてゐるのが聞えて來た。――この頃の電車や汽車の從業員の間に、如何に不快な男の多いかは誰だつて感ずるであらう――それで僕は、思はずその爭ふ聲に耳を傾けたものだ。それは、もう可成年配の一人の醉漢が電車に乘らうとするのを、車掌が頑强にそれを拒んでゐるのであつた。

「……幾ら言つてもわからない人だね、乘客に迷惑をかけるから絶對にいけません。」

車掌は、威丈け高に醉漢に命令してゐた。

「……いや、だからさ、迷惑をかけないから頼むよ。」

「そんなに醉つてゐてはなんと言つたつて駄目だ！」

「なるほど俺は醉つてます。然しだね車掌君、これ位は俺には普通、いや、なアに平氣なんだよ。」

「平氣でもなんでもいゝから降りて下さい。……降りなけやア、突づき落ろすよ。」

車掌はいきなり嚇かすやうに聲を荒げた。

「そんなら君は、おい車掌君！　この雨を俺にどうしろてんだ、俺の家は庚申塚なんだよ。」醉漢も車掌に應じてたけり出した。

「そんなこと僕に相談したつて知るもんか。なんでもいゝ、醉拂ひは乘せること出來ないんだ。規則なんだから。僕等はその規則通りやるんだ。さア降りろ！　降りないと突つき落ろすよ！」

車掌の聲はだん／＼毒を含んで荒くなつて來た。

人が混んでゐるので、その醉漢の姿は僕の處からは見えなかつたが、車掌の姿は、その肩から上はよく見えた。その姿は、その僕には見えない醉漢をいまにも突つき落ろさうとするかのやうな姿勢であつた。僕は、いきなり人混みを分けてその車掌台の方に近寄らうとしながら怒鳴つた。

「規則などどうでもいゝぢやないか、乘せてやつてくれ。……この雨の中を……」こゝまで言つた僕は、雨にびしよ濡れになつてゐる貧弱な自分の姿に氣がついた。ハッと氣がさして默つてしまつたが、心はいつさう昂奮してきて、僕は荒々しくあたりの人を掻きのけて車掌台に出樣とした。――はたの人からは、さぞ僕までがその醉漢の一人と見えたであらう――。然しこの車掌達は、なにか對人的なことが起ると、多勢を頼んですぐ亂暴を働くわるい癖があつた。そしていまこゝでも續々としてフォームに入つて來た他の電車の車掌達までが寄つてたかつて一人の醉漢を虐めてゐるので、僕の聲などには少しも取り合つてくれなかつた。或は、僕のやうな門外漢が差出がましく干渉しただけ、いつさう

意地悪になつたのかも知れなかつた。およそ五六人もゐた車掌たちは、アルコールで體も自由にならない可成りな年頃の勞働者風の男を、上から突つき落ろし、下から引きずり落ろすといふ風に、腕力をつくして無理無體に、たうとう電車から引ずり落ろさうとしてゐるのであつた。醉漢は、自由にならない體を車掌達に委せきつて、それでもまるで蛸のやうに抵抗してゐた。僕はこのとき、はつきりとこの醉漢の顏を見ることが出來た。頰骨の高い細長な顏、好人物らしく尖つた頤、そしてすべてが醜しいだらけの中で唯一つ淸く澄んでゐる星のやうな小さい瞳……。僕の胸は一時に高く躍つて來た。この醉漢こそ、大原君、この醉漢こそもう一年もの間僕が邂り合ふことを待ち侘んでゐた、そしてこの前の手紙で君へも知らせてやつたあの年寄りであつたのだ。僕は、この懷しい人とも、一年餘りも逢はないでゐる中に、——尤も一年前にも唯路傍で二度だけしかあつてゐない名さへ知らぬこの年寄りの、——たゞ聲だけではそれと知ることが出來なくなつてゐたのであつた。

「あッ　お爺さんだ！」

僕がかう氣づいたときには、もう遲かつた。電車は年寄りを引きずり落ろすと、すぐ發車しだしたのであつた。僕はいきなり飛び降りしようとした。橫撲りの雨に洗ひ晒らしにされてゐるプラットフオームには、彈みをくつて倒れたまゝになつてゐる年寄りが、まるでぼろ屑か炭俵かなんぞのやうに身動き一つしないで打ちのめされてゐるではないか。側には幾人かの人も佇つてゐたが、唯物珍らしさうに眺めてゐるばかりで何うしてやらうといふ人もゐなかつた。………然し、電車はすぐに水床の深い河端を通つてゐたので、僕はこの電車から飛び降りることも出來なかつた。僕はこの哀れな醉漢——僕の懷しいお爺さんを見過ごさなければならぬ焦慮を、いつか車掌に對する憤懣に變へてゐた。

「おい車掌さん、非道いことをするものでないよ。あんな年寄りをさ。君達はあんな人を劬つてこそやるべきだが、なんだい今の亂暴さは？」

僕がかう詰るやうに言つても、車掌は聞えぬ振りをしてそつぽを向いてゐた。然し僕はこのとき、なんとかして車掌に口を利かして、その上うーんと遣り込めなければ納まらないやうないらいらした氣持になつてゐた。

「………君達は何ういふ積りからあんな非道い風姿をしたのか知らないが、たゞ單に、汚ない年寄りだからつて勝手なことをしたら間違つてるぞ。なるほどあの年寄りはかなり醉つてゐたが、そんなことはいくらでも大目に見ることが出來るので問題にはならない。…………」僕は、何しろ非常に昂奮してゐたのではつきり記憶してゐないが、なんでもこんなことを言つてやつたやうだ。

車掌も、何等關係もない男からこんな詰問らしいことを二度も追及されると癪に觸つて來たと見えて、

「私は私の考からやつたのだからよござんす。規則によつてよつぱらひは乘せることが出來ないんだから。」

と、まるで獨言でもするやうにぶす〳〵言つた。

「よく君達は規則規則つていふが、そんなものは程度問題ぢやないか。そんなものは何うにでもなるもんだ。それに規則なんてものほど碌なものはない、君達をいつも飼猫や犬ほども非道く縛りつけてゐるその規則で、君達ともつとも同じ境遇にゐるものを、君達が敲きつけるなんて、そんな馬鹿なことがあるかい？　まるで君達は自分の顏に唾をしてゐるやうなもんだ。その癖に、身なりでも一寸よくしてゐるやうな者には恩も怨みもないのにいやにへえへえしてゐる。」

そんなことでどうするんだ！」

「僕も半ば口の中で、こんな事を獨言するやうにぶつぶつ言つてゐたが、次の停留場へ來たのに氣附くと僕は、あの年寄りが氣づかはれるので電車を降りてしまつた。そして、小降りにはなつたがまだ止まない雨の中を、もとの發着場に來て見たが、もうそこには年寄りの姿はなかつた。僕はがつかり氣を落してしまつた。すると、また何うにでもなれといつた自棄氣分で、今度は電車にも乘らずに三十分餘りも雨の中を歩いて家に歸つて來た。然しそれは、考へやうによつては如何にも痛快で快よいことであつた。この珍らしい驟雨——それからしていかにも自棄氣味であり、また痛快なことである——の中で、あの醉漢の年寄りに逢ふことが出來たといふときに、僕がびしよ濡れになつて雨の中を歩いてゐるといふことが、いかにも相應しいことのやうにさへ思えたからであつた。自棄からだと思ふといかにもくしやくしやしてくるが、己れを捨てることだといふ風に解してくると、世の中は凡てをこの調子でやるのに限るといふ風にさへ

思へて來て却つて慰めらるゝものがあつたのだ

家の門口で妻に迎へられた僕は、さいぜんあの××の終點で、雨具を持つて歸りを待つ澤山の人々を見た後の心持のまゝであつたなら、それこそ自棄氣味になつて妻を怒鳴りつけたかも知れなかつた。そして、こちらが怒鳴りつけでもしようものなら、自分の悪るいことを棚にあげて反抗せずにはゐない、そして結局はその原因を貧乏なるが故の當然の手落ちの如く言ひ拔ける女のことだからまた淺猿しい口爭ひを仕出かすところであつたらうが、このときの僕の氣分は、もう妻などは何うでもいゝやうにさへ思へてゐた。

「あれ、あれ、何うなすつたの？　どうしてそんなに濡れなすつたの？」

僕の姿を見て、妻は大仰に言つて、頭から足許までじろじろ見下ろしてゐた。

「あんなにひどい夕立だからね。もつと濡れてもいゝ位だよ。」

「呑氣ねあなたは、もつと濡れてもいゝなんて、これより以上濡れようはないわ。」

妻は可笑しさうに笑つてゐたが、僕はそれには頓着せずに濡れたまゝの軀で家にあがつて、それからゆつくりと着物を脱ぎ初めた。

「何うしてあんなにいつも醉つてるのだらうか？」

着更へを濟した僕は、机の前に座ると兩肱でうな垂れようとする頭をさゝへて默禱するやうな氣持ちで、この年老いた一勞働者のことを考へて見た。これでまだ三回しか逢つたことのない、そして何所に棲んでゐて何をするものだかも知らない醉どれから、僕はいろんなことを敎へられ、慰められて來たやうだ。…………

いま更らあらためて言ふまでもなく、生きるといふ事が人間にとつていかに重大でかつ困難なことであるか！多くの

人々がそのために苦鬪し續けて來たやうに、僕もまたどれほどそのために苦しみ惱んで鬪つて來たか知れない。それだのにこの年老ひた一勞働者が、いかにそれを簡單にやすく／＼と片附けて行くことか！　凡てを捨てたものの生が、如何に容易であるか！　あの自働車に轢かれて怪俄をした彼を見たときでも僕は、年寄りがいつも醉つ拂つて――あの交番の前といへ、そのときといへ――こんなことばかりをしてゐては、近い中に牢へでも打ち込まれて獄死でもするが、それでも自働車か電車にでも轢かれて死んでしまひさうな氣がしてハラハラしたものだつたが、彼はそれにも拘らず、いまでも――恐らく餘生とてもであらう――健在であつた。そしていつものやうに醜い身裝りをして醉つ拂つてゐた。……僕はこんなことを考へてゐると、さつきあのプラツトフオームで打ちのめされた年寄りが、いま頃はどつかで、さつきの事を思ひ出して微笑してゐるやうにさへ思はれて來た。それとも、若いときのことでも思ひ出して悲しくなつて來て泣いてゐないとも限らない。しかしまアそんなことはないだらう、自働車で怪俄したときだつて年寄りは、巡査が行つてしまふと、寂しさうではあつたが、得意さうに微笑してゐたくらゐだもの。

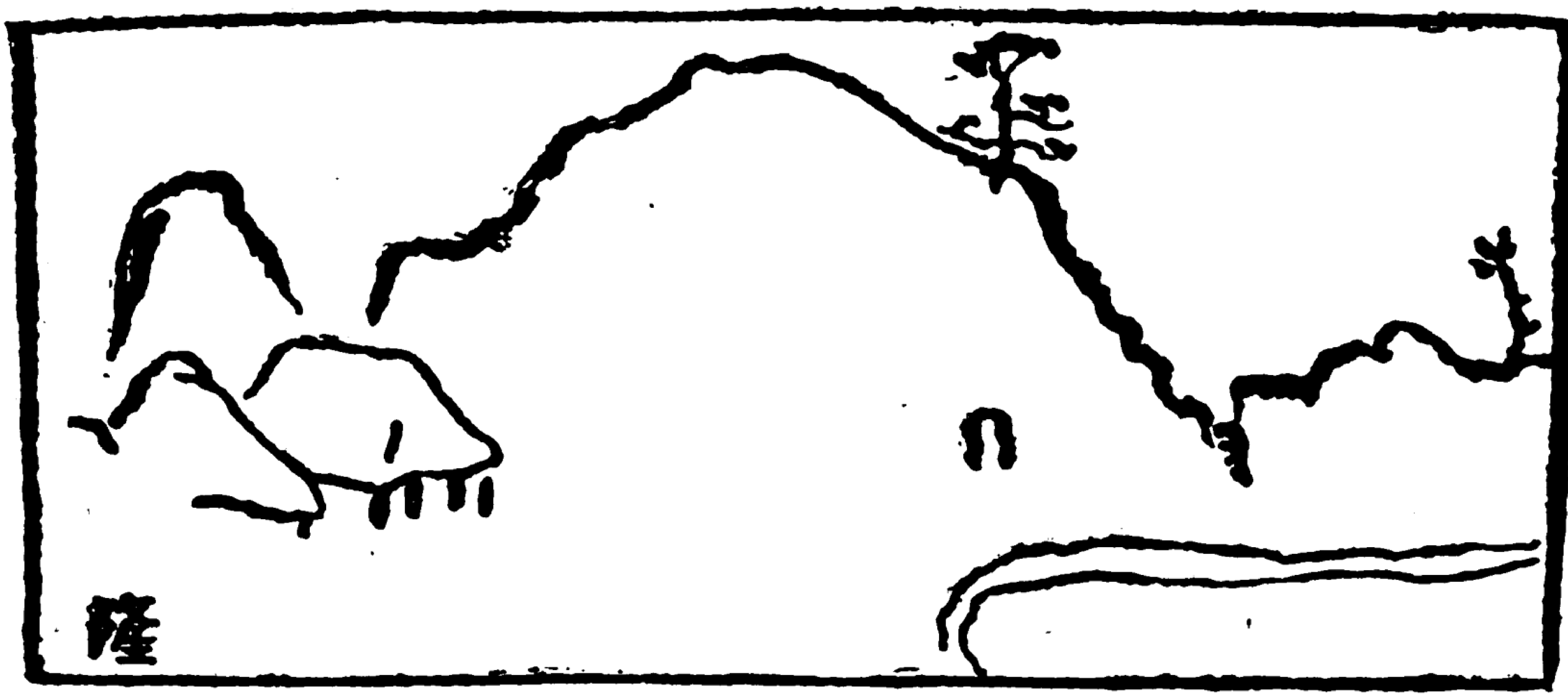
僕はこゝまで書きつゞけて來たとき、ほんの氣紛れからではあるが、碌でもない世の中などに見切りをつけてしまつて、そして妻や子供までも捨てゝしまつて、乞食にでもなつてしまふかしら？　といふやうなことをふと思つてみた。それといふのも、それほどに僕にはこのお爺さんの境涯が羨しいからなのだ。といつて、人にはめいめい彼自身の生きて行く道が分れてあるのだ。僕がお爺さんの眞似をしてみたところでなんになるだらう。…………

大原君――こゝまで書けば僕の目的は達せられた。もう筆を擱かう。とんでもない長いものになつてしまつた。いろんな前書が多かつた爲めに、どうやら龍頭蛇尾に終つたことを少々厭な氣がする。あの年寄りが車掌と言ひ合つてゐたとき、俺は庚申塚まで歸るのだといつてゐたが、その庚申塚とは僕のゐる土地の字名なので、その後とでもどうかした機會で逢ひはしないだらうかと期待を以て注意してゐるが、今日までゞはその機會を得てゐない。しかし僕には、どうやら近い中にまた逢はれさうな氣がしてならない。さう思ふせいか、よしこれ以上あの年寄りに逢つてみたところで何うなるであらう？といふやうな氣もしてくる。…………然し、矢張り逢つてみたいな。今度逢はれるとき、お爺さんはど

んな醉ひ方をして、どんなことをして生を享樂してゐるであらう？それを想像してみるだけでも僕には痛快だ……。

今度の夏は、例年よりも暑いやうだね。僕などは體がどうもまゐつてしまつて、懶くて困つてゐる。悲の疲れもどうやら此頃はひどいやうだ。まだ案內狀を貰つただけで返事も出さないでゐるが、君の結婚式には是非列席したい希望でゐるが、さアその頃の僕の氣持が靜かなものであつてくれゝばいゝが。ひよつとすると失敬するかも知れない

——完——



或る男

武者小路實篤

一四五

彼が房子と知りあいになつてから結婚する迄のことは彼の「世間知らず」を讀めば大體わかることである。たゞあすこには始め二人で手紙をよこしたのを一人でよこしたことにしてある。そして始め房子は紅吉と一緒に彼の處にくるわけだつたが紅吉に用が出來て、房子一人來た。

房子が來た時に、彼の處に居たのは正親町と長與だつた。房子は彼の處に二時間程居た。彼は房子に逢つたのは始めてゞなかつた。その前の白樺の展覽會に房子が來てゐたのを彼は見て覺へてゐた。彼はその時の房子にたいする感じを房子あてにかうかいてゐる。

「私の單調な室に貴女と云ふ小鳥が入つて來て二時間餘り囀つていつたので今だに私の頭の調子が少し普段と變つてゐます。貴女は私と正反對の性質をもつてゐます。內氣で、他人の事を氣にする。私は稍々もするといぢけます。その點貴女は私より遙かに進んでゐます。私は人ごみの處へ行くとなると注意されないやうな態度を

とつてゐます。貴女は注意を一身にあつめないではゐられない性質があるやうに思ひます。白樺展覧會に貴女が來た時來て居た同人は皆、貴女のことを今でも覺えて居ます。あの時、いろ〳〵の噂のあつたものです。さう云ふ態度は私は自分に出來ないだけな程興味が持てます。何處迄も積極的にすべての人の中心になつて生きてゆくことは私には興味のあることです。私は自分の仕事の上では誰をも征服しないではゐられません。私は自分を帝王のやうな人間にしないでは不安です。その私に貴女は勇氣をつけることを知つておゐでだと思ひます。私は世間を恐れてはいけないのです。或時は冷酷な人間にならなければならないのです。私は強者になり、自由な人間にならなければならないのです。今の私が貴女のやうな小鳥を知ることが出來たことが、迷信家で空想家で、運命をへんに肯定する私には何か意味があるやうに思はれるのです」

彼等は毎日手紙のやりとりをした。そして六月一日には二人で鵠沼に出かけた。そして彼等は安心して入り込む處まで入り込んだ。彼は別に罪を行つたやうには思はなかつた。二人は始めつからあまりによくお互に知りすぎてゐた。彼はたゞ子供の生れるのを恐れた。だがそれを恐れることを一面恥ぢた。

彼等はもう何年前から知つてゐる人間のやうであつた。お互に疑ひもせず、安心してゐた。彼の理窟は時に疑つた、しかし彼の直接に受ける感じは相手を信じさした。この女は過去に過ちがあつたにしろ、惡るだくみの出來ない、信じていゝ人間だと思つた。そして彼の理窟は云つた。ひどい目によしあつても自分は更に生ることを知つてゐる人間だ。彼はある時、母に「お前の星はいゝ星だが、人を信じすぎてひどい目にあふことがあるさうだから用心おし」と云はれた時に彼は「ひどい目に逢へばそれだけ得をする星ではないのですか」と云つた。

彼はともかく自分の主觀を信じやう。臆病になりすぎたくない。

彼は房子を最初知つた時から、この女は自分が信じれば信じた通りになるだらう。自分が疑つたら疑つた通りになる

だらう。さう思つた。信じたら救はれる人間を疑ふことによつて墮落させて、それで自分の先見を傲る卑怯を彼は耻ぢた。彼は一方臆病であつたが、信じられると信じてゐるのに、狐疑して安全な道を通るよりは信じる通りに進んでひどい目に逢ふ方が氣持がいゝと思つた。元より彼は房子を失ないたくなかつたからであつたが、彼は腹の底で安心してゐるのに、心配する必要を認めなかつた。

なるやうになれ、其處からとれるものはとる。

彼等は半日以上鵠沼の砂丘や林のなかを歩きまわつた。そして六時過の汽車にのつた。

彼等は一等と同じ客車にある二等に乗つた。彼等はなるべく他の人と離れてゐたかつたので一番近い隅に腰かけて、そして氣樂に話をしてゐた。彼は房子にふざけるやうに云つた。「私にはあなたが非常に善人にも非常な惡人にも思へます」と、すると房子は云つた「私にもさう思へます。」八時頃汽車は新橋についた。その時分はまだ以前の新橋驛だつた。彼等は一つ切りない二等の入り口から一寸降りやうとふり返つたが、人が多かつたのと、あともどりするのがいやだつたので、一等の客車を通過して一等の入り口から出た。一等には西洋の婦人が一人のつてゐた。そして彼等が通る時、「シンバシ？」と聞いた。「イエース」彼はすぐさう答へられたのに自分で感心し又得意になつて、いゝことをしたやうな氣さへした。二等の人で三四人彼等のあとをついて一等の客車を通過した人があつた。しかし彼はそんなことは問題にしてゐなかつた。彼等は急いで改札口を出て少しゆくと、後から鋭どく呼びとめられた。彼は人ちがいかと思つたがふり向いた。すると二人の驛員が彼に近づいた。そして彼が二等の切符で一等にのつたことをとがめた。

彼は降りるために一等室を通過しただけだと云つた。しかしその云ひ譯はたゝなかつた。そして彼はある室につれられた。

彼は辯解しても切りがないし、一等室を通過したのは事實だから、それだけで罰金をとられるのは仕方がないと思つ

た。しかし彼が房子をつれてゐたのを、へんにとつて、自家に電話をかけて聞くとか、何とか云はれたので腹を立てた。そして彼は名前を聞かれた時正直に姓名と住所をかいた。そして罰金を拂はうとしたが、蟇口の中には金が一圓もなかつた。そして拂はなければならない二圓十錢はなかつた。足りないと云はれた時「連れの方が持つてゐるでせう」と云はれた「もう歸つたでせう」「あるだけおいてお行きなさい。」彼は蟇口の中にある金を殘らず五厘錢まで出して机の上に並べた。電車の片道の切符も出さうかと思つたが、それはやめた。掛りの人は「それならあとで一緒にとゞけて下さい、今夜中に」と云つた。彼は何かぶつ〳〵云つて見たが、あきらめて出た。すると房子はまだ先き彼がつかまつた處に皆に注意されながら立つて彼のくるのを心配して待つて居た。

「どうでした」

彼は正直に云つた。「二圓なら持つてゐますわ」彼は房子から二圓の金をもらつてそれを拂ひに行つた。拂つた時、掛りの人はお氣の毒でした」と云つた。

彼は「どういたしまして」と云つた。

このことがあつて、彼はなほ房子を愛した。

自分のために侮辱を忍ばした。それを平氣に忍んでくれた。それが彼にはうれしかつた。

彼はこの時の感じを生長と云ふ感想の内にかうかいてゐる。

「自分は新橋の停車場で二等の切符で一等の入口からおりたと云ふ過失から大勢の前で侮辱されたことがある。さうして罰金をとられた。この時自分は可なり腹を立てた。自分の過失は過失である。罰金とるのが彼等の職務ならばいたし方はない。過失で汽車に轢かれる人でさえあるのだもの、罰金などはなんでもない。しかしその侮辱の仕方が腹が立つ

た。今でも思ひ出すと腹が立つてくる。さうしてこの腹が立つことが、自分に生長を命ずる。自分はこの時思つた。韓信は偉い故に股をくゞつたのかも知れない、しかし更に股をくゞらされたから偉くなつたのだと。

自分は大將にはなりたくない。自分を侮辱した人々にしかいしをしやうとも思はない。しかしこの僅かなことが、このつまらぬことが、吾人に腹を立たせ、その腹の立つことが發憤させる。發憤する事から起るエネルギーを利用することを知つてゐる人は、そのエネルギーを最もいゝ意味に於て自己を生長させる力に使ふことが出來る」

一四六

六月の四日に彼は又房子に逢つてゐる。房子が彼の處に來て彼が園池の處に居たので園池の處に來た。玄關まで迎へにゆくと、すぐ「二十錢持つてゐらしつて」と云つた。彼は二十錢わたした。この日彼は房子を今迄になく美しく思つた。そして園池が居てくれたことが、彼等の間の憧がれを強くした。彼はその後房子と志賀の處にゆき、日比谷や上野に散歩した。六月六日に彼は房子にかう云ふ手紙をかいてゐる。

「私は腹の底で恐ろしく自信のある男ですから、どんなことがあつても自分が駄目になるとは思ひません。かう云ふ自惚から私は安心して貴女とつきあふことが出來るのです。しかし貴女とつきあつてから少し怠けものになりました。寢不足になりました。私の頭は何かにおほはれてゐる氣がして來ました。私は之を打ちやぶらないではゐられません。さうして貴女をつれて高い處にのぼらないではゐられません。私は貴女とたゞ遊ぶだけでは我慢が出來ません。貴女を自樂の谷から引きづり上げないではゐられません。貴女の今迄の生活に何か後悔することがあつたら、皆それを貴女から

取り去らなければゐられません。私には貴女の絶望的な處が氣に入つてゐます。貴女と友達となる以上は貴女にたよられなければいやです。貴女は私によつて絶望からのがれようとされなければいやです。私は今迄の貴女が知らないものを與へたく思つてゐます。そのかはり私は誰よりも貴女を信じてゐます。自棄からでなく貴女と安心して友達になれる男は少いでせう。」

書いてゆけば切りはない。かくて彼等二人は當然の勢ひで益々親しくなつた。六月二十日の手紙までは彼は房子のことを貴女とかいてゐる。六月二十一日から、貴女とかいたり君と書いたりしてゐる。七月四日からは「君」專門になつてゐる。そして文章も段々ぞんざいになつてゐる。

「昨日おとなしく別れたせいか、又君がおとなしくなつたせいか、思ひ出す程君が可愛くなります。今になりすぎさうです。少し遠慮しておく必要がありさうです」

七月八日の手紙には

「運命はへんな方法で君と私をむすびつけましたね。私達はこの運命を感謝して最もいゝ運命を生まなければなりません。………君は本當にいゝ子です。よく私のいやなことを云つたのを忍んでくれました。さうして私を信用してくれました。本當にいゝ子です」

自分はその後についてはあまりかく必要はあるまい、たゞその後まもなく房子が故郷の福井に歸つたこと、そして二人の間に毎日手紙が往復されたことを報告するので十分と思ふ。そして七月二十八日に彼の母はこの事實を見つけた。

彼の母はその時どうしたか。そして彼はその時どうしたか。彼は世間知らずにその時のことをかうかいてゐる。彼は木下の處に行つて夕食時分に歸つて來たのだ。

「すると室に母が立つてゐた。さうして自分の机の上にC子（房子）からの手紙が一通のつてゐた。見つかつたなと口

分は思つた。

その時、母は怒りの前にふるへて

「お前はとんでもないことをしてくれたね」

「なんです」自分は母の前に立つて母を見おろした。自分の肩まで切りない母は自分を見上げた。

「わかつてゐるだらう」

「大概わかつてゐます」

「お前の所へしよつちゆう手紙をよこす女は、この前來た變な女だと云ふぢやないか」

「さうです」

「よりもよつてなぜあんな女と關係したのです」

「氣に入つたからです」

「お前も惡口を云つてゐたぢやないか。お友達の方も展覽會の時、見て笑つてゐらつしたと云ふぢやないか」

「惡口は云つてゐました。しかし氣には入つてゐたのです。勿論、あの時は結婚する氣はなかつたのです」

「それはお前がもらひたければもらうのもいゝだらう。しかしもう少しましな女がありさうなものぢやないか」

「あれでも家はいゝのですよ」

「いくら家がよくつたつて、あれぢや仕方がないぢやないか。私はいゝとしても世間で笑ひますよ」

自分はこの時、母はいゝことを云つてくれたと思つた。

「お母さん。それはまちがつてゐます。お母さんがあの女がいやならいやと云つて下さい。世間の人が笑ふなんて云ふは

れると、いやな氣がします。世間の人がなんと云つたつていゝぢやありませんか。世間の人はどうせ別に考へもしないで云ふのです。そんなことを一々氣にしてゐたら切りがありません」（中略）

「お前がそんなにあの女にまゐつてゐて、貰ひたいならもらうといゝだらう。どうせお前のことだから私の云ふことなんか聞くわけはない。しかしきつとあとで後悔するよ。お前の不在に男でもつくつてごらん」

「大丈夫ですよ」

「どうだかわかるものかね、お前が一番ひどい目にあふのだからね」

「だから僕に任せてくれゝばいゝでしよ。何しろ二十八なのですからね」

自分はかう云つた時、自分が自分の力で食つてゆけないことが頭にひし〳〵と來た。しかし何氣なく、

「自分のことは自分が一番知つてゐます」

「それがあてになれば心配はないけれども」

しかし母はそんなことを云つてゐる内に何時のまにか、二人の結婚を認めるやうな態度をとるやうになつた。「自家に來てくれなかつたらよかつたのだ」。「風はちやんとしてくれるだらうね」。「家はいゝのだね」とか云つた。母は云ふだけのことを云つて歸つて行つた。神經痛は可なりひどく痛むらしかつた。自分は母の後姿を見て涙ぐんだ。母を事實で喜ばしてやりたいと思つて。」

翌日志賀に彼が母に見つかつてかう〳〵云はれたことを話したら、

「君のお母さんは君の呼吸をすつかりのみこんでゐらつしやるね」と云つた。彼はよろこんだ。その後彼は母に房子から送つて來た寫眞を見せた。

その翌朝、彼がうがいつかいにゆくと其處に母が居て笑ひながら云つた。

「とう／＼お前に降參してしまつた。だん／＼憎くなくなつて可愛くなつて來た。始めはどうしようかと思つてくやしかつたが、少し樂しみになつて來た」。

彼はそれを聞いて涙ぐむ程よろこんだ。そして房子からの其後の手紙にはこんなことがかいてあつた。

「氣に入らなかつたらすぐ出してしまうなんて仰有ると私は泣きたくなつてしまいます。そんなくらいなら始めつから氣に入らない方がよつぽどいゝわ。私だつてほんとに氣に入らなければ一秒だつて我慢の出來る人間ではないんですけど、あなたなら大丈夫と高をくゝつて居りました。だつてどう考へたつてあなたが嫌ひになつたり、貴君に嫌はれたりしやう筈がないと思ひますから。だつてちつともお嫁にゆくのがいやぢやなくなつてしまつたのですもの、さよなら」

彼はそれをよんで噴き出したくなつた。そして目出たし、目出たしと思つた。

彼は未來を考へて不安は感じなかつた。たゞ仕事がしたかつた。

彼は七月三十日に房子にかいた。

「母は落ちついてゐる。君は人生を遊んでくらさうと思つてゐるらしい。しかし人生はもつと眞面目なものだからその心算でゐてほしい。僕の氣持は少し眞面目になつてゐる。」

一四七

彼は八月に房子と十日許り山代の溫泉で一緒にくらした。房子の母も房子と一緒だつた。

志賀の處に出したハガキにかうかいてゐる。

「こつちに來てから何か書かうとしてゐるが何にもかけない。ごく平穩にくらしてゐる。今度白樺に何かかけるかい。

僕は始めて何にも出さない心算で今はゐる。まだ四五日こゝにゐる。こゝに少しおちついた。机のいゝのがないのと、光線の具合のわるいのと、電燈の位置がいけないのと、蚊が多いので本もよめない。C子はわりにおとなしい」

一四八

今の彼にはその時分の氣持はぴつたりは感じられない。しかし當時の彼は自己の内に燃える火にかられて、何ものにも恐れず自己を生かすことを本願にしてゐた。彼の當時の考は前に一寸ぬいた「生長」の内に一番はつきりあらはれてゐると思ふ。

『木は自分以外のものを自分のものにして、即ち同化して段々成長してゆく、天に向つてのびてゆく、枯れゝば地に返つてしまう。

なぜ成長したがるのだらう。自分は知らない。知らない。知らない。」

『しかし本當のことを云ふと加速度に自分は自分を成長させる慾望が強くなつてゐる。そうして充實した氣分にとつつかれてゐる。

その説明に人類や自然をかりて來たのである。さもなければ、自分は自分のこの氣分を説明することは出來ないのだ。

ある女の人は自分が何とか云ふと仕事仕事と云ふのを空なことにさわいでゐるやうに笑ふ。しかし空なことであつても仕方がないのである。いくら人の一生が空なことでも生れてゐるから仕方がないやうなものである。」

自分はある時淋しさに打ち克つ爲に次のやうなことをかいた。

「自分にある力が與へられてゐる。その力は淋しきことや、後悔することや、道徳上の不安や、侮辱されることやを自己を前進させる爲の奏樂者に強いる力を持つてゐる。かゝる時に之等のものは賞讃や、自惚や、滿足にまさつて自分を

鼓舞する。

偉大なる人は多く始めに、淋しさや、悔恨や、侮辱やらにせめられた人だ。かくて彼等は全力をもつて前進するより仕方がなかつたのだ。一足だに力を入れずに歩くとすぐ倒される位置に居たのだ。

生長力の强い人は、すべて罪惡、すべての敵に逢遇する度に、それ等を自己を生長させる炎の中にたゝきこんでしまう。かゝる人にあつては罪惡は既に罪惡ではない。敵は既に敵ではない。否或時には罪惡は善以上の善であり、敵は味方以上の味方である。ホイットマンの前には罪惡もなければ敵もない。

すべてのものは彼の歌に色彩と力とを加へる伴奏者に過ぎない。」

自分を動きがとれない程征伏してしまうものに出逢はない限り、自分はくり返し叫ぶ。

「すべてのものは我に
成長を命ずる
成長を」

草木を見よ。彼等は如何にもして成長しやうと努力してゐる。

何に故か
たゞ自然にさう强いられてゐるからだ。
何に故に自然がさう强いるのであらうか。

知つてゐるものがあればたゞ自然だけである。吾々は自然に愛されなければならない。自然のよき伴奏者にならなければならない。さもなければ自然の節にあはせて踊らなければならない。それには先づ成長しなければならない。根が自然にとゞく迄成長しなければならない。』

多くの人が彼を理解しないのは、彼の生長慾を理解しないからだ。それは野心ではない。しかし同時に聖者の心でもない。それは善惡の問題ではなく、自然や、人類の意志の問題だ。彼はその意志にすなほにならうとしてゐる、彼はつくられたまゝに生きやうとする男で、彼にとつては自己の生長をたすけるものすべてが、自分の味方で、自己の生長をさまたげるすべてのものが敵である。彼が勝つといふのは、自己の生長慾に害のあるものを、益のあるものに變形することが出來る時に使はれる言葉である。彼の特色は自己建設家と云ふ處にある。しかしその自己建設は他人の自己建設を害するものであつてはならないのだ。その時には自己建設は自然の意志、殊に人類の意志に反する。彼は自己を本當に生かすことは、他人の自己を本當に生かすことである。之が彼の信仰である。そして其處で彼は自然に出來るだけすなほに生かさうとするのだ。彼が惡を恐れるのは、自分とさうして他人の内の自己の成長を傷つけることを恐れるに他ならないのだ。そして彼の憎む思想行爲は又、自他の内の人生を歪にしたがる思想、行爲である。

このことを根本的に知るものゝみ彼の生き方を知ることが出來るであらう。

其處に彼の特色と、使命があるのだ。だから一方彼はエゴイストである。しかしそれは人類的エゴイストである。彼が人類愛を讃美するのも、自己を殺したいがためではない、自他の内にある生命を生かしたいがためである。

彼は、山代の温泉にゆく前に「世間知らず」を先づかき上げ、歸つてすつかりなほつた。彼が「白樺」に一字もかけ

なかつたのは山代にゐる時だけだつた。同人からあまりめずらしいから「雨合ひ」にでもつかつたらいいだらうとひやかされた。

「世間知らず」は百二三十頁の小説だつたが、當時の白樺には長すぎて、のせられないので洛陽堂から單行本として出すことにした。

この小説は彼の結婚を書くのが目的ではなかつた。彼は一方こゝで告白もしたかつた。又房子に瞞されてゐるやうに思はれるのもいやだつたのも事實だ。だがそれだけではなかつた。彼はこゝで自棄に落ち入つた女が、信用されることによつて、希望をとり戻す徑路が書きたかつた。又一度道をふみ迷つた女が、あと戻りが出來ないやうに人々が思つてゐることに反對したかつた。

彼はその爲に、房子のハイタイした感じを始めの方に強く書かうとした。このことはよくなかつたかも知れない。だが賢き人は之によつて房子を非難はしないであらう

道を一度ふみはずした女にたいする社會の態度は女の氣持をどう變化させるかと云ふことは誰もが知つてゐる處であらう。彼はその社會の態度を正しいものとは思つてゐないのである。彼は後悔は生きなければならないものと思つてゐる。社會は後悔は先に立たずと云つてゐる。しかし後悔は次ぎの時期に於いては先に立たなければならない。

しかし彼はこの小説で世間を非難しやうとは思はなかつた。たゞ世間を無視出來るものが、無視した處に興味をもつた。「世間知らず」ではあるが、「世間の知らないことを知つてゐる」と彼は私かに自信してゐるものである。

この小説には一つ大きな嘘がある。しかしそれは彼の告白にならず、妻の告白になる。妻は彼と結婚する前に彼に告白した。彼はそれを過去のことゝして責める氣はしなかつた。彼にも責める資格はないのである。

彼は他人の告白をこの小說の內に書かうとは思はない。

彼は過去のことは現在と未來を生かすものとしてのみ、價値を認めようとするものである。

一五〇

彼はその秋、九月の或る日、即興的に「二つの心」と云ふ一幕物をかいた。二日かゝつたと思ふ。彼はかきはしたがあまり自己流な書き方だつたので自信があるやうでなかつた。それで長與が來た時、それを持つて歸つてよんでもらつた、長與から賞めて來たので彼は安心した。

之は乃木大將の殉死と房子とに對する彼の感じが變形して生れたものである。彼は乃木大將を愛してもゐず、又その殉死に厚意も持つてはゐなかつた。しかし生きるよりも死んでゆきたい氣持ちには或る感じを受けた。人間はある場合生るよりも死にたくなるやうにつくられてゐることを感じた。それは生るのが死ぬより苦しい時がある。乃木大將は旅順で多くの人を殺し、又自分の子供を二人とも殺した。そして弟につめ腹も切らせ、その前に軍旗（?）を奪はれたりしてゐる。それ等のことが生る重荷になつて來てゐる。彼はそんな風に感じた。そして彼はさう云ふ風に死にたがるものを生かすことを考へた。

「二つの心」では殿樣が、愛する腰元が死にたがるのを生かさうとして、失敗する處があつかつてある。その腰元は奥樣の死ぬ時の誓ひと世間の秩序、思はくのために死を撰びたがつてゐる。殿樣はその心の美しさは認めても、その意氣地のないのをはがゆがる。

彼はその女の言葉の調子に房子の調子をとつた。そして其處で房子の立場を裏から認めやうとしてゐるのだ。彼はこのことに就て房子にからかいてゐる。

「今度の白樺に出した『二つの心』の女の方の言葉にはお前のくせが出てゐるよ。お前はあの女よりは進んだ女だけど、お前の性質も一寸出てゐるだらう。お前よりもいゝ女かも知れないが、殿樣も俺より偉いからな」

一五一

彼はその時分、時々金がいると古本を賣つた。彼には他に金をつくる道がなかつた。彼は夏目さんのたのみで朝日に感想を二三回出して十圓あまりの金をとつた他、自分で金をとつたことは一文もなかつた。彼はまだ何處からも原稿をたのまれもせず。又持つて歩かうともしなかつた。「世間知らず」が本になつた時、彼はその賣れた分の印税として十六圓五十錢もらつたが、それ以上はもらはなかつた。處がある時、志賀から、古本屋の話として、彼の署名して賣つた本があると、千家と云ふ人が來て買つてゆくと云ふことを聞いた。彼はそのことを聞いた時うれしかつた。自分の知らない所に自分を愛してゐてくれてる本當の讀者がゐることを彼は感じたから、その後、その古本屋に逢つた時、彼は話をその方に向けた時、古本屋は云つた。

「千家と云ふ人は何にもわからない人です、あすこにゐる成田と云ふ人はいゝ人ですが」

彼はそれを聞いた時、少しがつかりしたが、しかし千家と云ふ人はきつと面白い人にちがいないと思つた。彼は逢はずに厚意を持つてゐた。

その時分、岸田はよく彼の處に來たが、木村莊八と云ふ若い有望な畫かきと知りあいになつたことを彼に話した。彼は段々若い仲間が出來出したことを感じた。

一五二

彼はその時分よく他の人と議論をした。前にスバルの木下杢太郎氏と議論した。その後三井甲之氏と議論した。彼は

議論をすることの嫌ひな男ではなかつたが、しかし議論をするといつもそのはがゆいので參つた。相手を理解しないで議論するのは惡いと思ふが、相手を理解するのは彼には馬鹿氣てゐる以上、不可能であつた。あまりに相手の考が不確實で部分と部分が撞着する時、彼は手がつけられないと思つた。そして相手の言葉を拔き書きする位いいやなことはなかつた。そして議論してゐるのはたゞ第三者に自分の方が賢いと云ふことを示すにすぎない、相手にはどうせ通じないのだからと思ふやうになつて、なほ議論することが、賤しいことのやうな氣になつた。しかし負けたと思はれるのはいやだつた。殊に彼は議論には子供の時から自信があつた。

そして相手のまちがいが彼にはよくわかつた、だから其處にぶつかりたい誘惑をうけた。しかし其處にぶつかると、それは消えてなくなる幻影にすぎなかつた。何時のまにかちがう處に正體をあらはして、つかみ處がなかつた。彼はとう〱馬鹿氣てしまつた。それから、彼は議論をするより、相手を馬鹿にすることを覺えた。相手の議論をやつけるのではなく、相手のまちがつた自信を傷つけるだけですます方法をとるやうになつた。しかしそれも馬鹿氣て來た。勝手に云ひたいことは云はしておいて、自分も云ひたいことを勝手に云ふ方法をとるやうになつた。あとは眞理と、時間に任せることにした。さもないと切りがない。いくら時間があつても切りがない。まして時間がないのだから、ほつたらかしておくより仕方がない。

夏目さんの「夢十夜」に家になめられる話がある。あの話はよくその氣持をつかんでゐる。白雲子とか云ふ人が夏目さんを風かみにおけない人間のやうに云つた。しかしそれは夏目さんの價値を上げても下げることは出來なかつた。夏目さんと云ふ人物のもつてゐる持ち味の懐しさは依然と殘つてゐる。

その年のくれに房子は東京に出て來た。そして園池に聞いた赤坂の宿屋に泊つた。彼は大概その宿屋にゐた。そして彼の友達は皆其處に來た。いつも賑かだつた。彼はその時テラコッタと云ふ薄い新聞のやうな雜誌をうけとつた。それはいつか彼の處に來た佐藤惣之助、土屋昌介、と千家や福士なぞのやつてゐる雜誌だつた。そして其處に「世間知らず」の合評が出てゐた。そして其處で彼は生れて始めて公けに程度强く賞められた。彼はよろこんだ。殊に千家の評が彼をよろこばした。まもなく、テラコッタの仲間が彼の處に遊びに來た。千家も來た。

彼は自分の播いた種が枯れてはゆかないことを感じた。自己を本當に生かす事の間違ひでないことを益々感じた。

或夜、彼は自分の室で眠てゐると、二時頃房子が來てすぐ來て下さいと云ふのをはつ切り聞いた。「すぐゆく」と彼は返事して目がさめた。夢だつたのだなと思つた。しかしあまりはつ切り彼は房子にゆくと約束をしたので、そのまゝ寢てゐるのが氣になつた。寒いので夢だから安心だと思つて寢やうとしたが寢つかれなかつた。それでとう／＼思ひ切つて起きて、房子の泊つてゐる宿屋の前に行つた。そして房子の眠てゐる室を見上げたが、その室は月の光りをうけたまま靜かだつた。

彼は小さい聲で「おい」と云つて見た。そして返事がない時、彼は引きかへした。翌朝彼はあらためて、宿屋に出かけた。夜中に來た話をしたら房子は本當にしなかつた。

彼はこの夢の中でよばれて出かけた氣持を數年のちにかいた「不幸な男」の內に再現した。

「彼は急げるだけ急いだ、交番の前を通る時は急病人が出來て醫者にゆくのですと云ひ譯を考へて居た。」

これはその時の彼の實感であつた。

彼が十二月十二日夜長與と房子の居る宿屋で逢ふ約束になつてゐたので午後から宿屋に行つてゐた。すると柳から電話がかかつて面白いことがあるから來ないかと云つた。彼は長與が來るから君の方から來ないかと云つた。柳はそれなら行かうと云つた。夕食がすむとすぐ長與が來た。三人で話てゐるとまもなく柳が來た。面白い話と云ふのは何んだと聞いたら、「ニユースのニユース」だと云つて柳は二つの夕刊を彼に渡した。その新聞の三面に、大きな見出しで、白樺同人の華族のお坊ちやまの彼は不良少女の親玉の房子にだまされたことが面白くかいてあつた。そして房子は彼とつきあつてゐる内に思つた程の男でないので愛想をつかして故郷に歸つたやうにかいてあつた。そして彼が白樺同人の忠告を聞かずにひどい目にあつたやうに書いてあつた。

彼は厭な氣はしたが、記事が事實と隨分ちがつてゐて、愛想をつかして逃げたはづの房子がちやんと彼と一緒に居たり、鵠沼に行つたことが岩本樓に行つたことになつたり、一度も彼が行つたことのない處で彼の見たこともない五色の酒をのんだりしてゐるやうに書いてあるのに、一方興味さへ感じた。

房子はそれをよんで始めは皆と笑つてゐたが不意に机に顏をかくして忍び泣きした。

柳はおどろいて「君が泣くのは可笑しい」と云つた。

彼は「泣き蟲なのだから氣にしなくつていゝ」と云つた。

房子もまもなく冗談を云ひ出したが、又涙ぐんだ。二人が歸つたあと「何時になつたら罪がなくなるのでせう」と云つて又泣いた。

彼は房子が彼の前に男を知つてゐたことを痛切に感じて暫くだまつてゐたが云つた。

「誰もお前を罪することは出來ない。出來るものがあれば新聞記者だけだらう」と云つた。

そしてその晩彼は次のやうなことを書いた。」

「泣くな
我が愛する女よ
泣くな。
たゞ笑へ
俺はたゞ可笑しい許りだ。
俺は新聞に悪口をかゝれて見たかつた
「生れくる子の爲に」を
四年前にかいた時から。

俺は新聞にかゝれるともつと參るもつと思つてゐた。
所が書かれて見たら何んでもなかつた。
俺はたゞ笑つてゐる。
汝の泣くのを見ても
たゞ笑つてゐる。

泣くな

我が愛する汝よ
泣くな
新聞の俺にうそのつけるのはたゞ過去のこと許りだ。
汝が俺をまだ知らぬ時のこと許りだ。
汝のくらき過去は、たゞ二人の未來を飾る此上なき飾物だ
泣くな、さうして笑へ、
我が愛する汝よ」

翌日になつたら房子も平氣になつてゐた。彼はたゞ母にこの事を知られるのを一番恐れた。彼の母は辛抱強い點で比類がないと人々に云はれてゐた。しかし世間を恐れてゐた。體面を實に重じる質だ。

彼は母が新聞をよんで弱はつた時、何と云つて慰めていゝかわからなかつた。しかし幸に彼の處にくる朝刊にはそのことは出てゐなかつた。彼は安心した。

洛陽堂の主人は彼の處に白樺の用で來たあと、彼が弱つてゐるかと氣にしてゐたら弱はつてゐないので安心し、又感心したと他の人に云つたさうだ。彼はそれを聞いて可笑しく思ひ、又得意にも思つた。彼は新聞記事位いでおどろくには修業がつみすぎてゐる。

三四日して彼が正親町の處へ行つて歸つてくると母が炬燵にあたつて一間ほどある手紙を見てゐた。さうして彼が入ると、こんな手紙が來たが、どう返事したらいゝだらうと云つた。彼はその手紙を見ると、彼の父の實母の甥からの手紙で、新聞記事を讀んで、子爵樣（彼の兄のことだ）の御留守にあんなことがあつては不都合ではないかと云ふやうな非難が書いてあつた。

「新聞に出たことを知つてゐるのですか」

彼は聞いた。

「知つてゐるでもないし、知らないでもない」さう彼の母は云つてつけたした。「お前が房子と五色の酒をのんだと書いてあるさうだね」

「どうして知つてゐるのです」

「叔父さんの處にくる新聞に出てゐたのださうだ。」

母は少しも不平らしいことは云はなかつた。そして返事を書くのに困つてゐる」と母は云つた。彼は「私が書きませう」と云つて、母に卷紙を出してもらつて一氣に返事をかいた。

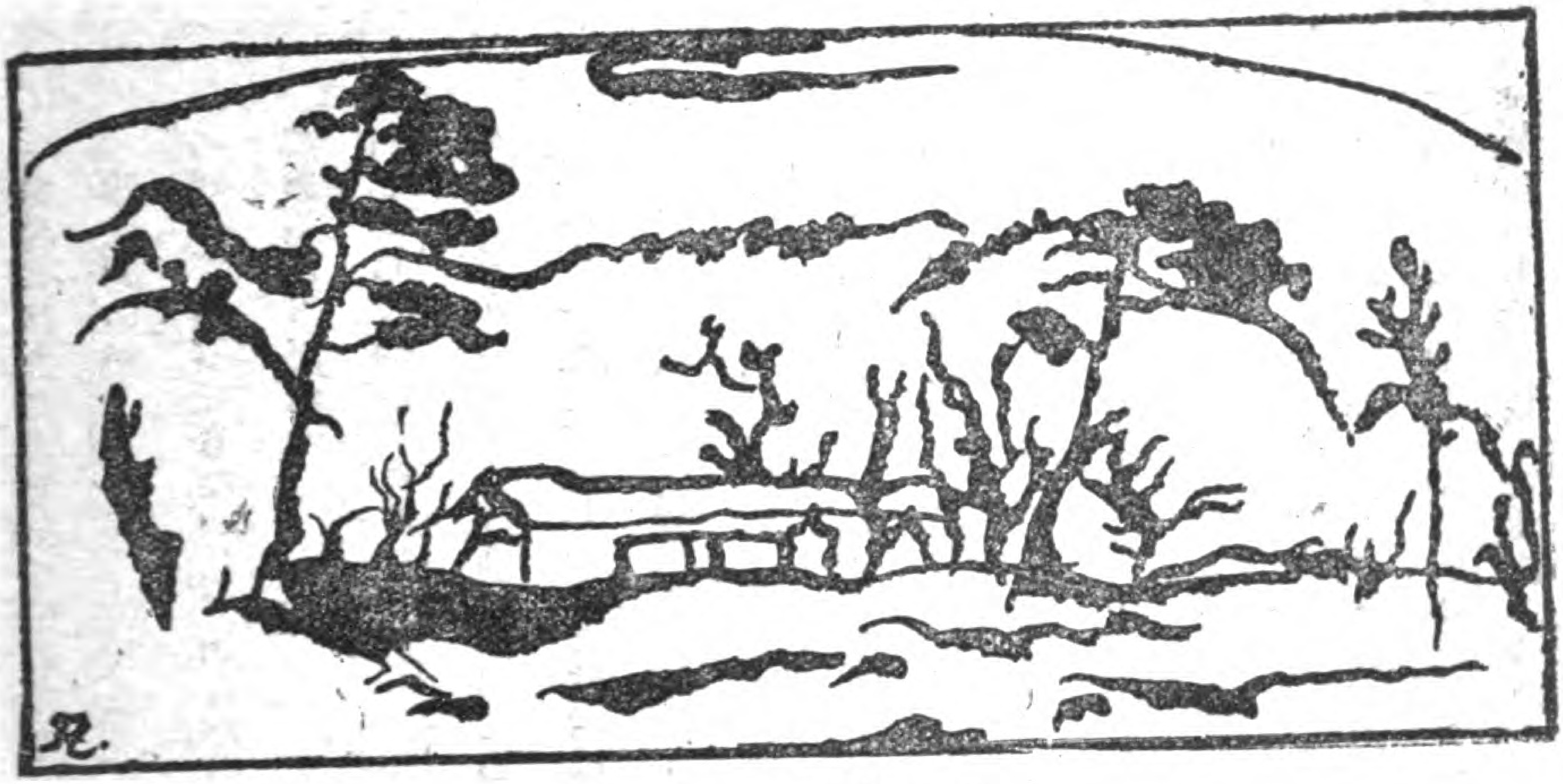
母は彼に今度のことは母も叔父も友も贊成してゐるのだとかくことをすゝめた。彼は母の言葉に從つた。

(その後、父の實母の甥から彼の處へ謝罪の手紙が來た。)

彼は二三日して母に園池と房子と三人で帝劇にゆくことを話した。そして「もう新聞にも出たのですからね」と云つた。母は「もう新聞にまで出れば一緒に何處へ行つてもいゝね」と云つた。彼はよろこんだ。そして話せる母を持つてゐることを皆に自慢したく思つた。

そしてよき母を持つことを感謝したく思つた。勿論それは母が彼の性質を知り、又彼を或る點で信用してゐたからではあつた。

彼はその年の暮に又房子を送つて房子の實家に行つた。彼は其處で房子の兩親から丁寧に歡迎され、そして妹を持つてゐない彼は房子の小さい妹達から兄のやうにあつかはれるのを喜んだ。炬燵にあたりながら彼は北國らしい雪景色を眺めるのも珍らしく又面白かつた。



擽り達磨

里見弴

呼鈴を押して、長火鉢の前に戻つて來た。暫く耳をすましてみても、シインとして、何一つもの音がなかつた。まだ寢て了ふやうな時刻ではないが、と思ふのだが、餘りの靜さに、なんとなく憚られて、もう一度立つて行く氣も出なかつた。」

急に小刻な上草履の音が、遙の廊下に、梯子段に、また廊下に、あたり構はずばた〳〵と近づいて來た。あの威勢では、がらツとやられるな、と思つて、體を捩向けて待ち構へてゐたが、存外襖は靜に、そしてほんの四五寸あいて、

「お召でした？」

と云ふ聲がえらかつた。」

「寢ましたから……」

手でも抑へながら、おつ被せてひそめくと、それでもすぐはツと氣がついて、敷居につき膝で、紙雛のやうに兩袖をぴツしり重ねて胸で、そとから凭れ加減にしてゐた襖を、今度はまた忍び込みでもするやうに、そうツと押あけて、膝行りよつて

來たのは、番とみえて、さつき晩飯の給仕にも居た、二十四五の大柄な女中だつた。もう寢るばかりか、襟頸だけ白く塗つて、湯上りの頬は赤くてらつかせ、ゆかたを重ねて襟つきの袷に鯉口の絆纏をはおつてゐた。

「あゝ、もう寢るんですね」

「いゝえ、まだ早いんですけど、お風呂にはいつちまつたもんですから、無精してこんな失禮な裝で……」

云ひながら、半分はてれ隱しに、寢床の方へ匍ひ寄るやうに、そツと覗き込むと、「まア、可愛らしい顔をして……」

「ようやらやつと、たつた今寢かしつけたところです」

「おや、さようですか。いつでも今時分までおツきしていらつしやるんですか」

「さよでもないんだが、今日は朝から汽車や自動車に乘せられたり、いろんな知らない人に話しかけられたり、珍しいことや嬉しいことづくめだつたもんで、へんに氣がたつちまつた按配でしてね。尤もいつもだつて大底九時より早いことはないんだが、……ちいちやなくせに、宵ツぱりで困つちまいますよ」

「早熟ておいでですから、かうやつて顔だけ出していらつしやると、とてもお三つとは思はれませんわ」

「三つたつて、正月生れだから、まる〳〵ぢアあるんですがね。あんまり體が丈夫でないせいか、いつでもさうやつて、腹ン匍になつて寢てゐるんですよ」

「でもね、よくまアねえ……」

「姐さん、實はちよつと意地きたなをさせて貰はふと思つたんだが、―もう寢るんぢアお氣の毒ですなア」

「いゝえ、まだあなた……。なんでございます？」

「ちよいとその、一本あつくして來て貰ひたいんですがね」

と、頻に、無精髭の延びた顋を撫で廻しながら、「その代り……もへんだが、ほんとにもうなんにも要りませんよ。新漬か海苔でもあれば申分ないが、おそいんだから、なに、決してそんな贅澤も云ひません」

「あら、そんなに御遠慮なさらないだつて、海苔や蒲鉾くらゐでおよろしけれア……」

「さうですか、そいつアどうも濟みませんなア……。實はね、ちよいとその、寢酒を一抔やらないと……」

さう云つて、寂しさうに、けれども嬉しさうに微笑みながら、「晩酌つてやつは、いかに我子でも、そばからぢいッと見てでもゐられると、なんだか氣がひけて、こんな二人ッきりの時にやア尚更、どうも具合がわるさうだつたからやめといたんです。その代り、もうかうして寢かしつけちまやアこつちのもんですから、御面倒でもちよいとお願ひして、これからゆつくり一抔やらうつてんです」

「何から何まで、ほんとうにあなたもお大底ぢアおあんなさいませんわね。でも、全くよくなさいますわ。さつきもお給仕をしながら、あたし感心して見て居りましたんですよ」

「褒られちア恐縮ですが、どつちかと云へばまア子には甘い方ですかね。でも、何しても新米のことですから……」

「へえ、ぢアなんですか……」

「えゝ、女房に死なれたんです」

「まア！　それアさぞお力おとしでございませうねえ。で、いつ奥樣……」

「奥樣は困つたな」

蒼白く、少しはむくんだやうな、いかにも居睡入らしい血色に、眉尻の吊つた二重瞼の目もとを優しく笑皺めて、「葬式を出したのが、――こんなことを云つちアア、御商賣柄わるいのかも知れないが、實は、つい一昨々日のことでしてね、

それに、病中からあとのごた〲の間は、御近所の皆さんの御親切で、子供だけはまアあつちこつちで、勝手な我儘をさせて貰つてゐましたから、現在自分で面倒をみるのは、新米も新米、ほんの今朝からのこつてすよ」

「まア、さようですか」

「なにね、馴れちまつたら、またどうにかなつて行くもんでせうけれど、この先こいつを抱へて、一體どうなるのやら、それを考へてみると、全く途方にくれちまいますね」

「ほんとうにそれアお困りでございますわねえ」

と、しみ〲云はれたのに氣がついて、急に調子を變へてると、

「それぢア、おそくなつてからほんとにお氣の毒さんですけれど、どうか一本だけ……」

「えゝえ、お安い御用ですわ。すぐに持つて參りますから……」

快く引うけて、女中が立つて行つたあとに、客は、ふと視線の落ちた子供の寢顏を、そのまゝしげ〲と見詰めてゐた——まだ湯あがりのほてりがさめきれない頰は、眞ッ赤に、そして牛乳の薄皮に似たてりでピカ〲と、枕をはづして布團にぺたんと押しつけてゐる下側(したがわ)では、唇の隅を突きあげるほどに、歪にふくれ出してゐた。その、可愛らしく開いた唇の間からは、すや〲と靜な寢息が洩れた。——全く、平安そのものゝ姿だつた。而も、あいてゐる時には腫ぼッたいほどでも、つぶつた上瞼の、眼球を縁どる影とは云へないほどの隈(くま)で、どうかすると子供の寢顏は、急に痩せてもしたやうに見える、と云ふことまで知つてゐながら、その時、おや〲……——と、思はず顏をよせたほどに、その陰氣な隈どりに驚かされたのだ。

「(いけない〲)かう氣が弱くなつちまつちアいけない……)

そんな風に心に強いて、うしろ手に身を反らし、片手を床の間に延した。そこには、出がけに新橋の停車場で買つて二重廻しの衣嚢に押し込んだまゝ、途中見る暇もなくて持つて來た今朝の新聞が擲りだしてあつた。けれども、それを手にとる前に、ふと床の置物に目がとまつた。どこで焼けるのか、觀工場式の古道具屋などでは必ず二つ三つ見かけるやうな、安ツぽい陶製の達摩立像だつた。顔や生えた胸や、總て肉體の部分は栗色に、頭から被つた布は朱色に、そして目のなかをちよつと白くしてあつた。いづれ型でぬく安工藝に違ひないから、どこで見ても大底同じ寸法なのに、玆のは、一尺五寸ほどもある大ぶりなやつだつた。たゞその見馴れない大さだけで、彼の注意も惹かれたわけだつたが、田舎の温泉宿らしい薄暗い電燈の火影にぢつと見詰めてゐると、それが、今にも歩き出して來さうな氣がした。——愛する者を失つたばかりの心は、人力以上のものなら、どんなに安ツぽい神佛でも、なんとなく懷まれるものだ。有難いとか、尊いとか云ふ氣持よりも、もつと親み深い、すぐなんか言葉でもかけたくなるやうな氣がするものだ。

瀬戸物の達摩に、一瞬間そんな牽引を感じたが、新聞をひツ摑むと、すぐまた身を起して、長火鉢の上で、がさ／＼と繰り擴げ、まづあちこちの寫眞版や挿畫などから見始めた。……廊下を廻れば可なりあるが、この字型の向合ひで、雨戸さへたてゝなければつい目の下に見おろされるだらうと思はれる風呂場から、手荒く車戸をあけたてする音や流しにたわしをかける音、三助の鼻唄まで、へんに響けて、近々と聞えて來た。さうかと思ふと、トロ／＼、トロ／＼トロ……と、天井裏を鼠が坐山戯まわる足音がした。新聞よりも、さう云ふ物音の方へ注意がもつて行かれがちなほどに、あたりはしんかんと靜り返つてゐた。

「あら！、びつくりするわよウ、いやな濱さん……」

「あら、さうですかよウ」

「なんだい、グレ濱ー」

それから、小走に近づく上草履の音にからんで、「おゝ寒ー　さむ〳〵さむ……」

追ひかけて、

「雪が降つて來たよ」

「あら、ほんとう？、……へえ、どうれで寒いと思つた」

手にとるやうに聞えて來るそんな應酬に、ぼんやり耳を傾けながら、風もなく、一日どんよりと曇つたまゝに暮れて了つたその日の空合を思ひ出して、矢つ張り雪になつたかと、客は、知らず識らず丹前の襟をかき合せた。

「お待たせいたしました」

「どうも濟みません。……雪ですつて？」

「あら、こゝまで聞えましたか」

と、廣蓋(ひろぶた)に運んで來たものをそこに置いて、手の甲を口にあて、ちよつと氣取つて笑ふと、「えゝ、さうですつて、降つて來ましたつて」

「さう云はれて見ると、いかに閑靜だつて、このシインとした具合は、成ほど雪の晩ですね。雨戸ひとつコトリとも云はないんですもの」

「いかゞですお一つお酌をいたしませう」

蒲鉾に燒海苔にあさ漬、――臺布巾でざツと撫で廻したあとへ、それらを並べてから、女中は銚子を取りあげた。

「贅澤千萬だな、溫泉場へ來て、雪の降る晩に、姐さんのお酌で一杯やるなんて……」

「まあお上手だこと」

「お上手ぢあない」

生眞面目に答へて、盃を取りあげて注がせながら、女房が生きてゐたうちに、たゞの一度でも、つれだつて、湯治はもとより、上野淺草へすら碌に出かけなかつたことを思ひ出すと、眞實貧澤千萬、なんとも申し譯のないやうな氣がして來た。時にも金にも、そんな餘裕がなかつたには違ひないが、さりとて、しようとさへ思へば、斷つて出來ないことでもなかつたのに、たゞなんとなく未來を慰みに、氣忙なく、年が年ぢうせつせと働き通して、さて死なれたとなるとまだ初七日も來ないうちから、こんなにして寢酒なぞ飲む、……どう考へてみても、相濟なくなつてならなかつた。

「いや、全く、お世辭のつもりぢアなかつたんだ。……どうも、ちつと……」

あとにつかへた口へ、盃をもつて行つて、酒のみらしく、少しばかり銜んで味はつてみるまでもよく、プンと麴臭い匂のする地酒だつた。貧澤だ、相濟ないと思ふ心が、すぐ、こいつは……、と不足に感じながら、「しかし、もうどうか、あとは手酌でやりますから、構はず寢てくださいよ」

「いゝえ、今夜はまた馬鹿にうちが暇ですから、大へん更たやうな氣がしますけども、まだ時間にしたら、やつと十一時ちよつと廻つたばかりでせう」

「さうですか、ぢアまアもう一杯だけ……」

と、うけた手ですぐ半分ほど飲んで、「へえ、この頃はやつぱり靜ですかねえ」

「えゝえ、毎ン日やつと二組か三組。どうやらかうやらお茶をひかないばかりです」

「だつて、湯治に來てゐて滯在のお客があるでせう」

「いゝえ、それだつて今年は、いつもから比べると、まるでお話になりやアしません。尤も二月も末近くなれば、うち

ばかりでなく、どこも暇でせう。まだ〳〵うちなんぞは、宿屋兼料理つてことになつてますから、これでもいくらかまアましな方なんですよ」

「あゝ、さうですか、お料理屋さんもなすつてるんですか、へえ、さうですか」

成程さう云はれてみれば、女中の容子あひが、素ッ堅氣の宿屋風でもなかつた。「ぢア、つまりなんですね、普通の宿屋なら藝者はいらないが、こちらなら來る、と云つたやうな具合なんですね？」

「えゝ、まア……。でも、どうせこんな田舎のことですから、藝者らしい藝者もゐやアしませんし、それに呼ばれゝば、それアもう蕎麥屋だらうとお汁粉屋だらうと、食物屋ならどんなうちにでも行きますけど……」

「へえ、さうですか。……ま、一つ、あなたいかがです」

「いゝえ、あたしは……」

「まア、そんなこと云はないで、寒さしのぎに……」

「さようですか、ぢアほんのぽつちり」

「まア〳〵、いゝぢアありませんか。あなたいけるんでせう？」

「いゝえ、それがあなた、かう云ふうちにゐながら、まるツきり頂けないんですよ。すぐ顔へ出ちまつて……。へ、もう澤山……」

「あたしもたんとはいけないんだが、……なんでせうか、へんなことを訊くやうですが、こちら、お酒は、これ一口でせうね」

「あら、いけませんですか」

「いゝえ、假にも酒のよしあしなんぞ云へた義理ぢアないんだけど、あたしには、どうもちつと甘口すぎるんで……」
「それアいけませんでしたね。相憎うちでは一口しかつけないもんですから。……どうも有難うございました」
と、貰つた盃を返して、「いかゞです、もしなんでしたら、もう一本冷で持つて來ときませうかしら」
「さうですね……、まア今夜は、これでおつもりにしときませう」
「さようですか。ぢアほかにもう何も御用はございませんでせうか」
「えゝ、どうぞもうほんとにおやすみなすつてください。とんだ御面倒預つちまつて……。しかし、おかげさんで、これだけやりやアぐつすり寢られますよ」
聲に出して愛想笑ひをして、
「ではお先に御免かふむります。おやしみなさいまし」
「おそくまでどうもお氣の毒さんでした。おやすみなさい」
靜に遠ざかつて行く足音を聞き送つて了ふと、陽の翳(かげ)るやうに、心持が、ぽそつとした、色もつやもない淋しさに返つて行つた。糀臭くて、甘つたるく、うまくもない酒を、盛りあがるほど盃に注いで、一口にぐツとあほつた……。
東京市芝區露月町□□番地、時計機械職、平民、鶴崎貞治郎、三十歳、同貞吉、三歳、――宵に宿帳に書いて渡した通り、彼は、東京一の時計製造工場、S――社で「社寶」とまでに大事がられてゐる、發條調整の名人だつた。床についてから、僅か五日の患で戀女房に死なれ、腑ぬけ同樣になつて了つたのを、普段から目をかけてくれる工場の主任から、序に持病の神經痛の湯治がてら、暫く□□へでも行つて氣を變へて來い、と、舊くから懇意な仲だとか云ふこの宿の主人に宛た手紙まで貰つて、大して進まぬながら、一子貞吉をつれて出かけて來たのだつた。早く父に別れ、しつかり者の母親の手內職で、貧しく育てられたとは云へ、三十年の生涯は、決して彼に辛くはなかつた。豐な家庭にも、眞暗な谷底はあつて、飽食暖衣のまゝ、人生の悲境ばかりたどらなければならないやうな廻合せになつたり、貧しくとも日向より知らずに、生を樂み、世を歡ぶやうな運にあたらないものでもないが、貞治郎はさう云ふ意味で、瘦せたりか

ら眞ッ直に延びた桐の木だつた。二十二で、母親を失つた時の悲み、早すぎる增給の猜みから、朋輩に理由のない喧嘩をふつかけられ、二三人よつて袋叩にされた時の口惜さ、――數へたてれば「神樣」と云ふものに出逢つた時、不足の並べたい節もあらうけれど、要するに彼の心持は、長閑で、のび／＼としてゐた。殊に、足かけ五年前に、目顏で心を告げ合ふばかりで、身も細るほど戀してゐた近所の紺屋の娘を、仲に立つ人があつて、嫁に貰ひうけてからは、この世の中に、老や病や死はさて措いて、どんな少さな不仕合でも、不仕合と名のつくものがあるのかしら、と思つたわけではないが、まづそれほどの樂天家であり得たのだ。そのうち子供が出來て、いやが上にも世の中が、ぱッと花が咲いたほど明るくなつた。……そこへ、流行性感冒、――假名で書けば、たゞはやりかぜで、病氣の名前らしくもない、なんとなく手答のないやつがやつて來たと思ふと、じたばたもさせず、もう女房がさらはれてゐたのだ。世の中に、こんなわからない話はなかつた……。

奮發して、大きな寢棺に、ゴツソリと納めてみても、灰色の、すのはいつた、毀れ易い骨にしてみても、涙聲に悔みを云はれてみても、どうしてもかうしても、わけがわからず、諦がつかなかつた。日があたつても、曇つても、馬鹿々々しいばかりだつた。そのくせ爲たり云つたりすることは、大して普段と違ひはなかつた。いつも通りの鵜崎貞治郎だつた。氣がつく度に、これがまたひどく馬鹿々々しかつた。世の中が、これほど變つて了つたのに、自分ばかりもと通りと云ふのは、へんな氣がした……。

別段なにも考へてはゐないのに、涙が、ポタリ、……ポタリと、新聞紙の上に落ちて來た。鼻渠を傳はられて、むづ痒かつたが（勝手にしやアがれ）と、流れるまゝにして置いて、靜に盃を唇にもつて行つた。……するとまた、ポタリポタリと落ちた。續けさまに四五杯、德利を逆に振つて、細な滓が渦をまく最後のやつまで、今度は手早くあほりつけたが、子供のする人眞似のやうに、隨つてまたポタ／＼ポタと來て、ぎゆッと胸がつまつた。齒をくひしばると、鼻からつく息が、涙の眞似をして、ウ、ウ、ウ、ウ、ウッと小刻に切れ、仕方なしに口をあけば、泣聲のやうに顫へた音をたてた。人が泣くのに不思議はないものを、

（馬鹿！ 馬鹿！ 馬鹿！）

と、貞治郎は、ぢやれつく小犬でも叱るやうに、心で自分を窘めた。

その時、むくりと掛布團がもち上つて、貞吉が、腹ン匍に、兩手を突つ張り、正面に顏をあげた。

（寢惚たな……）

と、思つて、むしろ微笑ましい心持で、横から默つて見て居ると、忽ち相格が變つた……。瞬もしずに、ぢいッと一點を見据えた目つきは、白齒を突きつけられた大人のそれと變りはなからう、凍りついたやうな瞳から、見るまに命が吸ひとられて行きさうだつた。息も止つたか、頰の肉一つピリッとも動かず、つい先刻までとは打つて變つて、石のやうに靑白く見えた。思はず、その顏の向いてゐる、背にした床の間を振り返つたが、薄暗い電燈の、火影にさへぎるものとてもなかつた。

「貞吉！」

同時にワッと泣きだした。

夢中で抱きあげて、貞治郎は、部屋のまん中に突ッ立つた。――あとから思へば、どこから何が飛び出さうとも……、と云ふ氣持も惱にあつた。子供は頸ッ玉にかぢりつき、顎の下に堅く顏を押しつけて、足をぢたばたさせながら、割れ返るやうに泣き叫んだ。

「どうした、貞吉！阿父さんだよ、阿父さんだよ」

云ふまでもなく、泣きたてるよりほかに、なんの答などあらう筈はなかつた。

「夢でもみたのかい、恐い夢でもみたのかい……。なんでもない〳〵、さアもう阿父さんがだつこしたから、なんにも恐いことはないよ。さアもう泣くんぢやないよ。ね、貞吉は强いんぢアないか。さア今度は阿父さんがだつこして寢てやらうね。阿父さん、一緒に寢てゐなくつていけなかつたね。もう大丈夫だ、ね、こんなにきつくだつこしてゐるんだもの……」

どんなに云つてみても、少しの利目もなかつた。たゞ、咽いつぱい泣き續けた。

一時の驚きがどうやらおさまつて行つたあとに、第一に來た不安は、病氣だつた。朝から汽車や自働車に揺られ通したゝめに、腦膜炎とか腦麻痺とか云ふやうな病氣でもおこしたのではないか、少し落ちつけば、けれども、さう云ふ常識的な考をもつことが出來た。嬰兒でもだますやうに、お尻を叩いて、それに調子を合せて部屋ぢう歩き廻りながら、無精髭だらけの頰を、子供の頭に押しつけて見た。カッカと火のやうになつてゐた。

(こいつは困つた……)

一二分躊躇してゐたが、思ひ極めて呼鈴を押した。何度も〳〵、永い間押し續けた。たうとう、遠くで障子のあけたてされる音がしてやがて上草履のパタ〳〵が近づいて來た。番頭でも來るかと思つてゐたが矢張り先刻の、番の女中だつた。異常な泣聲で、この夜なかに起された意味は呑み込めてゐた。

「どうかなさいまして?」

寢起の寒さも忘れて、はいつて來るなり、親身に心配さうな聲をかけた。貞次郎には、それが、地獄で佛と云ふ喩ほどにも嬉しかつた。

「どうしたんだか、急にこんなに泣きだしちまつて……」

「あゝ、夢でもごらんなすつたんでせう」

誰でもすぐ考へさうなことを、はつきりさう云はれて了ふと、貞次郎の性分では、醫者を呼んでくれは未、病氣らしいとも云ひ出し惜くなつて了つた。

「さうかも知れないんだが、……觸つてみると、大ぶに頭が熱いやうなんで……」

「坊つちやん、夢をごらんなすつたんでせう?さうでせう?」

云ひながらそばによつて、それでも額に手の平をあてがはふとしたが、一層烈しく聲をあげて、父親の頸ツ玉にしがみつくので、後頭分に觸つてみて、

「えゝ、大してもないやうですが……。お風邪でもひきなすつたかしら。……兎も角、金盥に水を持つて來ませう」

それで、いよ〳〵醫者を、とは云ひ出せなくなつて、

「えゝ、どうぞ……。寒いところを起して、ほんとにすみません」

「どういたしまして。……まア、どうなすつたんでせうね、大へんお泣きなさるやうでございますわね。……坊ツちやん、どつか痛うございますか？、きいき惡いんですか？」

父親にさへ一言も答へないものが、それに返事をしさうなことはなかつた。たゞ、少しも衰えずに泣き續けた。

女中が、手拭を浮した金盥を持つて來ると、貞次郎は、自分の身も一緒に横たへながら、布團の上にねかさうとした。と、更に一層、火がついたやうに泣き喚いて、起きあがらうと身を藻掻くので、仕方なく、また立ちあがつた。

「おねんね、可厭だつて仰有るんですか」

手拭を絞つてみたが、堅く胸にかぶりついてゐるので、どうすることも出來なかつた。

ねんねして、おつむを冷さう。ね、さうすれば、すぐ癒つちまふよ。ね、いゝ子だからねんねしようね」

云ひ聞かせながら、もう一度膝をついたが、結果は同じことだつた。

(ヒョッとしてこの部屋は……)

ふとその考へがあたまを掠めると、貞治郎は、總身水をあびたやうになつて、ぐるりと部屋ぢうを見廻した。

「姐さん……」

呼びかけたが、そのまゝ口を噤んで、襖のそとへ出て行つた。

球の小さい電氣で、更に薄暗く、光澤はなしに、眞ッ黒に色のついた廊下のさきが、モヤ〳〵と霞んだやうな暗さだつた。けれども、氣のせいか、そこへ出ると、ぴつたりおッつけた貞吉の軀全體から傳つて來る、恐怖か苦痛か、何かさう云ふものゝ表情が、幾分へつたやうに感じられた。頭に卷かれてゐる小さな手の力に變りはないが、それが、安心と嬉しさから來だしたやうにも思へたのだ。

「姉さん、あすこに……」

と、一間へだてたさきの廊下に、スリッパアが並んでゐるのを顎でさして、「あすこに、お客さんがあるやうだが、かう泣かれちア氣鍛でならないから、いろんなことを云つて誠にすまないけれど、どつかもうちつとかう、離れた部屋に床をひいて貰へませんかね。荷物なんぞはそのまゝでいゝから、寢床だけどつかほかに願ひたいんですがね」

思ひなしか、たつた今、全身總毛だつて、うつかり「姉さん、この部屋で……」とかなんとか訊かけた瞬間からの、女中の容子も違つてゐた。なんとなく言葉ずくなになつたり、自分が出ればすぐあとからくつついて來る、と云ふやうなことが、同じやうな氣持か、でなければ、もつと理由のある恐怖を胸にもつてゐるせいではないか、と考へさせるに十分だつた。貞治郎は、(でも、早くに氣がついてよかつた)とまで、本氣で心のうちに呟いたのだ。

不愕な顔もしずに、女中は、三等客の最低な夜具布團を、一ぺんに肩の上に積みあげて、先にたつて、廊下を奥の方へ案内した。相變らず子供は泣き續けてゐたが、それでも大ぶん鎭つて、もう足をぢたばたさせるやうなことはなくなり、ぢつと父親の胸に顔をおつつけてゐた。

前には、宿の主人の好意ある計らひで、上等の客を通す八疊間に、あいてゐるかぎりと云ふ約束で通されてゐたのだが、今度の部屋は、それが彼の仕拂ふ宿料に相當とは云へ、それこそ農閑に、米や醤油をかつぎ込んで、百姓の爺さん婆さんでも湯治に來てゐるに適はしい、疊建具の薄よごれた、床もほんの申譯ばかりに、押入の横に半間だけとつてあるやうな六疊敷だつた。まるつきり火の氣がなかつたからばかりではなくて、どうやら向きも西か北らしく、日當のよい部屋にかぎつての、しめッぽい底冷が感じられたが、不思議に貞治郎は、そこへはいるなり、なんとなく救はれたやうな氣がした。

「どうもほんとうに御世話さんでした。すみません〳〵」

「いゝえ、ちつとも……。今すぐお火と、……金盥はどうしませう」

「さうですね、無駄になるまでも、兎も角持つて來といてください」

「それから、お荷物は明日またどこかお氣に召した部屋へ移すことにしまして、何かお大切なものが置いてありましたら……」

「ぢアね、すみませんが、違棚の上に、財布と時計を、手拭でくる〳〵ツ巻いたやつが載つてますから、それだけこつちへ何しといて貰ひませうか」

「へえ、畏りました」

そんなものが運ばれたり、布團がのべられたりするうち、貞治郎は、三つの子にはもう似つかはしくない子守唄を、無意識に吟みながら、天井から小壁から、部屋ぢうをあちこち見廻してゐた。なかにも、茶褐色にくすぶつた天井板のいかにも田舍らしい落ちついた氣持が氣に入つた。

「明日ツから、もうづうツとこゝにして貰ひませう」

「でも、こゝは、あんまりひどうございませう？　たゞ近くにお客様がいらつしやいませんので、今夜だけほんの假にお通ししたんですから、明日は……」

「いゝえ、こゝが結構。落ちついたいゝ部屋ですよ」

そこらをきちんとしてから、やがて女中は、寒さうに肩をすぼめて、小走に廊下をさがつて行つた。大ぶん聲は低くなつたが、子供はまだ泣いてゐた……。

「ねん〳〵よー　おころりよー
坊やは　いゝ子だー　ねんねしーなー
坊やの　おもりは　どこへいたー
あのやーまア　こーへて　さとへいたー
さーとのおみやに　なにョもろたー
でーんでん　太鼓に　笙のふーえー」

それから先は忘れてゐた。

「坊やの　おもりは　どこへいたー
あのやーまア　こーへて　さとへいーたー」

そこへ戻つた。

「坊やの　おもりは　どこへいーたー」

急に貞治郎は悲しくなつて來た。

「坊やの　おもりは　どこへいーたー
あのやーまア　こーへて　さとへいたー」

聲が悲しく濡れかゝつた。

そのとき貞吉が、ふと泣聲をとめて、顏をあげ、しげ〳〵とあたりを見廻してゐたが、その目つきには、もう恐怖の色はなく、（おや、どこだらう……）と云ふくらゐの氣持が見えた。（しめたよ！）と、父親は、

「さア〳〵、ねんこ〳〵、おとなにして、早くねんこしなくつちアいけませんよ。ね、坊やはいゝ子ちやんだからね。
ねん〳〵よー　おころりよー
坊やは　いゝ子だー　ねんねしーなー」

そのまゝだまつて了つて、今度は少しうは向き加減に、頰ぺたを胸に押しつけると、目をふさいで、暫するうちにうつら〳〵しかけた。貞治郎は、それでもまだ、低聲に唄ひ續けてゐた。幼年の日の甘い悲みが、遙にも、懷しくよみがへつて來るやうな唄聲に、我から聞きとれて了つた………。

しみ〳〵と寒くもなつて來たし、先日來の心勞や寢不足で、有繫にあたまがぼんやりして了つたので、そうツ子供を寢床へいれやうとしたが、すぐに大きな目をあいて、

「いや〳〵、いやア」

と、怖て、いつかな離れまいとする。

「よし〳〵、阿父さんも一緒に寢るんだからね、さア〳〵、安心しておねんねするんだよ」

二枚借りて、一枚上からはおつてゐた丹前を、上だけぬがうと思つたのだが、どうしても、手をはなさないので、ゴロ〳〵と着ぶくれたまゝ、一緒に床へはいつた。さうして抱いてやつて居ても、布團なり、腕なりの重みが、ちよつとでも餘計かゝると、すぐ薄目をあけて、「いや〳〵、いやア」と泣聲になる。仕方なしに、少しは寒からうとも、小さな軀の上から、間を隙して、腕を墜道の形に曲げ、それで布團の重みを支へてゐた。さうしてゐれば、すや〳〵眠つた。

まづそれで落ちついて、一體もう何時だらうと、枕もとに置いてくれた手拭包のなかの時計へ手を延ばさうとしたがほんの微な身じろぎでも、すぐまた目をあいた。――子供ながら、どうしても安眠できないのが、いかにもいじらしかつた。それからは、ちよつとでも軀を動かさないやうに、堅くなつて、ぢいつとしてゐた……。

「いや〳〵、いやア」

はつとすると、眠つたとも思はないのに、いつか腕の支へが、貞吉の横腹に觸つてゐた。

「よし〳〵、よし」

アーチを立て直して、泣く聲が、だん〳〵あやしくなつて行き、いつしか貞治郎も、勞れ切つてぐつすり寢込んで了つた……。

翌朝は素晴しい天氣になつた。

一ぺんに空の色が、春らしく華やぎ、蒼みまさつた。有繋に寒のうちとは違つて、もう十時と云ふと、あつちこつちから、賑に雪解の音が起つた。縦樋は、氣忙ないカンカラ太鼓を叩きたて、雨落の水たまりは、ペチヤクチヤ〳〵、し

ツきりなしに喋り續けた。ヅシン――、二階の屋根から庇へ滑り落ちる雪の塊は、パッと虹を吐くお祝の花火で、跳起きる竹の葉摺が、遠くの拍手喝采だつた。雀が踊る、犬が角力をとる、黒い地面は長閑に煙草をふかして見物する……。

鵜崎の父子は寢坊をして、廣い風呂場のなかの、浴槽のなかまで日のあたる頃、透明つた溫泉に肩までつかつて、横にすれば馬鹿長く、縱に反せば馬鹿短い、自分たちの手足を可笑しがつてゐた。

「ほうら、こんなに長くなつた。お前もやつてごらん、ね、ほうら……」

「どうして？　ね、阿父ちやん」

「ほうら、こんなに短くなつたらう？　可笑しいね」

「どうしてよウ」

「ごらん、阿父さんのこの指の長いこと」

「へんな手！」

とてもたまらないと云ふ風に、くツく笑つて、あぶなく湯を呑みさうになつて、一層笑ひ募りながら、流して這ひ上つた。――大きな窓の、硝子戸が、そこへはツきり影をおとしてゐた。彼方の羽目板には、お湯の反射が、白鼠でもチヨロ／＼するやうに搖れ動いてゐた。時々湯氣の滴が、高い天井から、ポツン／＼と落ちて來た……。

突然、頭の眞上が、ズ、、、ズウと鳴つたと思ふと、ドツスンと重い地響がした。

「こわい！」

貞吉が、丸くなつて跳びついて來た。

「なにが可怕いもんか」

と、桃色の素肌を抱き擁へて、「屋根の雪が滑り落ちて來たんぢアないか。弱蟲だねえ、貞坊は」

「さう？」

大きな目を、クリ／＼させて、おもてを眺めたが、丁度軒から一尺ほど、ずり落ちかけてゐる雪があつた。「あゝ、

あすこにもおッこちかけてる！」
「さうだね。もつと高いとこからでも滑つて來るんだよ。分つたかい」
「あゝ」
「分つたらなんでもありやアしないだらう？　分りさへすれア、なんにも可怕いものなんぞありやアしないんだよ」
「さう？」
「さうさ。……昨晩、貞坊、どうしてあんなに泣いたんだい？」
默つて、目を反した。
「何か可怕い事でも見たのかい？」
「あのね、どうして雪つてもの、滑るの？」
「それアお前、屋根はすべ〳〵してゐるだらう？　雪だつてすべ〳〵してるぢアないか」
「だつて、雪は、粉ぢアないか」
降つて來る時は粉だつて、積つて堅まりやア氷とおんなじことだもの。氷はすべ〳〵してゐるだらう？」
「さう？」
「さう？　つて、さうぢアないか。……ね、貞坊、それよりね、昨晩お前、どうしてあんなに泣いたんだよ」
「どうして、氷と雪とおんなじなの？」
「そんな、誤魔化さずにさ。なんか可怕い夢でもみたのかい？」
「僕、知らないよ」
「そんなこと云はないで、云つてごらんよ」
貞吉は、むづかしい顔をして、暫くだまつてゐたが、だん〳〵それが盤面になつて來た……。
「よし〳〵。あのね、あの、雪かい？　雪はね……。あゝ、雪と氷だつたね、雪と氷はね、それアおんなじぢやアないけ

どさ……」

慌て貞治郎は誤魔化しにかゝつた。普段から、ちつと智慧が早すぎるだけに、ひどく神經質なのを、何よりの苦勞にしてゐながら、さう云ふ質問で、もう一度子供を苦しめやうとしたのは、甚だよくないことだつた、と後悔して、それつきりもう決してその晩の話はもち出さないことに心をきめた。

寢る前には、少し心配してゐたが、その晩も、その翌くる晩も何事もなかつた。子供は、ケロ〳〵と、何もかも忘れ果て了つた容子だつた。一週間の滯在中も、歸京してからも、引き續いて何事も起らなかつた。神經質なあたまには、生れて初めての遠い旅行の刺戟が强すぎたために、疲勞から來たほんの一時的な現象だつたのだらう、と云ふ考に落ちついた。さう考へれば、實際なんでもないことだつた。――そのうちいつか忘れるともなく、貞治郎の心からも、あの可厭な一夜の印象は、薄れ消えて行つた……。

五年の歳月が流れた。

あれほど惱され憎く思はれた心の痛みも、今では夢のやうだつた。どうかすると、亡き妻の命日も忘れてゐるほどだつたが、然し、貞吉に慘めを見せまいために、いくら勸められても後妻は迎えなかつた。いゝ婆やを置きあてゝ、この頃では、まるで家族の一人のやうに、なに隔なく團欒してゐた。金は、引き續いてS―社にゐる方が餘計とれたに相違ないが、朝から晩までの通勤では、だんだん大きくなる子供の、家庭の躾がまるで出來ないからと云つて、頻りと留められたのを押し切つて辭職し、それまでに、食ふものも食はずに貯蓄して置いた金で、表通りに小さな時計屋を始めたの

は、つい一年ばかり前のことだつた。店番ながら茶の間に坐り込んで、それには勿體ない腕前を、つまらない修繕や油さしの小仕事に使つて惜まなかつた。

夏のことだつた。

茶の間との隔の障子を取り拂つて、寒冷紗を張つた安もの〻簾をさげ、その吹き通して、電車道から照り返して來るむつとするやうな炎暑を、どうやら堪えながら、貞治郎は、細な仕事に背を丸くしてゐた。

「僕ね、僕、昨夜へんな夢をみたよ」

「さうかい。僕いつか、飛行機に乘つた夢をみたことがあるよ」

「昨夜の夢はね…」

近所の、一つ二つ年上の子が遊びに來てゐて、夕日のさし込む茶の間の緣側で、何やら鐵力の弄具の音をさせながらそんな話を始めた。大きな蜻蛉の口が、モシヤ〱モシヤ〱動きながら、鼻の頭のすぐそばまで來るので、隨分可怕かつた。と云ふのが、その昨夜見たと云ふ夢だつた。それがすむと、貞吉が、負ン氣になつて口を出した。

「僕だつて可怕い夢みたことあるよ」

「さうかい、どんなの？」

「重ちやんのより、もつとづうつと可怕いんだぜ。あのね、僕ね、もう先、ちいちやかつた時分にね、阿父さんと一緒にどつかへ行つたんだよ」

「どつかつて？」

「どつかね、溫泉に行つたことがあるんだよ…」

貞治郎は、ふと仕事の手をとめて、聽耳たてた。そんなことにはちつとも氣がつかずに、一生懸命子供は話し續けた。

「僕ね、名前忘れちまつたけれどね、そのなんとか云ふ溫泉の宿屋でみた夢なんだよ」

「どんな夢さ。素敵に可怕いのかい」

「可怕かつたよ！僕ね、初めね、なんだか擽つたいと思つたら、達磨さんが來てね、こゝを擽るんだよ。たまんないから、かうやつて顎をくツつけると、今度はこゝらをコチョコチョつてやるの、そいから足の裏もやるんだよ。こつちを抑へると足をやるしね、足を縮めると咽を擽るんだもの、困つちやつてね、たうとう仕舞に泣き出しちやつたんだよ。それや隨分可怕かつたぜ…」

思はず貞治郎は、ひとりでニコニコ笑ひだした。成程あすこの床の間には、大きな達磨の置物があつたつけ、とそんなことまではつきりと思ひ出された。それにしても、そんな他愛のない夢を、今日が日まで、たつたひとりの胸におさめて、恐しがつて、——めつたに父親にも話せないほど恐しがつてゐたのか、と思ふと、子供の心の世界と云ふものが可哀いくも、いぢらしくも、また可笑しくもあつた。

「なアんだ、擽られたら可笑しいんぢアないか」

と、年上の友達の一人が、やゝ劬(いたは)る氣持をもつて云つた。

「だつて可怕かつたよ」

「擽られてかい？」

「擽られるんだつて可怕いよ。それに、眞ツ赤な着物を着た達磨さんなんだもの」

「達磨なんぞ、ちつとも可怕かアありやアしない。コロコロ轉がしてやりアいゝのに」

「だつて轉がらない達磨なんだよ。大きな、可怕い顔をしたやつなんだよ」

「それだつて、達磨が擽るなんて…」

「面白いやねえ」

聞いてゐる二人には、どうしても面白い夢としか感じられないらしかつた。それがまた貞吉には、いかにも残念に思はれたのだらう、むきになつて、

「面白いもんか、達磨さんに擽りに來られりやア、誰だつて可怕がるよ」

「なんだい達磨なんぞ」

「擽り達磨なんだ」

貞治郎は「擽り達磨」で、思はずぷッと噴飯て了つた。

（成程、擽り達磨の仕業だつたか）

さう云へば、あの頃の自分は「泣かせ達磨」にとり憑かれてゐたやうなものかも知れない、――ふとそんな氣持が、涼しく心を掠めすぎた。

編輯を了へて

◇自分で自分を誑りつゝある日本人、普選案は泥土に委せられて政客の喰ひもの同様になつて居る。血に彩られたる熱旗——、血を吹く青年たち君たちは一刻も早く長夜の眠からさめよ、そしてその旗を一氣に悲壯なる對岸に樹て。

◇栗鼠の如く小利巧の首相は栗鼠の如く樞密院に立ち廻つてゐる。大愚の如き人でない限り時局の安定はむづかしい總ての閣員は三流以下の挑下の部に屬する人々である、事務はとれるが、動く世界を見る眼はない。政友會に氣兼ねして何一つ政治問題が解決出來るものか。

◇羅馬使節が問題になるなど隨分阿呆らしい。羅馬法王が道德的に、國際的にどんな働きをした。歐洲大戰に對して何等の貢獻も出來なかつた偶像ぢや、羅馬法王は平和に對して何等の權威もない、そんなものは廢止すべし、しかし本願寺の尻の穴はあまりに小さい、法王など存在するのは時代錯誤だ、——加藤內閣、本願寺、政友會、羅馬法王——何れを見ても氣の拔けたいい取組だ。

◇忘れたが國葬費は十萬圓位のものぢやないか、しかし大谷光瑩の葬式は二十萬圓とある、日本は金持の國、本願寺金持ちの寺、葬式の費用がなくて死屍床上を離れざるの細民もあるのを思ひ知れ。

◇お角力又々紛糾、普觀館も餘計なことをしたものだ、或は此以上紛糾して自滅させたい天公の意圖かも知れない。

◇このたび州衣會によつて上演せらるるクロオデル氏の「女と影」については、その節一作を「女性」に第二作は「改造」に各掲載することになつたが、第一作は昨年九月書き下ろされた稿本で、第二作は此度上演するに就いて特に執筆された舞踊並に節付の上演正本である。この事を特に闡明する必要があつたので一言した。

◇上演禁止の谷崎氏の「愛すればこそ」はいよ／＼其筋から改めて興行相許さるゝことゝなつた、それが當然のことである。そして、その姉妹篇「愛なき人々」の名著もいよ／＼上梓された。

◇黑人マランのかいた「バツアラ」に對する知識階級の同情は太したものだ、一は白人種の迫害に對する有色人種としての敵愾心の發露ではなからうか、白人專制も久しいものだからモウそろ／＼天下の形勢が動いていい時だ。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八十錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	増大號共郵税不要
壹ケ年	拾壹圓廿錢	増大號共郵税不要

註文の注意

本號定價金八十錢

本誌一頁廣告料
一等百二十圓
二等九十圓
三等八拾圓

日本電報通信社

○本社廣告取次所 博報堂 弘盛舍

◇増大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す

◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は壹部郵稅貳拾四錢を申受く(但し支那を除く)

◇見本は發送せず
◇郵稅切手代用は壹割增のこと
◇拂込みは振替によらるるが最も便利なり

大正拾貳年二月二十日印刷納本
大正拾貳年三月一日發行

編輯兼發行者 東京市芝區伊皿子町四十番地 平田貫一郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿七番地
印刷所 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町一ノ一 改造社
電話 芝(長)一六三八
芝二八)五.四
芝四三
振替東京



●特約販賣店●

京橋 伊東文房具店
同 文祥堂文房具店
同 文永堂文房具店
日本橋 三越呉服店
同 白木屋呉服店
上野 松坂屋いとう呉服店
神田 文房堂
大阪 三越呉服店
名古屋 松坂屋いとう呉服店
其他市内及全國著名の百貨店文房具店にあります

日本總代理店 東京神田 米國貿易會社

米國製
ムーアー萬年筆は
絶對に漏らぬ
優良無比のペン
であります

夢の輔直

里見弴作

谷崎氏の「愛すればこそ」と共に大正十一年度創作壇の二大收穫と稱せらるゝ「直輔の夢」は東京市の瀆職事件に連坐せる某重役と、肺に惱める一青年と同病に悽惱せる藝妓上りとの深刻な戀愛關係を描寫した纒綿たる情緒を一流の麗筆にて描き出したものだ、人生を呪ふもの、自分の運命を朝夕に相しながら愛慾を捨つる能はざる氣持は本書により て著しく我々の心胸を撲つ、本書には大阪毎日にて好評嘖々たりし「甘酒」の大長篇をも收めた。

純藝術的の代表的小說

◇四六判上製◇
定價壹圓八十錢
◇送料十七錢◇

◇東京芝區愛宕下町◇
改造社
◇振替東京八四〇二◇

近代の戀愛觀

文學博士 厨川白村著

全國の男女學生否總ての階級に暴風の如き大問題を惹起しつゝある本書を見よ、讀書界の全人氣を集めつゝある本書がいかに新戀愛の尊嚴を語つて居るか

しかし男と女との性、そこには今も昔も變りない永遠性があり恒久性がある、千歳を隔てゝ猶ほ滅びざるものは兩性の甚だ錯雜紛糾し易き然獸骨折りその勝利をも慾求をも命をもすべてを犧牲りあれどのみならず上一ある。いまだ一節

七十版

◇定價貳圓五拾錢◇

四六判上製◇送料十七錢◇

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO